## 久恒啓一「今日の格言」 一覧

- 人々は永遠に生きられるかのように生きている(セネカ)
- ・ 我々は人生に不足しているのではなく、浪費しているのである
- ・ 毎日毎日を最後の一日のように思いつつ生きよ
- 得意淡然、失意泰然
- ・ 自分の説くところは、しばしば自分がそうありたいと願う願望である
- ・ 人を相手にせず天を相手とせよ、天を相手にして己を尽くして人を咎めず、我が誠の足らざる尋ぬ べし(西郷隆盛)
- いや、わしは五十一歳になったばかりだ(伊能忠敬)
- ・ 天は富貴を人に与えずしてこれをその人の働きに与うるものなりと。(福沢諭吉)
- ・ わたしはこの世界に、何かをやりとげるために生まれてきたのだ (野口英世)
- ・ 偉人は偉大たらんと決意する意志力により偉人になる
- ・ 人間は思ったとおりの人間になる
- ・ 足元に井戸を掘れ
- ・ 人間 5 0 年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。一度生を受け、滅せぬ者の有るべきか(信 長・敦盛)
- ・ われより古(はじめ)をなす(杉田玄白)
- ・ 他人とくらべるな、過去の自分とくらべよ (野田一夫)
- ・ 地位は思いがけなく訪づれる努力の果実である
- ・ 教えることは学ぶことである
- ・ 自己の探求と社会との関わり
- ・ 迷ったら、失敗する可能性が高い方、自分がダメになる方を選べ。そうするとエネルギーが湧いて くる。(岡本太郎)
- ・ 私は知のプレイボーイです(梅棹忠夫)
- ・ 早朝の一時間を損すれば、終日これを負わねばならぬ(西洋の諺)
- ・ 古人は「人の朝早く起きると、遅く起くるとを以って家の荒廃を知る」と言へり。「朝早く起くるは 家の栄えるしるしなり、遅く起くるは家の衰ふ因なり」と言へり(貝原益軒)
- 短い人生は時間の浪費によっていっそう短くなる
- ・ 繁栄したいものは5時起きしなくてはならない。既に繁栄し得たものは7時まで寝ていてよろしい。 繁栄したくないものは11時まで寝ていてもよろしい。
- ・ 過去を頼るなかれ、現在を頼め、更に雄々しく未来を迎えよ
- ・ 光陰矢の如し、日月流水の如し
- ・ 生死事大、光陰惜しむべし。無常迅速、時は人をまたず
- ・ 時を得る者は栄え、時を失う者は滅ぶ
- ・ 少にして学べば、即ち壮にして為すことあり。壮にして学べば、即ち老いて衰えず。老いて学べば、 即ち死して朽ちず。(佐藤一斎)
- 一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うことなかれ。ただ一燈を頼め。(佐藤一斎)
- ・ 読書は充実した人間をつくり、会話は機転のきく人間をつくり、書くことは正確な人間をつくる

(フランシス・ベーコン)

- 「努力して努力する」―これは真によいものとは言えない。「努力を忘れて努力する」―これこそが 真によいものである。(幸田露伴)
- ・ よき師、よき友、よきコネがいい人生の三種の神器だ(渡部昇一)
- ・ 深井戸プラス補助の井戸が人生を充実させる (渡部昇一)
- ・ 金を馬鹿にするものは金に馬鹿にされる。財産を無視するものは財産権を認める社会に無視される (本多静六)
- ・ 収入の四分の一は貯蓄にまわせ(本多静六)
- · 惜福、分福、植福(幸田露伴)
- ・ ただのバカはいいが、学問のあるバカは困る (渡部昇一の母)
- ・ 頭より性格、頭より心がけが大切だ
- ・ 多忙と多忙感は違う
- ・ 諸君、学校でたら勉強しよう(日本経済新聞の広告)
- ・ もっとも美しい日本語のひとつは、志という言葉だ(野田一夫)
- ・ 迷ったら現場に行け。答えは現場にある
- ・ 先人から学んだ事は、先人のような生き方をしてはいけない、ということだ。(大前研一)
- ・ 現場にはあらゆる人生の材料がころがっている。その中から、自分で問題をつかみ、その問題をひろげ、深めて行くことである。(城山三郎)
- ・ 自分自身を知るまでは他人を本当に知る事が出来ない。他人を知るまでは自分自身を本当に知る事 は出来ない。
- ・ 私に沈深なるは淵の如く、人に接して活発なるは飛鳥の如く、其蜜なるや内なきが如く、其豪大なるや外なきが如くして、始めて真の学者と称す可きなり(福沢諭吉・学問のすゝめ)
- ・ 才能とは自分自身を、自分の力を信ずることである(ゴーリキー)
- ・ 事実がわかっていなくとも前進することだ。やっている間に、事実もわかってこよう。(フォード)
- 自分の経験は、どんなに小さくても、百万の他人のした経験よりも価値ある財産である。

(レッシング)

- ・ 成功する人は錐のように――ある一点に向かって動く。(ボビー)
- ・ 己の立てるところを深く掘れ、そこには必ず泉があらむ。(高山樗牛)
- ・ 一番忙しい人間が一番時間を持つ (アレクサンドル ビネ)
- プロを意識したとたんに、すべての物事に対して貪欲になるはずだ。すべてを吸収しようとする。 吸収するために、人は独自の工夫をするものである。(藤本義一)
- ・ 健康は人間が自分に贈ることの出来る最高のプレゼントです。(鈴木健二)
- ・ 完全な組織人間にはかならずに、こんな組織と心中してたまるかと、冷ややかに組織のあり方や、 行こうとする方向を見つめるゆとりがなくてはならない。(鈴木健二)
- ・ 多くの人は日記を書くが、私は絵を書く。(ピカソ)
- ・ 睡眠が 5 時間半、読書が週に 30 時間、散歩が朝と夜に 1 時間ずつ。家族との時間が 8 時から 10 時まで。(鈴木健二)
- スケジュールをどのように組むかは、私の最大の仕事である。(鈴木健二)
- ・ 生きるエネルギーは十代の青春も二十代の希望も、三十代の前進も、四十代の飛躍も、五十代の最 高潮期も、六十代の失われてゆくときも、変わることなく燃やし続けなければならないのだ。

(鈴木健二)

・ 鍛錬とは、とりもなおさず脳および神経を筋肉と同じく完全に使用して行くことである。いずれも 精神の作用であって、それを続けることによって、いよいよ精神力を増進するものである。

(本多静六)

- ・ 人生の幸福は、現在の生活程度自体よりはむしろその生活の方向が上り坂か下り坂か、上を向くかで決定されるものである。つまり、人の幸福は出発点の高下によるものでなく、出発後の方向のいかんにあるものだ。(本多静六)
- ・ 仕事の変化はほとんど休息と同様の効果がある。(本多静六)
- ・ 人生の最大の幸福はその職業の道楽化にある。職業を道楽化する方法はひとつ努力(勉強)にある。 (本多静六)
- ・ 病気にかからぬ方法、身体をいためない方法は、常にこころをゆかいに保つということである。 (本多静六)
- ・ 一職を得れば一職、一官を拝すれば一官、心頭を離れず、ひたすらにそれをつとめしのみ、他に出 世の秘訣なるものならず。(豊臣秀吉)
- ・ 汝の仕事を追え、そうでなければ仕事が汝を追うであろう。(フランクリン)
- ・ 予は不意にくる一分の空き時間を逸せざらんがために常に小冊子を懐中にすることを忘れない。 (グラッドストン)
- ・ あなたの最高の傑作は?次の作品です。(チャップリン)
- ・ 「七つの教会を建て、速やかに日本人司祭に譲り、いささかも痕跡を残さないことをもって我々の使命とする」(初めて日本に来た七人の宣教師)
- 「お、い、あ、く、ま」の心得 「おこるな、いばるな、あせるな、くじけるな、まけるな」 (住友銀行堀田頭取)
- ・ 省事(しょうじ)に如(し)かず(小泉純一郎)
- ・ 大事争うべし、些事(さじ)構うべからず(小泉純一郎)
- ・ 毀誉得喪は真にそれ人生の雲霧人をして混迷せしむこの雲霧を一掃せば、天青く日白し(佐藤一斉)
- ・ 男子三日会わざれば、刮目して待つべし
- ・ 行いは俺のもの、批判は他人のもの私の知れた事ではない (勝 海舟)
- ・ 憂きこと尚この上に積もれかし限りある身の力ためさん(山中 鹿之助)
- ・ 十度書を読むは一度人の言を聞くに若かず(福沢諭吉)
- 学問は実学にして居に慰にあらず又戯にあらず(福沢諭吉)
- ・ 凡庸な教師はただしゃべる良い教師は説明するすぐれた教師は自らやってみる偉大な教師は心に火をつける (William Artnur Ward)
- ・ 人間は一人づつ違う。生まれたときはだれもが無垢で真っ白だが、自分を作っていく過程で変わっていく(司馬遼太郎)
- ・ 一作つくるときは、その一作で勝負すること(城山三郎)
- ・ ロングセラーは、マスコミの力だけによってできるものではない。地味な努力の積み上げと、満足した客の口コミの力を忘れてはならない。(城山三郎)
- ・ 己を知る人のために死ぬ、というのは、美徳であり、美学である。この美学があれば、不条理に対抗できる。逆に、その必死の美学を持たぬ限りは、不条理を甘受する他はない。(城山三郎)
- ・ やれたかも知れぬことと、やり抜いたこととの間には、実は決定的な開きがある。(城山三郎)

- ・ もし「そのうちに」やりたいことがあれば、今、そう今の今やりなさい。楽しいと思うことを今からやっていれば、老後にも楽しむ方法が自然と身に付いて、老後も遊びのプロとして楽しみながら暮らしていける。(大前研一)
- 幸運だったのではない。私はそれだけの努力をしてきた。
- (マーガレット・サッチャー英首相)
- ・ 人生における最大の失敗は、失敗を恐れ続けることである。(教育家 エルバート・ハバード)
- これまでの私とこれからの私をプレゼンできますか? (久恒啓一)
- ・ 仕事の生産性を高めるには、自分の得意とする分野を必ず持ち、そこを通じて情報を入手し、分析 して、発信していかなければいけない。(和田秀樹)
- 働きグセをつけないと働けない(和田秀樹)
- ・ 「偉くなる」ということは、「虚勢を張らなくてよくなること」だ(和田秀樹)
- ・ 「才能だと」諦めた人間が負け、「やり方を変えればよい」と気づいた人間は勝ち残っている。

(和田秀樹)

- ・ 朝にして食わざれば、即ち昼にして餓え、少にして学ばざれば、即ち壮にして惑う。餓うる者は猶 お忍ぶべし、惑うものは奈何ともす可からず。(佐藤一斎)
- ・ マスターズコースは創造物なプレーを可能にする。高いロブを上げたり、ぶつけて転がしたり、スピンをかけたりと、イマジネーションを働かせて様々な打ち方が出来る。(タイガーウッズ)
- ・ プロ棋士になるには若いときに脳に汗を欠かせなければ駄目だ。(米長邦雄永世棋聖)
- ・ 人生は至極些細なるものにして蛆虫に等しと云ふは、他人の沙汰に非ず、欺く云ふ我身も諸共に蛆虫にして、他の蛆虫と雑居し、以て社会を成すことなれば、蛆虫なりとて決して自から軽んず可らず(福澤諭吉)
- ・ 三直三現・直ちに現場に行く直ちに現物を見る直ちに現時点での処置をする
- ・ 蓋し此人を蛆虫として軽く視るは心の本体にして、其霊妙至尊を認るは心の働なり。能く〜此処を 区別して、扨人間を霊妙至尊のものなりと決定する上は、其位に相応する丈けの働なきを得ず

(福澤諭吉)

- ・ 浮世を軽く認めて、人間万事を一時の戯れと視做し、其戯を本気に勤めて怠らず、啻に怠らざるの みか真実熱心の極に達しながら、扨万一の時に臨んでは、本来唯是れ浮世の戯なりと悟り、熱心忽 ち冷却して方向を一転し、更らに第二の戯を戯る可し。之を人生大自在の安心法と称す(福澤諭吉)
- 人間、志を立てるのに遅すぎるということはない。(ボールドウィン)
- あなたにできること、できると夢見たことが何かあれば、それを今すぐ始めなさい。(ゲーテ)
- ・ 僕は死ぬ迄進歩する積りで居ます(夏目漱石)
- ・ 明日死ぬつもりで生きなさい。永遠に生きるつもりで学びなさい。(マハトマ・ガンジー)
- ・ 人生でもっとも大切なのは失敗の記録である(糸川英夫)
- 器用じゃダメなんです(桂文楽)
- ・ 第一に余は生来極めて平凡な人間である。唯幸いにして余は余自身の誠に平凡な人間であることを よく承知して居った。平凡な人間が平凡なことをして居ったのでは此の世に於て平凡以下の事しか 為し得ぬこと極めて明瞭である。(浜口雄幸)
- おもしろきこともなき世をおもしろくすみなすものは心なりけり(高杉晋作)
- ・ 何事かを試みて失敗する者と、何事も試みないで成功するものとの間には、測り知れない相違がある (デール・カーネギー)

・ どんな職業につこうと、成功に向かう第一歩は、その職業に興味を持つことだ

(ウィリアム・オスラー)

- ・ 明日のことを思いわずらうな。明日のことは、明日自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は、 その日一日だけで十分である(「マタイによる福音書」六章)
- ・ 自分の今行なっていること、行なったことを心から楽しめる者は幸福である (ゲーテ)
- ・ 私は一日たりと、いわゆる労働などしたことがない。何をやっても楽しくてたまらないから

(トーマス・エディソン)

・ 一見大したことのない仕事でも、思いきって全力を注ぐことだ。仕事を一つ征服するごとに実力が増していく。小さい仕事を立派に果たせるようになれば、大仕事のほうはひとりでに片がつく

(デール・カーネギー)

- ・ あなたは一番好きな仕事をやっているだろうか?もしやってなければ、今すぐ手 を打つことだ! 自分の仕事が好きでなければ、本当の成功は望めない。多くの成功者は何度も他の仕事で失敗を重ねて、やっと自分のやりたい仕事を見出している (デール・カーネギー)
- ・ 自分にできる限度をほんの少し越えたことを、毎日一つ実行せよ(ローウェル・トマス)
- ・ 何事にも落胆しない――あくまでやり続ける――決して断念しない。この三つが大体において成功 者のモットーである(デール・カーネギー)
- ・ 私の人生における成功のすべては、どんな場合でも必ず十五分前に到着したおかげである (ネルソン)
- ・ 大いなる安らぎの心は、賞讃も中傷も気にしない人間のものである(トマス・ア・ケンピス)
- ・ 良心に照らして少しもやましいところがなければ、何を悩むことがあろうか。何を恐れることがあ ろうか(孔子)
- ・ あなた自身を主張せよ。決して人真似するな。あなたの生まれながらの才能を、全生涯かけて蓄積 してきた力とともに一度に発揮しよう。だが人の才能の受け売りは、一時的な中途半端なものでし かない。各人がどこまで能力を発揮できるかは、神のみが知っている(エマーソン)
- ・ この世で一番大事なことは、自分が「どこ」にいるかということではなく、「どの方角に」向かっているか、ということである(オリヴァー・ウェンデル・ホームズ)
- ・ 人は誰でも成功途上にある (マーフィー)
- ・ チャンスに出会わない人間など一人もいない。ただそれをつかまなかったというだけだ

(デール・カーネギー)

- 習慣とは「第二の天性」だ(マーフィー)
- ・ 有能なものは行動し、無能なものは講釈する (バーナード・ショー)
- ・ 賢い人は徹底的に楽天家である(アンドリュー・カーネギー)
- ・ 平凡の凡を重ねよ いつかは非凡になる(岩田弐夫)
- ・ 偉い人には、あたかも彼が偉くないかのように接しなさい。そして、偉くない人には、あたかもそ の人が偉い人のように接しなさい。(ユダヤ人の大富豪)
- ・ 成功している人たちは、その仕事を辞めるのが難しいくらい、自分の仕事を愛している。

(ユダヤ人の大富豪)

- ・ 地上にもともと道はない。歩く人が多くなればそれが道になる(魯迅)
- ・ 自分がやることは何でも取るに足らないことのように見えるかもしれない。しかしながら、それを やることこそが大切なのだ(マハトマ・ガンジー)

- ・ 幸福の秘訣は、自分がやりたいことをするのではなく、自分がやるべきことを好きになることだ (ジェームズ・バリー)
- ・ 足を踏み出すたびにためらう者は一生涯、片足で立っていることになる(中国の諺)
- ・ 状況は決して悪くない。腕まくりして頑張ればもっと良くなる (ドゴール)
- ・ 心が変われば行動が変わる行動が変われば習慣が変わる習慣が変われば人格が変わる人格が変われ ば運命が変わる(松井秀喜)
- ・ 夜はしっかり寝る、そして難しい問題は太陽の下で考える(宮内義彦)
- ・ 自分を励ますために心の太鼓を叩くという術を長い間かけて少しは身につけてきたのでしょう。心 の太鼓はあくまでも自分で叩かなきゃ、他人は絶対に叩いてくれませんよ。自分で自分の太鼓を鳴 らさなきゃ。(飯田亮)
- ・ 心――態度態度――行動運命――人生(ヒンズーの教え)
- ・ 「自分のお金の管理・運営を他人の手に委ねたら、そのお金を委ねられたほうが金持ちになる」というルールを忘れてはいけません。(ロバート・キョサキ)
- 何であれ、オモロイことしかしない。しなくてはならないことは、オモロクしてみせる。(河合隼雄)
- ・ 人間というのは、新しいことを始めることさえ忘れなければ、老いるものではない。マルティン・ ブーバー (イスラエエルの哲学者)
- ・ 人は人によって人となる。(斉藤実)
- カネを残すのは下、事業を残すのは中、人を残すのは上。(後藤新平)
- ・ 小説も正式に勉強したこともないし、何をやっていいかわからない、ただし人の足跡のついていないところを歩いてみたい。(松本清張)
- ・ 続けることがなぜ大切なのかというと、続けることによって違う方法論を編み出さなければ続かなくなってくるということなんです。(阿久 悠)
- ・ 自分になりきるとは、自分だけの言葉を持つことだ。自分の言葉ばかりで物を言うようになったとき、人ははじめて真の自分を獲得し、自分を全肯定できるのだ。(中野孝次)
- ・ 欲なければ一切足り求むるあれば万事窮す(良寛)
- ・ 一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず、人の嘲りをも恥づべからず。万時 に換へずしては、一の大事成るべからず(吉田兼好)
- 天才とは努力し得る才だ(ゲーテ)
- ・ 一年の計は穀を樹うるに如かず十年の計は木を樹うるに如かず終身の計は人を樹うるに如かず (管仲)
- 格物、致知、誠意、正心、修身、斉家、治国、平天下(大学)
- ・ ジャーナリストとは、問題の核心をいっぺんにつかみ出して、それをティピカルに表現できる人、 それを提示する時機を考えている人である。(司馬遼太郎)
- ・ わたしの考えるもっともすばらしい人生とは、来る日、来る日が過去の人生のな かで最良の日で あると実感できる、すなわち昨日よりは今日、今日よりは明日がより充実していることだ。

(永守重信)

- ・ 今日も生涯の一日なり(福沢諭吉)
- ・ 井を掘りて今一尺で出る水を掘らずに出ぬといふ人ぞ憂き (新渡戸稲造)
- ・ 苦労には後で有形無形の大きな利子がついてくる。(永守重信)
- 妄想するよりは活動せよ疑惑するよりは活動せよ説話するよりは活動せよ(後藤新平)

- ・ 事業をやるには三つの目が必要だ。虫の目(複眼で見る)鳥の目(鳥瞰する)魚の目(流れを見る) (小佐野腎治)
- 仕事は仲間を作る(ゲーテ)
- 何かを理解しようと思ったら、遠くを探すな(ゲーテ)
- ・ 自分の一生の終わりと初めを結びつけることのできる人は最も幸福である (ゲーテ)
- ・ この地方を説明せよというのか、先ず自分で屋根に登りなさい。(ゲーテ)
- ・ 気持ちよい生活を作ろうと思ったら、済んだことをくよくよせぬこと、滅多なことに腹を立てぬこと、いつも現在を楽しむこと、とりわけ、人を憎まぬこと、未来を神にまかせること。(ゲーテ)
- ・ 憂きはひとときうれしきも思い醒ませば夢候よ(杉本苑子)
- ・ 苦しい中でやるということ、これはただ気力の問題です。人間というものはどんな場合でも、自分 を見限ったらもうそれでおしまい。命がけになれば、どんなことでもできる。(澤田政廣)
- ・ 人生の本舞台は常に将来にあり(尾崎行雄)
- ・ おのおの、その長ずる所にしたがい、好む所に向かわしめる。(「塾制ー一行状」)(三浦梅園)
- ・ 一日土をいじらざれば、一日の退歩である。(朝倉文夫)
- ・ 童話 50年 立ち止まり 振り返り またも行く 一筋の道だった (浜田広介)
- ・ わたしは決して、偉い人間でも何でもないんだ。まったく凡人に過ぎない。ただ何事も一生懸命努力してやってきたつもりだ。そうしているうちに、いつか世間から次々とドエライ椅子に押し上げられてしまっていたまでだ。(斉藤実)
- ・ 忍耐、正直は最良の策である。忍耐は苦しいがしその実は甘い(野口英世)
- ・ 路行かざれば至らず 事為さざれば成らず (吉野作造)
- ・ 戦争のときも平和のときも、私は一生懸命自分の心にそむかないように作曲してきたつもりである (古賀正男)
- ・ 終生の業は、その日その日の義務を完了するより外にない (新渡戸稲造)
- 事の成る成らぬは天に任し、自分はひとえにその日その日の務めを全うすれば足る(新渡戸稲造)
- いまここじぶんその合計がじぶんの人生(相田みつを)
- ・ 仕事はなんでもいい一生けんめいに生きている人の顔はみんな美しい美しい顔になりたい (相田みつを)
- ・ 人物ですよ、人柄。了見が悪くちゃだめだ。心は清廉潔白でなくちゃいけない。

(柳家小さん・五代目)

- ・ 私は、誰々曰く式の話がきらいで、総ては体験に依る話をする主義です(朝倉文夫)
- 「茂吉は、一生懸命生きた男だった。解剖したときには体はボロボロだった」(北杜夫)
- ・ 物の成る人 朝起きや身を働かせ小食に忠孝ありて灸をたやさず物の成らぬ人 夜遊びや朝寝昼寝 に遊山ずき引き込み思案油断不根気 (細川幽斎)
- わだばゴッホになる(棟方志功)
- ・ 牛のように図図しく進んで行くのが大事です。文壇にもっと心持の好い愉快な空気を輸入したいと 思ひます。それから無闇にカタカナに平伏するくせをやめさせてやりたいと思います(夏目漱石)
- ・ 自分を生かす自然な絵をかけばいい。下品な人は下品な絵、ばかな人はばかな絵、下手な人は下手な絵をかきなさい。結局、絵などは、自分を出して生かすしかないのだと思います(熊谷守一)
- いつどこでだれとだれがどんな出逢いをするかそれが大事なんだなあ(相田みつを)
- ・ 人のお世話にならぬよう人のお世話をするようそして酬いを求めぬよう(後藤新平)

- ・ 広く、深く、おのがじしに(佐佐木信綱)
- ・ 万巻の書を読み千里の道を行き生死を天に任じ世界の山河に放吟す(白鳥省吾)
- ・ 歴史を知らない国民は滅びる(吉田茂)
- ・ 他人が笑おうが笑うまいが、自分の歌を歌えばいいんだよ (岡本太郎)
- やろうとしないから、やれないんだ。それだけのことだ(岡本太郎)
- ・ ぼくはこうしなさいとか、こうすべきだなんて言うつもりはない。ぼくだったらこうする という だけだ。それに共感する人、反発する人、それはご自由だ (岡本太郎)
- ・ あの源氏物語は立派な作品ですが、私と同じ女性です。あの作品の後に、それに匹敵する作品が出てこないのは、書こうとする人が出てこないからです。今の時代には今の時代のことを書き写す力のある人が出て、今の時代のことを後世に伝えるべきであるのに(樋口一葉)
- もっと ちゃんと 考えな、あかんで(司馬遼太郎)
- ・ 一言も褒めることなく、またけなすことなくして、私の曲をふと口ずさんで下さる人々だけが私の 心の支え。(古賀正男)
- ・ 運動は事務の堆積なり (市川房江)
- ・ 「信頼できる上司」を持つことこそが会社という組織の中では、もっとも強力な「元気になる力」 となる。(河合薫)
- ・ 毎日、正しいことを繰り返しやれば、人間は甦る。人間は誰でも必ず育つ能力を持っている。教育 で人は育つ。(廣岡達郎)
- ・ 小さな改善でも甘くみないで取り組んでいくことで、巨大な生き物を変えて甦らせることだってできる。(張富士夫)
- ・ 私は業務の95%をコミュニケーションに費やしています。(カルロス・ゴーン)
- ・ 人間が変わる方法は3つしかない。一つは時間配分を変える、二番目はすむ場所を変える、三番目 は付き合う人を変える。(大前研一)
- ・ 人を採用するときに私が見るのは、6割が人格、2割が生活習慣、そして3割が学力なんです。 (渡邉美樹)
- ・ 自覚した凡才は才能を過信した秀才より前向きな生き方ができる。(久恒啓一)
- ・ 順境とか逆境とか、貧富とかいふことを苦にするとせぬは、畢竟目的が定まって居るか居らないか にある。(犬養毅)
- ・ 人間は書物のみでは悪魔に労働のみでは獣になる(徳富蘆花)
- ・ 大功は緩にあり 機会は急にあり (渡辺崋山)
- ・ 脳力(のうりき)とは物事の本質を考え抜く力である。民族の脳力を、民力という。(寺島実郎)
- ・ 凡そ小人の常、大なる事を欲して、小さなる事を怠り、出来難き事を憂ひて、出来易き事を勤めず、 それ故、終に大なる事をなす事あたはず。(二宮尊徳)
- ・ 天下の患いは勢いを知らざるより大なるはなく、而して治国の要は勢を察するより急なるはなし。 (原敬)
- ・ 人に百歳の寿なく、社会に千載の命なし。(徳富蘇峰)
- ・ 老後は、わかき時より、月日の早き事、十ばいなれば、一日を 十日とし、十日を百日とし、一月 を一年とし、喜楽して、あだ に日をくらすべからず。(貝原益軒)
- ・ 昨日またかくてありけり今日またかくてありなむこの命なにを齷齪明日をのみ思ひわずらふ

(藤村詩抄)

- わたしは書物はきらいだ。書物は知りもしないことについて語ることを教えるだけだ。(ルソー)
- ・ 学んで思わざれば則ちくらし。思うて学ばざれば則ち殆し。(論語)
- ・ 書物を買いもとめるのは結構なことであろう。ただしついでに それを読む時間も、買いもとめる ことできればである。(ショウペンハウエル)
- ・ 大切なのは普通の語で非凡なことを言うことである。(ショウペンハウエル)
- ・ もっとも長生きした人とは、もっとも多くの歳月を生きた人ではなく、もっとも よく人生を経験 した人だ。(ルソー)
- ・ 高く登ろうと思うなら、自分の脚を使うことだ!高いところへは、他人によって運ばれてはならない。 い。ひとの背中や頭に乗ってはならない。(ニーチェ)
- ・ ただ、返すがえす初心忘るべからず(世阿弥)
- ・ 働きのよろこびは、自分でよく考え、実際に経験することからしか生まれない。それは教訓からも、 また、残念ながら、毎日証明されるように、実例からも、決して生まれはしない。(ヒルティ)
- ・ 仕事が楽しみなら、人生は極楽だ!仕事が義務なら、人生は地獄だ! (ゴーリキィ)
- 才能とは天から与えられた使命だ。(エマソン)
- ・ 国際社会というのはオーケストラみたいなものです。ヴァイオリンはヴァイオリンのように鳴って はじめて価値がある。日本人は日本人のように思い、考え、行動して初めて国際社会の場で価値を 持つ。(藤原正彦)
- ・ 歳をとって、よく人間が枯れるなどどいい、それが尊いようにいわれるが、私はそういう道はとらない。それは間違っているとさえ思う。あくまでも貪欲にして自由に、そして奔放に、この世をむさぼって生きていたい。仕事をする以外に私の枯れようなんてないんだな(松本清張)
- ・ アルミニウム精錬が電力を食って、金属というより電気のカタマリのようなものであるように、小 説も、空気をつかんで固体にするようなエネルギーが要ります。(司馬遼太郎)
- 「受けて立つ」相撲振りといわれたが、「向こうが立てば立つ」、しかし立った瞬間には、あくまで も機先を制している・・換言すれば、いわゆる「後手の先」で、立った瞬間には自分として十分な体勢 になっている、そういう立ち合いだったといえましょう。(双葉山)
- ・ 人の短をいう無かれ、己の長を説く無かれ(崔えん・座右銘)
- ・ 心は楽しむべき、苦しむべからず。身は労すべし、やすめ過すべからず。(貝原益軒)
- ・ 首相に必要な資質は次の3つだ。何をやればいいかという使命感、目標を実現できるかという本質と時代を見抜く洞察力、粘り強くやり遂げるための情熱。(小泉純一郎)
- · 不憂、不惑、不畏(犬養毅)
- ・ 創造的な仕事をなしとげる3つの条件がある。それは、1.若いこと、2.貧乏であること、3.無名であることだ。(毛沢東)
- ・ 百術は一誠にしかず(小沢一郎)
- ・ 仕事の報酬は仕事である(土光敏夫)
- ・ なんにもしらないことはよいことだ。自分の足であるき、自分の目でみて、その経験から、自由に かんがえを発展させることができるからだ。知識は、あるきながらえられる。あるきながら本をよ み、よみながらかんがえ、かんがえながらあるく。これは、いちばんよい勉強の方法だと、わたし はかんがえている。(梅棹忠夫)
- ・ 人間は魂さえ磨いて居ればよい。ほかに何も考えることはいらん。国も人も魂じゃ。魂の無い国、 魂の無い人は国でも人でもない。(頭山満)

- ・ 私は地方の町に行くと、必ずその町の役場に山城の跡はありませんかと問いあわせることにしている。その山城をめぐる攻防戦や、そこに拠った一族の歴史をあとで調べることにしている。その結果、それらの場所が私だけの名所旧跡になる。(遠藤周作)
- ・ 疑いだね。体制や学問を鵜呑みにしない。上から見ないで底辺から見上げる。(松本清張)
- ・ 深くこの生を愛すべし1. 省みて己を知るべし1. 学芸を以て性を養うべし1. 日々新面目あるべ し(会津八一)
- ・ 「何かおかしい」と感じ、「ではどうすべきか」と考えることが発展につながる。おかしいとい感じなくなったら、もうおしまいだ。(金川千尋)
- ・ 賞賛による堕落から逃れる方法はただひとつ。仕事を続けることである。人は立ち止まって賞賛に 耳を傾けがちであるが、唯一なすべきことは、賞賛から目をそらし、仕事を続けること。それ以外 の方法はない。(アインシュタイン)
- ・ 偉大な人間は反復の大切さを知り単純作業にも気持ちをこめる(中田英寿)
- ・ 中途半端な才能はいさぎよく捨て得意な分野を24時間考え続ける(大黒将志)
- ・ 父母に棄てられたる子は、家を支える柱石となり、国人に棄てられたる民は、国を救う愛国者となり、教会に棄てられたる信者は、信仰復活の動力となる。(内村鑑三)
- ・ 私は常に仕事をし、よくよく瞑想をする。私がいつもすべてのことに応えすべてのことに立ち向か おうと待ち構えているように見えるのは、何かを企てる前に、永い間瞑想をし、起こるかもしれな いことを予見しているからだ。他の人々にとっては思いがけないと見える場合にも私のいうべきこ となすべきことを突如としてひそかに私に啓示してくれるのは、天才ではなく熟慮であり、瞑想な のだ。 (ナポレオン)
- ・ ただ、死ぬんですよ、ブログって。寿命があるんです。一人の人間がインプットなしでアウトプットし続けるのは、一年が限度でしょう。(糸井重里)
- ・ 死んだら死んだで生きていくさ(草野心平)
- ・ どういうふうに毎日、一日の人生を生きることが、一番我が意を得たものになるかという、その考 え方が、人生観なんです。(中村天風)
- 世には卑しい業なく、ただ卑しき人あるのみ(リンカーン)
- ・ 凡そ人一日この世にあれば、一日の食を喰らい、一日の衣を着、一日の家に居る。なんぞ一日の学問、一日の事業を励まざらんや。(吉田松陰)
- 職業はなんでもいい、ただ第一人者たるを心掛けよ(カーネギー)
- ただの思いつきでできるようなものは、世の中に断じてない(アインシュタイン)
- · 日日是好日(雲門)
- ・ 不断にあらず、容易に断ぜずなり (伊藤博文)
- ・ とにかく朝早く稽古場に出ろ。人に負けない時間に出ろ。出さえすれば、あとはどうにかなる (大関・大の里)
- 他人様のお堀になったところを、サラにもう一間ずつ余計に掘りました(古河市兵衛)
- ・ ふたつ よいこと さて ないものよ (河合隼雄)
- 病気になっても病人になるな(柴田高志)
- ・ 「親に孝行であること」「腹を立てぬこと」「決して筆を取らぬこと」(大隈重信)
- ・ 亜細亜ハーナリ (岡倉天心)

- ・ 人間は火のついた線香じゃ。それに気がつけば誰でも何時かは奮発する気になるじゃろう。老若誠 に一瞬の間じゃ、気を許すな(頭山満)
- ・ 作家というのは本当は六十からが勝負自分の持ち味が出せるようになるんだ若いうちは自己主張が 強くなるが人間を積み重ねることによって力を抜けるようになる手を抜いているようで手を抜かな いこれが出来ないと・・・(藤田喬平)
- ・ 趣味なんか持ってたら、仕事なんかできないよ (藤田喬平)
- ・ むりやり手を動かそうとしているうちに不思議とちゃんとアイディアが湧いてくる(石ノ森章太郎)
- ・ 今ふりかってみると、まずしいながら私だけの作風をやっとつかむことができたのは 50 歳になって からである (遠藤周作)
- ・ 私は長いこと、本職の余暇にいろいろな文学活動もやってきたが、それをほめてくれる人はいなかった。(森鴎外)
- ・ 墓石の表面には余の姓名の外戒名は勿論位階勲等も記すに及ばず(原敬)
- ・ 眼前の躁廻しに百年の計を忘るる勿れ (渡辺崋山)
- ・ 「百」扱ったならば、卒業というか、入門というか、正しく一段階を得て、人生四十にして立った 境地である。それからほんとうの途が発するのであるが、またそれで初めて一人前の域に入ったと きでもあると思う(朝倉文夫)
- ・ 幸せという花があるとすれば その花のつぼみのようなものだろう辛いという字がある もう少し で 幸せになれそうな字である(星野富弘)
- If you can dream it, you can do it! (向井千秋)
- ・ 人生を変えるきっかけというものは、日常茶飯事のいろいろなところに転がっている(向井千秋)
- ・ 私は日本のようにメロディー豊かな国は他にないと思う(古賀政男)
- 精神集中(鳩山一郎)
- 「己持」「至誠」「養神」「動不」「目的・正直・忍耐」(野口英世)
- ・ 希う所は 後世作者興ることあらば即ち顧を万分の一に得んことを。死すとも且つ朽ちざるなり

(三浦梅園)

- ・ 神よ、仏よ――全治全能さえ給え(棟方志功)
- ・ 顔というものは変わりますよ。だいたい若いうちからいい顔というものはない。男の顔をいい顔に 変えていくということが、男をみがくことなんだよ。(池波正太郎)
- 偉い人は、いつもこれからを語っている。(藤原勝紀)
- ・ 死して滅びざるものは、寿(いのち)ながし(横山大観)
- ・ 下足番を命じられたら、日本一の下足番になってみろ。そうしたら、誰も君を下足番にしてはおか ぬ (小林一三)
- 自分で歩き、自分で処理して行かねばならぬものが、人生というものであろう(井上靖)
- ・ 僕の前に道はない 僕の後ろに道は出来る(高村光太郎)
- 小さいから大を倒せる。そこに日本武道としての柔道の意義がある。(三船久蔵)
- ・ 画家は明日を憂えてはいけない。今日、今、最も忠実でなくてはいけない。(万鉄五郎)
- ・ 人間の真価は、困難のときわかるものである。(山下太郎)
- ・ 死なんと戦えば生き、生きんと戦えば必ず死するものなり(上杉謙信)
- ・ 天下になくてはならぬ人となるか、有ってはならぬ人となれ(河井継之介)
- 自分の第一義としんずる仕事を職業となし得ぬのは何たる苦痛であろう(久米正雄)

- ・ テーマや詩を前にして、その情景を思い浮かべる。音楽がどんどん頭の中に湧いてくる(古関裕而)
- ・ 人は四十になるまでに土台を作らねばならぬ(野口英世)
- ・ 食欲と知的な飢えとは同じだ、教育教育といって、あまりご馳走をあたえないほうがいい

(朝永振一郎)

- ・ 我々が空想で描いてみる世界よりも、隠れた現実のほうが遥かに物深い(柳田国男)
- ・ 大事をなさんと思わば小なることを怠らず勤むべし、小積もりて大となればなり(二宮尊徳)
- ・ 春に百花あり秋に月あり、夏に涼風あり冬に雪あり。すなはちこれ人間の好時節(松尾芭蕉)
- ・ 心に太陽を持て(山本有三)
- ・ どんなに真面目な仕事をしても、遊戯に熱している時ほどには人を真面目にし得ない(萩原朔太郎)
- ・ 美しく死ぬことはやさしい。しかし美しく老いることはむずかしい(大宅壮一)
- ・ 正しい道徳の富でなければ、その富を永続することができぬ(渋沢栄一)
- ・ この道より我を生かす道なし、この道を歩く(武者小路実篤)
- ・ やはりもう一度女に生まれて、婦人運動をしなければならないね(市川房江)
- 始終骨なし人形ばかり描いていて、いつまでも美術国だといっていられるか(黒田清輝)
- ・ 人生は一種の苦役なり。ただ、不愉快に服役すると欣然として服役するとの相違あるのみ

(徳富蘇峰)

- ・ 六十、七十はなたれこぞう、おとこざかりは百から百から(平櫛田中)
- ・ 余は石見人森林太郎として死せんと欲す(森鴎外)
- 芸術は終生が修行である(横山大観)
- 我以外皆我師(吉川栄治)
- ・ どんな子どもでも、人間として生を受けた以上、立派に育っていかなくてはなりません(沢田美喜)
- ・ 余は偉大なる落伍者となって、何時の日にか歴史の中によみがえるであろう(坂口安吾)
- ・ 考えよ 人生の旅人 汝もまた岩間から染み出た水霊にすぎない(西脇順三郎)
- ・ してみせて、言って聞かせて、やらせてみせて、それで誉めれば人は働く(山本五十六)
- 世人の信を受くるべし。機を見るに敏かるべし。果断勇決なるべし(銭屋五兵衛)
- ・ ただ一つの思想を知るということは、思想というものを知らないというに同じだ(西田幾多郎)
- 未練が老醜のはじまりではないだろうか(中野重治)
- いつまでも古くならないもの、それこそがむしろもっとも「新しい」ものだとはいえないでしょうか (中原淳一)
- ・ 能力や才能は、それを認め活用してくれる能力や才能がなければ成り立たない(池田満寿夫)
- ・ 芸術に完成はありえない。夢はどこまで大きく、未完成で終わるかである(奥村土牛)
- ・ 九十歳よりは、又々画風をあらため、百歳の後に至りては、此道を改革せんことをのみ願ふ(葛飾 北斎)
- ・ 東洋の道徳、西洋の芸術、精粗遺さず、表裏兼ね該え、よって以て民物を沢し、国恩に報ず (佐久間象山)
- ・ 天気予報は七分の学理に三分の直感 (藤原咲平)
- ・ 今日の我に明日は勝つ(美空ひばり)
- ・ 私をすくうてくれた女の人は、悉くはたらく場所にいた人達である(室生犀星)
- ・ 彫刻は決して難しいものではなく、感覚的、直感的に見ればよい(市之瀬広太)
- ・ 過分の良馬を買うべからず(竹中重治)

- ・ 数字の外はたよりにするな。勘とかニラミとかは当てにならない(内藤豊次)
- ・ バカ正直であれ(木下恵介)
- ・ 人のやったことは、まだ人のやれることの百分の一にすぎない(豊田佐吉)
- ・ もし我々に死がなかったら生の倦怠をどうしようか。死こそは実に我々に恵まれた甘露である

(中勘助)

- ・ 無益の事は負けて居申すべき事(石川丈山)
- ・ 人間は運と知恵だけでは成功しない。健康が大切だ(御木本幸吉)
- ・ 夢は遠く大きいほどよい(西堀栄三郎)
- ・ 時日と忍耐とは桑葉をして絨毯に変ぜしむ(岩倉具視)
- ・ 天を怨みず、人を咎めず (新島襄)
- ・ 青春とは心の若さである(松下幸之助)
- ・ 虚にして虚にあらず、実にして実にあらず、この間に慰がある(近松門左衛門)
- ・ 決して失われることのないものが未来の希望なのである (三木清)
- ・ どんなことでも努力すれば、必ず報われると信じている(大山康晴)
- 人間には運命というものがあって、これをある点まで支配することができるものだと思う(片山潜)
- ・ 我事において後悔せず(宮本武蔵)
- ・ 純な青年時代を過ごさない人は深い老年期を持つことも出来ないのだ(倉田百三)
- ・ 身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬともとどめおかまし大和魂(吉田松陰)
- ・ 功ならず名ばかり逃げて年暮れぬ(平賀源内)
- ・ 果報は練って待て(佐伯勇)
- ・ 創業は大胆に、守成には小心なれ(岩崎弥太郎)
- ・ 一日に千里の道を行くよりも、十日に千里行くぞ楽しき (大町桂月)
- 原稿の書きかけが監獄内に散乱しているから、一度監房に戻して貰いたい(幸徳秋水)
- ・ 慢性になった常識が盲点をつくる(松本清張)
- ・ 私は一本の作ごとに、様々な一生を暮らして来た。映画の上で様々な人生を経験して来た(黒沢明)
- ・ 何につけても「しかたがない」という人間ほどしかたのない人間はいない(下村湖人)
- ・ 人間の一生には一度はまたとない好機が来る(遠藤周作)
- ・ たゆまざる歩みおそろしかたつむり-自分は天才ではない。他人が五年でやることを十年かけてで もやる。(北村西望)
- 即天去私(夏目漱石)
- ・ 若き日に汝の思想を培え・・・若き日に汝の希望を星につなげ(松前重義)
- ・ 人必死の地に入れば、心必ず決す(横井小楠)
- ・ 筆を用いて工みならざる患えず、精神の到らざるを患う(田熊村竹田)
- ・ 諦めるということは便利な言葉である。が、卑怯な言葉で、また怖ろしい言葉である(野上弥生子)
- ・ 天は人もわれも同一に愛す、故に我を愛する心をもって人を愛せよ(西郷隆盛)
- ・ 是れ法のためのことなり。何ぞ身命を惜しまんや。諸人去かざれば、我れ即ち去くのみ(鑑真)
- ・ 学問とは、飛耳長目の道だ(荻生徂徠)
- ・ 己を知るを、ものを知れる人というべし(吉田兼好)
- ・ 気は長く、心は広く、色薄く、勤めは固く (勝小吉)

- ・ 朝起きると「今日もまだ生きていてありがたい」と感謝し、寝るときには「今日一日無事に生きられてありがたい」と感謝する。 (五木寛之)
- ・ 私は六歳の頃から物の形の形状を写す癖があった。五十歳の頃から様々な絵を描いてきたが、思えば七十歳以前に描いたものはみな取るに足らないものだった。七十三歳になってようやく鳥や動物、虫、魚の骨格、あるいは草や木の生ずる有り様を悟ることが出来るようになった。したがって八十歳になればますます絵が上達し、九十歳には奥義を極め、百歳には神妙の域に達することだろう。百十歳になれば、「一点一格」活けるがごとくに描けるようになるに違いない。願わくば読者の皆様には長生きをされ、私の言っていることが偽りでないことをその目でご覧下さいますように。

(葛飾北斎)

- ・ 別種の文化と接することとは、驚くことなんだ。驚く心、見る目を持ちなさい。少年の心で、大人の財布で歩きなさい。(開高健)
- 悠々として急げ(開高健)
- ・ 物をふやさず、むしろ少しずつ減らし、生きている痕跡をだんだんに消しながら、やがてふっと消えるように生涯を終えることができたらしあわせだろうと時どき夢想する。(藤沢周平)
- むずかしいことをやさしくやさしいことをふかくふかいことをゆかいにゆかいなことをまじめに書くこと(井上ひさし)
- ・ 事上練磨(日々の物事に当たって、その一つひとつに真剣に取り組むことが大切であり、それが自分を磨くことになる)(王陽明)
- ザ・ファースト・イズ・フォーエバー (三浦雄一郎)
- ・ 西郷が辞めれば政府が潰れる。しかし、西郷の意見を容れれば国が潰れる。(大久保利通)
- ・ 人間は老衰するから働けぬというよりも、働かぬから老衰することになる。(本多静六)
- 若いときには老人に接し、年老いては若い人に接せよ。(福沢諭吉)
- 始めることで、全体の半分はすんだようなものだ。(アリストテレス)
- ・ 一日を生きることは、一日の進歩であれ(湯川秀樹)
- ・ 利休程度の仕事に自分の仕事を止めるわけにはゆかぬ。(柳宗悦)
- 仲よき事は美しき哉(武者小路実篤)
- ・ 人格を研(みが)かなけりゃ画いた絵は三文の価値もない。(富岡鉄斎)
- ・ 自分の頭を棍棒で殴りながら書くしかない。(ジャック・ロンドン)
- 見ることはできても、かなわないのが夢。大リーグで投げられると信じて、目標にしてやってきた ので、今ここにいると思う。(松坂大輔)
- ・ 自分にコントロールできることとできないことを分ける。自分で制御できないことに関心を持たないことです。(イチロー)
- ・ 練習は不可能を可能にする。(小泉信三)
- ・ 執筆の計画は体力を考えて立てるべきです。70 代には 10 年計画、80 代にはほぼ 5 年計画、90 代では 3 年計画としている。ただ今「金文通釈」9 冊の改訂版を刊行中。今後 3 年間に「甲骨金文学論業」上下巻など 6 冊を刊行したい。その先は神様のおぼしめしをうかがってから決める。

(白川静・95歳)

- ・ 人間って守りに入った瞬間から年を取るんじゃないかしら。(瀬戸内寂聴)
- ・ 芸人は、米一粒、釘一本もよう作らんくせに、酒がええの悪いのと言うて、好きな芸をやって一生 を送るもんやさかいに、む さぼってはいかん。ねうちは世間が決めてくれる。ただ、一生懸命に芸

を磨く以外に、世間へのお返しの途はない。また芸人になった以上、末路哀れは覚悟の前やで。 (4代目桂米団治)

- ・ 人間は地位が上がれば上がるほど、役得を捨て役損を考えろ(白洲次郎)
- ・ プリンシプルを持って生きていれば、迷うことは無い。プリンシプルに沿って突き進んでいけばいいからだ。そこには後悔もないだろう。(白洲次郎)
- 知恵というのは経験の娘である。その理論が経験によって裏づけられない思想家の教えを避けよ。 (レオナルド・ダ・ヴィンチ)
- ・ 志あるものは事ついに成る。(十八史略)
- ・ 本というものは読むものではなく、引くものだ。(大宅壮一)
- ・ 私はドゴール大統領よりも偉いし、マキシムの料理長より、作家のアーサー・ケストラーよりも偉い。なぜなら、私はドゴールより料理が上手だし、マキシムの料理長よりはたくさん旅行している。 それにケストラーよりはテニスがうまいのだから。(ジョージ・マエックス)
- ・ 一体、金を溜めるということは、人生の副産物であって、本来の面目は金を溜めること以外になければならぬ。すなわち精神を磨いて、一身の品性を高め、引いて、感化を周囲に与え、結局は国民の品性を高め、更に子々孫々の品性をたかめむる点に出来るだけの力を注ぐことが、我々のこの世に生存する第一の面目であることに先ず考え至るべきものであろう。(高橋是清)
- ・ 俺は豆腐屋だ。がんもどきや油揚げは作るが、西洋料理は作らないよ(小津安二郎)
- ・ 永遠に挑戦者であることは出来ない。しかし、挑戦の感覚を持続できない奴は前に進めない。

(村上龍)

- ・ 人はその性格に合った事件にしか出遭わない。(小林秀雄)
- ・ どんなに疲れていても一日に 30 分は必ず本を読め。一年継続できる人は、おそらく 5%もいないで しょう。それを 10 年継続したら、そうとうの差が出てくると思う。(丹羽宇一郎)
- ・ 心掛け次第で明日からでも実行が出来、実行した以上必ず実益がある、そういう言葉を、ほんとう の助言というのである。(小林秀雄)
- ・ 実行をはなれて助言はない。そこで実行となれば、人間にとって元来洒落た実行もひねくれた実行もない、ことごとく実行とは平凡なものだ。平凡こそ実行の持つ最大の性格なのだ。だからこそ名助言はすべて平凡に見えるのだ。(小林秀雄)
- ・ 成る程、己の世界は狭いものだ。貧しく弱く不完全なものであるが、その不完全なものからひと筋 に工夫を凝らすというのが、ものを本当に考える道なのである、生活に即して物を考える唯一の道 なのであります。(小林秀雄)
- ・ 私は、自分の職業の命ずる特殊な具体的技術のなかに、そのなかにだけに、私の考え方、私の感じ 方、要するに私の生きる流儀を感得している。かような意識が職業に対する愛着であります。

(小林秀雄)

- ・ 天職という言葉がある。若し天という言葉を、自分の職業に対していよいよ深まって行く意識的な 愛着の極限概念と解するなら、これは正しい立派な言葉であります。(小林秀雄)
- ・ きのうも明日もないわ、今日をしっかり生きるだけ。(杉村春子 八十半ば)
- ・ 人生にはライフワークと言うものがある。これがあるかないかで一生の勢いが違う。(福田一直)
- ・ 苦しいこともあるだろう。云いたいこともあるだろう。不満なこともあるだろう。腹の立つことも あるだろう。泣き度いこともあるだろう。これらをじっとこらえてゆくのが男の修行である。

(山本五十六)

- ・ 選ばれたる人とは、自らに多くを求める人であり。凡俗なる人とは、自らに何も求めず、自分の現在に満足し、自分に何の不満ももっていない人である。高貴さは、自らに課す要求と義務の多寡によって計られるものであり、権利によって計られるものではない。まさに貴族には責任がある(Noblesse oblige)。貴族とは、つねに自己を超克し、おのれの義務としおのれに対する要求として強く自覚しているものに向かって、既成の自己を超えていく態度を持っている勇敢な生の同義語である。(オルテガ・イ・ガセット)
- ・ 朕には、特に際立った資質が備わっていない。朕が勝てたのは、朕の武勇がすぐれていたからではなく、敵の能力が足りなかったからだ。天は、わが周辺の富み 栄えた国々を、傲慢と奢侈の故に罰した。朕は今も、馬飼いや牛飼いと同じものを着、同じものを食べている。わが君臣は労苦を共にし、富と栄えを共有している。朕は贅沢を憎み、節制を旨としている。(チンギス・ハン)
- ・ 最初は盃一杯の水から始まっても、行く末は大黄河へと連なっていくようなアカデミズム。(林望)
- ・ 「森」を感じ取るためには、細かいことにつき合っている暇はないのだ。(塩野七生)
- ・ 聞いたことは忘れ、見たことは覚え、したことは理解する。(中国のことわざ)
- ・ 自分の中に静かな水をたたえていれば、どこに行っても、何に巻き込まれても大丈夫。(茂木健一郎)
- ・ 年々歳々花相似たり 歳々年々人同じからず 言を寄す 全盛の紅顔子 応(まさ)に憐れむべし 半生の白頭翁(劉廷芝)
- ・ やりかけのまま抱えている仕事の数と精神状態とは反比例する。(ジャネ(フランスの学者))
- ・ 自分の好きなことでいいから何かに徹底的に入れ揚げ、圧倒的に努力したことは、いつの日か必ず報われるということ。徹頭徹尾打ち込んだことが血となり肉となって、新しいものをつくり出す力になる。

「圧倒的な努力」と言ったのは、要するに人が眠る時に寝ないでやる、人が休む時に休まないでやる、人が面倒くさいと思うことをあえて選んでやる、ということです。(見城徹)

- ・ 思うに希望とは地上の道のようなものである、もともと地上に道はない、歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。(魯迅)
- ・ 之を知るを知ると為し、知らざるを知らずと為す、是れ知るなり(孔子)
- ・ 幸福な人は自慢屋であり、教訓家になることが多い。偶然の結果、健康や成功に恵まれたにすぎないのに、自分の能力のせいだと過信する(田辺聖子)
- ・ 人は善くも言われ、悪くも言われるのがよい(三宅雪嶺)
- ・ 私たちの考え方や信念の全骨格は、私たちの崇める偉人たちによってかたちづくられる(リヒテンベルク)
- ・ 自由とは、人間の知力や制度の移植で簡単に創造することのできないものである(中川八洋)
- 男が成長するとは、自分が持たないものをひとつひとつ確認し、次第にあきらめてゆく行程である。 (谷沢永一)
- ・ 独創的なものは初めは少数派。多数というものは独創ではない。(湯川秀樹)
- 普通の風景も心が純粋になれば生命にあふれる。(東山魁夷)
- 継続していれば、なんでもすごいことになる。(竹内 均)
- ・ 出世しようの、いい真打ちになろうという考えはない。ただこれが好きなんで、はなしを覚えた。 (古今亭志ん生)
- 「見本のない産業をつくりだす」(井深 大)
- ・ 大勢の人間の努力は一人の天才に勝る。(高柳健次郎)

- ・ 空白の部分を考える。それが私の喜び。(松本清張)
- 技術屋は技術以外、事務屋は事務以外を勉強しろ。(土光敏夫)
- 人生とは今日一日のことである。(D.カーネギー)
- できるか、と尋ねられたときはいつでも、たしかにできると答えなさい。それから急いで、どうすればいいかを探しなさい。(セオドア・ルーズベルト)
- ・ 世の中に、自分で試してみないでわかることなんか、一つもない。(五木寛之)
- ・ よい人に交わっていると、気づかないうちに、よい運に恵まれる。(安岡正篤)
- ・ 人は極端にないかをやれば、必ず好きになるという性質をもっています。好きにならぬのがむしろ 不思議です。(岡潔)
- ・ 究極の失敗の原因は、安住してしまうことだ。(テッド・ターナー)
- ・ したくない仕事しかこないんです。でも、運はそこにしかない。(萩本欣一)
- 人生とは今日一日のことである。(D. カーネギー)
- ・ よい人に交わっていると、気づかないうちに、よい運に恵まれる。(安岡正篤)
- ・ じっくり考える時間は、時間の節約になる。(プブリウス・シルス)
- ・ 世の中に、自分で試してみないでわかることなんか、一つもない。(五木寛之)
- ・ いつも念頭においておけば成就する。ゆっくり進んでいれば、到達する。(モンゴルのことわざ)
- ・ 小さな妥協は小さな人物でもできるが、大きな妥協は大きな人物にならなければできない。(松永安 左衛門)
- ・ 人は極端に何かをやれば、必ず好きになるという性質を持っています。好きにならぬのがむしろ不 思議です。(岡潔)
- ・ 上機嫌は、人が着ることのできる最上の衣装である。(サッカレー)
- ・ 究極の失敗の原因は、安住してしまうことだ。(テッド・ターナー)
- ・ アバウトは健康にいい。(赤瀬川原平)
- ・ たった今から、収入の一割を貯金したまえ。(大谷米太郎)
- ・ 臆病者と言われる勇気を持て。(松尾静麿)
- ・ 人を集めよう。幸福が集まる。(斎藤茂太)
- 幸せになりたなら、もっているものを増やすのではなく、欲望を減らせばいい。(セネカ)
- ・ お前の値打ち以上に持ち上げる者を恐れよ。お前を不当に下げる者だからだ。(アラビアのことわざ)
- できるか、と尋ねられたときはいつでも、たしかにできると答えなさい、それから急いで、どうすればいいかを探しなさい。(セオドア・ルーズベルト)
- ・ いろいろ書きだしてみて、組み立てたり、バラしたりしえみるのです。そうしますと、かくならなければならない、かくなるべきだという結論が生まれてくるわけです。 (市村清)
- ・ 成功の秘訣は、自らの直面している問題をマスターすることにある、(著作家・ディズレーリ)
- ・ われわれ文学者には勤勉な態度というものがしばしば欠けているが、それを身につけることができ たのも、退屈な事務所勤めのおかげだった。(文学者ウオルター・スコット)
- ・ 考えたことや見聞きしたことを書き留めるのは、商人が棚卸しをするのと同じだ。(名医・ジョン・ ハンター)
- ・ 向上心に燃えた有能で勤勉な人間には、ここで行き止まりという柵は立てられない。(ベートーベン の好んだ格言)

- ・ 私が唯一正しい教えを受けたのは、世間という学校である。そこでは艱難辛苦という厳格で高貴な 教師にめぐりあった。(地質学者ヒュー・ミラー)
- ・ 小銭に気をくばれば大金はおのずと貯まる。
- ・ 最良の教育とは、人が自分に与える教育である。(ウオルター・スコット)
- ・ 一度に一つの仕事しかしない人間のほうが、むしろ誰よりも多くの仕事をする。(イグナチウス・ロョラ)
- ・ 機械技術の分野にいちばん必要なのは挫折の歴史である。私はヘマな失敗例を集めた書物がほしい。 (発明家ワット)
- ・ 立派な習慣を身につけるよう気を配るのが、いちばん賢明な習慣だ。(リンチ)
- 自己実現とは、自分の好きなことをやって、十分に食うことができ、のみならずその結果が他人によって高く評価されることである。(竹内均)
- ・ 戦争の為に、百億の予算を組む国家と、教育の為に、百億の予算を組む国家と、いずれが将来性あるかは問わずして明である。(桐生悠々)
- ・ 原因から、結果に至るまでの順序を知らなければ、依然として無智である。(桐生悠々)
- ・ 国家の衰亡につながるいちばん厄介な要因は、自分で自分の物事を決めることができなくなったと きだ (トインビー)
- ・ 物事は決断しなきゃだめよ。政治家のエクスタシーは決断にあって、決断がない政治家はだめ。それができない政治家は政治家に値しない(サッチャー)
- ・ 楽天主義は意志の所産だが、厭世主義は人間が自己を放棄したときの状態である(アラン)
- ・ 決断力のない君主は大概みんな中途半端な中立の道を選ぶ。そしてその大方は滅びていく (マキャベリ)
- ・ ユダヤ人の教育の最大の目的は、新しいものを創り出す個性的な力を持った人材を育てることにある。このために自立した人間を創らなければならない。これが人づくりである。(マーヴィン・トケイヤ (ユダヤ人))
- ・ 初対面のときに、自分と他人との人間関係を得意げにべらべらしゃべる者はほとんど信用できない。 あるいは、相手の話を何度も重ねて縦にずっと見ると、いつも同じことを言っている人は信用して いいが、どこか筋が違ったり、話の内容が変わっていくのは眉唾だ。(長尾芳郎(名鉄百貨店会長))
- ・ 第一の経営哲学、経営理念が確立できれば、まず五十点で半分成功したのと一緒。(松下幸之助)
- ・ 幼稚な人間とは、何が肝心なことかがわからぬ人間、かつまた肝心なことについて考えようとしない人間こそ幼稚な人間なのだ。(福田和也)
- ・ いま時期尚早とという人は、百年たってもなお時期尚早というでしょう(川渕三郎)
- ・ 日本のいわゆる発展は終わりで、あとはよき停滞、美しき停滞をできるかどうか。これを民族の能力をかけてやらなければいけない。(司馬遼太郎)
- ・ 究極の目的を設定するのはナンバー1の仕事だが、それをいかに実現するかという、ハウツーを考 え出すのはナンバー2の仕事である、またその下にいる参謀たちの仕事です。(石原慎太郎)
- ・ 私はいつも思いついたことを書き留めるノートを持ち歩き、夜寝るときも枕元にメモをする紙を沖、 頭に浮かんだアイデアをメモしていった。それをトップダウンでやらせたのである。(中曽根康弘)
- ・ 時期尚早という人間は 100 年たっても時期尚早という。前例がないという人間は 200 年たっても前 例がないという。(川淵三郎)

- ・ その父賢にして、その子の愚なるものは稀しからず。その母賢にして、その子の愚なる者にいたり ては、けだし古来稀なり。(安井息軒)
- ・ 短き人生は、時間の浪費によって、一層短くなる。(サミュエル・ジョンソン)
- ・ 一生を五十年として、その半分を寝ることと食うことに費やしてしまうとすれば、一生の間に、創作的態度に出られる期間は僅か五年か六年しかない。(賀川豊彦)
- ・ 明日ありと思う心のあだ桜、夜半に嵐の吹かぬものかは。(親?)
- ・ 年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず。(劉希夷)
- ・ 過去を顧みるなかれ、現在を頼め。さらに雄々しく未来を迎えよ。(ロングフェロー)
- ・ 余り人生を重く見ず、棄身になって何事も一心になすべし。(福澤諭吉)
- ・ 人生は一種の苦役なり。ただ不愉快に服役すると欣然として服役するとの相違あるのみ。(徳富蘇峰)
- ・ 運命は神の考えるものだ。人間は人間らしく働けばそれで結構だ。(夏目漱石)
- ・ 命を知る者は天を怨みず。己を知る者は人を怨みず。(「説苑」)
- ・ 幸福人とは、過去の自分の生涯から満足だけを記憶している人々であり、不幸人とは、それの反対 を記憶している人々である。(萩原朔太郎)
- 「今が最悪の事態だ」と言える間は最悪ではない。(シェークスピア)
- ・ 災難にあう時節には災難にあうがよく候。死ぬる時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがる る妙法にて候。(良寛)
- 境遇とか!われ境遇を作らん。(ナポレオン)
- いかなる教育も逆境に及ぶことなし。(ディズレリ)
- ・ 急がず休まず。(ゲーテ)
- ・ 青春は失策、壮年は苦闘、老年は悔恨。(ディズレリ)
- 四十歳で愚物はほんとうに愚物だ。(ヤング)
- ・ 老人は一日をもって十日として日々に楽しむべし、常に日を愛惜して一日もあだに暮らすべからず。 (貝原益軒)
- ・ 大切なことは、大志を抱き、それをなし遂げる技能と忍耐をもつということである。その他はいずれも重要ではない。(ゲーテ)
- ・ 志ある者はついに成る。(「後感書」)
- 志は満たすべからず。楽しみは極むべからず。(「礼記」)
- だれもよい機会に会わぬ者はない。ただ捕らえられなかっただけ。(カーネギー)
- 真の知識は経験あるのみ。(ゲーテ)
- ・ 学問なき経験は、経験なき学問にまさる。(英諺)
- ・ 成功の秘訣を問うなかれ。なすべき――の些事に全力をつくせ。(ワナメーカー)
- ・ 成功の秘訣は目的の一定不変なるにあり。(スマイルス)
- ・ 世路は平々坦々たるものにあらずといえども、勇往邁進すれば、必ず成功の彼岸に達すべし。勤勉、 努力、節倹、貯蓄、一日も怠るべからず。(安田善次郎)
- ・ 楽天は人を成功に導く信仰なり。(ヘレン・ケラー)
- ・ 為す者は常に成り、行く者は常に至る。(「説苑」)
- ・ あまり熟慮しすぎる人間は大して事を成就しない(シラー)
- ・ 功成り名遂げて身退くは天の道なり。(「老子」)

- ・ 吾人の最大の光栄は、一度も失敗しないことではなく、倒れる毎に起きる所にある。(ゴールドスミス)
- ・ 勝利の第一の秘訣は早起きだ。(ウィルソン)
- 絵画は言葉を持たぬ詩である。(ホラチウス)
- わたしは色彩にわが血を混ぜています。(ジョン・オウピイ)
- ・ 志なき人は聖人もこれを如何ともするなし。(荻生徂徠)
- ・ できるものは行う。できない者が教える。(バーナード・ショー)
- ・ 模倣によって偉大になった人はかつて一人もいなかった。(サミュエル・ジョンソン)
- ・ 一事を必ずなさんと思わば、他の事は破るるをもいたむべからず。人の嘲をも恥ずるべからず。万 事にかえずしては一の大事成るべからず。(兼好)
- ・ 人一度して能くすれば己は百度す。人十度して能くすれば己は千度す。果して能くすれば愚も必ず明、柔も必ず強になり。(『中庸』)
- ・ 千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とす。(宮本武蔵)
- ・ 人間は自然の与えた能力上の制限を越えることは出来ぬ。そうかといって怠けていれば、その制限 の所在さえ知らずにしまう。だから皆ゲーテになる気で精進することが必要なのだ。(芥川龍之介)
- ・ 靴屋は良い靴を作る。靴以外のものを何も作らないから。(エマーソン)
- ・ 読書の技術は、よろしく適当にとばして読むことである。(ハマートン)
- ・ 読書は自己の頭によらず、他人の頭をもって思索することである。(ショーペンハウエル)
- ・ ことわざは一人の機知であり、万人の知恵である。(ラスキン)
- ・ 法律の備わざるところは格言これを補う。(西諺)
- ・ 人より少なく労苦して人より多くの利益を得ようとするのは薄志弱行の者のやることだ。この考えが一度芽生えると、必ず生涯不愉快の境遇に陥る。(陸奥宗光)
- ・ 愛するということは、我らが互いに見つめ合うことではなく、ともに同じ方向を見つめるということだ。(サン・テグジュベリ)
- ・ 腹の立ったときに、小言をいうな。(新島襄)
- ・ 夫を持ったり、子供を持ったりするたびに、人間の心の眼は開けてゆくものだよ、(川端康成「結婚の眼」)
- ・ お前が誰と一緒にいるか、いってみな。そうしたら、お前がどんな人間かいってやる。(セルバンテス「ドン・キホーテ」)
- ・ 自分の能力は自分で使ってみなければ、わからない。(湯川秀樹)
- 熱狂できないということは、凡庸のしるしだ。(バルザック)
- ・ 最も欲望の少ない者が最も豊かな者である。(プブリリウス)
- ・ 人間、出世したかしないか、ではありません。卑しいか卑しくないか、ですね。(永六輔「職人」)
- ・ 事を遂げる者は愚直でなければならぬ。才走ってはうまくいかない。(勝海舟)
- 率直に話すことがもっともよい態度である。(ホメロス)
- ・ ほな最初の30分は私が話しましょ。残りの30分は、あんたはんが何か面白い話を聞かせてください。(松下幸之助)
- ・ 人と一時間話をすれば、厚い本を一冊読んだのと同じくらい何かを得るものだ。(永六輔)
- ・ 老齢は山登りに似ている。登れば登るほど息切れするが、視野はますます広くなる。(映画監督 イングマール・ベルマン)

- ・ 富、眠り、健康はそれを取り戻した時になって、はじめてその味わいを満喫できる。(ジャン・パウル)
- ・ いい情報は明日でもいい。悪い情報は叩き起こしてでも伝えろ。(ナポレオン)
- ・ 古本屋の本は値切るな。(谷沢栄一)
- その使い方を知るまで、富者の財産をほめてはならぬ。(ソクラテス)
- ・ 内でけんかをしているからわからないのだ。一つ、外から見て御覧ネ。直にわかってしまふよ。(勝 海舟・「海舟語録」(講談社))
- ・ 出来ぬと思えば出来ず、出来ると思えば出来る事が随分ある。(三宅雪嶺・「世の中」(実業之世界)
- ・ 努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語る。(井上靖・「氷壁」(新潮社))
- ・ どっちへ行きたいか分からないのなら、どっちの道に行ったって大した違いはないさ。(ルイス・キャロル「不思議の国のアリス」(新潮社))
- ・ 努力の成果なんて目には見えない。でも、紙一重の薄さも重なれば本の厚さになる、(君原健二・「君原健二聞き書きゴール無限」(文芸社))
- ・ 偉大であるということは、誤解されるということだ。(エマーソン・「自己信頼」(海よ月社))
- ・ 何もしなければ道に迷わないけど、何もしなければ石になってしまう。(阿久悠・紅白歌合戦 2007 で紹介された言葉)
- ・ 勇断なき人は事を為すこと能わず。(島津斉彬・「島津斉彬公言行論」(岩波書店))
- ・ 物事を考える人は大勢いるが、行動を起こすのはたった一人だ。(ド・ゴール「ド・ゴール大戦回顧 録 1 」)
- ・ 夫を持ったり、子どもを持ったりするたびに、人間の心は開けてゆくものだよ。(川端康成・「結婚の眼」)
- ・ 英雄とは、自分のできることをした人だ。一方凡人とは、自分のできることをしようとせず、でき もしないことをしようとする人だ。(ロマン・ロラン・「魅せられたる魂」(岩波書店)))
- ・ 組織が人を動かす企業は活力を失い衰退していく。人が組織を動かす企業は発展成長する。(安岡正 篤・「安岡正篤人生の法則」(致知出版社)
- ・ 道具を大切にするものは将棋も上達する。(大山康晴・「平凡は妙手にまさる 大山康晴名言集」(こ う成出版社)))
- ・ 報酬以上の仕事をしないものは仕事並みの報酬しか得られない。(エルバート・ハバード・「ガルシアへの手紙」(総合法令出版)))
- 目的を見つけよ、手段はついてくる。(マハトマ・ガンジー)
- ・ 天才?そんなものは決してない。ただ勉強です。方法です。不断に計画しているということです。 (ロダン・「語録」」)
- ・ 神道に書籍なし。天地をもって書籍とし、日月をもって証明となす。(吉田兼倶・「神代上下しょう」)
- ・ 難問は分割せよ。(デカルト・「方法叙説」(白水社)))
- ・ 人というものが世にあるうち、もっとも大切なのは出処進退の四字でございます。そのうち進むと 出づるは人の助けを要さねばならないが、処ると退くは、人の力をかりずともよく、自分でできる もの。(河井継之助)
- ・ しかない、というものは世にない。人よりも一尺高くから物事をみれば、道はつねに幾通りもある。 (坂本龍馬・「竜馬がゆく」(文藝春秋))

- ・ 高い処に登って叫べば声は通り処に達するであらうが、そは声が大きいのではない、立つ処が高い からである。(西田幾太郎)
- ・ 真実にわれらの思想をうつす鏡は我らの日々の生活である。(モンテーニュ)
- ・ 人の一生は重荷を負て遠き道をゆくがごとし、いそぐべからず。不自由を常とおもえば不足なし。 こころに望みおこらば、困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の墓、いかりは敵とおもへ。 勝事ばかり知りて、まくることを知らざれば害其身にいたる。おのれを責て人を責むるな。及ばざ るは過ぎたるよりまされり。(徳川家康)
- ・ 徳教は目より入りて耳より入らず。(福沢諭吉)
- ・ 食われねばこそ教育するのである。食われぬからと云って子弟の教育を怠ったらなら、永久に食われぬ境遇を脱することは出来ない。(小林虎三郎)
- ・ 師は必ず弟子の問いを待ちて言を発するなり。(道元)
- 一犯一語(大杉栄)
- ・ 才能も智恵も努力も業績も身持ちも忠誠も、すべてをひっくるめたところで、ただ可愛げがあるという奴には叶わない。(谷沢栄一)
- ・ おい癌め酌みかはさうぜ秋の酒(江国滋)
- ・ 夢は砕けて夢と知り 愛は破れて愛と知り 時は流れて時と知り 友は別れて友と知り (阿久悠)
- ・ 私が田中角栄だ。小学校高等科卒である。(中略)できることはやる。できなことはやらない。しか しすべての責任は、この田中角栄が負う。以上。(田中角栄)
- ・ 人間は、頭よりも胃の腑が大事だ。モリモリ食べて長生きすれば、青白き秀才の三倍は仕事ができる。(野村胡堂「三馬鹿の記」)
- ・ 毎日を人生最後の日だと思って生きてみなさい(スティーブ・ジョブズ)
- ・ 危機と遊びが男を男にする (開高健)
- · 敗戦興国(松前重義)
- ・ 助残るものは絵だけだよ。絵かきはそれで能(よ)いのだよ(岡田三郎)
- ・ 足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壜は立ちて待ちをる(若山牧水)
- ・ 困難にあわない人生はあり得ない。もしあるとすれば、それは怠けている証拠である。(井植歳男)
- ・ 狂と呼び、痴と笑うも、世間の勝手じゃ。(豊田佐吉)
- 勇なるかな、勇なるかな、勇にあらずして何をもって行わんや(細井平洲)
- 終始一貫(北里柴三郎)
- ・ 段取り半分(佐藤忠良)
- ・ 人間の出来ている人の描いたものは絵でも矢張り出来ている。(奥村土牛)
- ・ 絵を描くことは、長く遠く果てしない孤独との戦いである。(三岸節子)
- 静かに行く者は健やかに行く。健やかに行く者は遠くまで行く。(城山三郎)
- ・ 日本独自の何かをつくってみようとね。できなければ、その芽だけでもつくっておいてやろうと思 う (加山又造)
- 真実一路(中川一郎)
- 私は草木の精である(牧野富太郎)
- ・ 私は精神的に弱いので、逆にそれを人にさらけ出して、どうしてもやらざるを得ない状況に自分を 追い込んでゆくのである。(植村直己)
- · 春風秋雨是人生(金田一春彦)

- 私は自伝を書くように絵を描く(ピカソ)
- ・ 六十、七十、洟垂れ小僧男盛りは百から百から(平櫛田中)
- ・ たとえ乞食になっても絵かきになろう (熊谷守一)
- ・ 自分がやりかけた仕事を一歩づつたゆみなく進んでくのが不思議なことだけれど、この世の生き甲斐なんです。(いわさきちひろ)
- ・ 最初にそれがとても至難だと思われるものを、屈服せずにやり遂げると、それは必ず至難ではない ものであることが分かる。(堂本印象)
- ・ 私は、はじめから、文学というものは実業による経済的な防波堤の内側でなすべきものと決めていた (村野四郎)
- ・ どうでもいいものはどうでもいいんだよいちばん大事なことに一番大事ないのちをかけてゆくこと だ (相田みつを)
- ・ アノ人はこの世に活きているあいだは真面目なる生涯を送った人であるといわれるだけのことを後世の人に遺したいと思います。(内村鑑三)
- ・ どんどん染物を染めていって、自分というものなどは、品物のかげにかくれてしまうような仕事を したい(芹沢けい介)
- 用意周到、準備万端、先手必勝(瀬島龍三)
- ・ 人生は妥協の連続ですよ。人は妥協しなければ生きていけません。でもね、ひとつだけ妥協しない ものを持たなくちゃね。(武谷三男)
- ・ 静かにつっぱり続ける。(赤坂憲雄)
- ・ 今まで見ていたのは夢のための夢だ。男 60 を過ぎてこれからみる夢こそが本当の夢だ(松本幸四郎)
- ・ 万物の長とうまれたものは、徳をおさめ、知をいみがき、人の人たる道をつくさねばなりません。 (第一期「尋常小学修身書 第二学年児童用)
- ・ かように、じぶんのおこないをつつしんで、よく、人にまじわり、そのうえ、よのため、人のため に、つくすように、こころがけると、よい日本人になれます。(第一期「尋常小学修身書 第二学年 児童用)
- ・ 愛するということは、我らが互いに見つめ合うことではなく、ともに同じ方向を見つめるということだ。(サン・テグジュベリ)
- ・ 腹の立ったときに、小言をいうな。(新島襄)
- ・ 夫を持ったり、子供を持ったりするたびに、人間の心の眼は開けてゆくものだよ、(川端康成「結婚の眼」)
- ・ お前が誰と一緒にいるか、いってみな。そうしたら、お前がどんな人間かいってやる。(セルバンテス「ドン・キホーテ)
- 自分の能力は自分で使ってみなければ、わからない。(湯川秀樹)
- 熱狂できないということは、凡庸のしるしだ。(バルザック)
- ・ 最も欲望の少ない者が最も豊かな者である。(プブリリウス)
- ・ 人間、出世したかしないか、ではありません。卑しいか卑しくないか、ですね。(永六輔「職人」)
- ・ 事を遂げる者は愚直でなければならぬ。才走ってはうまくいかない。(勝海舟)
- 率直に話すことがもっともよい態度である。(ホメロス)
- ・ ほな最初の30分は私が話しましょ。残りの30分は、あんたはんが何か面白い話を聞かせてください。(松下幸之助)

- 人と一時間話をすれば、厚い本を一冊読んだのと同じくらい何かを得るものだ。(永六輔)
- ・ 老齢は山登りに似ている。登れば登るほど息切れするが、視野はますます広くなる。(映画監督 イングマール・ベルマン)
- ・ 富、眠り、健康はそれを取り戻した時になって、はじめてその味わいを満喫できる。(ジャン・パウル)
- ・ 人生は一箱のマッチに似ている。重大に扱うにはばかばかしい。重大に扱わなければ危険である。 (芥川龍之介)
- ・ 自由は山嶺の空気に似ている。どちらも弱い者にはたえることはできない。(芥川龍之介)
- ・ 人生は一冊の書物に似ている。ばか者たちはそれをいそいでぺらぺらとめくっていくが、かしこい 人間は、念入りにそれをよむ。なぜならば、彼らはただ一度しかそれをよむことができないことを 知っているから。(ジョン・パウル)
- ・ 人は城、人は石垣、人は堀、なさけは味方、あだは敵なり。(武田信玄)
- 教える能力というものはおもしろく教えることである。(アインシュタイン)
- 知恵は経験の娘である。(レオナルド・ダ・ヴィンチ)
- ・ その理論が経験によって裏づけられない思索家の教訓をさけよ。(レオナルド・ダ・ヴィンチ)
- ・ 病気の境涯に処しては、病気を楽しむということにならなければ生きていても何の面白味もない。 (正岡子規)
- 私たちは精神の窓をあらゆる方向にあけはなたなければいけないが、そこから吹きとばされてはな らない。(ガンジー)
- ・ 家庭の不幸はどんなときでも、一つだけではすまないものである。(ドストエフスキー)
- ・ 頭の悪い人には他人の仕事がたいていみんな立派に見えると同時に、又えらい人の仕事でも自分に 出来そうな気がするので、おのずから自分の向上心を刺激されるということもあるのである。(寺田 寅彦)
- 不断に疑問を抱くことこそ知恵に対する最初の鍵である。(アベラルズス)
- ・ 真実にわれらの思想をうつす鏡はわれらの日々の生活である。(モンテーニュ)
- ・ 我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、ともにこれ凡夫のみ。(聖徳太子)
- ・ 順境は、我能力の達し得る範囲にあるものにして、返て我力を減殺するものなり。逆境は、我能力 の達し得る範囲外にあるものにして、反て我力を増長するものなり。(清沢満之)
- ・ 人は人吾は、吾なりとにかくに吾行く道を吾は行くなり。(西田幾太郎)
- ・ 教えて化すれば、化、及び難く、化して教うれば、教、入りやすし。(佐藤一斎)
- ・ 人は教えることによって、最もよく学ぶ。(セネカ)
- ・ 師は必ず弟子の問を待ちて言を発するなり。(道元)
- ・ 世間は活きている。理窟は死んでいる。(勝海舟)
- ・ 禍は口より出でて身を破る。福は心より出でて我をかざる。(日蓮)
- ・ おまえは、史記などに書いてあることを信用するか。(山本周五郎)
- ・ よい主人は、智恵ある者を使い、健気な者を使い、欲に耽る者をも使い、愚痴なる者をも捨てずして、それぞれの用に応じて使うぞ。(天草版「金句集」)
- ・ 汚職は国を滅ぼさないが、正義は国を滅ぼすのである。(山本夏彦)
- 現代は思想家よりも思想仲買人の方が幅を利かせている世の中である。(林達夫)
- ・ 他人の悪を能く見る者は、己が悪これを見ず。(足利尊氏)

- ・ 人は善くも言われ、悪くも言われるのがよい。(三宅雪嶺)
- ・ 本を読んだら、そこに書いてあることを絶えず実際の問題に当てはめ、自己の思考力を訓練し、学 問を実際に応用する術を習得しなければならない。(石橋湛山)
- ・ 長い文章なら、どんな下手でも書く事ができる。文章を短く切り詰める事が出来るようになったら、 その人は一ぱしの書き手である。(薄田泣菫)
- ・ 問題は何といっても一つ一つ対策をたてて実効あらしめる事、議論ではない(佐藤栄作)
- ・ いつも「これが最後」と思って曲を書いているんです。、、子どもの心を忘れず、常に「今」に夢中 でいたいですから(富田勲)
- ・ 身死して財残るは、智者のせざるところなり。(吉田兼好)
- ・ 年寄りは若いときに貯金をしろと言うが、それは間違っている。最後の一銭まで貯めようなどと考えたらいけない。自分に投資しなさい。私は 40 歳になるまで、1 ドルたりとも貯金したことがない。 (ヘンリー・フォード)
- ・ わたしの財産の最初の使いみちは、それで暇と自由を買いとることだ。(ルソー)
- ・ 報酬以上の仕事をしないものは、仕事並みの報酬しか得られない。(エルバート・ハバード)
- ・ 金がないから何も出来ないという人間は、金があっても何も出来ない人間である。(小林一三)
- ・ そもそもが、仕事に精を出し、それから満足を得ている者は、貧困というものに煩わされない人種 なのだ。(ヘミングウェイ)
- ・ 限りない資本を活用する資格とは何であるか。それは信用である。(渋沢栄一)
- ・ 金は食って行けさえすればいい程度に取り、喜びを自分の仕事の中に求めるようにすべきだ。(志賀 直哉)
- ・ 有望な仕事があるが資本がなくて困るという人がいる。だが、これは愚痴でしかない。その仕事が 真に有望で、かつその人が真に信用ある人なら資金ができぬはずがない。(渋沢栄一)
- ・ むかし景気のよかったものは、復古を主張し、いま景気がよいものは、現状維持を主張し、まだ景 気のよくないものは、革命を主張する。(魯迅)
- ・ 富人が金を得れば、悪行が増長する。貧人が金を得れば堕落の道を降っていく。(森鴎外)
- わずかな金で満足すること、これもひとつの才能である。(ジュール・ルナール)
- 真実な人間とは自己の青春を終えることのできない人間だと言ってもいい。(伊藤整)
- 日に新たに、日々に新たなり(湯王)
- アルプス・アポン・アルプス (ナポレオン)
- ・ 人はその長所のみとらば可なり。短所を知るを要せず(荻生徂徠)
- 仕事の報酬は仕事である(藤原銀次郎)
- 智恵は経験の娘である。(レオナルド・ダ・ヴィンチ)
- ・ その理論が経験によって確証されないあの思索家たちの教訓を避けよ。(レオナルド・ダ・ヴィンチ)
- 「幸福」が来たら、ためらわず前髪をつかめ、うしろは禿げているからね。(レオナルド・ダ・ヴィンチ)
- ・ どうすれば向かい風や逆巻く波を味方につけ、勢いを持続できるか。周到な目配りと創意工夫が欠かせない。(桂三枝・日経 120501)
- ・ 貯蓄十両、儲け百両、見切り千両、無欲万両(邱永漢)
- ・ 竜は私たち一人ひとりの中にいる。竜は自分の経験を食べて大きくなる。年を重ねれば強くなる。 自分の竜を大事にしなければね。(ブータンのワンチュク国王)

- ・ 人間は誰でも自分の心の三畳間を持つべきだ。(モンテーニュ)
- ・ 物事は「上から見る」「横から見る」「下から見る」のでは、それぞれ違ってくる。常に多角的に見る習慣を身に付ける。(大宅壮一)
- ・ 弱体な国家は、常に優柔不断である。そして決断に手間取ることは、これまた常に有害である。(マキャベリ)
- ・ 俺は、何をしにこの世に生まれて来たのンか、いまだに解っていない男なんや。ほんまや、、。(若き 日の司馬遼太郎)
- ・ 挫折というバネを使うんだ。(サッカー・中村俊輔)
- ・ 覇権を握ることは難しい。覇権を持続することはさらに難しい。しかし一度失った覇権を奪回する ことはさらに難しい。(野球・三原脩)
- ・ 不安と戦いながら練習するからチャンピオンは強くなる。(ボクシング・具志堅用高)
- ・ 自分を追い込まずして、アイデアが出てくるわけないじゃないか。(ボクシング・輪島功一)
- ・ 一位は目ざして、二、三位になることはあっても、三位を目標にして一、二位になることはない。 (バレーボール・真鍋政義)
- ・ プレッシャーを受けるのも経験だし、挑戦だと思う。注目されることは成長するための要因でもあるから。(サッカー・香川慎司)
- ・ 努力では負けなかったね。僕はね、地球を二周走っているんですよ。(ボクシング・ファイティング 原田)
- ・ 誰よりも準備をし、誰よりも走って、誰よりも努力しているという自信はある。(サッカー・長友佑都)
- ・ 周りが勝手に限界を唱えるんです。もったいない。これからが面白いのに。(スピードスケート・岡 崎朋美)
- ・ 何かをつかむためには、何かを変えないといけない。(サッカー・宮本恒靖)
- ・ ケガはしない、、、いや、正確にはケガをしないように最大の努力をしてきた。(ゴルフ・青木功)
- ・ 私はね、起こることはすべて、必要があって起こるんだ、と思うんですよ。(柔道・山下泰裕)
- ・ 一番つらいのは、夢が叶わないことではなくて、夢を持てないことです。(マラソン・佐藤信之)
- ・ 打席に立つ以上は王らしいバッティングをするしかない。(野球・王貞治)
- ・ 最後にどうするかと言ったら、私心なく、無心になって決める。(サッカー・岡田武史)
- ・ 楽しいから笑うのではない。笑うから楽しいのだ。(ウィリアム・ジェームズ)
- 人々が老けこむのは、希望を捨ててしまうからだ。(サミュエル・ウルマン)
- 歳をとったから遊ばなくなるのではない。遊ばなくなるから歳をとるのだ。(バーナード・ショー)
- ・ 興味があるからやるというよりは、やるから興味ができる場合がどうも多いようである。(寺田寅彦)
- 旅は私にとって、精神の若返りの泉だ。(アンデルセン)
- ・ 学ぶことをやめた人はだれでも老いている。20歳であっても80歳であっても、学び続ける人は誰でも若い。(ヘンリー・フォード)
- ・ いまできない事は。十年たってもできまい。思いついた事は、すぐやろうじゃないか。(二代目市川 左団次)
- ・ 人と話をするときは、その人自身のことを話題にせよ。そうすれば、相手は何時間でもこちらの話

を聞いてくれる。(ディズレーリ)

- ・ 望ましい人間とは、他人に圧迫を与えず、他人の心を和ませるユーモアを持っていることです。(ドナルド・ケンドール・ペプシコーラ会長)
- 「よし、朝だ!」というのも、「あーあ、朝か」というのもあなたの考え方次第だ。(ウェイン・W・ ダイアー)
- ・ ナンバーワンになるには、ナンバーツーであるかの如く鍛えなくてはいけない。(モーリス・グリーン)
- ・ 汗で溺れた人はいない。(ルー・ホルツ)
- ・ 勝負は観客から離れたところで決まる (モハメド・アリ)
- すべては過程だ。結果ではない。(カール・ルイス)
- ・ 偉大な選手になるかどうかは、努力と生活を律する意志の強さにかかっている。(ビリー・ジーン・ キング)
- ・ がんばれば成功するし、がんばらなければ成功しない。(ブルース・ジェンナー)
- ・ 一番大事なのはいつも勝てると信じること。そうすれば勝つチャンスが来る。(マルチナ・ヒンギス)
- ・ 実現してくれと願う人もいれば、実現してくれたらいいのにと夢想する人もいる。そして自ら実現 する人もいる。(マイケル・ジョーダン)
- ・ 「勝ち負けは重要でない」と言った人は、おそらく皆負けている。(マルチナ・ナブラチロワ)
- ・ 自分でコントロールできないことを排除して、できることに集中するんだ。(カール・ルイス)
- ・ 金メダルは金でできているわけではない。汗と強い意志、そしてガッツという希少な合金でできているんだ。(ダン・ゲーブル)
- ・ ファンは、とるに足らない人間にはブーイングをしない。(レジー・ジャクソン)
- グループの力は、リーダーの力である。(ヴィンス・ロンバルディ)
- ・ 僕は、まだプレーができると知りながら去る道を選んだ。(マイケル・ジョーダン)
- 一度あきらめることを覚えたら、クセになる。(ヴィンス・ロンバルディ)
- ・ 振り返るな。追いつかれる。(サチェル・ペイジ)
- ・ 他人の人生に影響をもたらしてこそ人生には意味がある。(ジャッキーロビンソン)
- ・ 教育のこと、天下にこれより偉いなるはなし。一人の徳教、広人万人に加わり、一世の化育、遠く 百世に及ぶ。教育のこと、天下これより楽しきはなし。英才を陶鋳して兼ねて天下を善くす。その 身、亡ぶといえども余薫とこしえに存す。(嘉納治五郎)
- ・ 真の文明は山を荒らさず川を荒らさず村を破らず人を殺さざるべし(田中正造)
- ・ 冷に耐え、苦に耐え、煩に耐え、閑に耐え、激せず、躁がず、競わず、随わず、以って、大事を成べし(王陽明)
- 私はよく生きた者がよく死ぬことができるのだと思っている。それはよく働くものがよく眠るのと同じことで、そこに何の理くつもない。(中川一政)
- ・ 人間は事実を見なければならない。事実が人間を見ているからだ。(チャーチル)
- ・ 玉は琢磨によりて器となる。人は練磨によりて仁となる。(道元)
- よき目的にはよき手段でなければならない。(ガンジー)
- ・ 祖母は百歳になっても、まだ、先のプランがいっぱいあった。それが祖母の命を支えた。(宇野千代)
- ・ 会社での8時間を懸命に働くのは当たり前である。当たり前でないのは、会社外の時間をどうすごすかである。(土光敏夫)

- ・ 一国の消長は青年の双肩にある。青年を教育することこそが天下を治める捷径である。(孔子)
- ・ 大事は軽く、小事は重く(中山素平)
- ・ 小さな妥協は小さな人物でもできるが、大きな妥協は大きな人物でなければできない。(松永安左ェ 門)
- ・ 一にジェントルマン、二に吝、三にビジョンなし、四に人を信用せず、五に度胸なし(高崎達之助)
- ・ わしは 100 まで生きる。あと 5 年だ。そして、これからの 5 年に、20 歳からはじめて過去 75 年営んだ業績と同じ分量の仕事がやれる。(御木本幸吉)
- ・ 親苦労する。その子楽する。孫乞食する。
- ・ 性格がその人の運命である。(伊藤肇)
- ・ もっと自分は仕事をやらないといけないと思いました。仕事をするというのは新しい人と出会うことですから。出会う、というのはいいですよね(高倉健)
- ・ 彼は昔耶蘇教伝道師見習の真似をした。英語読本の教師の真似もした。新聞雑誌記者の真似もした。 漁師の真似もした。今は百姓の真似をして居る。真似は到底本物で無い。彼は終に美的百姓である (徳富蘆花)
- ・ 今までの日本人画家は、パリに勉強しにきただけだ。俺は、パリで一流と認められるような仕事を したい(藤田嗣治)
- ・ 芸術はもう沢山だ。ほんとに人間としての悲しみを知る画かきが出ても好いと思ふ(竹久夢二)
- 真の文明は山を荒らさず川を荒らさず村を破らず人を殺さざるべし(田中正造)
- ・ 教育のこと、天下にこれより偉いなるはなし。一人の徳教、広人万人に加わり、一世の化育、遠く 百世に及ぶ。教育のこと、天下これより楽しきはなし。英才を陶鋳して兼ねて天下を善くす。その 身、亡ぶといえども余薫とこしえに存す(嘉納治五郎)
- ・ 学校は精神上の故郷である。(中略)多くの教師や、多数の同窓と切磋琢磨した学校は、又偉大な感 化を吾等に与へ、惹いては生涯吾等の心を支配するに至るのである。

されば善良なる校風の下に教育された者と、然らざる者とは、其の一生を通じて幸不幸の懸隔は果たしていかばかりであろうか。(中略)故に健全なる校風の確立は、学校関係者の第一の義務であり、 且つりそうであらねばならぬ。

(良き校風の確立のために) 更に肝心なのは生徒各自の心掛けである。如何に歴史が燦然と輝いて ゐても、如何に教師が諄々とといても (?)、生徒自らに自覚がなく、校風発揚の意志が無かったな らば、それは呵惜(あたら) 無意義なものとなってしまふのである。然も校風は学校といふ協同生 活の所産であるから、生徒各自は一致協力して校風の振興に努力を積まねばならないのである (大 野清吉)

- ・ 、、武力日本と相並んで文化日本を世界に躍進せしむべく努力せねばならぬことを痛感する。、、現代 人の現代的教養を目的として岩波新書を刊行せんとする。、、、、躍進日本の要求する新知識を提供し、 岩波文庫の古典的知識と相俟って大国民としての教養に遺憾なきを期せんとするに外ならない。、、 古今を貫く原理と東西に通ずる道念によってのみ東洋民族の先覚者としての大使命は果たされるで あろう。、、(岩波茂雄)
- ・ 歴史を越えて、今日まで流れる日本人の民族性、私達日本人に共通する、生命のふるさとを描き出 したい(木下恵介)
- ・ ともかく一章の起承転結を考えつつ一日一節を書く。日曜日も祭日もない。盆も暮れも書く。多作 の秘訣とはただそれだけだ(佐伯泰英)

- わたしは薬で命をながらえるより、絵を描いて命を充実させることをおすすめしている。(安野光雅)
- むずかしいことをやさしく

やさしいことをふかく

ふかいことをゆかいに

ゆかいなことをまじめに

書くこと(井上ひさし)

- ・ 用を雑にした時に、雑用が生まれる(渡辺和子)
- ・ よき細工は、少し鈍いき刀を使ふといふ(吉田兼好)
- ・ 身死して財(たから)残ることは、智者のせざるところなり(吉田兼好)
- アメリカとは仲良く、中国とは喧嘩せず(高坂正堯)
- ・ 一番稽古する力士が番付を上げていく (横綱旭富士)
- ・ 高い塔を建ててみなければ新しい水平線は見えない (川口淳一郎)
- ・ 与えられた仕事をコツコツと地道にやり続けた先に、自分にしか到達できない泉がある(宮本輝)
- ・ 誰彼もあらず一天自尊の秋(飯田蛇笏)
- 裸体画はいっさい描かない(ミレー)
- ・ この道を行けば どうなるものか 危ぶむことなかれ 危ぶめば道はなし 踏み出せばその一歩が 道となる 迷わず行けよ 行けばわかる (一休和尚)
- ・ 成功した人は、頑張っている人を見ると応援せずにはいられない。、、成功の要諦とは「いかに自分を助けてくれる人と出会うか」とも言えます。、、、そのためには、自分がこれだと思ったことを、一心不乱にやり続ける、これが自分を応援してくれる人に出会ういちばんの近道です。(北原照久)
- ヘタでいい、ヘタがいい(小池邦夫)
- ・ 一生に一度でいいから会心の一枚を撮ってみたい (岡田紅陽)
- 今後君たちがどうやっていくかを地獄の底から見ていくよ(土光敏夫)
- ・ 難民問題で必要なのは、3 つのリスペクト(尊厳)です。国々の献身、人道支援に従事する者たち、難 民。(緒方貞子)
- ・ デモ隊は声ある声だ。わしは、声なき声に未知に耳を傾ける。後楽園は巨人戦で満員じゃないか。(岸信介)
- ・ 名刺をもらうと顔を覚えない(田中角栄)
- ・ 一番力があるときこそ、一番難しい問題に挑戦するんだ(田中角栄)
- ・ 冷蔵庫に入れておいた芝居をするな(勝新太郎)
- ・ 82 年をひと言でいうとだな、人に騙されるなということだ(中内功)
- ・ 今年は一本も打てないんじゃないか、と不安にもなる(王貞治)
- 60歳を過ぎなければ、人の上にはたてない(佐藤栄作)
- ・ 美空ひばりによって完成したと思える流行歌の本道と、違う道はないものであろうか(阿久悠)
- ・ 持ち味を生かせ(北大路魯山人)
- 精力善用。自他共栄。(嘉納治五郎)
- ・ 富士山より高い塔を立てる(正力松太郎)
- それ(都落ち)はちがう。上洛や。(梅棹忠夫)

- ・ 国際的になるということは、その国の人としてみごとな人になることだ (To be ineternational, be national)。、、思想、ものごし、にその人が選んだ人生の筋が通っていれば国際人なれる。 (曽野綾子)
- ・ 正しくたって間違えたってどっちでもいのだ。お前の兄弟を支持しろ。(アラブの格言)
- ・ 人間は仕事を通して成長していかなければなりません。その鍵となるのは好奇心です。常に問題を 求め、積極的に疑問を出していく心と頭が必要なのです。(緒方貞子)
- ・ ベストを尽くして失敗したら、ベストを尽くしたってことさ (スティーブ・ジョブス)
- ・ 仕事はナメてかかって、真面目にやれ (テリー伊藤)
- 小さいことを積み重ねるのが、とんでもないところへ行くただひとつの道だと思っています (イチロー)
- ・ 成功の反対は失敗ではなく、「やらないこと」だ(佐々木則夫)
- ハンディをエネルギーにしようと考える(安藤忠雄)
- ・ 悪戦僅に生還するの想いあり(吉田東伍・大日本地名辞書)
- ・ 無理をしない (諸橋轍次・大漢和辞典)
- 天国の言語は英語だよ!(斎藤秀三郎・斎藤和英大辞典)
- ・ 障害は不自由ではあるけれども、決して不幸ではありません。(ヘレンケラー)
- ・ やれやれ、目明きとは不自由なものじゃな。(塙保己一)
- ・ 指導者には、民衆を正しい方向へ導いているという自信のもとに、 群れより先を行き、新たな針 路を拓かなくてはならないときがある (マンデラ)
- ・ 大きな山を登った後にだけ、人はさらに登るべきたくさんの山があることを見出す(マンデラ)
- ・ 障子を開けてみよ、外は広いぞ(豊田佐吉)
- ・ 経営者の仕事は、大きいことと小さいことを考えることです(松下幸之助)
- ・ 百論をひとつに止めるの器量なき者は謹みおそれて匠長の座をされ(西岡常一)
- ・ 悲観主義者はすべての好機の中に困難をみつけるが、楽観主義者はすべての困難の中に好機を見い だす (チャーチル)
- ・ 世間は生きている、理屈は死んでいる (勝海舟)
- 指導者とは希望を扱う人である(ナポレオン)
- ・ 四十歳よりは内は勝つように、四十歳より後は負けざるように(武田信玄)
- ・ 嫌いな人間だが、一緒に仕事はする(後藤田正晴)
- ・ 収穫を問うなかれ、ただ耕耘を問え(曽国藩)
- 学問は歴史に極まり候(荻生徂徠)
- 君たちがいる。そして、わしがいるではないか。われわれにやれなくて、だれがやるのだ。(今西欣司)
- ・ 細部を見なければ全体は見えない(稲盛和夫)
- ・ 平易な言葉で奥深いことを伝えることが大切なのだ。(吉田秀和)
- ・ 国宝とは何者ぞ、宝とは道心なり。道心ある人を国の宝となす(最澄)
- ・ 金を失うことは小さく失うことである。名誉を失うことは大きく失うことである。しかし勇気を失 うことはすべてを失うことである(チャーチル:源氏鶏太)
- なんじの道を進め、そして人々をして語るに委せよ!(ダンテ:マルクス:蜷川幸雄)

- ・ 一生を終えてのちに残るのは、われわれが集めたものではなくて、われわれが与えたものである (シャンドリー:三浦綾子)
- ・ 今の私は、これまでに出会ったものすべての賜物である(テニスン:日野原重明)
- ・ 幸も不幸もない。要は心の持ち方一つなのだ。(シェークスピア:斎藤茂太)
- ・ 勤勉努力は凡を非凡にする(平沢興)
- ・ 生きるんだ、お前は親ではないか (藤原てい:北朝鮮兵士から)
- 思いたつ日が吉日(木村尚三郎)
- ・ 見えるものを見ず、見えぬものを見よ(美輪明宏)
- ・ 芸に遊ぶ (孔子:白川静)
- ・ 専門家とは、非常に狭い分野で、ありとあらゆる失敗を重ねてきた人間のことである。(ニールス・ボーア。「量子力学」の創設者)
- ・ 偉大な人々は目標を持ち、そうでない人々は願望を持つ。準備を怠るものには、チャンスは絶対に 訪れない。(ルイ・パスツール)
- ・ シャルトルのベルナールいわく、われわれは巨人の肩に乗った小人のようなものだ。当の巨人より も遠くを見渡せるのは、われわれの目がいいからでも、身体が大きいからでもない。大きな体の上 にのっているからだ。(ニュートン)
- ・ 小さな疑問からは、小さな答えしか得られない。(ジェームズ・ワトソン。分子生物学者)
- ・ 性格は顔に出る

生活は体型に出る

本音は仕草に出る

感情は声に出る

センスは服に出る

美意識は爪に出る

清潔感は髪に出る

落ち着きは足に出る

- ・ 士は過ちなきを貴ばず、善く過ちを改むるを貴しとなす(佐久間象山)
- ・ ものをつくる苦労や喜びを知っている人は、自分の失敗を、そう簡単に人のせいにはしません(井 深大)
- 何も行わず、手をこまねくということ、それが最も危険なのです(ケネディ大統領)
- ・ 日本的なものが、大きなことを言えば一番世界的に通用するもんなんだ(小津安二郎)
- 人間生まれたときははだかだ。失敗してはだかになってももとにかえるだけじゃないか(力道山)
- ・ 三日続けて仕事をしないと、頭の配線図が消えてしまう (サトウサンペイ)
- ・ 会社の仕事とは別に何か研究なり勉強を生涯持ち続けるようにすること。電話で済まさず必ず手紙 を書くようにすること(丸田芳郎)
- ・ 経営とは世の中の役にたって、儲けることだ(五島昇)
- 残躯楽しまざるべけんや(伊達正宗)
- 一日一快(城山三郎)
- ・ 外国旅行は、ジェットコースターに乗せられ、ぐるぐる廻っているようなものだから、話を聞いた らメモをしておかなければ駄目だよ (大宅壮一)

- ・ 人は、たとえ六十、七十であろうと、二十五六であろうと、春夏春秋というのがあるのだ。悔ゆる ことはない(吉田松陰)
- ・ 偶然は、準備のできていない人を助けない (パスツール)
- ・ 小さくていいから、鋭いキリで深い穴を開けてみよ。壁の向こうが見えてくる(常盤文克)
- ・ 困難な仕事でも「できるか?」と聞かれたら、「もちろん、できます」と答えることだ。やり方はそれから懸命に考えればよい(セオドア・ルーズベルト)
- ・ 出世の道は信用を得ることである(小林一三)
- 諦めない奴には、絶対に勝てない(ベーブ・ルース)
- ・ 聴くことを多くして、語ることを少なくし、行うことに力を注ぐべし(成瀬仁蔵)
- 忠告は滅多に歓迎されない (チェスタフィールド)
- ・ 施して報いを願わず、受けて恩を忘れず(大隈重信)
- どこかにたどり着きたいなら、今いるところには留まらないことを決心することだ(J.P.モルガン)
- ・ 老いは怖くない。目標を失うのが怖いのだ(三浦雄一郎)
- ・ 臆病者の目には、敵はつねに大軍に見える(織田信長)
- これは技ではなく道だと思っております。(包丁)
- 天命死(立川昭二)
- ・ リーダーはいかなる時も上機嫌で希望の旗印を掲げていなければならない(三浦雄一郎)
- ・ 天下第一等の師につきてこそ人間の真に生甲斐ありというべし(森信三)
- ・ 一人の卓れた思想家を真に読みぬく事によって、一この見識は出来るものなり。同時に真にその人 を選ばば、事すでに半ば成りしというも可ならむ。(森信三)
- ・ 教育とは人生の生き方のタネ蒔きをすることなり。(森信三)
- ・ 人はすべからく、終生の師を持つべし。真に卓越せる師をもつ人は、終生道を求めて歩き続ける。 その状あたかも、北斗七星を望んで孝行する船の如し。(森信三)
- ・ 人間は何人も自伝を書くべきである。それは二度とないこの世の「生」を恵まれた以上、自分が生涯たどった歩みのあらましを、血を伝えた子孫に書きのこす義務があるからである。(森信三)
- ・ 一眼は遠く歴史の彼方を、そして一眼は却下の実践へ。(森信三)
- ・ ぼくは人物を描きたい、人物を、もっと人物を。赤ん坊からソクラテスに至るまで、白い肌の黒髪の女から陽に焼けて煉瓦色の顔をした黄色い髪の女に至るまで、この二本足の動物のシリーズはぼくの力ではどうにもならない(ゴッホ)
- ・ 女性を観察し研究する時、私はたいてい花を想像します(マチス)
- 病気の話をするのはやめにしましょう」(宇野千代)
- ・ 決まりきった日課が不可能を可能にする。煉瓦を一つずつ積み上げるような規則正しい生活を続ければ、壮麗な建築物が生まれる。(井上寿一)
- ・ 愚痴をやめよ。ただちに建設にかかれ(出光佐三)
- ・ 興業という、文化から程遠いところで仕事をしていますが、志だけは高く持ってきました。(高野悦子)
- ・ アニメーションは世界の秘密をのぞき見ることだ。風や人の動きや表情やまなざしや体の筋肉の中に世界の秘密がある。そう思える仕事だ。(宮崎駿)
- ・ 子供たちに「この世は生きるに値するんだ」ということを伝えることが仕事の根幹になければならないと思っていた。(宮崎駿)

- ・ 火事は最初の5分間、選挙は最後の5分間(渡辺美智雄)
- ・ 人事を尽くして天命に遊ぶ(小沢一郎)
- ・ 人間も企業も前を向いて歩けなくなったときが終わりである。(豊田英二)
- ・ 「ワトソン君、君は物事を見るが観察をしない」(シャーロック・ホームズ)
- ・ 「あなたはこれまでの人生のいかなる時期よりも、もっと忙しくなることでしょう。なぜなら今や あなたは引退され、察するに、自分のやりたいことにこの世のすべての時間を注ぎ込むだろうから であります。」(フリードマン教授)
- 私が遠くを見ることができているのだとすれば、それは巨人の肩に立っていたからです。(ニュートン)
- ・ 模倣によって偉大になった人はかつて一人もいなかった。(サミュエル・ジョンソン)
- ・ 教育の秘宝は生活尊重にある。(エマーソン)
- ・ 成功の秘訣を問うなかれ。なすべき一つの些事に全力をつくせ。(ワナメーカー)
- ・ 成功の自決は目的の一定不変なるにあり。(スマイルス)
- ・ 楽天は人を成功に導く信仰なり。(ヘレン・ケラー)
- あまり熟慮しすぎる人間は大して事を成就しない。(シラー)
- ・ 大切なことは、大志を抱き、それをなし遂げる技能と忍耐をもつということである。その他はいず れも重要ではない。(ゲーテ)
- ・ 青春は失策、壮年は苦闘、老年は悔恨。(ディズレリ)
- いかなる教育も逆境に及ぶことなし(ディズレリ)
- 急がず休まず (ゲーテ)
- ・ 正直と勤勉を汝の不断の伴侶たらしめよ (フランクリン)
- ・ 青年にすすめたいことは、ただ3語につきる。すなわち働け。もっと働け、あくまで働け。(ビスマルク)
- 戦いは最後の五分間にあり。(ナポレオン)
- 真の知識は経験あるのみ。(ゲーテ)
- ・ 克己は勝利の最大たるものなり。(プラトン)
- ・ 創造力は知識よりもっと大切である。(アインシュタイン)
- ・ 俺は超二流(楽天・星野仙一監督)
- 西洋が恐ろしいのは、雷をきいても耳をふさぐことを第一の悪、と考えることです。(渡辺崋山)
- ・ 西洋人も人なり、佐賀人も人なり、薩摩人も人なり、くじけずに研究せよ(島津斉彬)
- 練言は一番槍にまさる(徳川家康)
- ・ 仏のうそを方便といい、武士のうそを武略という (明智光秀)
- ・ どうも広い川だねえ、さぞ大きな鯰がいるだろう(頭山満)
- やってみなはれ、やらなわからしませんで(鳥井信治郎)
- · 飛耳長目(吉田松陰)
- ヨーロッパ人は国境をなくすことに全力を傾けなくてはならない(クーデンホフ・カレルギー伯)
- ・ 百発百中の一発、よく百発一中の敵砲百門に対抗しうる(東郷平八郎)
- 小心でなくては大事はできない(川路聖あきら)
- ・ たとえ私の門人でも、その後いい考えが出てきたら、私の説を批判しながらその考えを広めなさい (本居宣長)

- ・ 書を読まば最上の書を、師を択ばば第一流の人を(落合直文)
- ・ 気は長く、心は広く、色薄く、勤めは固く身をば持つべし (勝小吉)
- ・ 起・承・転・転。終身現役、命の最後の一滴まで燃焼させたい。、、学びの姿勢を無くしたとき、人 は本当の意味で「老いる」のだ。(童門冬二)
- ・ できあがった人形には人格が備わって、ひとり歩きしはじめる。主張するし、生意気になる。人形には人形の人生があると思う。(与勇輝)
- 源へ戻ろう、新しい力を汲み上げるため。(ヴェルディ)
- ・ 交響曲を書くことは、私にとって、世界を組み立てることなのだ。(マーラー)
- ・ 評論家なんて、言おうと気にしないことだ。これまで評論家の銅像があったかね。(シベリウス)
- 私は音楽に恋をしているのです。(ブラームス)
- ・ 仕事をするときは上機嫌でやれ、そうすれば仕事もはかどるし、身体も疲れない。(ワーグナー)
- ・ 神がもし、世界でもっとも不幸な人生を私に用意していたとしても、私は運命に立ち向かうだろう。 (ベートーベン)
- ・ 音のする盆をかくのは大変だ。写実というのも、そこまで行かなければ本当の写実ではない。(小林 古径)
- ・ ぼくは自分にとって複雑すぎる。自分をどう使ったらいいのかわからない。(サン=テグジュベリ)
- いつみてもさてお若いと口々にほめそやさるる年ぞくやしき(朱楽菅江)
- ・ けいこがつらいと思ったことはない (大鵬)
- ・ 先祖と比べて小さいと思われないよう演じるのみです(12代目市川團十郎)
- ・ 役者には、うまい、へたは関係ない。強いて言えばそこには人間学しかない(三國連太郎)
- ・ 球が止まって見える (川上哲治)
- わかりきったようなことになお深い謎を見出せるのは選ばれた人たちだ(北杜夫)
- 現状維持は後退である(ディズニー)
- 若いか年寄りかの分かれ目は、不条理に対して闘う気概があるかどうかということです。(細川護熙)
- ・ ナニ、誰を味方にしようなどといふから、間違うのだ。みンな、敵がいい。敵が無いと、事が出来 ぬ。(勝海舟)
- ・ 西洋人も人なり、佐賀人も人なり、薩摩人も人なり、退屈せずますあmす研究すべし(島津斉彬)
- ・ 人にはすべて能不能あり、いちがいに人をすて、或はわらふ可からず候(富岡鉄舟)
- ・ 卿等は辞表を出せば済むも、朕は辞表を出されず(明治天皇)
- ・ 春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら粛む(佐藤一斎)
- ・ 凡そ学問は必ず積累を以てす。一朝一夕の能く通暁するところにあらず(佐久間象山)
- ・ 一人にても餓死流亡に及び候わば、人君の大罪にて候(渡辺崋山)
- 予は俯仰天地に愧る事なし、いよいよこれより心を定め、静居して以て天下をトせんと欲す(大隈 重信)
- ・ 予は朝にあるも野にあるも主義とする所は則ち一なり(大隈重信)
- ・ ただ旧友を忘れざるのみならず、兼ねてまた新友を求めざるべからず(福沢諭吉)
- ・ 独立の気力なき者は、必ず人に依頼す。人に依頼する者は、必ず人を恐る。人を恐る者は、必ず人に豁ふものなり(福沢諭吉)
- ・ 天下に最も多きは人なり。最も少なきも人なり(黒田官兵衛)
- ・ 高い塔を建ててみなければ、新しい地平線は見えない。(川口淳一郎)

- 70 代は前半と後半がある。80 代は3 つに分かれて前期、中期、後期だ。90 代は毎年違う、と諭された。(阿刀田高)
- ・ 女性が魅かれるのは、仕事をしている男であって、仕事をさせられている男ではない。(藤本義一)
- ・ 大志を抱けば、天下何ものか恐るにたらず。(吉田茂)
- 静かにゆくものは、すこやかにゆく。すこやかにゆくものは、遠くまでゆく。(イギリスの諺)
- ・ 失敗しない者は、常に何事もなし得ない。(フェルプス)
- ・ 戦での勝ちは、五分をもって上とし、七分を中、十分をもって下とす。(武田信玄)
- ・ 運命は我々の行為の半分を支配し、他の半分を我々自身にゆだねる。(マキャベリ)
- ・ 運は性格の中にある、という言葉はなおざりに生まれたものではない。(芥川龍之介)
- ・ 心が変われば態度が変わる。態度が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる。(蓮沼門三)
- ・ 日の光をかりて照る大いなる月たらんよりは、自ら光を放つ小き燈火(ともしび)たれ。(森鴎外)
- ・ 金だけが人生ではないが、金のない人生もまた人生とは言えない。(モーム)
- ・ 得失は一時にして、栄辱は千歳なり (勝海舟)
- ・ 世の中は桜の下の相撲かな(木戸孝允)
- ・ 男子というものは、困ったということは、決していうものじゃない(高杉晋作)
- ・ 明日死ぬと思って生きよ。不老不死だと思って学べ(マハトマ・ガンジー)
- ・ 世間の老人連中は長生きのことばかり気にするが、寿命というものは歳月の長短ではなく、人生に 厚みや幅があって、苦楽が多く思索を続ける人が真の長寿者だ。(福沢諭吉)
- ・ 汗は自分でかきましょう。手柄は人にあげましょう。そしてその場で忘れましょう。(竹下登)
- ・ 世間の老人連中は長生きのことばかり気にするが、寿命というものは歳月の長短ではなく、人生に 厚みや幅があって、苦楽が多く思索を続ける人が真の長寿者だ。(福沢諭吉)
- ・ 戦わずして敵を降伏させる(黒田官兵衛)
- ・ 机の前に座ることが大切なのだ。机の前に座って、ペンを握り、さア書くと、言う姿勢をとること が大切なのである。(宇野千代)
- ・ 結婚生活で大切なことは、、、慢性の病気を克服していくように、少しずつ理想へ足元を踏み固めていくことだと思う。(佐藤愛子)
- ・ 長く歳月をかけて自分を鍛え、磨き抜いてきた、底光りするような存在感といったら、私の言いたい品格にやや近づくだろうか。かなりの年齢に達しなければ現れない何かである。(茨木のり子)
- 70 代は前半と後半がある。80 代は3 つに分かれて前期、中期、後期だ。90 代は毎年違う、と諭された。(阿刀田高)
- ・ 人生は不思議なもので、開くドアを一つ違えるだけで、その先がまるで変わってしまいます。(笹本 恒子)
- ・ 万難千苦を嘗め尽くし、業若し成らずんば、異郷に客死するもうらむべきにあらず(伊沢修二)
- ・ 人は、他人のために行動を起こしたときこそ、本当の人間になれる。(マンデラ)
- ・ 神が「永遠の今」という時間を各人に恵み給うたことは、自分は自分としての永遠に連(つが)る 寄与をするよう期待されてのことではないでしょうか。まず自分の自分なりの確立が大切です。そ れには、その根幹を貫くバック・ボーンがなければならない。それは自分の勉強と思索と反省から 生まれて、不断に成長する自分自体の方法論であろうと思います。これなくしては、私共は歴史か ら疎外されてしまい、その形成に参加する資格がなくなるわけです。(大平正芳)

- ようわからん、けどおもしろい(湯川秀樹)
- ・ 自分の置かれた立場でできることはしっかりやる。仕事の面白さはやってみないと分からない。(福 地茂雄)
- ・ いっさいは、自分の心をどの方向に向けていくかに、かかっている。老いを、単に死に至るまでの 衰えの時期と見るか、それとも、人生の完成に向けての総仕上げの時ととらえるのか。老いを人生 の下り坂と見るのか、上り坂と見るのか・・・同じ時間を過ごしても。人生の豊かさは天と地の違いが あるのだ。(池田大作)
- ・ ソフトバンクは将来、豆腐屋が「一丁、二丁」と数えるように、「一兆、二兆」というビジネスをや る会社になる(孫正義)
- ・ 年をとるほど立派になり、息を引き取るときに、最も優れた品格を具える。そういう人生でありたいものです。(伊与田覚)
- ・ 私が田中角栄だ。小学校高等科卒業である。諸君は日本中の秀才代表であり、財政金融の専門家ぞろいだ。私は素人だが、トゲの多い門松をたくさんくぐってきて、いささか仕事のコツを知っている。一緒に仕事をするのは互いによく知り合うことが大切だ。われと思わん者は誰でも遠慮なく大臣室に来てほしい。何でも言ってくれ。上司の許可を得る必要はない。できることはやる。できないことはやらない。しかし、すべての責任はこのワシが負う、以上。(田中角栄)
- ・ あなたのエベレストを探しましょう。(三浦雄一郎)
- ・ 育英の基本は師弟の和熟にあり(夏目漱石)
- 私には私にしかできないことがあり、あなたにはあなたにしかできないことがある。(最澄)
- ・ 迷いというものは、すべて自分の身の可愛さから生じる。(盤珪 永琢)
- ・ やったことは、たとえ失敗しても、20年後には笑い話にできる。しかし、やらなかったことは、20 年後には後悔するだけだ。(マーク・トウェイン)
- ・ たった一人の勇気を持った者が時代をつくっていく。(トーマス・ジェファーション)
- ・ 忠告を受け入れられる者は、忠告を与える者よりも優れていることがある。(クネーベル)
- ・ 知性を高める唯一の方法は、何事も決めつけないこと。すなわちあらゆる考えに対して心を広くすることである。(ジョン・キーツ)
- ・ 軽い荷物にしてほしいと願ってはいけない。強い背中にしてほしいと願わなくてはならない。(F・ルーズベルト)
- ・ 知識への投資は、常に最高の利息がついてくる。(ベンジャミン・フランクリン)
- わが敵は、わが味方である。(エドモンド・バーク)
- あなたが持っているもので、あなたがいる場所で、あなたができることをやりなさい。(セオドア・ルーズベルト)
- ・ 難問は分割せよ。(デカルト)
- ・ 私たちの問題は人間が生み出したもの。従って、人間により解決できるのです。人間社会の中で起る問題の中で、人間を超えているものはありません。(ジョン・F・ケネディ)
- ・ 何かを言うときは、よくよく考えて、相手のためにも、自分のためにもなるようなことを口にすべきである。(道元)
- ・ 自然は人に一枚の舌と二つの耳を与えた。だから人は話すことの二倍だけ聞かねばならない。(ゼノン)
- ・ 自分が元気になる一番の方法は、他の誰かを元気にすることだ。(マーク・トウェイン)

- ・ 人を用いる道は、その長所を取りて短所はかまわぬことなり。(荻生徂徠)
- もし悪口を言うなら、自分に返ってくることを予期せよ。(プラウタス) -
- ・ 多くの愚者を友とするより、一人の知者を友とせよ。(デモクリトス)
- 「できるか?」と尋ねられたら、いつでも「もちろん、できます!」と答えなさい。それから急いで、やり方を探るのだ。(セオドア・ルーズベルト)
- ・ 真に偉大な存在となるためには、人々の上に立つのではなく、彼らと共にあらねばならない。(モンテスキュー)
- ・ 誰もみな、一つのことを探究すればするだけ、偉大になり、成功するのである。(オリソン・スウェット・マーデン)
- ・ 成功とは、失敗に失敗を重ねても情熱を失わない能力のことだ。(チャーチル)
- ・ 成功の程度を測る尺度は、どんなむずかしい問題を解決したかではない。去年と同じ問題が今年も また持ち上がっていないかどうかである。(ダレス)
- 機会が二度、君のドアをノックすると考えるな。(シャンフォール)
- ・ 多くのことを成し遂げるための手っ取り早い方法は、一つずつ片付けていくことだ。(サミュエル・スマイルズ)
- ・ 偉大なことは弾みで為されるものではない。小さなことの積み重ねによって成し遂げられるものである。(ゴッホ)
- ・ 心が暗ければ出会うものすべて災いとなり、心が太陽のように明るければ、出会うものすべてが幸いになる。(空海)
- ・ 本来の自分であろうとすることが、最も幸せなことである。(エラスムス)
- ・ 人のために灯をともせば、自分の前も明るくなる。(日蓮)
- ・ たとえ明日、世界が滅びようとも、私は今日、リンゴの木を植える。(マルティン・ルター)
- ・ 多くの人に幸せや喜びを与えていく。それ以上に、尊くて素晴らしいものなどない。(ベートーベン)
- ・ その日、その日が「一年で最高の一日である」と心に刻め。(エマーソン)
- ・ 強敵がいなくなれば、こちらの力も弱くなる。(徳川家康)
- ・ 「そのうちに」を口ぐせにしている人は、永久に「そのうち」を繰り返す。(朱子)
- ・ 脱皮できない蛇は滅びる。(ニーチェ)
- ・ 英雄とは自分のできることをした人だ。(ロマン・ロラン)
- 許すことができるのは、強い者だけだ。(ガンジー)
- 賢い人は聞き、愚か者は語る。(ソロモン)
- 見えないところで友人のことを良く言っている人こそ信頼できる。(トーマス・フラー)
- ・ 計画のない目標は、ただの願い事にすぎない。(サンテグジュベリ)
- 仕事を追え、仕事に追われるな。(ベンジャミン・フランクリン)
- ・ 時を得る者は栄え、失う者は滅ぶ。(列子)
- ・ 誹謗中傷への最高の返答は、黙って仕事に精を出すことである。(ジョージ・ワシントン)
- リーダーとは「希望を配る人」のことである。(ナポレオン)
- ・ 歌に上達しようと思うなら、恋をしなさい。(与謝野晶子)
- ・ 不満を募らせる人間に、居心地のよい椅子は決して見つからない。(ベンジャミン・フランクリン)
- 幸せは去ったあとに光を放つ。(イギリスのことわざ)
- ・ 死は人生の終末ではない。生涯の完成である。(マルティン・ルター)

- ・ 核兵器に殺されるよりも、核兵器に反対して殺される道を私は選ぶ。(宇都宮徳馬)
- ・ 汝が千人 いくさに起たば 学問は ここに廃れむ。汝が 千人の 一人 ひとりだに生きてしあらば 国学は やがて興らむ。(折口信夫)
- ・ 職務は、忠実に完璧に望まれた以上のことをやる。しかし、残りの時間と金は使いたいように自由 に使う。(渋沢敬三)
- ・ 人間古今東西みなチョボチョボや。(小田実)
- ・ サラサラとしたお茶漬けでなくて、お客にたっぷりとしたご馳走を食べさせたい。ビフテキの上に バターを塗って、その上に蒲焼を載せるような、誰も食べたことのないご馳走をね。(黒澤明)
- ・ 異国趣味で琵琶や尺八をやるのではない。西洋音楽にない日本の音楽の本質的で重要な面を出した いと思った。(武満徹)
- ・ 映画に文法はない。どうつくるのも自由だ。ただ一つ、権力の側からは描かないこと。(若松孝二)
- ・ 闘病生活は一つの精神闘争なのである。(鳩山一郎)
- 一人荒野を行く(赤崎勇)
- ・ はやりの研究にとらわれず、自分が本当にやりたいならやりなさい。自分がやりたいことだったら、 仮に結果が出なくても続けることができる(赤崎勇)
- ・ 自分は平均的な人間。才能がある人はいっぱいいる。普通にやれば勝てるわけがない。他の人がやっていないテーマをやろうと常に思っていた(天野浩)
- ・ 私は四国から出たことがない人間だった。若い人には、誰でも頑張ればこういうチャンスがあるということを示せたと思う(中村修二)
- ・ 原動力は怒り(中村修二)
- ・ 一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペンが、世界を変えられるのです。(マララ・ ユスフザイ。ノーベル平和賞受賞者)
- ・ 分け登る、麓の道はおおけれど、同じ高峰の月を見るかな
- ・ 愛ある人に、目標有り

目標ある人に、計画有り

計画ある人に、実行有り

実行ある人に、成果有り

成果ある人に、幸せ有り

幸せある人に、ロマン有り

ロマンある人に、夢がある(内山敏彦・料理人)

- ・ これが最後の仕事かもしれない、そう思って毎回取り組むことが大事。一回一回の仕事にベストを 尽くすことです。本気で誠実に向き合わなければ、どんな仕事も全うできません。(木村孝・染織研 究家)
- ・ これからのテーマは「人」です。(糸井重里)
- ・ 仕事を学ぶには、昔話を聞くより一緒にやったほうがいい。(篠山紀信)
- ・ 嫉妬も中傷も受け止めて、仕事でオセロをひっくり返す。(秋元康)
- 下を見ちゃいかん(坂本龍一)
- 3年間歯を食いしばって名刺の代わりになるような仕事を完成させれば、そこから自由が拓ける、、。 (沢木耕太郎)
- ・ 私の理想は、無名のうちに慎ましく生きて、何も声を上げずに死んでしまうことです。(渡辺京二)

- ・ 外交は、大きな棍棒片手に優しい声音で(セオドア・ルーズベルト大統領)
- ・ 眺望は人を育てる(大岡信)
- ・ 往く道は 精進にして 忍びて終わり 悔いなし (高倉健)
- ・ 僕より才能のある人はたくさんいた。でも、僕ほど一生懸命プレーし、毎日、努力を惜しまなかった選手はいないと思う。(デレク・ジータ:ヤンキース)
- ・ 人間は地位が高くなるほど、足もとが滑りやすくなる。(タキトゥス)
- ・ 何も、用意しないで、フイっと往って、不用意に見て来なければならぬ。(勝海舟)
- ・ 総じて人は己に克つを以て成り、自らを愛するを以て敗るるぞ。(西郷隆盛)
- 才能を疑い出すのがまさしく才能のあかしなんだよ。(ホフマン)
- ・ むかし景気のよかったもおは、復古を主張し、いま景気のよいものは、現状維持を主張し、まだ景 気のよくないもおは、革新を主張する。(魯迅)
- ・ 生きることは生涯をかけて学ぶべきことである。そして、おそらくそれ以上に不思議に思われるで あろうが、生涯をかけて学ぶべきは死ぬことである。(セネカ)
- ・ ひとり、燈 (ともしび) のもとに文 (ふみ) をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰む わざなる。(兼好法師)
- ・ 自分で行った貴重な省察は、できるだけ早く書きとめておくべきである。(ショーペンハウエル)
- ・ 書物を買い求めるのは結構なことであろう。ただしついでにそれを読む時間も、買い求めることができればである。(ショーペンハウエル)
- ・働きのよろこびは、自分でよく考え、実際に経験することからしか生まれない。(ヒルティ)
- 負いかた一つで重荷も軽い。(フィールディング)
- ・ 世の中のいざこざの因(もと)になるのは、奸計や悪意よりも、むしろ誤解や怠慢だね、(ゲーテ)
- ・ 世の中は粥で造られてはいない、君等は怠けてぐづぐづするな。かたいものは噛まねばならない。 喉がつまるか消化するか、二つに一つだ。(ゲーテ)
- ・ 政治とは、情熱と判断力の二つを駆使しながら、かたい板に力をこめてじわっじわっと穴をくりぬいていく作業である。(ヴェーバー)
- ・ 生まれてから死ぬまで、人間ってものは、醒めているかぎり、たえず何らかの教育を受けているわけだよ。そしてその教育の中でも一番は、いわゆる人間関係って奴だな。(マーク・トウェイン)
- ・ 約束を守る最上の手段は決して約束をしないことである。(ナポレオン)
- ・ 作戦計画を立てることは誰にでもできる。しかし戦争をすることのできる者は少ない。(ナポレオン)
- ・ 若いころ流さなかった汗は、年老いて涙となって流れる。(中村清)
- ・ 目を閉じて、じっと我慢。怒ったら、怒鳴ったら、終わり。それは祈りに近い。憎むは人の業にあらず、裁きは神の領域。--そう教えてくれたのはアラブの兄弟たちだった。(後藤健二)
- ・ 歴史を書いていて同じ愚を繰り返していると感じる。(陳瞬臣)
- ・ 見るべき程の事は見つ。(平知盛)
- ・ 自分はラストマン (最終責任者) だ。(川村隆)
- ・ That's one small step for man,one giant leap for mankind.(アームストロング船長)
- ・ 和を以(も)って貴(とうと)しとなし、忤(さから)うこと無きを宗(むね)とせよ。人みな党あり、また達(さと)れるもの少なし。ここをもって、あるいは君父(くんぷ)に順(したが)わず、また隣里(りんり)に違(たが)う。しかれども、上(かみ)和(やわら)ぎ下(しも)睦(むつ)びて、事を論(あげつら)うに諧(かな)うときは、すなわち事理おのずから通ず。何事か成らざらん。(聖徳太子)

- ・ 大したことをしたわけではない。当然のことをしただけです。(杉原千畝)
- ・ 人でも、ものでも、結局のところは品ですね。品格が大切ですちゃ。(安宅英一)
- ・ 「ムッソリーニは非常にきさくで体格のいい親しみのあるおじさん、ヒトラーは物静かで知性的な 態度であった。(進藤一馬)
- ・ 風強し、暖。今日よりい約2ヶ月半、初めての病院生活と医療的拷問との日々始まるか、と思う。 しかし、すべてそのときそのときに応ずればよしと覚悟は定まりてあり。(中野孝次)
- ・ 「顧みて幸福なる生涯なりき。このことを天に感謝す。わが志・わが思想・わが願いはすべて、わが著作の中にあり。予は喜びも悲しみもすべて文学に託して生きたり。予を偲ぶ者あらば、予が著作を見よ。予に関わりしすべての人に感謝す。さらば。」(遺書)(中野孝次)
- ・ 従容として死につく、という言葉あり、人の死の理想たるべし。(中野孝次)
- ・ 春の夜やガンをいだきてひとねむり(中野孝次)
- ・ よし、あと一年か。それなら、あと一年しかないと思わず、あと一年みなと別れを告げる余裕を与 えられたと思うことにしよう、一年を感謝して生きよう、とようやく思定まる。(中野孝次)
- ・ ふたりが一体となって自分たちだけの歴史をつくっていくとき、その歴史が今度は逆に老年になって夫婦を支える確かな基盤になってくる。(中野孝次)
- ・ いま世界でもっともすぐれた文学は、日本語で書かれている、、(高橋源一郎)
- ・ 春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 冷しかりけり(道元)
- ・ 語学修得は第一に多読である。分からんでもよろしいから無茶苦茶に読むのである。元来人生は分からんことばかりではないか。それでも広く世を渡っているうちには処世の妙諦がだんだんと会得されてくる。語学もこれと同じである。広く読んでいるうちに自然と妙味が分かり、面白みが出て来て、しまいには愉快で愉快でたまらなくなるのだ。(斎藤秀三郎)
- 「反骨のジャーナリスト」というのは、、二重形容だ。(むのたけじ)
- ・ 「脱皮しない蛇は死ぬ。」「主語をハッキリさせてものを言え」「動詞を存分に働かせ」「形容詞を使 うな、事実を言え」「言葉の持つ面白さを耕せ」。(むのたけじ)
- 「きょうコレヲ必ずヤル」「きょうコレヲ決シテヤラナイ」この二つを毎日やるうか、やらないかは 一生の豊凶を左右する。(むのたけじ)
- ・ 若者を友人とする老人はよく笑う。老人を友とする若者はよく考える。(むのたけじ)
- ・ 剣道も噺も間が大切。間の悪い奴を間抜けというんだ。(柳家小さん・五代目)
- サラリーマンとして成功したければ、まずサラリーマン根性を捨てることだ。(小林一三)
- ・ 適材を適所に置くということは、口では簡単に言うが、そんなに適材がゴロゴロ転がっているものではない。責任を持たせて、どしどし仕事をさせるのが一番だ。(小林一三)
- ・ 百歩先の見えるものは、狂人あつかいにされる。五十歩先の見えるものは、多くは犠牲者となる。 十歩先の見えるものが、成功者である。現在が見えぬのは、落伍者である。(小林一三)
- ・ 成功の道は信用を得ることである。どんなに才能や手腕があっても、平凡なことを忠実に実行できないような若者は将来の見込みはない。(小林一三)
- ・ 五十、七十、百まで生きても、アッという間の一生涯だよ。何が何やらわからんまんまに。会うて 別れて生まれて死に行く。(夢野久作)
- ・ 死をはじめて想う。それを青春という(山田風太郎)
- ・ ぼくは(明治時代を)恐ろしい時代だと思うけれどねえ。日本はほぼ十年おきに戦争していったんだもの、太平洋戦争までね。(山田風太郎)

- ・ 目的の大きさに比例して努力・精進しなければならないのは、人生の鉄則だ。(シュリーマン)
- ・ 前後を切断せよ、満身の力を込めて働け。(夏目漱石)
- ・ 世の中は根気の前に頭を下げる事を知っていますが、火花の前には一瞬の記憶しか与えて呉れません (夏目漱石)
- ・ 大学に職業学という講座があって、職業は学理的にどういうように発展するものである。またどういう時世にはどんな職業が自然の進化の原則として出て来るものである。と一々明細に説明してやって、例えば東京市の地図が牛込区とか小石川区とか何区とかハッキリ分かってるように、職業の分化発展の意味も区域も盛衰も一目の下にりょう然会得出来るような仕掛けにして、そうして自分の好きな所へ飛び込ましたらまことに便利じゃないかと思う(夏目漱石)
- ・ 面目とはね、君、真剣勝負の意味だよ(夏目漱石)
- ・ 人生においては何事も偶然である。しかしまた人生においては何事も必然である。このような人生 を我々は運命と称している。(三木清)
- ・ 希望に生きる者は、常に若い。(三木清)
- ・ 一つの所に停まり、一つの物の中に深く入ってゆくことなしに、如何にして真に物を知ることができるであろうか。(三木清)
- ・ 習慣を自由なしに得るものは、人生生において多くのことをなしえる。習慣は技術的なものである ゆえに、自由にすることが出来る。(三木清)
- ・ 人は軽蔑されたとかんじる時によく怒る。だから自信のある者はあまり怒らない。(三木清)
- ・ 長い一生のあいだなにをしてきた、そしてなにをのこしてゆくのか。終始一貫して、私は自然とは なにかという問題を、問いかえしてきたように思われる。(今西錦司)
- ・ 自分の目でみて、自分の頭で考えよ。(今西錦司)
- ・ 陰謀を持ち大目標を秘めて生きてゆく人生のいかに生きがいあるかを、私は身をもって経験してき た。(今西錦司)
- 最初は下手でも結構。でも絶対に止めないで続けること。やれば必ず芽が出ます。(片岡球子)
- ・ 恋愛は常に不意打ちの形をとる。(立原正秋)
- ・ 「写楽」よ、余計なことを考えずに、てめえのために描くんだ、てめえのために。(蔦屋重三郎)
- ・ 縁の下の力持ちになることを厭うな。人のためによかれと願う心を常に持てよ。(前島密)
- ・ 男子は生涯、一事をなせばたる。(秋山好古)
- ・ 今は命を大切にすることより、酒でも遊びでも恋愛でもよい、命がけで何かを実行してみることだ。 そのときはじめて命の尊さと、この世のはかなさを実感するだろう。(白洲正子)
- ・ 我が生類を憐れむことは行き過ぎであろうとも百年後も守るべしそれが孝行である。(徳川綱吉)
- ・ 三菱の事業は一門のために経営するのではない。お前たちの中に国家のことを考えず、岩崎家のみを考える者があったなら、三菱は潰したほうがよい。このことを、しっかり腹に入れておくがよい。 (岩崎弥之助)
- 人は女に生まれない。女になるのだ。 (ボーボワール)
- ・ 自分が大統領を狙わず、大統領職に自分を狙わせる。これこそ大統領になる最大のコツではないだろうか(リチャード・ニクソン)
- ・ 文章を書くのにテープに口述筆記をするのが一番だ。重要な演説の原稿をまとめるのが自己を鍛える。決断の検証と思考を磨くことになるからだ。(リチャード・ニクソン)
- ・ 天にありては星、地にありては花、人にありては愛、これ世に美しきものの最たらずや。(髙山樗牛)

- ・ 偉人と凡人の別は一言にして尽くすべきのみ。彼は人生を簡単にする者なり。此は人生を複雑にする者なり。(髙山樗牛)
- ・ 大いなる人となるの道は唯二つあるのみである。己の小さきを悟るのは其の一つである。己の大いなるを信ずるは他の一つである。(髙山樗牛)
- ・ 世の中で起こることはすべて必然、必要で、振り返ってみればすべてベストのタイミングで起きている。(船井幸雄)
- ・ 人間は夢を持ち前へ歩き続ける限り、余生はいらない。願望は寝ても覚めても忘れるな。泥棒でも、 敵をやっつけるのも、美女を手に入れるのも、そう願う心をどんなに状況が変化しようが、一時も 忘れずに心がけていれば、かならず成し遂げられる。(伊能忠敬)
- ・ 精神の注ぎ候ところより自然と妙境に入り、至密の上の至密の上をも尽くし候(伊能忠敬)
- ・ 一番重要なことは長生きだ。、、、長生きすれば、いま生きている連中の正誤がわかる。(きだみのる)
- ・ 共産主義者はすべてに先だって、マルクスの「資本論」より、ファーブルの「昆虫記」を読まなく ちゃならない。現実探求のリアルな目は、これで養うのだ。(きだみのる)
- ・ 日本人は降伏を終戦と言い直した。占領軍を進駐軍といった。自尊心のオブラートで現実を包んで、ファクトを見ようとしない。(きだみのる)
- ・ 日本はまだ、米国から完全に独立していない。戦争の清算は済んでいないんだ。そろそろ真の独立 をするべきだね。(大森実)
- ・ アメリカ人の言葉に『時は金なり』とありますが、むしろ『時は金よりも尊し』と述べたい。(新島 棄)
- ・ 幸せとは、健康で記憶力が悪いということだ。(シュバイツァー)
- ・ 自分たちの目の黒いうちに必ずまた合同しようではないか (三鬼隆)
- ・ 総理でなくても仕事はできる(福田赳夫)
- 「昭和元禄」。「日本経済は全治3年の重傷症」。「福田ドクトリン」。「視界ゼロ」。「狂乱物価」。「日々 是反省」。「 さあ働こう内閣」。「身を殺して以て仁を為す。是上州人。」。「明治三十八歳」。「掃除大 臣」(福田赳夫)
- ・ 民の声は天の声というが、天の声にも変な声もたまにはあるな、と、こう思いますね。(福田赳夫)
- ・ 総理・総裁は推されてなるもので、手練手管の限りを尽くしてかき分けてなるものではない。 いずれ近い将来日本国がこの福田赳夫を必要とするときがなからずやってくる。(福田赳夫)
- 散るをいとふ世にも人にもさきがけて散るこそ花と吹く小夜風(三島由紀夫)
- ・ 空虚な目標であれ、目標をめざして努力する過程にしか人間の幸福が存在しない。(三島由紀夫)
- ・ 死において、自殺といふ行為と、生の全的な表現との同時性が可能であることは疑ひを容れない。 最高の瞬間の表現は死に俟たねばならない。(三島由紀夫)
- ・ つまるところははらが坐っているかどうかだけなんですよ。やることは断固としてやるという私心 のない人が、5、6人いたら、大抵のことはできる。(細川護熙)
- それなのに、東海道新幹線だけは、かたくなに車内改札を続けている。(古市憲寿)
- ・ 実践、実践、また実践。挑戦、挑戦、また挑戦。修練、修練、また修練。やってやれないことはない。やらずにできるわけがない。今やらずしていつできる。やってやってやり通せ。(平櫛田中)
- ・ 人を動かすことに詩の価値がある(西條八十)
- ・ 花も嵐も踏み越えて 行くが男の生きる道(西條八十)

- ・ 私は国家、国民のために神に祈る気持ちで考え抜きました、、、私は新総裁にはこの際、政界の長老 である三木武夫君が最も適任であると確信し、ここにご推挙申し上げます。(椎名悦三郎)
- 世界は自由だ。私は好きなことをやる(オナシス)
- グラス一杯払うのがやっとでも酒は高級クラブで飲め。(オナシス)
- ・ 余分なことを言ったりやったりすれば、面倒な場面を招くのにつながる。だから余分なことをしない『省事(しょうじ)』の心が必要になるのさ・・・重い地位へ就けばなおさらこの心が大切になってくるのだ。(椎名悦三郎)
- ・ 相手に屈辱感を与えないで、間違っておったなということに、そこはかとなく気づくような答え方 をしてあげなければいかん(椎名悦三郎)。
- 家庭という宝物は壊れて失われる時に、はじめてその真の価値を当事者に認識させる。(伊藤整)
- ・ 勉強の仕方さえ教えればそれでよい。後は自分でやれるはず(伊藤整)
- ・ いつも自分を少しだけ無理な状態の中に置くようにしなさい(伊藤整)
- ・ 人間の幸福というのは、滅多にやってこないような、大きなチャンスではなく、いつでもあるよう な、小さな日常の積み重ねで生まれる (ベンジャミン・フランクリン)
- ・ 本当に豊かなのは誰か?それは、自分に満足している者である(ベンジャミン・フランクリン)
- ・ 明日やらなければならないことは、今日の内にやってしまうこと。之が人生の秘訣である(ベンジャミン・フランクリン)
- ・ 規則正しい生活は、人に健康と富、そして賢明さを与えてくれる (ベンジャミン・フランクリン)
- ・ 相手を説得するために、正論など持ち出してはいけない。相手にどのような利益があるかを、話す だけでいい(ベンジャミン・フランクリン)
- ・ 私には著書を作るという病癖があり、しかも著書を作った後にはこれを恥じる病癖がある。(モンテスキュー)
- ・ 平凡な語で、非凡な事を言うのが、非凡である。(モンテスキュー)
- ・ 予は危険人物なり。(宮武外骨)
- ・ 生きとし生けるものには生命の力と向上発展の欲望がある(森田正馬)
- 自然に服従し境遇に従順なれ(森田正馬)
- ・ 我々の最も根本の恐怖は死の恐怖であって、それは表から見れば、生きたいという欲望である(森 田正馬)
- ・ 生物はみなそれぞれ分に応じ、心身ともに念々刻々、その最良の方法による活動と営々の努力によって、実に永遠無窮の進化発展をしているように思われる(森田正馬)
- ・ 私は若干の意見をもっていた。意見のない者と、意見の対立はない。(石原莞爾)
- ・ 回り道が近道のことがある。それが人生だ。(牧野昇)
- うまくいかなくてもやったことは全部将来の自分のプラスになります。(牧野昇)
- 人間は習慣の束である。(ジョン・ヒューム)
- ・ 貪欲は勤勉の鞭である。(ジョン・ヒューム)
- ・ サハリンと北海道の天然ガスパイプラインにコミットし、米国の反発を覚悟してプーチン訪日を実現すれば、北方領土交渉についてプーチンは何らかの譲歩をする、、(佐藤優)
- ・ 自分の強さを実感している人は、謙虚になる。(ポール・セザンヌ)
- 自然に線は存在しない。(ポール・セザンヌ)
- 私は絵を描きながら死にたい。描きながら死にたい。(ポール・セザンヌ)

- ・ 芸術の頂点は人物画だ。(ポール・セザンヌ)
- ・ 自然を円筒、球、円錐という単純な形にとらえなおし遠近法の中に置く。その線や面を中心に向か うように配置する。(ポール・セザンヌ)
- ・ 文机の塵はらひ紙のべて物まだ書かぬ白きを愛でぬ(森鴎外)
- ・ やはりふた親どもの意に遵い陸軍に出仕の外は御座無く候。(森鴎外)
- ・ 汝の血を冷やかにせよ。汝の血を冷やかにせよ。何れの場合なるを問わず、怒りは人を服する所以 にあらざればなり。(森鴎外)
- ・ 問題があるときに必要とされるのは、利口者ではなく信頼できる人。(水原茂)
- ・ 卑屈の奴隷に安んじて共に満足する人民等は、これは国家の良民ではない。 ほんに国家の死民でござる。(植木枝盛)
- ・ 咳をしても一人(尾崎放哉)
- ・ 旅人は待てよ このかすかな泉に 舌を濡らす前に 考えよ人生の旅人 汝もまた岩間からしみ出 た水霊にすぎない。(西脇順三郎)
- ・ いつまでも富士山の八合目にいるような気持ちで技術を磨くのよ。頂上に登ってしまったら技術は 低下するでしょ。(山野愛子)
- ・ きょうの私とあすの私は違う。(山野愛子)
- ・ 命ある限り。(吉田正)
- ・ 人は一人では生きられない。だからこそ、人とのかかわりに人生は大きく左右されます。(三國連太郎)
- ・ 答えは簡単だ。私は被害者であり、加害者でもあった。(有吉佐和子)
- ・ (才女の) レッテルを剥がすためにも悲愴な決意で書いた。(有吉佐和子)
- ・ 中村八大は他から作られず、自分で完成させる物也。よってすべての環境は、彼にとって生かされる。中村八大が送る生涯は自分が製作する人生也。中村八大は永遠に生きねばならない。中村八大は誰よりも苦しく、誰よりも幸せでなければならない。中村八大は今日から決定的に作られて行く。 1953年十月二十一日 右の通り決定する。(中村八大)
- ・ 人間四十九年、これ一杯の酒 極楽も地獄もさきはありあけの 月の心にかかる雲なし。(上杉謙信)
- 喜怒哀楽をもって人を楽しませるというのは素晴らしいことだと考えます(永田雅一)
- ・ 人間の能力は未来進行形で発展します。たとえ今は実現できなくても、1年後、2年後に実現する つもりで努力を重ね、勉強をすれば必ず成長する。そのためにはまず、自分の能力が無限に発展す ると信じることです。(稲盛和夫)
- ・ 不運なら、運不運を忘れるほど仕事に熱中してみなさい。(稲盛和夫)
- ・ 多くの日本人が自分に与えられた仕事に打ち込み、また、世のため、人のために役立とうとするなら、21世紀の日本は素晴らしいものになると信じています。(稲盛和夫)
- ・ 創造的な仕事とは、高度な技術を開発するということばかりではない。今日よりは明日、明日よりは明後日と創意工夫をこらし、改良、改善を積み上げていくことである。一人ひとりが自分の持ち場で、もっと能率の上がる方法はないか、昨日の欠点をどうしたら直せるか、考える習慣をつけることだ。(稲盛和夫)
- ・ 仕事の本当の喜びと醍醐味を味わうためには、渦の中心になって、周囲の人たちを巻き込むくらい、 自発的に、積極的に仕事に取り組まなくてはならない。(稲盛和夫)

- ・ ひとつの仕事や分野を深く追求することにより、すべてを知ることができる。広くて浅い知識は、 何も知らないことと同じだ。(稲盛和夫)
- ・ 球を遠くに飛ばすことより、自分をコントロールすることが勝敗に結びつくことを、私はゴルフから学んだ。(ジャック・ニクラス)
- ・ 自分自身をコントロールすること。それは激情を抑えることではない。激情を自分に起こさせない 能力をいうのだ。(ジャック・ニクラス)
- ・ 忙しさは悲しみを忘れさせる。(バイロン)
- ・ 四海困窮せば天禄永く絶えん、小人に国家を治めしめば災害並び到ると・・ (大塩平八郎)
- ・ 身の死するを恐れず ただ心の死するを恐るるなり (大塩平八郎)
- ・ 人間は、一人ひとり、みんなすばらしい力を持っている。その力を出すために勉強しているんだよ。 (椋鳩十)
- ・ 勝者には決し知り難い、敗者のみの知る人間の真実を、できうる限りつかみとり、それを未来に生かす道をひらくことこそ、近代史学をこえる新しい歴史学のなすべきことなのではなかろうか。(網野善彦)
- ・ 愛情には一つの法則しかない。それは愛する人を幸福にすることだ。(スタンダール)
- ・ 天才の特徴は、凡人がひいたレールに自分の思想をのせないことだ。(スタンダール)
- ・ 最も賢明なことは、自分を己れの打ち明け相手にすることである。(スタンダール)
- ・ イタリア人の勇気は怒りの発作であり、ドイツ人の勇気は一瞬の陶酔であり、スペイン人の勇気は 自尊心の現れである。(スタンダール)
- お、い、あ、く、ま。おこるな、いばるな、あせるな、くじけるな、まけるな。(堀田庄三)
- ・ デジタル的傾向の人は細かい構造にひかれる。アナログ的傾向の人は鋭くないように見えるが大づかみに何かつかむ。そういうほうに関心があるし、そういう能力が優れている。(湯川秀樹)
- ・ アナログ的な能力の相当にある人が一生懸命に努力してデジタルな能力を向上させたというケース が、高能力になる。(湯川秀樹)
- 基本である1、2、3をきちんと練習しないで、いきなり4とか5をやるな。(ジャイアント馬場)
- ・ 佐藤首相は日本の首相です。私は日本人です。日本人の私の目の前で、日本の首相の非難をすることは断じて許しません。(松村謙三)
- ・ 試合する前に不要なプレッシャーと戦うハメになる。だから勝てないんだ。(尾崎将司)
- 大局さえ見失わなければ大いに妥協してよい。(徳富蘇峰)
- ・ 人生の要は七分の常識に三分の冒険心を調合するを以て、適当なりとなすべし(徳富蘇峰)
- ・ 言葉さかんなればわざはひ多く 眼鋭くして盲目に似たり 耳豊聾者に及ばんや 不如不語不見不聞。(火野葦平)
- ・ 悩みがないのは仕事をしていない証拠だ。(樋口廣太郎)
- ・ 仕事十訓: 1・基本に忠実であれ。基本とは、困難に直面したとき、志を高く持ち初心を貫くこと、常に他人に対する思いやりの心を忘れないこと。 2・口先や頭の中で商売をするな。心で商売をせよ。 3・生きた金を使え。死に金を使うな。4・ 約束は守れ。守れないことは約束するな。5・できることと、できないことをはっきりさせ、YES、NOを明確にせよ。6・期限のつかない仕事は「仕事」ではない。7・他人の悪口は言うな。他人の悪口が始まったら耳休みせよ。8・毎日の仕事をこなしていくとき、いま何をすることが一番大事かということを常に考えよ。9・最後までやりぬけるか否かは、最後の一歩をどう克服するかにかかっている。それは集中力をどれだけ発

揮できるかによって決まる。 $1-\cdot$ 二人で同じ仕事をするな。お互いに相手がやってくれると思うから「抜け」ができる。一人であれば緊張感が高まり、集中力が生まれてよい仕事ができる。(樋口廣太郎)

- ・管理職十訓:1・組織を活性化しようと思ったら、その職場で困っていることを一つずつつぶしていけばよい。人間は本来努力して浮かび上がろうとしているのだから、頭の上でつかえているものを取り除いてやれば自ずと浮上するものだ。2・職位とは、仕事のための呼称であり、役割分担を明確にするためにあるものだと考えれば、管理職とは何かがキチンと出てくる。3・先例がない、だからやるのが管理職ではないか。4・部下の管理は易しい。むしろ上級者を管理することに意を用いるべきである。5・リーダーシップとは、部下を管理することではない。発想を豊かに持ち、部下の能力を存分に描き出すことである・6・YESは部下だけで返事をしてもよいが、NOの返事を顧客に出すときは、上司として知っていなければならない。7・人間を個人として認めれば、若い社員が喜んで働ける環境が自らできてくる。8・若い人は、我々自身の鏡であり、若い人がもし動かないならば、それは我々が悪いからだと思わなければければならない。9・若い人の話を聞くには、喜んで批判を受ける雅量が必要である。10・結局職場とは、人間としての切磋琢磨の場であり、錬成のための道場である。(樋口廣太郎)
- ・ 才能の8割は体力である。(石ノ森章太郎)
- ・ 理想を放棄することにより人は老いる。信念を持てば若くなり、疑念を持てば老いる。自信を持て ば若くなり、恐怖心を持てば老いる。希望を持てば若くなり、絶望を持てば老いる。(マッカーサー)
- ・ 目の前には異なる思考回路を備えた他者がいる。殴られるかもしれんし、社会的に制裁されるかも しれん。しかしそれを肝に銘じて行動するのが、相手に対する礼儀であろうが。(甘粕正彦)
- ・ アイデアの良い人は世の中にたくさんいるが、良いと思ったアイデアを実行する勇気のある人は少ない。(盛田昭夫)
- ・ 人の心を打つためには、下を向いて原稿を読んではダメだ。(盛田昭夫)
- お祝いやお悔やみを伝えるときくらい、定型文を使わずに文章を自分で考えなさい。(盛田昭夫)
- ・ 音楽は、決して不快感を与えてはなりません。楽しみを与える、つまり常に『音楽』でなくてはなりません。(モーツァルト)
- ・ みなさんが私に認めてくれる才能は、あるお守りのおかげだと思っています。そのお守り、それは 勉強です。(モーツァルト)
- ・ 私は生涯で一度も、独創的なメロディーを作ったことがない。(モーツァルト)
- ・ 多くのことをなす近道は、一度にひとつのことだけすることだ。(モーツァルト)
- 旅をしない音楽家は不幸だ。(モーツァルト)
- ・ 私は人の賞賛や非難をまったく気に留めない。ただ自分の感じるままに行うんだ(モーツァルト)
- オリジナルな曲を書こうなんて、これっぽっちも考えたことはない(モーツァルト)
- ・ 実験は常に真っ当な結果をもたらしているものだ。こんなはずはないと考えるのは、人間のほうが 間違っているからだ。(八木秀次)
- ・ 人材を育てる方法はただ一つ。仕事をさせ、成功させることである。成功経験が人を育て、さらに 大きな仕事をさせる。(西掘栄三郎)
- ・ 石橋を叩いて安全を確認してから決心しようと思ったら、おそらく永久に石橋は渡れまい。やると 決めて、どうしたらできるのかを調査せよ。(西掘栄三郎)

- ・ SF とは思考実験である。SF とはホラ話である。SF とは文明論である。SF とは哲学である。SF とは歴史である。SF とは落語である。SF とは歌舞伎である。SF とは音楽である。SF とは怪談である。SF とは芸術である。SF とは地図である。SF とはフィールドノートである。(小松左京)
- ・ 年代を超えた人のつながりをもっと強くして、知らないことやおもしろいこと、人間にとって大切 なことに接するようにしないと、私たちの世代は子供たちの好奇心には追いつけません。(小松左京)
- ・ 太った豚になるよりは、痩せたソクラテスになれ。(大河内一男)
- ・ どんなに粗末な頭でも、自分の頭で考える。(大河内一男)
- ・ 人生は大きい決断、小さい決断の積み重ねだ。(大賀典雄)
- ・ 私が望んでいるのは、ソニーが「スマートな会社だな」「お、やるじゃないか」と思われることです。 (大賀典雄)
- ・ 私がソニーに入って、得をしたのはソニーです。私は声楽家としてその名声を確立するかわり、ソニーで芸術面からソニーの製品に磨きを掛けた。それによりソニーのブランドが確立できた。(大賀典雄)
- ユーザーの琴線に触れる製品でなければ、ダメなんだ(大賀典雄)
- ・ 入社して30代前半までの最初の10年間は、アリのようになって働くことが重要です。、、「泥にように働け」、、。(丹羽宇一郎)
- ・ 30代前半から40代前半までの10年間は、自分が関わっている仕事について日本一、いや、世界一になるつもりで勉強することが重要です。(丹羽宇一郎)
- ・ 60 何年、酒、酒で苦労してきとる。なんぼバカでも、60 年もやればものも分かりまっせ。お 金もちいとばかりはできまっせ(鳥井信治郎)
- ・ 人生はとどのつまり賭けや。やってみなはれ(鳥井伸治郎)
- ・ ちょ・・・。ナチと一緒に挙国一致して超党派的に侵略戦争を立てたと言うんだろう?そんなワケない。軍部は突っ走ると言い、政治家は困ると言い、北だ南だと国内はガタガタで、ろくに計画も立てずに戦争になっちゃったんだ。それを共同謀議とは・・・・お恥ずかしいぐらいだよ。(賀屋興宣)
- ・ 生の完全な燃焼が死だ。(高見順)
- ・ 社長は戦国時代の大名と一緒で、すべて背水の陣でものを考えている。その都度、その都度、私自 身、自分の決心に時間をかけたことはない。(川上源一)
- ・ 常に温かく誠実な一人の女性が、あるとしたら、社会的にどんなに見映えのしない、存在であろうとも、その人こそ、世の中を善くする、大きな原動力であると思います。(長谷川町子)
- ・ 自分のやりたいことをやるのが一番だと思う。(赤崎勇)
- ・ 「王」が天守閣にこもったままでは、その下にいる将軍たちが動くことはありません。(新浪剛史)
- 一流になれ、そうすればものが言える。(ジャッキー・ロビンソン)
- ・ もし、他人に何かのインパクトを与えるような、生き方が出来なかったとしたら、人生などそれほど重要なものではないと思う。(ジャッキー・ロビンソン)
- 「不可能」の反対は、「可能」ではない。「挑戦」だ!! (ジャッキー・ロビンソン)
- ・ 一生涯の目的を達成せんとする者は、いかなる固執も、障害も、目前の名利も介さず、忍ぶ、粘る、 堅忍持久、終始一貫、最後の目的に突進することである。(石橋正二郎)
- ・ 時の短縮は、私の信条である。もし他人の三分の一の時間で仕事をすれば、結局三倍の仕事ができるわけだ。だから一生涯の活動時間を、かりに四十年とすれば、百二十年分の仕事量となる勘定に

なる。(石橋正二郎)

- ・ 大事なことは自分の持ち場を徹底的に勉強してプロになることだ。(八尋俊邦)
- わしは、まっつぐが好きや(沢村栄治)
- ・ 商売としてみればレースは決して安くない。勝ってもそんなに車が売れるわけではないし、負けれ ば確実に売れ行きは落ちる。しかし、技術革新や技術者の育成のためにはなる。 (河島喜好)
- ・ 共産主義と戦った私の時代がなければプーチンの時代もなかった。(エリツィン)
- ・ 練習とは追求。そして、本番を楽しむための準備。(渡辺貞夫)
- ・ 雪は山堂を擁して 樹影深し 檐鈴動かず 夜沈沈 閑かに乱帙を収めて疑義を思えば 一穂の青 灯 万古の心(菅茶山)
- ・ 「どうにかなる」という考えでなく、「どうなるか」を研究し「どうするか」の計画を立てて実行することだ。(鹿島守之助)
- ・ 責任を追及するのではなく、原因を追及することに心を砕くべきだ。(張富士夫)
- ・ 懺悔とは、私の為せる所の過てるを悔い、その償ひ難き罪を身に負ひて悩み、自らの無力不能を慚 ぢ、絶望的に自らを抛ち棄てることを意味する。(田邊元)
- ・ お前達の前途が、どうぞ多難でありますように…。多難であればあるほど、実りは大きいのだから(壇 一雄)
- ・ 人間ひとりひとり…。実にひとりひとり、どのように悲しくても、恐ろしくても、めいめいの人生 を貫いて行くだけのことで、その途上に自分の人生を知る以外に何の人生があるだろうか(壇一雄)
- ・ お前達の前途が、どうぞ多難でありますように…。多難であればあるほど、実りは大きいのだから。 (壇一雄)
- ・ 今日は調子が落ち目で自分では決して出来のいい泳ぎではなかった。はじめは4着だと思って泣いてしまった。表彰の後、太田さん(コーチ)の顔を見たら、また泣いてしまいました。(田中聡子)
- ・ 諸学の基礎は哲学にあり(井上円了)
- ・ 余は世間の学者を貴族的と称し、余自身をば百姓的と唱えている。かつて福沢翁は平民的学者を持って任ぜられたが、余はそれよりも一段下りて土百姓的学者である(井上円了)
- ・ 妥協とは、自分が一番大きいのを手に入れたと誰もに思わすように、ケーキを切る技術である。(エアハルト)
- ・ 成功は成し遂げた内容によって測られるのではない。その人が出くわした障害の大きさと、打ちの めされそうな困難に立ち向かって奮闘を続けた勇気によって、測られるのである。(チャールズ・リ ンドバーグ)
- 油絵は写真に勝る(高橋由一)
- ・ もし自分の尽力によって、なんとか纏(まと)まりがつくならば、自分の生命と名誉の如きは、何とも思わない。(若槻禮次郎)
- ・ 山は黙して語らずされど内に深き想いあり。(槇有恒)
- ・ 芸の上手いと言うも、下手と言うも、ほんのわずかの差である。その差は決して技巧の差ではない。 その人の人柄からくる無技巧の差である。(大河内伝次郎)
- ・ あれもいい、これもいいという生き方はどこにもねえや。あっちがよけりゃこっちが悪いに決まっているのだから、これだと思ったときに盲(めくら)滅法に進まなけりゃ嘘です。(尾崎士郎)
- ・ 一人ですっと立っていけ、やりてえことがあったら、こっそりやらねえで大っぴらにやれよ(尾崎士 郎)

- ・ 今、今日、明日のことだけを考えていればいい。そう自分に言い聞かせているの。(山田五十鈴)
- ・ 我死なば焼くな埋めな新小田に捨てて秋のみのりをば見よ。(松浦武四郎)
- ・ 人間、「運鈍根」と言われるが、三つのうちどれが大切かと言われたら、それはやっぱり「根」だろう。運が開かれることも必要だが、それを深め、広げるのは「鈍」であり「根」。真打ちは「根」だ。 (岩佐凱実)
- ・ 「明日は」「明日は」と言いながら、今日という「一日」をむだにすごしたら、その人は「明日」も また空しくすごすにちがいありません。(亀井勝一郎)
- ・ この世の中には2種類の人間しかいない。できる人間と批判する人間だ。(レーガン)
- ・ 人々が戦争を始めるのではない。政府が始めるのだ。(ロナルド・レーガン)
- ・ 政界にロクな者がいるわけがない。もしロクな者でないのがいたら、とっくにビジネスが雇っている。(ロナルド・レーガン)
- ・ アンパンマンは焼け焦げだらけのボロボロのこげ茶のマントを着て、恥ずかしそうに登場します。 自分を食べさせることによって飢えている人を救います。それでも顔は気楽そうに笑っているので す。(やなせたかし)
- ・ 私は、時間厳守、整理整頓、勤勉の習慣なくして、また、一時に一つの事に専念するという決意なくしては、私のしてきたことを決して成し遂げられなかった。(ディケンズ)
- ・ この世に生きる価値のない人などいない。人は誰でも、誰かの重荷を、軽くしてあげることができ るのだから。(ディケンズ)
- 病気や悲しみも人にうつるが、笑いと上機嫌ほど、うつりやすいものもこの世にない。(ディケンズ)
- ・ 家族の愛こそが、人生最大の安らぎである。(ディケンズ)
- ・ 競争者が多くいることはいいことだ。自分がどんなに勉強しているか本当に批評してくれるのは、 競争者以外にはない。(高崎達之助)
- ・ 事業の目的は第一に人類の将来を幸福ならしめるものでなければならぬ。第二に事業というものは 営利を目的とすべきではない。自分が働いて奉仕の精神を発揮するということが、モダン・マーチャント・スピリットだ。(高碕達之助)
- ・ 常識は嫌いだ。非常識はもっと嫌いだ。超常識がいい。(阿久悠)
- 大事なのは環境。自分の能力以上を求められる環境でなければ成長は難しいんです。(柳井正)
- ・ 具眼の士を千年待つ(伊藤若冲)
- 重要なのが、体調をよくしておくことなんです。(山本寛斎)
- ・ 死去の際位階勲等の付与は余の絶対に好まざる所なれば死去せば即刻発表すべし(原敬)
- ・ 家計は現在の財産より生ずる利益利息等の収入により質素に之を営むべし(原敬)
- ・ 余の日記は、数十年後はとにかくなれども、当分世間に出すべからず、余の遺物中この日記は最も 大切なるものとして永く保存すべし(原敬)
- ・ 社長の仕事とは後継者を含めた人づくりにあると考えています。(井植薫)
- ・ 稽古は本場所のごとく、本場所は稽古のごとく。(双葉山)
- ・ 定年があるような人生はダメなの。定年がない人生てのは素晴らしいの。休んでられないんだもの。 (ハナ**肇**)
- ・ 相手に話が伝わらないというのは、相手のレベルが低いのではなく、自分の話すレベルが低いと心 得るべきである。(新井白石)
- ・ 才あるものは徳あらず。徳あるものは才あらず。真材誠に得がたし。(新井白石)

- ・ 原始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の 光によって輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。(平塚らいてう)
- ・ 子供を産み育てることは、社会的・国家的性質を持つものであるから、女性が子供を育てている期間、国家の保護を求めるのは必要なことである。(平塚らいてう)
- ・ 女性は母性であるが故に保護されるべきである。(平塚らいてう)
- ・ 見栄をはらずに、自分には自分なりの力があることを自覚しましょう。(田河水泡)
- ・ 生き延びるのは最も強い者でも最も賢い者でもなく、「変化」できる者だ。(ダーウィン)
- ・ 私は、できるだけ一生懸命に、できるだけよくやったのだ。誰もこれ以上にはできない。(ダーウィン)
- ・ まことに、人間の遭遇ほど、味なものはない。(折口信夫)
- ・ 人の信用を得る根本は、約束を守ることである。(戸田城聖)
- ・ やられる側の人間を美しく描きたい(丸木俊)
- ・ 芸能人には引退があるが、芸術家にはない、書きながら柩に入るのが作家だ。(斎藤十一)
- ・ この世の中には先生と呼ばれる多くの人がいる。、、自分も早く先生と呼ばれる人になりたい、、(下 岡蓮杖)
- ・ 日本の巨船は怒とうの中に漂っている。便乗主義者を満載していては危険である。諸君、自己に目 覚めよ。天下一人をもって興れ。(中野正剛)
- ・ 貧乏の無い人生はいゝ人生だが、貧乏をしたつて必ずしも、人間は不幸になるものではない。(直木 三十五)
- ・ 私程度の作品を一日三十枚平均で書けないやうなら、作家になる資格はない。(直木三十五)
- ・ 自分しか歩けない道を自分で探しながらマイベースで歩け。(田辺茂一)
- ・ 何でも時代のせいにしていれば、そりゃ楽だ(田辺茂一)
- ・ 僕は経済も経営も分からない。分かろうとも思わない。女性を通じて社会を理解するのがライフワークだ(田辺茂一)
- ・ 囃す (はや) されたら踊れ(田辺茂一)
- ・ 自分たちはすべてを犠牲にし、眠る時間も減らして練習している。この事実がやがてソ連に負ける 道理がないという自信となって選手たちの胸に集積されていった。 (大松博文)
- ・ みんな、それぞれが、何か新しいことをやる、それはすべて冒険だと、僕は思うんです。(植村直己)
- ・ 人を選ぶとき、家族を大切にしている人は間違いない。仁者に敵なし。私は人を使うときには、知 恵の多い人より人情に厚い人を選んで採用している。(渋沢栄一)
- ・ 事を成し、物に接するには、必ず「満身の精神」をもってせよ。ささいな事であっても、いい加減 に扱ってはならない。(渋沢栄一)
- ・ 余はいかなる事業を起こすにあたっても、利益を本位に考えることはせぬ。この事業は起こさねばならず、かの事業は盛んにせねばならずと思えば、それを起こし、関与し、あるいはその株式を所有することにする。(渋沢栄一)
- ・ 畢竟するに老衰とか老耄とかいうのも、新知識の欠乏を意味するに外ならないと考えた。それ故に 私も老衰とか老耄とかの誹名を被らぬ様に、常に学び常に新知識の注入に意を用い、更に斃れて後 已むの決心を以て進んだならば、国家のために微力を尽すことは困難な業ではあるまいと還暦を迎 えて考えたのであった。(渋沢栄一)

- ・ みじかしと悟れば一瞬にもたらず、ながしと観ずれば千秋にもあまるは、げに人の一生にぞありける。(渋沢栄一)
- 何人にも遺すことのできる本当の最大遺物は何であるか、それは勇ましい高尚なる生涯である。(内村鑑三)
- ・ 恃むべからざる者は平和の時の平和論である。斯かる者は戦争の時には又戦争を唱ふる者である。 (内村鑑三)
- ・ 人間が後世に遺すことにできる、ソウして誰にも遺すことのできるところの遺物で、利益ばかりあって害のない遺物がある。それは何であるかならば「勇ましい高尚なる生涯」であると思います。(内村鑑三)
- ・ 少しなりともこの世の中を善くして往きたいです。この世の中にわれわれの Memento を遺して逝きたい。(内村鑑三)
- ・ 私はまだ一つ遺すものを持っています。何であるかというと、私の思想です。、、、私は青年を薫陶して私の思想を若い人に注いで、そうしてその人をして私の事業をなさしめることができる。、、著述をするということと学生を教えるということであります。(内村鑑三)
- ・ 、、来年またふたたびどこかでお目にかかるときまでには少なくとも幾何の遺物を貯えておきたい。、、、この心掛けをもってわれわれが毎年毎日進みましたならば、われわれの生涯はけっして五十年や六十年の生涯にはあらずして、実に水の辺に植えたる樹にようなもので、だんだんと芽を萌き枝を生じてゆくものであると思います。(内村鑑三)
- ・ 短き勤務の割合に多額の俸給を国家から支給され、地位を保証され老後を保証されている大学の教 授だけが、時間と勢力とを要し而も報いられない下積みの仕事をなす義務がある。(河合栄治郎)
- ・ 職業にあるものは多かれ少なかれ、分業の害悪をなめねばならない。彼は一生を通じて細かに切り 刻まれた仕事に没頭して、一部分人としてしか成長し得ない危険に瀕する。(河合栄治郎)
- ・ 自分はつきつめた所、何になるかといえば、自分は自分になる"完全な自己"になるということだ (安岡正篤)
- ・ どんな一事・一物からでも、それを究尽すれば必ず真理に近づいてゆき、竟には宇宙・天・神という問題にぶつかるものだ。(安岡正篤)
- ・ 宗教と道徳を区別するのあ西洋近代学の通念であって、東洋ではこの二者を"道"として一なるものと考えてきた(安岡正篤)
- ・ 愚直で、少々頭も悪く、小才も利かぬ、そんな人間の方が、根が真面目なだけに、修養努力して大 人物になることが多い。(安岡正篤)
- ・ 平和は眠りを許さない。地球のすべての男女の運命がそれにかかわっている。最もまめな骨おしみ をしない人類的事業の一つである。(宮本百合子)
- うまいものを食いたいと思ったら、絶対に出世しなければいけない。(辻静雄)
- ・ 風車、風の吹くまで、昼寝かな。(広田弘毅)
- ・ 自然に生きて、自然に死ぬ(広田弘毅)
- ・ 将来の事は東京の地を踏んでから、ただただ先生の学規にそくした生活に一生をささげる覚悟で居ります(小林正樹)
- ・ 孝行したいときに親はなし。さりとて、墓に布団は着せられず。(大坂志郎)
- 懐疑は発明の父である。(ガリレオ・ガリレイ)
- ・ 歴史とは問題の歴史である。問題の連鎖である。問題の提出は個人の独創による。 (九鬼周造)

- ・ 花に嵐のたとえもあるぞ。「さよなら」だけが人生だ。(井伏鱒二)
- ・ ぼくは物が書けない時、ハガキや手紙を書くことにしているんだ。筆ならしが終わると、ポンプの 呼び水のように筆のすべりがよくなる。(井伏鱒二)
- ・ 好きなことだけ自然体で続ける(三浦敬三)
- ・ 技術と言うものはまことに人間くさいもので、技術者に孤立は許されない。人とのつながり、あるいは人の集団、技術者の集団をうまく形成していくことが、技術者の要件なのである。(山下勇)
- ・ 新しい事業をやるときは、それまでやってきたこととまったく関係のないことに手を出したら駄目 だ。かならず失敗する。それまでの事業の延長線上にあるものにしか、手を出してはいかん(小佐 野賢治)
- ・ 人間っていうのは、会社でも何でもそうなんだけど、繁栄している時に去っていくのは、その人生 に悔いがないよ。しかし、落ちぶれた時に去っていくのは人間としてやっぱり一抹の寂しさがある わけですよ。(小佐野賢治)
- ・ 勝負師は勝っておごらず負けて落胆せず。(坂田栄男)
- 実力が本当に十分発揮できるとき、それを波とかツキとか呼ぶのだと私は考える。(坂田栄男)
- ・ だれかの健康を害してしか成り立たぬような文化生活であるならば、その文化生活をこそ問い直さ ねばならぬ。(松下竜一)
- ・ 我が愛を告げんには未だ推さなきか君は鈴鳴る小鋏つかう(松下竜一)
- ・ われ日本の柱とならん、われ日本の眼目とならん、われ日本の大船とならんと誓ひし願破るべから ず。(日蓮)
- ・ 夫浄土と云ふも、地獄と云ふも外には候はず。ただ我等がむねの間にあり。これをさとるを仏と云 う。これにまよふ凡夫と云う。これをさとるは法華経なり。(日蓮)
- ・ 成功も悪くはない。悪いのはただ、飲めば飲むほど渇きを産む塩水なのだ、成功は。(大岡信)
- ・ 私は古今の詩句を借りて、それらをあるゆるやかな連結方法によってつなぎとめながら、全体として一枚の大きな詩の織物ができ上がるように、それらを編んでみたいと思ったのである(大岡信)
- ・ スタッフや共演の方たちが寒い思いをしているのに、 自分だけ、のんびりと火にあたっているわけ にはいかない。(高倉健)
- ・ 頭不動のスイングはハイカラな人のための理論だ。(杉本英世)
- ・ 自らの力で生きる人間は強者になり、他人を信じる人間は弱者になる。(金正日)
- ・ 日本開発銀行は政府金融機関ですから政党その他から多くの注文がくると思いますが、私は一切引き受けません。たとえ総理からでもお断りしますが、それで良ければお引き受けします。(小林中)
- ・ 芸術というものは、時には嘘でもよいのだ。その嘘を承知の上で作った方がかえって本当に見える んだ。(高村光雲)
- ・ 要するに、責任者として最も大切なことは、あらゆる意味で私がないということです。人を挙ぐる には、すべからく退くことを好むものを挙ぐるべし。(岩田弐夫)
- 人に夢を与えようと思ったら、まずあたしが夢の世界を楽しまなきゃね。(越路吹雪)
- ・ いっぱい恋をしたし、おいしいものを食べたし、歌もうたったし、もういいわ(越路吹雪)
- ・ 桃源郷というか、理想を求める人はいつの世にもいた。…… (桃源郷は) 心の中にあるという人もいるが、(それを) 求めていくということが大切だ。(陳瞬臣)
- ・ 太陽は宇宙の中心であって不動であり、太陽の運動と見えるものは全て実は地球の運動である。(コペルニクス)

- ・ 人事の要諦であるアレンジメント(配置)、コンビネーション(組み合わせ)、フォーメーション(戦闘隊形)の三つを学んだ。(石塚庸三)
- ・ 世間は社会ではなく、自分が加わっている比較的小さな人間関係の環である。(阿部謹也)
- 「教えるとは、ともに希望を語ること」という言葉が今ほど必要な時はないであろう。(阿部謹也)
- ・ 弟子を育てるのは根気です。三度挑戦させてだめでももういっぺん、四度目をやらせる粘りが必要です。(貴ノ花利彰)
- ・ 必要なことだけを単純化して、美しい所を備えていれば、居心地のよい家になる。(志賀直哉)
- ・ 詩はいわゆる詩であってはいけない。人間の感情生活の変化の厳密なる報告、正直なる日記でなければならぬ。(石川啄木)
- ・ 年間 50 億人という人命を預かる職は、金をもらってやるべきではない。公職は奉仕すべきもの、したがって総裁報酬は返上する。(石田礼助)
- ・ 生来、粗にして野だが卑ではないつもりだ。(石田礼助)
- ・ 友に求めて足らざれば天下に求む。天下に求めて足らざれば古人に求めよ。(山田方谷)
- ・ 事の外に立ちて、事の内に屈せず(山田方谷)
- ・ 君子は義を明らかにして利を計らず(山田方谷)
- ・ 大きな仕事は、30代か40代までに行わなくては駄目だ。(八田與一)
- ・ 戦争は味方が苦しい時は敵も苦しい。もはや退却という時に、突然敵が撤退するのは、戦場では珍しくない事例である。なによりも、戦意を失わぬことが肝要である。(阿南惟幾)
- ・ 大したことは、一身の晩年をいかに立体的に充実して生きつらぬくかということだけである。一切 のムダを排除し、秀れた人物に接し、秀れた書を読み、秀れた芸術を教えられ、かつ発見してゆく 以外、充実の道はない(永田耕衣)
- ・ 人間がおかす少なからぬ罪のうち、傷害殺人等の甚だしきを除けば、最も罪の重いのが不作為である。何もしないですねてひがんで時間をつぶす投げやりである。自分が何の活動もせずぐうたら寝 そべっていれば、たちまち四方八方に伝染し、仕事を実直にこなす者を馬鹿にして見下す。働かなければ精神が内部から腐ってゆく。(藤野忠次郎)
- ・ 容積率の緩和によって、、、、使っていない土地のすべてが、マンションや商業ビルになる、、。 向こう 20 年間は大建設ブームになる (大前研一)
- ・ 我々の進むべき道は、勇敢な抵抗か、卑屈な服従か」「正直は、最上の政策である(ジョージ・ワシントン)
- ・ 人の話の腰を折ってはいけない。人の話題を横取りしてもいけない(ジョージ・ワシントン)
- ・ 上司と口論してはいけない。あなたの判断を穏やかに聞いてもらうように心がけよう(ジョージ・ワシントン)
- ・ 「私は同郷人であっても優秀な人物であれば取り立てるし、同郷人であっても能力が無ければ取り立てない。(加藤友三郎)
- ・ 花鳥諷詠 かちょうふうえい。春夏秋冬四時の移り変りに依って起る自然界の現象、並にそれに伴ふ 人事界の現象を諷詠するの謂であります。(高浜虚子)
- ・ 春風や 闘志抱きて 丘に立つ(高浜虚子)
- ・ 戦争が起これば、最初に真実が犠牲になる。(沢田教一)
- 今日のことを今日できない者は、明日のことがまた明日できないのです。(本多光太郎)
- ・ つとめてやむな。(本多光太郎)

- ・ 産業は学問の道場なり (本多光太郎)
- ・ 人間には待機の時代と断行の時代とがあります。潜伏の時代と飛躍の時代とがあります。じっと好機の到来を待つ間も大事ですが、ひとたび好機到来となれば機敏にチャンスをつかまえる気力がなくてはなりません(本多光太郎)
- ・ 川は暮らしの中を流れる。(蜷川虎三)
- ・ 我々は宇宙に衝撃を与えるためにここにいる(スティーブ・ジョブズ)
- ・ 人は見せてもらうまで、何が欲しいかわからないものだ(スティーブ・ジョブズ)
- ・ 前進し続けられたのは、自分がやることを愛していたから。自分が愛せるものを見つけなければな らない(スティーブ・ジョブズ)
- ・ 素晴らしい仕事をする唯一の道は、それを好きになること(スティーブ・ジョブズ)
- ・ 将来を見据えて点と点をつなぐことはできない。できるのは後からつなぐだけ。だから、いつか点がつながることを信じなければならない(スティーブ・ジョブズ)
- iPad のような製品をアップルが作れるのは、テクノロジーとリベラルアーツの交差点に立ちたいといっし考えているからだ(スティーブ・ジョブズ)
- ・ 進み続けよ、決して安住してしまってはいけない(スティーブ・ジョブズ)
- 絶対にマネのできない、マネしようとすら思わないレベルのイノベーションを続けろ(スティーブ・ ジョブズ)
- ユーザーは体験から始めて、そしてテクノロジーにさかのぼるんだ(スティーブ・ジョブズ)
- ・ もし今日が自分の人生最後の日だとしたら、今日やる予定を私は本当にやりたいだろうか?(スティーブ・ジョブズ)
- ・ 成功者であることの重さが、再び創始者になることの身軽さに置き換わったのだ(スティーブ・ジョブズ)
- ・ イノベーションは誰がリーダーで、誰が追随者かをはっきりとさせる。自分がクオリティの基準となりなさい(スティーブ・ジョブズ)
- とにかくつくってみんなに見せ、どう思う?と聞くしかありません(スティーブ・ジョブズ)
- ・ 残りの人生も砂糖水を売ることに費やしたいか、それとも世界を変えるチャンスが欲しいか?(スティーブ・ジョブズ)
- ・ イノベーションは、研究開発費の額とは関係がない。、、、、大事なのは金ではない。抱えている人材、 いかに導いていくか、どれだけ目標を理解しているかが重要だ(スティーブ・ジョブズ)
- ・ 仏教には「初心」という言葉があるそうです。初心をもっているのは、すばらしいことだ(スティーブ・ジョブズ)
- ・ 我に奇策あるに非ず、我は寧ろ奇策を忌む。唯正直あるのみ、正直に之を行へは人民必ず之を信せん。(松方正義)
- ・ 初めから他人の助けを、当てにするような人間は、決して成功せん。(児玉源太郎)
- ・ 踊りの気のない者はダメです(市川歌右太衛門)
- ・ 最初から「できない」ことを前提にせず、「どうしたらできるか」を考えて欲しい。「不可能」と「困難」はちがうのである。(飯田庸太郎)
- やればできる。できないのはやらないからだ。(飯田庸太郎)
- 一つの不幸にとらわれて、すべてのものを、不幸な眼で見ようとするのはいけない。(黒岩重吾)
- ・ 第一歩は何でもない。困難なのは、最後の一歩だ。(ヴィクトル・ユーゴー)

- 赤い椿 白い椿と 落ちにけり (河東碧梧桐)
- ・ 友を選ばば、書を読みて、六分の侠気、四分の熱(与謝野鉄幹)
- 妻をめとらば才たけて、顔うるわしくなさけある。(与謝野鉄幹)
- ・ 真の詩とは実生活を鮮やかに感じ、自分の生活をよくするために存在するのである(白鳥省吾)
- ・ 芝居も踊りも好きな人に見せるように演じなさい。(長谷川一夫)
- ・ 演技とは重心の移動だ。(長谷川一夫)
- · 天地人知仁勇(豊田章一郎)
- あなたにとって誰が本当の友達かということはあなたがスキャンダルに巻き込まれたときにわかる わ。(エリザベス・テーラー)
- ・ くたばって仕舞え(二葉亭四迷)
- ・ 何でも盗め。(柳家金語楼)
- ・ できるんですよ、がんばれば。(マキノ雅弘)
- ・ 成功に必要なのは完全無欠です。だから極端にまで研究し尽くされ、また評価されるのです。(ショパン)
- ・ 実業の精神として、第一にわれわれが尊ばねばならぬものは、個人の自尊心である。自尊心とは空 威張りすることではない。自ら正しくすることである。自らを重んじ、自分一箇の力を信じること である。(武藤山治)
- ・ 彫刻とは自然を立体的に見る学問(朝倉文夫)
- ・ 天才はこの大器晩成を指すのであって、天才なる賛辞をこの早熟の未完成品に与えるべきではない。 (朝倉文夫)
- ・ 人生は悟るのが目的ではないです。生きるのです。(岡本かの子)
- ・ 天才とは僅かに我々と、一歩を隔てたもののことである。 (芥川龍之介)
- ・ 相手が信頼するに足れば、自らも信頼に値するものにならねばならぬとする努力。これが相互信頼 の真髄である。(川又克二)
- ・ 経営者は優れた教育者でなければならない(菊池庄次郎)
- ・ 歴史的に見れば正しいことなのだから貫こう。(兼子勲)
- 人間はいついかなる場合でも、巡り合った境遇を最も意義たらしめることが大切だ。(米内光政)
- ・ ここはいま、日本で最低の撮影所だ。しかし、私が来たからには大改革をして日本一の撮影所にしたい。みなが賛成してくれるなら、日本一に必ずできる。同じ夢を見ようじゃないか。(岡田茂)
- ・ いいよ。 好きにしなさい。 ただこれだけは覚えといてくれ。 人間は金で生きてるんじゃない。 人間は心で生きているんだ。(渡辺晋)
- ・ 自社のタレントには音楽性、芸術性を高めるよりも大衆受けを高めろ(渡辺晋)
- タレントは偶像であるべし(渡辺晋)
- ・ 晋は新である…、新は進である…(渡辺晋)
- ・ 私は口がきけないひとが、もっと楽に口がきけるようになれたらどんなにいいだろうと思っている。 それができたら、私は本当の意味で幸せになれたのだろう。(グラハム・ベル)
- ・ 人と同じような生活や心を求めて、人々と違うことを成し遂げられるわけはない。これでいいのだ。 (荻野吟子)
- ・ 女医になる。きっと女医になってやる。きっとなる。きっとなってみかえしてやる。(荻野吟子)

- ・ 学問というものが単に知るということではなく、疑うということから始まることを知った.(荻野吟子)
- ・ 女性の地位を認めているのは耶蘇教だけです。耶蘇教を拡めることは女性の地位を高めることになるはずです。(荻野吟子)
- ・ 人とその友のために 己の命を 捨つるは是れより 大なる愛はなし.(荻野吟子)
- ・ 私も青春のことを懐かしみ、若い人を羨むことがあるが、しかし、もう一度若くなって世の中を渡ってこなければならぬと思うと、何よりも先に煩わしい思いがする。(正宗白鳥)
- ・ 小さき者よ。不幸な而して同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて人の世の旅に登れる前途は遠い。そして暗い。然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。行け。勇んで。 小さき者よ。(有島武郎)
- ・ 我が真生命の生まれし故郷は実に札幌なりき(有島武郎)
- ・ 明日知らぬ命の際に思ふこと 色に出ずらむあじさいの花(絶筆)(有島武郎)
- ・ 我児等よ 御空を仰げ今宵より 汝を見守る星出づ(妻・安子追悼歌)(有島武郎)
- ・ 書冊の形でする私の創作感想の発表は、この「著作集」のみに依ることとします。私の生活を投入 するものはこの集の外にありません(有島武郎)
- ・ 三国同盟は僕の一生の不覚だった。(松岡洋右)
- ・ この日記は今日から書き始める。ただし、今日から一日も欠かさず記し、記念として残したい。(周 恩来)
- ・ 銃で人を殺すのはたやすい。しかし暴力による闘いは肉体にしかおよばない。魂にまで到達することができるのは道理による闘いだけである。(周恩来)
- ・ 改革といっても、革命といっても、自分から始める以外にない。(周恩来)
- ・ 会長ほど難しい仕事はない。だいたい仕事を抱えるのは容易であり、仕事を離れるのは難しい。忙 しい忙しいといえるのは結構な話で、仕事から浮いてしかも仕事をつかんでいることはなかなか凡 人には無理なことである。だがこの難しさをやってのけなければ、本当の会長にはなれぬ。(奥村綱 雄)
- ・ 運と災難は紙一重である(奥村綱雄)
- ・ ひとつ上の仕事をやれ。社員は主任、主任は課長の、課長は部長の、部長は役員の、それで初めて大きな仕事ができる(奥村綱雄)
- ・ ダイヤモンドは中央の面を囲み、多くの面が多角的に集まって底知れぬ光を放つ。会社経営もまたかくありたい。一人の独裁でもいけないし、多数の悪平等でもいけない。個が集まって全を形成するが、個は全あっての個であり、個あっての全ではない(奥村綱雄)
- ・ 問題は解決されるためにある。(中山素平)
- ・ 私利私欲の人、自己顕示の人は全然評価しない。大きなスケールでものを考える人は、右であれ、 左であれ、共感を覚える。(中山素平)
- ・ 営者や後継者の条件にはどのような時代にも共通したタブーがある。すなわちなりたがる人を社長 にしたらダメということです。(中山素平)
- 人生に遅すぎるということはない。(安藤百福)
- ・ 創業とは一粒の種を撒くことである。(安藤百福)
- どんなに優れた思いつきでも、時代が求めていなければ、人の役に立つことはできない。(安藤百福)
- ・ 人の集まるところには、需要が暗示されている。(安藤百福)

- ・ 創業者には定年がない。(安藤百福)
- ・ 発明はひらめきから。ひらめきは執念から。執念暗なきものに発明はない。(安藤百福)
- ・ 子どものように、いつも「なぜ?」と疑問を発しなさい。(安藤百福)
- ・ 開発とは時代を読む作業である。(安藤百福)
- ・ 時代に変化に対応するのではなく、変化をつくり出せ。(安藤百福)
- ・ 不即不離の付き合いが長続きする。(安藤百福)
- ・ 企業力とは、問題が生じた場合、一丸となってことにあたる仕組みにほかならない。(安藤百福)
- ・ 一時的なヒット商品よりも、新しい市場を創造していく商品を作れ。(安藤百福)
- ・ インスタント食品とは時間を大切にする食品ということになる。(安藤百福)
- ・ 社員はもとより、社会全体がトップの姿勢を見ている。社長の座は十字架を背負っているようなものだ。(安藤百福)
- ・ 社長とは権力ではない。責任の所在を示している。(安藤百福)
- ・ 社員の結束を図るために、トップは先頭に立って旗印をかかげる必要がある。(安藤百福)
- ・ 事業はすべて、進むより退く方が難しい。(安藤百福)
- ・ 仕事をするのは組織ではなく人である。(安藤百福)
- ・ 人のやらないことをやれ。やれそうもないことを成し遂げるおが仕事というものである。(安藤百福)
- ・ 興味をもって取り組んだ仕事には疲労がない。(安藤百福)
- ・ 余人をもって代えがたい人になりなさい。(安藤百福)
- ・ 自らの足で歩き、自らの目で確認しなさい。そうでなければあなたの話には重みも説得力もない。(安藤百福)
- ・ 時は命なり。時計の針は時間を刻んでいるのではない。自分の命を刻んでいるのだ。(安藤百福)
- ・ 食の仕事は聖職です。(安藤百福)
- ・ 食べれないものを食べられるようにするおが料理というものである。(安藤百福)
- ・ 味に国境はない。(安藤百福)
- ・ 人類は麺類だ。(安藤百福)
- 「?」は、「!」のモト。(安藤百福)
- · 「気宇壮大 心眼千里」「体力智力 気力全力」「企業在人 成業在天」「入心入魂 自立自進」(安藤百福)
- ・ 短所あるを喜び、長所無きを悲しむ(似鳥昭雄)
- ・ 最大の危険は、目標が高すぎて、達成出来ないことではない。目標が低すぎて、その低い目標を、 達成してしまうことだ。(ミケランジェロ)
- ・ 日本には経済学学者はいるが、経済学者は少ない。(都留重人)
- ・ 会社の体力、自らのリーダーシップの限界を知ったうえで、世の中で「これは」というものを信じて追い求めればよい。あとは決断であり、大切なのは勘と度胸である。(後藤康男)
- ・ 苦しみを去って楽しみを求むる道はいかん。答へて曰く、学問なり。(中江藤樹)
- ・ 父母の恩徳は天よりもたかく、海よりもふかし(中江藤樹)
- ・ このたから(真理)は天にありては、天の道となり、地にありては、地の道となり、人にありては、人の道となるものなり(中江藤樹)
- ・ 天地の間に、己一人生きてあると思ふべし。天を師とし、神明を友とすれば外人に頼る心なし(中江藤樹)

- ・ それ人心の病は、満より大なるはなし。(中江藤樹)
- 人のやらぬこと、やれぬことのみをやった。(堤康次郎)
- ・ 忍耐そのものは別に敗北ではないのだ。むしろ、忍耐を敗北だと感じたときが真の敗北の始まりな のだろう。(安部公房)
- ・ 食べながら生きている以上たくさんの "なにか" の "いのち" が、私たちの中に生まれ変わっています。結局、お互いに 生まれ変わり合い、大きな一つの命を生きている。(水上勉)
- ・ 心の田んぼ――「心田」を耕すことを人は忘れてはいけない。(水上勉)
- 西方浄土などはなくて、永遠にここは地獄である。それなら、地獄の泥を吸って滋養となし、私は 長生きしたい(水上勉)
- ・ しないではいられないことを、し続けなさい。(水木しげる)
- ・ 私が幸福だと言われるのは、長生きして、勲章をもらって、エラクなったからではありません。好きな道で60年以上も奮闘して、ついに食いきったからです。ノーベル賞をもらうより、そのことの方が幸せと言えるでしょう。(水木しげる)
- ・ 私が40歳を過ぎてようやく売れだしたころ、手塚(治虫)さんはすでに押しも押されもせぬ漫画 界の重鎮で、スーパースターだった。だから、そのころの手塚さんは売りだしたばかりの中年漫画 家のことなんかあまり意識していなかっただろう。だが、私は手塚さんを「ライバル」だと思って やってきた。(水木しげる)
- ・ 好きな道で六十年以上も奮闘して、ついに食いきった(水木しげる)
- ・ 筋を考えるのが漫画家の生命線です。、、、売れなかった時代でも、原稿料の大半は、漫画の筋を考えるのに役立ちそうな本とか、妖怪の作画のための資料とかを買い込むのに使っていました。(水木しげる)
- ・ 妖怪をリアルに再現するためには、表情、動作、背景などを入念に描き込まないといけない。資料 を探し、文献を読み、想像力を働かせる必要もあって、総合力で作画に取り組まないといけない。(水 木しげる)
- ・ 葬式の類は一切無用のこと。 弔問、供物の類はすべて固辞すること。 生者は死者のためにわずら わさるべきにあらず。(梅原龍三郎)
- ・ さあさあ奮発せん。私は彼に見られるに値する。私は彼の芸術をあまりに愛する。彼はそれを知ら ねばならぬ。(梅原龍三郎)
- ・ 個性がないと絵もそれを見る人間の目を引かない。個性を出した絵でないと人を打たぬし売れもしない。とはいっても、私はどんな小さな作品でも商品だと思って描いてはいないけどね(梅原龍三郎)
- ・ 寒門に硬骨あり(中川一郎)
- ・ 地球は青かった (ガガーリン)
- 至誠一貫(吉岡彌生)
- ・ 謹賀新年。庶政一新を望む者は すべからく自己一新を図るべし(吉岡彌生)
- ・ 日本の医学は治療医学を良しとして予防医学を疎かにしたので、、(吉岡彌生)
- ・ 治療医よりも予防医の方がむしろ女医に適しておると思います。(吉岡彌生)
- 私の持論としては女医が結婚するには専門科目を異にすることがよいと思います。(吉岡彌生)
- ・ いつでも平常心を持って急迫の事態にも冷静に対応し、判断せよ(原安三郎)
- ・ 五歳の人間には五歳なりの、十歳の人間には十歳なりの重大問題があります。それをとらえて人生 のドラマをくみたてること、それが児童文学の問題です(石井桃子)

- ・ みんなが爆弾なんか作らないで、きれいな花火ばかり作っていたら、きっと戦争なんて起きなかったんだな。(山下清)
- ・ 今年の花火はどこへ行くかな? (山下清)
- ・ 企業の強さの第一条件はチームワーク、人の和です。(犬丸一郎)
- ・ 何というかな。ああ生まれてきて良かった、そう思うことが何べんかあるだろう。そのために生き てんじゃねえか。そのうちお前にもそういう時が来るよ、な?まあ、がんばれ。(渥美清:寅さん)
- ・ この空港 (ロンドンイースロー空港) で一番働いているのは、あれかもしれませんね。(古今亭志ん朝)
- ・ 目標に達するまでの道筋を多くしないこと。(橋本左内)
- ・ 学とは"ならう"ということで、すぐれた人物の立派な行いを習い、みずからもそれを実行していくことである。(橋本左内)
- ・ 百の頂に百の喜びあり (深田久弥)
- ・ 山高くして尊きにあらず。(深田久弥)
- ・ 人の真似をしなというのは、何でもないことのようだが、実行はむずかしい。、、人のあとについて 行くのは易しいが、自分で道を切り開いて行くには努力がいる。(深田久弥)
- ・ 銭は一銭もいらん。そのかわり、会社のえらか衆の、上から順々に、水銀母液ば飲んでもらおう。・・・・・上から順々に四二人死んでもらう。奥さんにも飲んでもらう。胎児性の生まれるように。そのあと順々に六九人、水俣病になってもらう。あと百人ぐらい潜在患者になってもらう。それでよか。(石牟礼道子)
- ・ 人の上に立った者はむやみと腹を立てたり、下のものを叱ったりするもんじゃない。叱ったり怒ってみても、子供じゃあるまいし、まず実にはならん。(植村甲午郎)
- ・ 23年余の官僚生活と戦後の経団連を通じて私が痛感したのは、一億同胞の資質が優秀でしかも勤勉なこと、貯蓄性向が高いこと、自由経済性のもとで創意工夫と自由活発な活動ができること、この三本柱こそが明治以来日本経済を今日まで発展させた原動力であったということである。この三本柱が揺るがない限り、日本経済の前途は洋々たるものと信ずる。(植村甲午郎)
- ・ 神が「永遠の今」という時間を各人に恵み給うたことは、自分は自分としての永遠に連(つが)る 寄与をするよう期待されてのことではないでしょうか。まず自分の自分なりの確立が大切です。そ れには、その根幹を貫くバック・ボーンがなければならない。それは自分の勉強と思索と反省から 生まれて、不断に成長する自分自体の方法論であろうと思います。これなくしては、私共は歴史か ら疎外されてしまい、その形成に参加する資格がなくなるわけです。(大平正芳)
- ・ 着々寸進 洋々万里。(大平正芳)
- ・ 均衡と中庸。だえんの哲学。物事には二つの中心があり、どちらかに傾斜することなく、中正の立場を貫くのが重要である。統制と自由、権力と国民、課税者と納税者、、、、。(大平正芳)
- ・ 今共産主義も弾圧ではなく、大きく呑み込み解毒しつつ消化しなくてはならぬ。(大平正芳)
- ・ 立派なものはこの世の中にはないと思う。私は改革ということに対して、その点についてはややニヒルでしてね。(大平正芳)
- ・ どんじりランナーは時代の流れが逆向きにかあればトップになれる。(平松守彦)
- ・ 新しい分野を見つけることです。そうすれば二流の人間でも一流の仕事ができる。(江崎玲於奈)
- すぐれた科学者は一芸に秀でた人間というよりも、むしろあらゆる視野を兼ね備えた教養人です。この幅広く、多角的な視点を持つということが、創造性の原動力になるのかもしれません(江崎玲

於奈)

- ・ いつも歩く道を離れ、未踏の森に飛び込み、新しいものを探れ(江崎玲於奈)
- ・ 人間が成功する条件というのは、個性的なタレント(才能)、それを磨くためのハードワーク(努力)、 そして人知を超えたチャンス(運)。この三つの組み合わせであると思います(江崎玲於奈)
- ・ 水は科(か)に満ちて流る。(石野信一)
- ・ 賞はごほうびではなく、激励のしるしである(大山康晴)
- ・ 一時の栄光を求めるより、長く続けることが大切(大山康晴)
- ・ 人が真似できない芸を持つことが一流の条件である(大山康晴)
- ・ 無冠となって、気持ちが軽くなった。あとは、どうして立ち直ろうかと、その点にしぼってゆけば よいと自分を慰めた (大山康晴)
- ・ 立ち直るためには、一刻も早く以前の立場を忘れることである(大山康晴)
- ・ こんどは、新しいものを身につけなければいけない。(大山康晴)
- ・ 五十の手習いという。私の場合もそれと同じで、五十歳で再出発をしなければならないということ であった。(大山康晴)
- ・ 必ずメモをとれ。(藤田田)
- ・ 心のシワが欲しい。(吉永小百合)
- ・ 人が嫌がる仕事であれば、競争する相手も少なく成功しやすいのではないかと考え、洗濯屋を始めることにしました。(五十嵐健治)
- 天才とは努力する凡才のことである。(アインシュタイン)
- ・ およそ世の中のリーダーたるものは、共感を呼ぶ何かを生むべく、常に腐心していなければならない。経営の決定にも、情緒的要素が必要であって、みんなに通じ納得がゆくためには、いかなる数字もこれに及ばない。(北裏喜一郎)
- ・ 深く掘れ己の胸中の泉、余所たゆて水や汲まぬごとに(伊波普猷)
- ・ 十年前、櫛くし、簪かんざし、巾着ぐるみ意見を貰った姐さんに、せめて、見て貰う駒形の、しが ねえ姿の、横綱の土俵入りでござんす。(長谷川伸)
- ・ 信じるなよ、男も、女も、思想でも。ほんとうによくわかるまで。わかりがおそいということは恥 じゃない。後悔しないためのたった一つの方法だ。(五味川純平)
- ・ 楽しまなけりゃ馬鹿らしい。しかし、楽しむというのも、なかなか大変だよ。(平岩弓枝)
- 人間を正気にさせるのは、重病による入院、戦争、独房体験の三つしかない。(西部邁)
- ・ 男には意地ってもんがあるんだ。(佐川清)
- ・ 人生の深い感動が込められている作品以外はやりません。お客さまに人生の感動を味わって頂ける ものをやれば、必ずある程度のところまでいけます。(浅利慶太)
- ・ 意気地のない人や、なんとかなるさと思って引っ込んでいるような人が、世の中を変えたためしはない。(ゴットリープ・ダイムラー)
- ・ いかなるものと雖も、必ず急所を持つものだ。急所を見分け得るものは成功する(横光利一)
- ゴルフは左手のゲームである(ボビー・ジョーンズ)

- ・ 人間は与えられた条件のなかでどう生きるかが大事なのだ。これが、今、私が置かれている人生の ライなのだ。(ボビー・ジョーンズ)
- ・ 先人の踏を求めず、求めしものを求む。(桜田武)
- ・ 自分が社長になったのは会社を取り仕切るためじゃない。 4年なり6年の間、会社をお預かりして 業績を上げ、次の社長にバトンタッチするためなんだ。(桜田武)
- ・ 信なくば立たず(三木武夫)
- ・ 私は何も恐れない。ただ大衆のみを恐れる(三木武夫)
- ・ 戦争が始まったら、勝者も敗者も一様に、人間の悲惨と辛苦の、身の毛もよだつ収穫の落ち穂を拾 うことになるのだ。(ネヴィル・チェンバレン)
- ・ 俳句の魅力は、一口にいふと、複雑な対象を極度に単純化して、叙述を接してひと息に表現することにあると思ふ(石田波郷)
- ・ 兵隊のときは兵隊らしく、ブラジルへ行ったら、ブラジルの社会で牧場主らしくやってきました。 私は「らしく」ということがいまの日本に少し欠けているんじゃないかと思います。いつでも、自 分として精一杯やるということが必要なんじゃないでしょうか。(小野田寛郎)
- ・ (世論では) 私は「軍人精神の権化」か、「軍国主義の亡霊」かのどちらかに色分けされていた。私 はそのどちらでもないと思っていた。私は平凡で、小さな男である。命じられるまま戦って、死に 残った一人の敗軍の兵である。私はただ、少し遅れて帰ってきただけの男である(小野田寛郎)
- ・ 何をやるにも3つの『ど』。努力、度胸、度量(小野田寛郎)
- ・ 貧しくたっていいじゃないか。乏しくたっていいじゃないか。卑しくなければ(小野田寛郎)
- ・ 結婚生活――この激しい海原を乗り越えて行く羅針盤はまだ発見されていない。(イプセン)
- 他人のために尽くすことによって自己の力を量ることができる。(イプセン)
- ・ 心に残るのは、千の忠告より一つの行為だ。(イプセン)
- ・ "できない"というのは許される。だが、"しようとしない"のは断じて許されぬ。(イプセン)
- ・ 君たち、新しいものを創りたまえ。(ワーグナー)
- ・ 人間の頭に上下などない。要点をつかむという能力と、不要不急のものは切り捨てるという大胆さだけが問題だ。(秋山真之)
- ・ 哲学とはやはり、自己の頭で、人生とは何か、世界とは何かを考え、それを体系化することである。 (梅原猛)
- つねに謙虚であるならば、ほめられたときも、けなされたときも、間違いをしない。(ジャン・パウル)
- 友人を信用しないのは、友人に欺かれるよりもはるかに恥ずべきことである。(ジャン・パウル)
- ・ 腕を上げるにはネをあげないことだ(斎藤茂太)
- ・ あきらめないことだ。一度あきらめると習慣になる(斎藤茂太)
- ・ 頑張るべきときだけ百パーセント、百二十パーセントの力を出し、あとは八十パーセントぐらいを キープする。それが、心身共に健康で、いい仕事を長く続けていくコツなんですよ(斎藤茂太)
- ・ 人の顔を美しくする最高の美容術は、笑いである(斎藤茂太)
- ・ できるだけたくさんの本を読み、美しいものに触れ、思いやりを持って人に接する。当たり前のことを言っていると思うでしょうが、そういうことの積み重ねが、本当に人を美しくするんです。九十年も世の中を観察してきた僕が言うんだから、間違いない(笑)(斎藤茂太)
- 焦らない。でも、あきらめない(斎藤茂太)

- ・ 感動こそがストレスに負けない最大の秘訣。そして、長生きのコツでもある(斎藤茂太)
- ・ イチかバチかのやけっぱちみたいなことをやるのを、勝負師という人があるが、これは間違いです。 そういうのは勝負師とはいわない、賭博師という。(升田幸三)
- ・ 棋士は無くてもいい商売だ。だからプロはファンにとって面白い将棋を指す義務がある。(升田幸三)
- ・ アマは真似でも通用するが、プロの道は独創。またそうでなきゃ通用しない。だから苦しいが喜び も計り知れない。(升田幸三)
- ・ 一心になれる人というのは、自分の人生を完成しますな。世にいう成功者の秘訣というのは、これ じゃないかと思う。(升田幸三)
- ・ 一人前になるには 50 年はかかるんだ。功を焦るな。悲観するな。もっと根を深く張るんだ。根を深く張れ。(升田幸三)
- ・ 森ではなく木を見なければなりません。そして、木が枯れれば、森は衰えてゆくのです。(米澤嘉博)
- ・ らしく・・・というのはいい言葉だよ。誰でもその人らしく振舞えればいいのさ(中山晋平)
- ・ 自由は置物のようにそこに『ある』のではなく、現実の行使によってだけ守られる、いいかえれば 日々自由になろうと『する』ことによって、はじめて自由でありうるということなのです(丸山真男)
- ・ 今に諸外国の人間が日本に来ることは、日本の刺身が食いたいためである、と言われるまでに至る であろうことが想像される。(北大路魯山人)
- ・ 身銭を切って食ってみること。本気でそれを繰り返してこそ、初めて味が身につき、おのずとわかって、真から得心がいくのである。(北大路魯山人)
- ・ 人を憎んでいる暇なんてない。わしには、そんな暇はない。(黒澤明)
- ・ 一日に1枚しか書けなくても、一年かければ、365枚のシナリオが書ける。(黒澤明)
- ・ 悪魔のように細心に、天使のように大胆に。(黒澤明)
- ・ 創造というのは記憶ですね。自分の経験やいろいろなものを読んで記憶に残っていたものが足がかりになって、何かが創れるんで、無から創造できるはずがない。(黒澤明)
- ・ 泥沼にだって星は映るんだ。(黒澤明)
- ・ 中途半端だと、愚痴が出る。いい加減だと、言い訳がでる。真剣にやれば、知恵が出る(川上哲治)
- リーダーは人をリードできるだけの人物に早くならなくてはいけないと思う(川上哲治)
- チームの目標にどうやっていくかと考える選手たちをうまく育てていくことですね。だからものの 考え方の基本というものが相当大きな問題になってくるような気がします(川上哲治)
- チームのためにやることがおれのプラスになるというようなことをかぶらせながら率いていくリーダーでなければ、なかなか選手をうまく働かすことができないという時代になっていくんじゃないでしょうか。根底はデータ、セオリーだと思いますけどね(川上哲治)
- ・ プロ野球では監督が代わるのは弱い時なんです。新しい監督というのは経験もないうえに弱いチームを引き受けなければいけないんですから非常に過酷なんですね (川上哲治)
- ・ "勝負"の二字には、文字通り"勝ち"と"負け"しかない(川上哲治)
- ・ 勝負に強いか弱いかは、執念の差 (川上哲治)
- ・ 組織のリーダーは、自らが良く思われたいという我執、とらわれの気持ちを捨てねばなりません(川上哲治)
- ・ ときに部下や周囲の不興を買うことがあったとしても、大義を表現するために成すべきことを成す。 そういう強い信念を持った人間でなければ、リーダーは務まりません(川上哲治)
- ・ 周囲からどう評価されるか、という不安や心配から自らを解き放って、自分の想念を「無の境地」

に置けば、問題の所在が良く見えるようになります。あとは、その問題を淡々と解決していく。こうすると自分も楽になるし、不思議なもので、だんだんと勘も冴えてくる(川上哲治)

- ・ 成功する人とは、この冷や飯を上手に食べた人であるといってよい (川上哲治)
- ・ 疲れるまで練習するのは普通の人。倒れるまで練習しても並のプロ。疲れたとか、このままでは倒れるというレベルを超え、我を忘れて練習する、つまり三昧境(さんまいきょう=無我の境地)に入った人が本当のプロだ(川上哲治)
- ・ できるだけ台詞を短くして皆の記憶に残るようにするんだ(スティーブ・マックイーン)
- ・ 他の役者に必要な筋書きを喋らせて、君はここぞという重要な時にだけ口を開くんだ(スティーブ・マックイーン)
- ・ 本物のスターとは、観客が感情移入できる俳優を言うんだ(スティーブ・マックイーン)
- ・ 千年の後にまで残そうとする大切な名声を、ただ一時的な奢りや栄達でどうして汚してしまうことができようか。(樋口一葉)
- ・ 社外の専門家の意見も十分に聞く。一つの意見に飛びつき足る事は絶対にしない。そして熟慮して ひとたび決断すればいかなる決断も逡巡も許さず断行する。こうした覚悟で下した決断はまず十中 八九成功する。トップの決断とその成功の積み重ねが社員との間の信頼関係を生むことになる(佐 伯勇)
- ・ 社外の専門家の意見も十分に聞く。一つの意見に飛びつき足る事は絶対にしない。そして熟慮して ひとたび決断すればいかなる決断も逡巡も許さず断行する。こうした覚悟で下した決断はまず十中 八九成功する。トップの決断とその成功の積み重ねが社員との間の信頼関係を生むことになる(佐 伯勇)
- ・ 運命の神は公平で、だれにでも一様に、公平に機会を与えてくれる。この機会をつかむか、つかまないかということが事業の成否の分かれ目になる。だからこそ、常に意欲し、常に用意しておることが大切なのだ(佐伯勇)
- ・ 人を裁く前に、自らを律せよ。(小山五郎)
- ・ 一つになれば生き延び、ばらばらになれば死ぬ(李承晩)
- ・ 平和になりすぎたら文明も文化も栄やしない。世界は一つにとか何とか甘いこと考えるな。そんな ふざけたバカなこと考えちゃいけない。常に破壊と建設、建設と破壊というものは縄をなうように していって、そこに人間の生活が生まれ繁栄していき、人生を形づくっていくんだ。(今東光)
- ・ 十で神童、十五で天才、二十歳すぎたらただの人。(公文公)
- 悪いのはこどもではない。(公文公)
- ・ 「はやく、死んでしまえ」こう云われて、くやしかったら、生きてみろ!(柴田錬三郎)
- ・ 私は考えなかった。ただ探求した。(レントゲン)
- ・ 私の人生のすべてのことは、そう、ひとつだって無駄なものはな かったと今になって思うことが ある。(遠藤周作)
- ・ プロの一生とは不断の勉強の連続だ。、、夜の夢の中でもそれを考えていることさえある。プロとは そういうものだ。(遠藤周作)
- ・ 年をとっても、第一線から退いても、若い者たちが次々とやってくるようになるためには、仕事関係だけでなく、人間関係でたくさんの若い友人を持っていなければならない。(遠藤周作)
- ・ 現場で働く人間にとって、何より嬉しいのは、同じ現場の人間に慕われること(高峰秀子)
- ・ 政権を取らない政党は、ネズミを捕らぬネコと同じだ。(西尾末広)

- ・ 名刺で仕事をするな。(扇谷正造)
- ・ ジャーナリストは現代史の目撃者たれ(扇谷正造)
- ・ プロサラリーマンを生みだすものは衝動的な気まぐれではなくて、持続的な努力である(扇谷正造)
- ・ ただ、言われた通り、何も考えずに行動するのは、『仕事をしている』ではなく、『仕事を流している』に過ぎない(扇谷正造)
- ・ 四十にして初めて惑い、五十にして志を立て、六十にして事に励み、七十にして事をなしとげ、八 十にして引退する。(扇谷正造)
- ・ 右手だけでは何も書けない。左手で紙をおさえて初めて字が書ける。左手あってこそ右手が自由に 働ける。夫婦も友人も人間はみな互いに右手と左手のようなものなのかもしれない。(岩谷時子)
- ・ 幹線道路を行くようなコースで競争したってしょうがない。自分だけの生き方を作らないとしょう がないだろう。(色川武大)
- 9勝6敗を狙え(色川武大)
- ・ 長く生きるというのは素晴らしいことなんだ。だけど長く生きるためには術(すべ)がいる。術をマスターしなくてはね(色川武大)
- ・ 戦争を回避することにこそ、政策があるのだ。(羽仁五郎)
- ・ 自分の国だから我々は日本を批判するのだ。批判するのはよりよい日本をつくるためなのだ。批判 の無いところに未来はない。無批判に日本の良さなどと言うのはナルシズムだ。鏡の中の自分の顔 をながめていい気分になっているような馬鹿と同じだ。(羽仁五郎)
- ・ 『愛国心という言葉は悪党の最後の隠れ家』とは英国の哲学者の名言だが、『法と秩序』は腐敗政治 家が人民の批判を非合法視するときの常用句だ。法と秩序と言い、法治国家と言うが、その実態は 警察国家なのだ(羽仁五郎)
- ・ 言論の責任を取ることになってくれば、言論の自由なんていうものは保証できないんですよ(羽仁 五郎)
- ・ おれたちは空想に命がけなんだからさ、あほなおとなといわれようといいじゃねえか。(実相寺昭雄)
- ・ 定年まで40年というと10種類以上の学士になれる。(三澤千代治)
- ・ 一切のものが私には不足していますが、意志だけはあり余っております。(ゴヤ)
- 日本の芸術を研究することによって、だれもがみな必ず、もっと陽気に、もっと幸福になるだろう と思う。(ゴッホ)
- かたよらない、こだわらない、とらわれない心。ひろく、ひろく、もっとひろく…これが般若心経、 空のこころなり(高田好胤)
- ・ 親が苦労して、子供を楽にさせてやりたいとすると、子供はのちのち無慈悲に堕ちていく。親は苦 労し、子は楽をし、孫は乞食する。(高田好胤)
- ・ 自利はトレーニング (修練)、利他はサービス (奉仕)。すなわち、トレーニングによって身につけたものを世のため人のためサービスすることを菩薩道ということ。(高田好胤)
- ・ 人々の心の中に「見上げる心」をはぐくみ、精神を昂揚するために必要な高さが「塔の高さ」であ り、精神的に必要な大きさが「お堂の大きさ」(高田好胤)
- ・ 「断られたら、またチャレンジすればいい」というくらい大胆な方が、偉い人は可愛がってくれま す。(堤清二)
- ・ 愚直さが相手の心を打つ(堤清二)
- ・ 振り返ると遅れちゃう。一歩進めるところが半歩になっちゃう(島倉千代子)

- ・ 音楽は世界語であり、翻訳の必要がない。そこにおいては、魂が魂に話し掛けている。(バッハ)
- ・ 最大の困難の第一は、名声を得ることであり、第二は存命中に維持することであり、第三は死後も 保持することである。(フランツ・ヨーゼフ・ハイドン)
- ・ 天才は、われらの才能が一層強度に洗練されたものに外ならない。(フランツ・ヨーゼフ・ハイドン)
- ・ 人事というものは、経営者が社員に送る最大のメッセージなのだ。だから、人事を間違えてはいけない。人事さえ間違えなければ、証券会社の経営は大丈夫だ。(瀬川美能留)
- ・ 勉強十戒: 一、学習の計画を立てよう 計画のないところに成功はない。二、精神を集中しよう 集中の度合が理解の度合である。三、ムダをはぶこう 戦略の第一は時間の配分にある。四、勉 強法を工夫しよう 工夫なき勉強に能率の向上はない。五、自己のペースを守ろう 他をみれ ばスピードはおちる。六、断じて途中でやめるな 中断はゼロである。七、成功者の言に耳をか たむけよ 暗夜を照らす灯だ。八、現状に対し臆病になるな 逃避は敗北だ。九、失敗を謙虚 に反省しよう 向上のクッションがそこにある。十、大胆にして細心であれ 小心と粗放に勝 利はない。(赤尾好夫)
- ・ 恥ずかしながら生きながらえて帰って参りました。(横井庄一)
- ・ 私はこれから、失われた日本人の心を探し求めたいと思います。、、勤勉な心を失った国民が本当に 繋栄したためしはありません。、、食糧の大半を輸入に頼っているようでは独立国家と申せません。、、、 子が親を大切にしないような教育、生徒が先生を尊敬しないような教育などあってたまるもんです か。そんなものがあれば、それは教育と言えません。(横井庄一)
- ・ 形(かた)を持つ人が、形を破るのが型破り。形がないのに破れば形無し。(無着成恭)
- ・ 情報もいいでしょう。でも、生の体験は強い。(大島渚)
- 私には、女は「存在」だが、男は「現象」に過ぎないように思われる。(多田富雄)
- ・ 善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや(親鸞)
- ・ 愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ。(ビスマルク)
- ・ 名人制度の改革の責任は、もし間違っていたら、私一人が負う。(関根金次郎)
- ・ 問題は最後の五分間だ。うんと踏ん張るべし。(浜口雄幸)
- ・ 終始一貫、純一無雑にして、一点の私心を交へないことである。(浜口雄幸)
- ・ 勉強するときには、サブノートというものを作った。ノートから要点を書き抜いたもうひとつのノートを作るわけである。参考書を読んだときは、サブノートのなかに書きこんでおく。試験の前日にはサブノートさえ読めばよい。(我妻栄)
- ・ 迷ったらば迷ったで進む(吉田健一)
- ・ 私は日本と日本人のためにこれからも正しい日本人が描かれるようにだんこ戦っていく。(三船敏郎)
- 成功の本当の秘訣は熱心さである。(ウォルター・クライスラー)
- ・ 自分で何かを考え出したりつくったりするのは平気だし好きなのだが、人のマネというのが不得手 なのです(熊谷守一)
- ・ 絵を描くのは、初めから自分にも何を描くのかわからないのが自分にも新しい。描くことによって 自分にないものが出てくるのがおもしろい(熊谷守一)

- ・ 大好きなのは、世の中にいっぱいあります。特に小さな子供と、鳥と虫には目がありません(熊谷 守一)
- ・ いま一番気になるのは、人々が情熱を失ってしまっていること。政治は理論であると同時に、情熱 なんだ。それを高度成長の中でみんな失ってしまった。(飛鳥田一雄)
- ・ プロの場合、ボールを打つ技術に差はない。結局はコースマネージメントの差が勝敗を左右する。 (岡本綾子)
- ・ 日本の魂のドン底から覆(くつが)えして、日本自らの革命に当たろう。(北一輝)
- ・ 失敗は恐るるに足らない。大切なのはそのあとの処置である。 (金田一春彦)
- ・ 人生は修業の連続とよく言うが、世の中に無駄な仕事はない。どんな仕事もどんな経験でも必ずそ こには自分に役立つ勉強が潜んでいる。だから、ただ働きを惜しんではいけない。(加藤寛)
- ・ 私は学校卒業証書や肩書で生活しない。私は私自身を作り出したのでえ、私一個人は私のみである。 私は自身を作り出さんとこれまで日夜苦心したのである。されば私は私自身で生き、私のシンボル は私である。(鳥居龍蔵)
- ・ してみせて、言って聞かせて、やらせてみせて、それで誉めれば人は働く(山本五十六)
- ・ やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ。話し合い、耳を傾け、 承認し、任せてやらねば、人は育たず。 やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実ら ず。(山本五十六)
- ・ 人間が苦労しなければならないこと、苦労した人間に光のあるというのは、つまりこの慢心の灰汁 (あく)がぬけているからである。苦労なんていうものは人生にない方がよいのかも知れないが、 それをしないと人間が増長して浅薄になる。苦労も人生の一つの必要である。(中里介山)
- ・ 社会をつくるまえの人間の自然状態が戦争であったこと、しかも、いわゆる戦争ではなく、すべて の人に対する、すべての人の戦争であったことは、否定できない。(ホッブズ)
- ・ 法のないところに不義はない。(トマス・ホッブズ)
- ・ 日本の政治家という奴は、政治で飯を食おうというのじゃから、良心の切り売りをするのが公然の 商売となりおる。(内田魯庵)
- ・ 学ぶんだ、学ぶんだ、見聞きするものについて、なにも言うな。ともかく口を閉ざして、仕事をし ろ、そして学ぶんだ。(カラヤン)
- ・ 与えられた仕事を着実にこなしていく。これが私のモットーです。(カラヤン)
- ・ 演奏者だけが盛り上がって聴衆が冷めているのは三流、聴衆も同じく興奮して二流、演奏者は冷静 で聴衆が興奮して一流。(カラヤン)
- 落ち着け。人を恨んで自分をダメにするな(カラヤン)
- ・ 曲がり角、四回曲がれば元の場所。(金森久雄)
- ・ 努力が苦しいと思うのは、本人に向いてないんですから、やめればいいんです。嫌なことをしても 伸びません。(木原光知子)
- ・ 我らの時代こそ、かつて最も偉大だった古代ギリシャの時代と肩を並べるほど素晴らしい時代なの だ。 (ラファエロ)
- デザインは明るい生活の歌である。(亀倉雄策)
- ・ 遺伝子の構造を明らかにすれば、偉業となる。オレがそれを、解明するのだ。(ジェームズ・ワトソン)

- ・ お客様は悪魔です。でも悪魔相手に勝負するのは相当面白い。笑う悪魔、泣く悪魔、感動する悪魔 になってもらおうじゃないかってね。(小沢昭一)
- ・ 私の寺社は全国に満ちている。貴賤の別なく、念仏を唱える者。これはすべて私の寺社である。(法 然)
- ・ 他の職につくことができないならば、今の身でよいから、ひたすら念仏せよ。阿弥陀如来は、そのような罪深い人たちのためにこそ、仏の本願にすがり念仏せよ。念仏申せば必ず極楽に往生できると教えている(法然)
- ・ それがキリスト教の国であっても、そうでない国であっても、盗みについてこれほど節操のある人々を見たことがありません。この国の人々は今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう。 彼らは親しみやすく、一般に善良で、悪意がありません。驚くほど名誉心の強い人びとで、他の何ものよりも名誉を重んじます。大部分の人は貧しいのですが、武士も、そうでない人びとも、貧しいことを不名誉と思っていません。(フランシスコ・ザビエル)
- ・ この作品は長年の研鑚修行の成果であり、この値段はそのごく一部に過ぎない。(河鍋暁斎)
- ・ 独創は学問といわず実業界その他あらゆる面で最高の指針だ。(鈴木梅太郎)
- ・ 放っておいても一人前にやってゆく連中は心配しないが、そうでない教え子ほど可愛い、、(鈴木梅太郎)
- ・ 修行中は馬鹿になっていなければ上達しない。馬鹿という言葉を言い換えれば、ものに拘らない素 直なことである。理屈っぽいのが一番修行の妨げになる。(宮城道雄)
- ・ 私は思う。音には白い音、黒い音、赤い音、黄色い音というように、いろいろな音がある。(宮城道雄)
- ・ 私は明けても暮れても自分の心を磨き、わざを高めることにすべてを向けてまいりました。生活そのものが芸でなければならないという信念で生きてまいりました。(宮城道雄)
- 自分だけの、「頂上」を目指せ!(竹村健一)
- 諸行無常 (釈迦(仏陀))
- ・ 思慮のある人は、奮い立ち、努めはげみ自制・克己によって、激流も押し流す事が出来ない島を作りなさい。(釈迦(仏陀))
- ・ 誠あり、徳あり、慈しみがあって、損なわず、慎みあり、みずから調え、汚れを除き、気をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。(釈迦(仏陀))
- ・ 他人の過失を見る必要はありません。他人のした事と、しなかった事を見るのではなく自分がした 事と、しなかった事だけを見るようにしなさい。(釈迦(仏陀))
- ・ 他の作と不作を見るなかれ。己の作と不作のみを見よ。(釈迦(仏陀))
- ・ 今日すべきことは明日に延ばさず確かにしていくことこそ、よい一日を生きる道である。(釈迦(仏 陀))
- ・ 「わたしは愚かである」と認められる者こそ、賢者である。逆に「自分は賢者である」と思っている者こそ、愚者と呼ぶにふさわしい。(釈迦(仏陀))
- 見せかけの模倣は駄目だ。やるなら徹底的に根本から始める。(福原有信)
- ・ 私自身は哲学者だと考えています。建築と哲学は別物と感じる人がいるかもしれません。しかし、哲学なくして建築などできるわけがありません。(黒川紀章)
- ・ そが上に熱き涙をしたたらせて さんまを食ふはいづこの里のならひぞや(佐藤春夫)

- もっぱら万人の魂に生ずる初発的かつ根本的な問題をとらえ、掘り起こし、手引きし、しかも最新の知識への展望を万人に確立させる書物を、新しく世の中に送り出したいと念願しています(野間省一)
- ・ 教養とは万人が身をもって養い創造すべきものであって、一部の専門家の占有物として、ただ一方 的に人々の手もとに配布され伝達されうるものではありません(野間省一)
- 多くのことを理解したが、何も完成しなかった。(グロチウス)
- ・ 凡庸な教師はただしゃべる良い教師は説明するすぐれた教師は自らやってみる偉大な教師は心に 火をつける (William Artnur Ward)
- ・ 人間、出世したかしないか、ではありません。卑しいか卑しくないか、ですね。(永六輔「職人」)
- ・ 人間、今が一番若いんだよ。明日より今日の方が若いんだから。いつだって、その人にとって今が 一番若いんだよ(永六輔)
- ・ いいですか。 夫婦ったって、アカの他人ですよ。 アカの他人どうしが起こす奇蹟。 それが夫婦と いうものです (永六輔)
- ・ 家庭というのはこんがらがった糸ですよ。 こんがらがってるから家庭なんです。 ほどくとバラバラになっちゃいますよ (永六輔)
- ・ 人の死は二度ある。 最初の死は、肉体の死。 でも、死者を覚えている人がいる限り、その人の心の中で生き続けている。 最後の死は、死者を覚えている人が誰もいなくなったとき。 そう僕は思っています (永六輔)
- ・ 若い人々から、何を読んだらいいかと訊ねられると、僕はいつもトルストイを読み給えと答える。 (小林秀雄)
- ・ 私が両手をひろげてても、お空はちっとも飛べないが、飛べる小鳥は私のように 地面を速くは走れない。私がからだをゆすっても、きれいな音は出ないけど、あの鳴る鈴は私のように、たくさんな唄は知らないよ。鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。(金子みすず)
- ・ 人真似、猿真似はやめておこう、真似では勝利は得られない。(井深大)
- ・ 立派な人間になるための一つの条件は、自分が心から尊敬できる人を持つこと。(井深大)
- ・ 仕事の報酬は仕事だ。それが一番うれしい。(井深大)
- ・ ある商品の成功への貢献度をウエイト付けすれば、発明の比重は1、開発は10、商品化は100。 (井深大)
- ・ 反省をしなければならない。しかし、改心をしてはいけない(頭山満)
- ・ 青年は圭角がなければならぬ(頭山満)
- ・ 自分が何者であるか知りたいか?尋ねてはいけない。行動だ!行動が君を描きだし、そして明らかにする。(トーマス・ジェファ-ソン)
- ・ ついに起こらなかった害悪のために、われわれはどれほど多くの苦しみを味わされたことか! (トーマス・ジェファーション)
- ・ 新聞なしの政府と政府なしの新聞、いずれかを選択しろと問われれば、私は少しも躊躇せずに後者 を望むだろう。(トーマス・ジェファーション)
- ・ 謙虚とは堂々として過信しないことだ。それは断じて卑屈であることではない。(中岡慎太郎)
- ・ 商売人はとくに約束を厳守することが必要である。時間を偽ったり、約束を破るような人はすぐ信 用を失ってしまうのである。(浅野総一郎)

- ・ 私は自分の持病と一生連れ添う覚悟を決めています。できるだけ病気を飼い慣らしておとなしくさせるという方針を立てました。(吉行淳之介)
- ・ 役者は権威と箔がついたら終わり。平でいたい。(藤田まこと)
- ・ 宗教は、宇宙の構図を示すとともに、人間の行動に指針を与える (トインビー)
- ・ 文明が挫折する根本の要因は、内部の不和と分裂である(トインビー)
- ・ 文明は一つの運動であり、状態ではなく、また航海であって、港ではない(トインビー)
- ・ 現代社会の病根をなおすには、人間の心の内面からの精神革命による以外にない(トインビー)
- 人間とは歴史に学ばない生き物である(トインビー)
- ・ ベストを尽くせばいいんだ。それ以上のことは誰にもできはしない (トインビー)
- ・ 偉大なる才能は、試練によっていっそう鋭く育まれる(トインビー)
- ・ 日本人が歴史上残した最大の業績は、世界を支配していた西洋人が「不敗の 神」ではない事を示した点である(トインビー)
- ・ あらゆるものは、他のあらゆるものと関連する。(レオナルド・ダ・ヴィンチ)
- ・ 音楽は絵の妹と呼べるだろう。なぜならそれは聴覚に頼るからで、聴覚は第二番目の感覚だから。 絵は何よりも優れていて、音楽より高く位置づけられている。というのも、絵は生まれるやいなや 消えてしまうというようなことがないからだ。(レオナルド・ダ・ヴィンチ)
- ・ むちゃくちゃに衣食を薄くして、病気を生ずるもかまわず、多くの書を買うて、神学もかじれば生物学も覗い、希・拉もやりかくれば梵文にも志し。(南方熊楠)
- ・ 世界に、不要のものなし(南方熊楠)
- ・ 核の時代においては、平和共存こそが唯一の合理的選択なのだ。(フルシチョフ)
- ・ 個性を生かしぬく人。それを深く掘り下げて行く人は、何よりも立派である(山本丘人)
- ・ 絵画というのは全人格的行為であり、画家の全ては作品のなかにある(山本丘人)
- ・ 画家は不断が大事であり、毎日のライフが大切である(山本丘人)
- ・ 歳月の影が折り重なって、芸(芸術)は円熟の境地に達するものらしい(山本丘人)
- ・ 造形する者は「ゆっくりいそげ」と古人の言葉に教えられてききた(山本丘人)
- ・ 個人は集団のために、集団は個人のために。(金日成)
- ・ 動物がいちはやく公害を感じ、そのあとで人間が気づいた。(戸川幸夫)
- ・ 人生は近くで見ると悲劇だが、遠くから見れば喜劇である。(チャップリン)
- ・ 人生に必要なものは、勇気と想像力。それと、ほんの少しのお金です。(チャップリン)
- 下を向いていたら、虹を見つけることは出来ないよ。(チャップリン)
- ・ 信はたて糸 愛はよこ糸 織り成せ人の世を美しく。(岡崎嘉平太)
- ・ 何よりもまず、ものの本質をつかまなければいけない。できるだけ早くつかんで、それを達成する ように努力する。枝葉のことにはあまり目をくれないようにする。(岡崎嘉平太)
- ・ これからの外交の行き方は、隣国とともに生きるということにあると思う。(岡崎嘉平太)
- ・ アヘン戦争以来、中国が苦しんだもろもろの何代を、孫文、黄興、蒋介石と三代を経て共産党政権がこれを一挙に解決した。(岡崎嘉平太)
- ・ 8月15日に蒋介石がだした布告文「仇に報いるに徳をもってせよ。(岡崎嘉平太)
- ・ 憎い日本ではあるけれども、アジアの守り神であっったといえるよ。(岡崎嘉平太)
- ・ 気宇が大きい、、(岡崎嘉平太)
- だれも中共に行き、あるいは人と交わって身をもって研究している様子がない。(岡崎嘉平太)

- ・ 実に遠大な計画です。それがいちばんよくわかるのが植林、治水です。黄河ひとつみましても、五 千年来の念願だった治水をついやってしまった。(岡崎嘉平太)
- ・ 周恩来。わが国は大変な損害を受けている。しかし、八十年は、日中二千年の交わりに比べれば僅かな時間だ。(岡崎嘉平太)
- ・ あと30年たったら、世界における今の中国というののは、えらいものになる。おそらく、ソ連は 追い越し、アメリカにも追いつくだろう。、、そういうときが来たときに、もし、日本民族と中国民 族との間に、不信感があったとしたら、息苦しいのは日本じゃなかろうかと思います。(岡崎嘉平太)
- ・ 基地については、外国の軍隊が今後二十年、三十年、五十年にわたって日本に駐留し、日本が実際 の自己防衛を行わないという状態がつづけば、日本民族はおそらく骨抜きになるだろうと私は心配 する。そこで、日本民族が生きるバックボーンをもつために、基地は漸次、できるだけ早く撤去し なければならない (岡崎嘉平太)
- ・ 日米安保条約だけに固執せず、より広い視野からアジアの安全を考える必要があると思う。また、 日本の安全は日本人自らが守るのだという気概をつくりあげてゆくことが必要なのではないだろう か (岡崎嘉平太)
- ・ 夢は諦めたら消えちゃう。だから諦めたらいけない(坂上二郎)
- ・ 社会というところは、短期間に見ればアンフェアなところもある。しかし、長期的に見ればフェア なものだ。それだけに努力さえしていれば、必ず誰か一人は見ていることを忘れるな。 (紀田順一郎)
- ・ 私は自分の銀行内のどんな事務の仕事でもこなせる。(J.P.モーガン)
- ・ 板垣死すとも自由は死せず。(板垣退助)
- ・ 人生は短い。大いに楽しめ(フルシチョフ)
- ・ 誰もぼくを叱る人はいない。おこる人もいない。、、、自分で好きなように都合のいいようにしてしま えば、それですんでしまう。ぼくが恐れているのもそのことだ。(藤城清治)
- 私が死にかけても、助けに来ないでいいから、カメラを回し続けてくれ。(畑正憲)
- ・ 難儀は節だ、節から芽が出る。(中山みき)
- ・ 人間の寿命は115歳となる。これから先はいつまでも生きていても良い。死ぬことを希望すれば、 自由に死ぬこともできる。その時、来世にどういう生まれ方をするのかもわかるようになる(中山み き)
- ・ ものごとはすべて大きく考えること。おじけづいていては成功しない。(五島慶太)
- ・ 私はとにかく、「強盗慶太」の異名を頂戴するくらいであったから、事業のための私であり、事業あってこその生涯だった。(五島慶太)
- ・ 金儲けは易しいが、経営とは違う。世のためになって利益を上げるのが経営。だから経営は難しい。 (五島慶太)
- ・ 若いころから自分の心にかなった事業を興してこれを育て上げ、年老いてその成果を楽しむことの できる実業界に比較すれば、いかにもつまらないものだ。これが十年近い官吏生活を経験した私の 結論であった。(五島慶太)
- ・ おいしい関係を持っている男女というのは、いつも毒の匂いというか、危険な匂いがする人だと思 うの。安全パイではおいしいはずないんだから。(犬養智子)
- ・ 世界を見ようとする時、世界もこちらを見ています。「井戸」をのぞくと「井戸」もあなたをみています (西田幾太郎)

- 円は広大な心を表します。考えることによって、それは宇宙をも包みます(西田幾太郎)
- ・ 私の生涯は極めて簡単なものであった。その前半は黒板を前にして坐した。その後半は黒板を後にして立った。黒板に向かって一回転をしたと云へば、それで私の伝記は尽きるのである(西田幾太郎)
- ・ 愛宕山 入る日のごとく あかあかと 燃やし尽くさん 残れる命(西田幾太郎)
- ・ 仕事は楽しみなんだ。どんな難しい問題でも真っ向から取り組み、それをひとつひとつ解決していくことが、実に楽しい。(宮崎輝)
- ・ ユーモアとは人生の薬味である。同じそばを食べるにしても、そこに薬味を入れたのと入れないのとでは味に雲泥の差がある。薬味の入っていない人生では、味わいが薄い。(源氏鶏太)
- ・ くということには、不平や不満がつきまとうように運命づけられている。その宿命に簡単に負けた のではおしまいである。自分を不幸にするだけだ。あえてその宿命に挑戦する気になったら、そし て、それによって自分という人間の真の値打ちを知ろうと努力する気になったら暗闇の中に一条の 光明を発見できるかもわからないのである。そのためには勇気が必要である。(源氏鶏太)
- ・ うまくやろうと思うな。その先に広い世界はない。(久世光彦)
- ・ 天地は我れを待って覆載し、日月は我れを待って運行し、四時は我れを待って変化し、万物は我れ を待って発生す、大なる哉心や(栄西)
- ・ 国民それぞれの主義とするところを尊重すべし。(ナポレオン3世)
- ・ 大衆は、小さな嘘より大きな嘘にだまされやすい。なぜなら、彼らは小さな嘘は自分でもつくが、 大きな嘘は怖くてつけないからだ。(アドルフ・ヒトラー)
- ・ 人々が思考しないことは、政府にとっては幸いだ。(アドルフ・ヒトラー)
- ・ だからどうだと言うのだ。ドイツ民族自らがそんな運命を選択したのではないのか! (アドルフ・ ヒトラー)
- ・ 長所を見て配置する。責任をとる決断が部下を動かす。部下の家族関係を知る。公私の別は率先垂 範する。常々現場の状況を把握する。(亀井正夫)
- ・ 自己を滅しておのれの課題に専心する人こそ、その仕事の価値の増大とともにその名を高める結果 を得る。(マックス・ウェーバー)
- ・ 政治家を職業とするには2つの道がある。政治の「ために」生きるか、政治に「よって」生きるか、 そのどちらかである。(マックス・ウェーバー)
- アイデアは、熱心に働いているときに限って現れる。(マックス・ウェーバー)
- ・ 精神のない専門人、心情のない享楽人、この無のものは、かつて達せられたことのない段階にまで登り詰めたと自惚れている。(マックス・ウェーバー)
- ・ 空想は実現のもと(三船久蔵)
- ・ 内円の動が外円を支配する(三船久蔵)
- ・ 引かば回れ、押さば斜めに(三船久蔵)
- ・ 私は過去を後悔することが嫌いなんです。(岡田嘉子)
- われより哲学を学ぶべきにあらず、哲学することを学べ。(カント)
- 我が行いを見習えと、誰にでも言い得るよう行為せよ。(カント)
- ・ 弱い羊だけが群がっている世の中など嫌だ。虎の寝そべっている野辺を突き進め。(山縣有朋)
- ・ 抽象的な真理など無い、真理は常に具体的である。(レーニン)
- ・ 不平等な経済的・政治的発展は資本主義の絶対的法則である。(レーニン)

- ・ 学べ、学べ、なお学べ。(レーニン)
- ・ 無関心は権力者、統治者への静かな支持である。(レーニン)
- ・ 私の財産は、挫折なんです。(新藤兼人)
- ・ 私は仕事をして生きてきた。その仕事の中に私自身が含まれていると私は思います。仕事とは、私 であり続けること、私とは何かを考え続けることなんです。(新藤兼人)
- ・ 渡り鳥が危険をおかしてまで海を渡るように、 『やらねばならぬ』ことは人それぞれにある。 私 の場合それが『音楽』だったのです(冨田勲)
- ・ 私は母のおかげで、生活の苦労を感じずに絵を生命とも杖ともして、それと闘えたのであった。私 を生んだ母は、私の芸術までも生んでくれたのである。(上村松園)
- ・ 一途に、努力精進をしている人にのみ、天の啓示は降るのであります(上村松園)
- ・ 生命は惜しくはないが描かねばならぬ数十点の大作を完成させる必要上、私はどうしても長寿をかさねてこの棲霞軒に籠城する覚悟でいる。生きかわり何代も芸術家に生まれ来て今生で研究の出来なかったものをうんと研究する、こんなゆめさえもっているのである。ねがわくば美の神の私に余齢を長くまもらせ給わんことを!(上村松園)
- ・ 女性は美しければよい、という気持ちで描いたことは一度もない。一点の卑俗なところもなく、清 聴はな感じのする香高い珠玉のような絵こそ私の念願とするところのものである(上村松園)
- ・ 画を描くには、いつもよほど耳と目を肥やしておかなくてはならないようでございます(上村松園)
- ・ 真善美極致に達した本格的な美人画をを描きたい(上村松園)
- ・ 改革はボトムアップでは絶対に成功しません。トップダウンでやるしかない。トップみずからが腹を切る覚悟でやるしかありません。(諸井虔)
- ・ その人になりきってしまって、その人が怒るときには私も怒り、その人が泣くときは私もまた泣い て、ものを考えているのである(山本為三郎)
- ・ 人間にとって大切なのは、何を恥と思うかです。(つかこうへい)
- ・ 雪に折るる松となるともものの夫のこのて柏のふたおもてすな(川路聖謨)
- ・ 誰余所にとらすべきやは我国の千島と君が教え仰ぎて(川路聖謨)
- ・ お前は学問をやれ。俺は金儲けをしてお前を食わしてやる。(安宅 弥吉)
- 世の中は、すべてヘイヘイヘイのガンでやれ。(安宅弥吉)
- ・ 「いわしも大群になると力が出る。みんなが心底から力を合わせることによって、何かが可能にな るんや。(西本幸雄)
- ・ 道のりは遠くとも、目標に向かって歩めば、一歩一歩近付くことだけは確かだ(西本幸雄)
- ・ レギュラーが決まっているチームは意外と弱い。2つか3つのポジションが決まっていないチーム のほうが強くなる(西本幸雄)
- ・ つまずくのは、恥ずかしいことじゃない。立ち上がらないことが、恥ずかしい。(三浦綾子)
- ・ 秀れた人間というのは、他の人間が、愚かには見えぬ人間のことだろう。(三浦綾子)
- 戦争とはこれほど不幸なことか。(マルクス・アウレリウス)
- ・ 金は借りてもならず、貸してもならない。 貸せば金を失うし、友も失う。 借りれば倹約が馬鹿らしくなる。(シェークスピア)
- ・ 安心、それが人間の最も身近にいる敵である(シェークスピア)
- ・ 愚者は己が賢いと考えるが、賢者は己が愚かなことを知っている(シェークスピア)

- ・ 偉人には三種類ある。生まれたときから偉大な人、努力して偉人になった人、偉大な人間になることを強いられた人(シェークスピア)
- 簡潔こそが英知の真髄である(シェークスピア)
- ・ 吾人はいやしくも俳句道に生涯を賭する決意の下に遅々たる歩みをつづけてきた。世上文学道の何れにも見出し難いところの唯一つの焦茶色の文学道に(飯田蛇笏)
- ・ 我々の俳句は、皆粒々辛苦の、正しい人間生活から流れ出る結晶であり、指先からペンをかりてほとばしり出る血汐そのものでなければならぬ (飯田蛇笏)
- ・ 名を成すのは常に困窮のときであり、事の破るるの多くは得意のときである。(越後正一)
- ・ 断定とは感動の重さなのだ(山本健吉)
- ・ 中野好夫の「あんたのおばあさんが聞いても分かるようにちゃんと訳してくれ」は万古不易の翻訳 論の名言だ(佐伯彰一)
- ・ 君に合戦計画を与えるつもりはない。達成してもらいたいことを計画しただけであり、それをどのように達成するかは君の自由だ(グラント大統領)
- ・ どんな戦いにも、両社が『負けた』と思うときが訪れる。そこから攻撃を続けた者が勝利するだろ う(グラント大統領)
- ・ 今まで経営で失敗したことはないが、久美子に社長を任命したことは失敗だった。(大塚勝久)
- ・ 次官は盲腸と言われているが、役に立つ盲腸だってあっていいじゃないか。(山村新治郎(11代目))
- ・ 起死回生法。一、生命の秘儀を覚り「死」の大事に徹見すること。二、これを目標とし、勇往邁進、 不断に坐禅三昧なること。三、呼吸法。四、内観の法(マントラ)。(尾崎秀実)
- ・ 戦争の全責任は私にある。私はどうなっても良いから、国民の生活を守って欲しい。(昭和天皇)
- イチローを作ったのは俺だ!(仰木彬)
- ・ よく食べられること、よく飲めること、よく眠れることというのは、ある意味では技術以上の素質です(仰木彬)
- ・ 山に登るルートはたくさんあるのだから、自分の成功体験を押し付けてはいけない(仰木彬)
- ・ 人生において大切なのは、引く時のタイミングであり、切る時のタイミング、そして攻める時は思いっきって、人目をかまわず攻めなければならないはず(仰木彬)
- 大阪に帰ってこい。おまえの最後の花道は俺がつくってやる」(清原に対して)(仰木彬)
- ・ 野茂に怒られるのが怖いから変えんかっただけや」(野茂英雄選手のトルネード投法に対して)(仰木 彬)
- ・ 自分が一流になれなかったのは、若い時に遊びすぎたからだ。あとから気づいても遅いんだぞ。オレが悪い見本や(仰木彬)
- ・ 美人作家というのは作家という母集団の中での美人ということでしょう。作家は美しいかどうかという能力は問われない世界なのよ。よく聞きなさい、私は美人作家じゃなくて美人なのよ。(米原万里)
- ・ 人は祖国を離れたとたんに、愛国者となる(川喜多長政)
- ・ 香を千世に留めぬるとも武士のあだなる花の跡ぞ悲しき(久坂玄瑞)
- ・ 将来の経営の在り方は一番調子のいい時にこそ考慮しておくべきです。(坪井東)
- ・ 「抵抗しても無駄だ!」と、閉じこもった犯人にメガホンで警告する警察官の言葉は、結婚生活に もそのまま当てはまる。(吉村昭)
- ・ 事実を主にしても、私は小説を書いている(吉村昭)

- ・ 小説とは、文章ですべてのストーリーをつむぐ文字の芸術。小説の一文字一文字に小説家の魂が込められている。つまり小説の名言とは小説家の言霊であり、小説家の肉体は滅びても、魂は我々の中で生き続けている証でもあるのだ!(吉村昭)
- ・ 野球選手の一番の敵は欲望(山内一弘)
- ・ 人に言った言葉は自分に返ってきます。だからできるだけ綺麗であったかい言葉を使いましょう。 (阿木よう子)
- ・ 無鉄砲なくらいのチャレンジをさせなくては企業の若さは保てない(松本望)
- ・ わが社は音の専門メーカーである。音をもって社会に貢献することを忘れてはならぬ。そのために は最高の技術を生かして、大衆が喜んで利用できる価格でなければ事業の意味を失う(松本望)
- ・ 新しい秩序を打ち立てるということくらい、難しい事業はない。(マキャベリ)
- ・ 軍の指揮官にとって、最も重要な資質は何かと問われれば、想像力である、と答えよう。(マキャベリ)
- ・ 人間というものは、危害を加えられると思い込んでいた相手から、親切にされたり恩恵を施されたりすると、そうでない人からの場合よりずっと恩に感ずるものである。(マキャベリ)
- ・ 常識を発達させよ。見聞を広くしなければならぬ。小さな考えでは世に立てぬ。(大村益次郎)
- ・ 中国人は友としてつき合うべき国で、けっして敵に廻してはなりません(柴五郎)
- ・ 寒けれども手を懐にせず、暑けれども扇をとらず、はだぬがず。道は目上にゆずれ片寄りて通るべし。門の敷居を踏まず、中央を通るべからず。客あらばぬ奴僕はもちろん、犬猫の類にいたるまで叱ることあるべからず。おくび、くさめ、あくびなどをすべからず、退屈の体をなすべからずと、きびしく訓練されたり。(柴五郎)
- ・ 挙藩流罪という史上かつてなき極刑にあらざるか。(柴五郎)
- ・ 陸奥湾より吹きつくる北風強く部屋を吹き抜け、炉辺にありても氷点下十度十五度なり。吹きたる 粥も石のごとく凍り、これを解かして啜る。(柴五郎)
- ・ 官界は薩長土肥四藩の旧藩士に要職を占められて入り込む隙間なし。会津のものにとりては、東京 もまた下北の火山灰地に似て不毛の地というべきか、(柴五郎)
- ・ 人々日々の生活の業に疲れ、過ぎたること忘れがちなり。(柴五郎)
- ・ 造らないかんものなら、仕方がなかでごわしょう。それ(文部省の予算流用)が知れて、許してもらえんのなら、山本さん、二人で二重橋(皇居)の前で腹ば切りもんそう。二人が死んで主力艦ができればそれで結構です。(西郷従道)
- · 紳士淑女諸君。(西郷従道)
- ・ 生きたカネの使い方は実に難しい。カネの残し方を覚えるよりも、使い方を覚えるほうが利口である。(笹川良一)
- ・ そんなに大層なことは、この世の中に一つもない。大概笑ってごまかせることだ。(森繁久彌)
- ・ 「芸人とは、芸の人でなく芸と人ということではないか、、、、(森繁久彌)
- ・ 女房やセガレがどんなにボヤこうが、私はあくまで一世一代で、すべてが私と共にあり、私と共に 無くなるのである(森繁久彌)
- ・ 目下開店中の八百屋のような万うけたまわりの芸術屋 (アルチザン) を整理して、新しい冒険に船 を漕ぎ出さねばなるまい。このまま立ち枯れるには、まだチット血の高鳴りが邪魔になる人生五十 年である(森繁久彌)
- ・ 相手の目を見て大きな声できちんと話せ。(田中角栄)

- ・ 肝心なのは大事を任せられる人を見つけることだ。(田中角栄)
- ・ 大事なのは数字と事実だ。(田中角栄)
- ・ 名指しで批判はするな。叱るときはサシのときにしろ。ほめるときは大勢の前でほめてやれ。(田中 角栄)
- ・ グレーゾーンが一番広い。真理は常に「中間」にある。(田中角栄)
- ・ 賢者は聞き、愚者は語る。もっと若い連中の話を聞こう。(田中角栄)
- ・ 聞く人が「今日はよかったな」と思う話をする。それが本当の雄弁というもんだ。(田中角栄)
- ・ 戦争を知っている世代が社会の中核にある間はいいが、戦争を知らない世代ばかりになると日本は 怖いことになる。(田中角栄)
- ・ わが国の前途に思いをめぐらすとき、私は一夜、沛然として大地を打つ豪雨に心耳を澄ます思いで あります。(田中角栄)
- ・ 一番力があるときこそ、一番難しい問題に挑戦するんだ。(田中角栄)
- ・ 大学出はだめだなぁ。(田中角栄)
- 中途半端な才能はいさぎよく捨て得意な分野を24時間考え続ける(大黒将志)
- やれやれ、目明きとは不自由なものじゃな。(塙保己一)
- ・ 命かぎりにはげめば、などて業の成らざらんや(塙保己一)
- ・ やせ蛙負けるな一茶是にあり(小林一茶)
- ・ 他の富めるをうらやまず、 身の貧しきを嘆かず、 ただ慎むは貪欲、 恐るべきは奢り。(小林一茶)
- ・ 鋭きも鈍きも共に捨て難(がた)し 錐(きり)と槌(つち)とに使い分けなば。(広瀬淡窓)
- ・ 学問の道は、須く(すべからく)雫の石を穿つ如くせよ。(高野長英)
- ・ 結婚したまえ、君は後悔するだろう。結婚しないでいたまえ、君は後悔するだろう。(セーレン・キルケゴール)
- ・ 哲学者たちは世界をさまざまに解釈してきただけだ。世界を変えることが大切なのに。(マルクス)
- ・ 浮利に走って軽進すべからず(広瀬室平)
- ・ 皆、自分の道をゆこう。(土方歳三)
- ・ 目的は単純であるべきである。思想は単純であるべきである。(土方歳三)
- ・ 喧嘩ってのは、おっぱじめるとき、すでに我が命ァない、と思うことだ。死んだと思いこむことだ。 そうすれば勝つ。(土方歳三)
- ・ 失敗は恐るるに足らない。大切なのはそのあとの処置である。(金田一京助)
- ・ 言語は結局知識の手段であって、目的ではない。(金田一京助)
- ・ 人生は何事も成さぬにはあまりにも長いが、何事かを成すにはあまりにも短い。(中島敦)
- ・ 大人になるということは、あいまいさを受け入れる能力をもつということ。(ジークムント・フロイト)
- ・ 名を成すには常に窮苦の日にあり。事の破るるは多くは得意の時による。(井上準之助)
- ・ 人生は使い方によつては充分長いものであり、充分尊いものであり、充分美しいものである。(井上靖)
- ・ 何でもいいから夢中になるのが、どうも、人間の生き方の中で、一番いいようだ(井上靖)
- ・ これまでとまったく違った新しい人生というのは、十五年ぐらいかけてチャレンジすると、かなり 達成できるものなんですよ(井上靖)
- ・ もし二心を抱けば わが子孫にあらず 面々決して従うべからず。(保科正之)

- ・ 政事(まつりごと)は利害を以て道理を枉(ま)ぐべからず、僉議(せんぎ)は私意(しい)を挟み人言(じんげん)を拒(ふさ)ぐべからず、思ふ所を蔵(ぞう)せず以てこれを争ふべし(保科正之)
- ・ しょせん学問はただ年月長く、うまずおこたらずに、はげみつとめることが肝要である。まなび方 はいかようにしてもよいだろう。(本居宣長)
- ・ 道をまなぼうとこころざすひとびとは、第一にからごころ、儒のこころをきれいさっぱり洗い去って、やまとたましいを堅固にすることを肝要とする。(本居宣長)
- ・ 総じて漢籍はことばがうまく、ものの理非を口がしこくいいまわしているから、ひとがつい釣りこまれる。(本居宣長)
- ・ 才のとぼしいこと、まなぶことの晩(おそ)いこと、暇のないことなんぞによって、こころくじけて、やめてはならぬ。なににしても、つとめさえすれば、事はできるとおもってよい。(本居宣長)
- ・ 主として奉ずるところをきめて、かならずその奥をきわめつくそうと、はじめよりこころざしを高く大きく立てて、つとめまなばなくてはならぬ。(本居宣長)
- ・ 音楽は幻想ではなく、むしろ啓示です。(チャイコフスキー)
- ・ インスピレーションを待っていたら、何も書けない。私は毎朝必ず作曲をする。そうすると、神様 がインスピレーションを送り込んで下さる。(チャイコフスキー)
- ・ 哲学なき政治、感性なき知性、労働なき富、この三つが国家崩壊の要因なり。(タゴール)
- ・ 「人びと」は残酷だが、「ひと」は優しい。(タゴール)
- ・ 学ぶ者は山に登るがごとし。(美濃部達吉)
- ぼくは、いかに演技すべきかということを知らない。ぼくにできることは、いかに熱演しないかということだけだ。(ゲーリー・クーパー)
- ・ 長崎人なら精霊流しを歌え(宮崎康平)
- ・ 新井にもし才能があるならば、それは一点集中の才能だと思います。(新井満)
- ・ 朽ちはてて身は土となり墓なくも 心は国を守らんものを(高山彦九郎)
- ・ 赤城山 真白に積もる 雪なれば 我が故郷ぞ 寒からめやも(高山彦九郎)
- ・ 集中力が極限まで高まっていると、札が光るときがある。(楠木早紀)
- ・ 私は、自分の研究はしますが相手の研究はしません。自分の最高のパフォーマンスができれば勝っても負けてもいいと考えているからです。私が勝負しているのは、目の前の相手ではなく自分自身 (楠木早紀)
- ・ 選ばれた人間、つまり優れた人間は、自分を超え、自分に優った一つの規範に注目し、自ら進んで それに奉仕するという、やむにやまれぬ必然性を内にもっているのである。(オルテガ・イ・ガセット)
- ・ 自らに多くを求め、進んで困難と義務を負わんとする人々であり、第二は、自分に対してなんらの 特別な要求をもたない人々、生きるということが自分の既存の姿の瞬間的連続以外の何ものでもな く、したがって自己完成への努力をしない人々、つまり風のままに漂う浮標のような人々である(オ ルテガ・イ・ガセット)
- ・ 大衆人とは、生の計画をもたない(その日暮しの)人間であり、波のまにまに漂う人間である。したがって、彼の可能性と彼の権力がいかに巨大であっても、何も建設することはできないのである。 (オルテガ・イ・ガセット)
- ・ 芸術には進化はないんです。芸術は変化があるのみです(金子鷗亭)

- あいつより うまいはずだが なぜ売れぬ(森光子)
- ・ 時間を前倒しできる者が勝ちを制する。(高井伸夫)
- ・ 「西田(幾多郎) 先生からはいろいろ教えを受けた。一番切実に教わったのは自覚ということだった。また、プラトンの意志の力、つまり吹雪の中を突っ込んでいくという発想、意志の弱さは罪悪だという思想を植え付けられた。(河合良成)
- ・ 汚い金をきれいに使うのが文化ちゅうもんや。(桑原武夫)
- ・ 人生に強いインタレスト (興味、関心と利害感)をもち、感動しうる心なくしては、よき行動はなく、したがって、よき人生もありえない。(桑原武夫)
- ・ 新井白石の合理主義、本居宣長のねばっこい追求力、そして明治維新をなしとげて、独立を守りえた私たちの祖父たちの知力と勇気、そうしたものをこそ、近代国家としての今の日本の中で改めて継承せねばならないのである。(桑原武夫)
- ・ 人間は 40 代後半になったら、自分の力を弟子なり後進なりに分けてあげなければいけない。人を育てるにはエネルギーが要る。老齢になった後に名誉職のような形で養成するのではだめだ。力の充実している時期に後進を養成しなければ人は育たない(桑原武夫)
- 天才になるには天才のふりをすればいい。(ダリ)
- ・ 創造的行為というものは、…自分が生み出したものとの間に強い連帯感を抱くものであり、それによって自分自身が変わっていくのを感ずるのである。(川喜田二郎)
- ・ 創造的行為の三ヵ条。自発性、モデルのなさ、切実性。(川喜田二郎)
- ・ 決断力のないリーダーは、誤った決断をするリーダーよりも劣る(川喜田二郎)
- ・ 共通課題への挑戦こそ人びとを結ぶものである。そうして解決という産物まで生みだしてこそ、そ の主人公もまた 創造されるのである。その達成感こそ人を育てるものである(川喜田二郎)
- 経営者は現場を歩き、積極的に生の情報を集めなければならない。(椎名武雄)
- ・ 山には神が宿り、仏が住む。(山折哲雄)
- ・ 金銀、平日は至宝なれども、饑寒(きかん)(飢饉や酷寒)の用をなさざれば、金銀を集むるは何の 為にや(青木昆陽)
- ・ 看護を行う私たちは、人間とは何か、人はいかに生きるかをいつも問いただし、研鑚を積んでいく 必要がある。(ナイチンゲール)
- ・ 龍となれ 雲自づと来たる。(武者小路実篤)
- ・ I LOVE YOU また結婚しようね(山地進)
- ・ もうひとつの創造(芹澤銈介)
- ・ 僕の演技の基本は「自然」です。(笠智衆)
- ・ 自己を裏切れば、その結果が成績として現われる。正しい生活、正しい精神、正しいトレーニング により、実力が発揮される。(円谷幸吉)
- ・ なにかを光らせるには、光るまで磨くだけでいい。(斉藤茂吉)
- ・ あたり前のことですが、手は動くものだ、この裸体は座っているが、立つものだ。そういう生きている人体そのものを描くことをこころがけなくてはいけません。(中村研一)
- ・ 建築の理論を最後の一歩まで推し進める力は、口でもない手でもない、やはり建築家それ自身の生活力、または生活意識そのものであります。(前川国男)
- 自分の力量に疑念をもっている人物には、自分が万能だと思っている人物ほどの危惧(きぐ)を、 余は抱かない。(メッテルニヒ)

- ・ 過ぎたる快楽は身体に悪影響を及ぼす。(井上光晴)
- ・ 四月長崎花の町。八月長崎灰の町。十月カラスが死にまする。正月障子が破れ果て、三月淋しい母 の墓(井上光晴)
- ・ イヴ・サンローランは20回縫いなおす。天才は19回目でまだ直す目を持っている。(伊丹十三)
- ・ がしかし、これらはすべて人から教わったことばかりだ。私自身はほとんどまったく無内容な、空っぽの容れ物にすぎない。(伊丹十三)
- ・ 昔、子供のときにあこがれた偉い人になるということを今こそ本当の意味でやりとげなくてはならないのだ。(伊丹十三)
- ・ あなたはは役者でしょう。それで給料もらってるんでしょう。自分で考えなさい。(溝口健二)
- ・ 小規模な企業が生き残るには、局地戦に勝て。(永谷嘉男)
- ・ 桜に百年の樹少なく、松に千年の緑多し。繁栄の極むるの家は数世を出でず、質朴を守るの家は百世を保つ。(雨森芳洲)
- ・ 人ならば、話し、動き、生活する人を描きたい。その人の性格、場合によっては職業までも充分現 わしたい。(安井曾太郎)
- それが何であれ、あなたの得意なことが幸福に導いてくれる。(ラッセル)
- ・ 不幸な人間は、いつも自分が不幸であるということを自慢しているものです。(ラッセル)
- ・ 教育は楽しむ能力を訓練することにある。文学、絵画、音楽などに見識のある楽しみを見いだせる のが「紳士」のしるしの一つだった。 (ラッセル)
- ・ 自由とは、ただ好きなことをするのではなく、我々が当然すべきことをなす権利を持つことである。(ヨハネ=パウロ2世)
- ・ 未来は今日始まる。明日始まるのではない(ヨハネ=パウロ2世)
- ・ 冗談のうちに真実の言葉が語られることがなかなか多いものだ。(フィヒテ)
- ・ 人は己の最善を尽くすがよい。狭いところに入れられなくても広いところに入れられる。実力のある者は決して世間で捨てて置かぬ。
- 独立と自由ほど、尊いものはない。(ホーチミン)
- ・ もし企業がマーケットシェアを広げ、より高い利益をあげることだけを目的として営まれたならば、 おそらく世界は経済的・環境的・社会的に崩壊するだろう。(賀来龍三郎)
- ・ 情報化社会にあっては独創力こそ人間としての存在理由になる(賀来龍三郎)
- 与えられた仕事の分野では、世界一になるんだという意気込みを持て。(賀来龍三郎)
- ・ 自己教育の真の方法は、すべてのことを疑ってみることである(ジョン・スチュアート・ミル)
- ・ 国を愛し、国民の自由を大切にする人たちは、支配者が国民に対して行使できる権力を制限しよう とつとめてきた。そしてこの制限が、自由という言葉の意味であった(ジョン・スチュアート・ミル)
- ・ 個人の自由にも、制限されなければならない事がある。それは、他の人に迷惑をかけてはならない ということだ(ジョン・スチュアート・ミル)
- ・ 国家の価値は、結局国家を組織する人民の価値である(ジョン・スチュアート・ミル)
- ・ 幸福になる唯一の道は、幸福ではなく何かそれ以外のものを人生の目的に選ぶことである(ジョン・スチュアート・ミル)
- ・ 人生の楽しみではなく、喜びを求めていこう(ジョン・スチュアート・ミル)
- ・ 『自分こそ正しい』という考えが、あらゆる進歩の過程で最も頑強な障害となる。これほどばかげていて根拠のない考えはない(ジョン・スチュアート・ミル)

- ・ 高貴な人物がその高貴さによってつねに幸福であるかは疑問の余地があるかもしれないが、その高貴さが他の人々をより幸福にし、それによって世界は全体としてはかりしれない利益を得ているのである(ジョン・スチュアート・ミル)
- ・ 満足した豚であるより、不満足な人間であるほうがよい。満足した馬鹿であるより、不満足なソクラテスであるほうがよい(ジョン・スチュアート・ミル)
- 私は仕事をなし終えたね(ジョン・スチュアート・ミル)
- ・ ただ一つ内なるこえ たましひに聞くことを お忘れにならなひやう(高村智恵子)
- ・ 優勝できなかったら、帰りの船から飛び込んで死ぬしかない。しかし自分は泳げる。さてどうやって死ぬか。(前畑秀子)
- いま ここ じぶん その合計がじぶんの人生(相田みつを)
- ・ 流れに逆らっちゃいかん。しかし流れに流されてもいかん(弘世現)
- ・ 「全ての不可能を消去して、最後に残ったものが如何に奇妙なことであっても、それが真実となる。」 (コナン・ドイル)
- 「ぼくにとっては、仕事そのものが報酬なんだからね」(コナン・ドイル)
- ・ 知識を与えるよりも感銘を与えよ。感銘せしむるよりも実践せしめよ。(坪内逍遥)
- ・ 子ゆえに迷い、子ゆえに悟る。(坪内逍遥)
- ・ 発明家と一緒に事業をしてはならない。(藤山愛一郎)
- ・ 受験という名のくだらんクイズ、、、、。大学入試は全廃すればいいと本気思っています(中村修二)
- 自然は飛躍して進まない。(カール・フォン・リンネ)
- ・ 母という字を書いてごらんなさい。やさしいように見えてむずかしい字です。恰好のとれない字です。やせすぎたり 太りすぎたり ゆがんだり泣きくづれたり・・・・ 笑ってしまった… (サトウハチロー)
- ・ 信念のない人生は空虚であり、実にみじめなものだ。(結城豊太郎)
- ・ 一路所信を邁進するにある。(結城豊太郎)
- ・ 忘年の交わり(結城豊太郎)
- ・ 謎の骨格に論理の肉付けをして浪漫の衣を着せましょう。(横溝正史)
- ・ 泳ぎ出した方がいいよ。そうでないと石のように沈んでしまう。(ボブ・ディラン)
- ・ 天地の間、各各その職分ありて、閑人なきこと天道なり。(会沢正志斎)
- 恐怖は常に、無知から発生する(エマーソン)
- ・ 私は引用が嫌いだ。君の知っていることだけ話してくれ (エマーソン)
- 現状維持はすなわち脱落である。(米倉功)
- ・ 学問は満足しようとしない。しかし経験は満足しようとする。これが経験の危険である。(谷川徹三)
- この年になると、じっとしているだけで、うれしいことが向こうからやってくる。(加藤楸邨)
- 俺の音楽をジャズと呼ぶな。(マイルス・デイビス)
- ・ 創造し続けようと思う人間には、変化しかあり得ない。人生は変化であり、挑戦だ。(マイルス・デイビス)
- ・ 立派なジャズを演奏するには、実際の生活や経験を通じてはじめて身につく、人生に対する理解と か感情といったものが必要なんだ。(マイルス・デイビス)
- ・ 杉野はいずこ、杉野はいずや。(広瀬武夫)
- ・ なすべきことをなせば、いかなる状況でも優勢になれる。(キッシンジャー)

- ・ 是非に及ばず (織田信長)
- ・ 重い障害とともに歩んできたあなたの生き方は、懸命に生きることの大切さを教えてくれます。私 達はあなたが歩んでこられた道から学んでその道をたどって参りたいと思います(浜井信三)
- ・ 人間の自由は不自由を避けたところに生ずるのではない。不自由の真只中をくぐり抜け、その向う 側に突き抜けた時にはじめて手にすることが出来る。さもなくば、現在享受しているものが本当の 自由であるか否かも確かめられないだろう。(黒井千次)
- ・ どういうふうに自分たちの世界が構成されていて、どういうふうに世界は動いていくのか、その全 体像の把握が教養です。(立花隆)
- ・ 童謡は童心性を基調として、真、善、美の上に立つてゐる芸術であります。童謡の本質は知識の芸術ではありません、童謡が直(すぐ)に児童と握手の出来るのも知識の芸術でないからであります。 童謡が児童の生活に一致し、真、善、美の上に立つて情操陶冶の教育と一致するのも超知識的であるからであります。(野口雨情)
- ・ 他人や組織に受け入れてもらえなければ、実業の世界では理想も信念も実現できない。天に向けた 理想、信念、誠実を裏付けにしながらサラリーマンは大いに自分を人に示す必要がある。(宇野収)
- プレッシャーの下で優雅さを保てるかどうかが、真のリーダーであるかを決める。(ジョン・F・ケネディ)
- ・ 大きな失敗を恐れない者だけが、偉大なことを成し遂げる(ジョン・F・ケネディ)
- 目標と計画が無いなら、努力と勇気がいくらあっても駄目なんだよ (ジョン・F・ケネディ)
- ・ 成功は千人の方々のお陰です。でも、失敗はあなた一人の責任です(ジョン・F・ケネディ)
- 私たちは、今までになかったものを、夢見ることができる人々を必要としている(ジョン・F・ケネディ)
- ・ 国があなたのために何をしてくれるのかを問うのではなく、あなたが国のために何を成すことができるのかを問うて欲しい(ジョン・F・ケネディ)
- ・ 国が諸君のために何ができるかを問い給うな、諸君が国のために何ができるかを問い給え(ジョン・ F・ケネディ)
- ・ アメリカが何をしてくれるかではなく、我々が共に、人類の自由のために何ができるのかを問い給 え(ジョン・F・ケネディ)
- ・ 我々の問題は人間によって作られたものだ。それゆえ、人間によって解決できる(ジョン・F・ケネディ)
- ・ 志を持った人は、土壇場に強い。困難にぶち当たっても倒れない。(鬼塚喜八郎)
- ・ どんなに画期的な良いものでも、人が求めていないものは商品としての価値がないのです。(能村龍 太郎)
- 良いものはきっと受け入れられる。(高野悦子)
- ・ 父(西武創業者: 堤康次郎) から学んだ最大のことは人を大事にするということ。組織に人を合わせるのではなく、上に立つ人の力次第で組織が伸び縮みするようにしています。(堤義明)
- ・ 生まれし時に この道 知らずとも この道を歩み 幾年月ぞ 今日涙して 明日又 笑おうぞ (美空ひばり)
- ・ 釣り師は 心に傷があるから釣りに行く。しかし、彼はそれを知らないでいる。(林房雄)
- ・ 人生に悩みはつきもの、特に人生の転換点で、その後の人生に知恵と勇気を与えてくれる名言は必ずあるものです。(安岡章太郎)

- ・ 俺の知らない奴は入れられない。(渡辺恒雄)
- ・ まず自分自身のあいだから、その最良の見本を提供することが必要である。そして一人でも二人で もそういう見本を提供することによって、集団全体が千年も輝くものとなるのだ。 (ホイットマン)
- ・ あなたの道を他人が歩むことはできない。その道はあなた自身で歩まなければならないものだ (ホイットマン)
- ・ 生きながら針にぬかれし蝶のごと悶えつつなお飛ばんとそする(原阿佐緒)
- ・ 大学の設立こそは少き日に新島襄から享けし夢かも (清水安三)
- ・ 中国語で「勉強(みえんちあん)」という言葉には強制する意味があって、あまり楽しくないニュア ンスを持っている。中国人は「勉強する」とはいわず、「用功(ゆんくん)」という。彼らは「学び て時にこれを習う。また楽しからずや」といった孔子を先哲とする民族であるからだ。米国の学生 は、学期末の試験で答案の最後に「先生の講義を心からエンジョイしました。ありがとうございま した。—I have enjoyed your course very much, Thanks.」と書くのが常である。(清水安三)
- ・ 経営者は従業員の信頼を得られる人物であること。これは従業員を信ずることでもある。つまり相 互信頼の確立。これが欠ければ企業は成り立たない。(大谷米一)
- お金が欲しいんじゃない。ただ、素晴らしい女になりたいの。(マリリン・モンロー)
- ・ 2、3年は赤字を出しても、経験を積めば次第にプラスになるような、底堅く将来性のあるものを 選んでほしいと思う。(安川第五郎)
- ・ 事業に障害が出ても決して強行突破しない。必ず迂回作戦をとる。目標を失わないでいれば、急速 に目標にはいかないが、結局はうまくいく。(安川第五郎)
- ・ 喧嘩をしないで、そこを避けて通る。どうかすると180度くらい逆行して遠回りをする。しかし 結局自分の思うつぼに行ってしまう。(安川第五郎)
- · こんなことで死んでたまるかい。(河野一郎)
- ・ 飯は外で自分より偉そうな奴と食うものだ。(河野一郎)
- ・ 大学を出てからの 10 年、20 年、二十代、三十代をどういうふうにして送るかということが、人間 をつくる上において一番大事なことだと思う。(河野一郎)
- ・ 子どもに考えさせるということをした人が、いちばん教師としてすぐれている。(大村はま)
- ・ 昨日よりも今日というように、気づいたり工夫したり、教師自身に成長の実感がある。ありあわせ、 持ち合わせの力で授業をしない。何事かを加える、何事かを加えられて教室を出る。(大村はま)
- ・ 段落。中心。つながり。自分の発見。自ら生み出したもの。区分け。関連を考える。構成力。関係、順序。、、、(大村はま)
- ・ 何でも見てやろう。(小田実)
- ・ まあ、もうちょっと、行ってみようやないか。ほんとうに未知なものにむかって進むとき、人はそ んなふうに自分に対して言うほかはない(小田実)
- ひとりでもやる。ひとりでもやめる(小田実)
- ・ 利のやっこ位のやっこ多き世に、我は我が身の主なりけり(佐々木信綱)
- ・ 私の財界に対する注文、それは第一に経済道義の高揚ということだ。いまの日本の財界に一番欠けているのはこれだと思う。(石坂泰三)
- ・ 青年はすべからく素直たるべし。壮年はすべからく狸芸ででるべし。老人はすべからく、いよいよ 横着に構えて、憎まれることを覚悟するべし(石坂泰三)
- ・ 中国共産党は明確な目標があり、理想がある。(張学良)

- ・ 「極限におかれたために、眠りかかろうとする意識のさらに下層ではたらいている何物かの声」がでてきた。(泉靖一)
- 胡霜漢月照刀環。百戰沙場久不還。萬馬夜嘶靑海戍。孤鴻秋度玉門關(木下順庵)
- ・ 自分の心がへこたれなければ、へこたれたことには、ならない。(久原房之助)
- ・ 社会の利益を増進しようと思い込んでいる場合よりも、自分自身の利益を追求する方が、はるかに 有効に社会の利益を増進することがしばしばある。(アダム・スミス)
- ・ 利己心の発揮は見えざる手を通じて社会の利益を増大させる。(アダム・スミス)
- ・ 人間は仕事がないと、健康を損なうばかりでなく精神的にも退廃する。(アダム・スミス)
- ・ 健康で、借金がなくて、しっかりした意識があるという幸福以外に、いったい何が必要だというの だ。(アダム・スミス)
- ・ 倫理観が欠如すると資本主義は暴走する。(アダム・スミス)
- ・ 陶工にとっては、その作品だけが墓と思うべし(富本憲吉)
- ・ キリスト教的欧米文化は「罪の文化」であり、日本の文化は「恥の文化」である。(ルース・ベネディクト)
- ・ 人生における厄介なことは、答えがないことではなく、答えが多すぎることである。(ルース・ベネ ディクト)
- われわれはあえて危険をおかしました。ただ武運がなかったのです。(ロバート・スコット)
- 過去という泉は深い。(トーマス・マン)
- 画人生涯筆一管(川端龍子)
- ・ 目前の刺激に動揺することなく、横路へ外れず、自己の信ずる大道を誠実をもって固く踏んでゆけるように、日常的に心の訓練を重ねる努力がなければ、この自信を高めることは出来ないであろう (川端龍子)
- ・ 井戸を掘るように、深く深くと掘り下げて行こうとするもの、一つは泉水のように、そう深くなく とも成るべく広く広く動こうとするものである。自分の場合は浅くとも庭の池のように広く広くと いう方向にあるのではないか(川端龍子)
- ・ 役所では言動に慎み、小説のことを噯気(おくび)にも出さないようにするし、仕事の方も人一倍 熱心に勤めていた。(新田次郎)
- ・ 君が代を おもふ心の 一筋に 我が身ありとも 思はざりけり(梅田雲浜)
- ・ 我々はどこから来たのか? 我々は何者なのか? 我々はどこへ行くのか?(ゴーギャン)
- ・ 仕事の生産性を高めるには、自分の得意とする分野を必ず持ち、そこを通じて情報を入手し、分析 して、発信していかなければいけない。(和田秀樹)
- ・ 音楽について話す時、一番いい話し方は黙っていることだ。(シューマン)
- ・ 一日5人。3万数千人の女がいつのまにかできる(岩田専太郎)
- ・ 挿絵画家には椅子が用意されていない。現役であることが位置であり、第一線から下ると、座る椅子は取り上げられてしまう(岩田専太郎)
- ・ きのうは過ぎ去ってもうない。あすはまだ来ない。今日があるだけ(岩田専太郎)
- ・ 絵はかくもんじゃない。生まれるものだ。どんな子が生まれるか(岩田専太郎)
- ・ 物はとかく時節をまたねば、願ふことも成就せず、短慮は功をなさず。(滝沢馬琴)

- ・ 福は来しがたくして、禍は招き易し(滝沢馬琴)
- 新しい芽を育てる。これが人間のいちばん美しいところ。(山田耕作)
- 山が動いた。(田英夫)
- ・ 誕生日は、最も粗末な食事でいい。 この日こそ、母を最も苦しめた日なのだから。(徳川光圀)
- ・ およそ大凡人たるものは、誠忠が肝要である。ゆえに時変に接しては死を見ること帰するがごとき 確固たる心胆を動かさぬように鍛練が第一である。山岡鉄舟)
- 不屈(瀬長亀次郎)
- ・ 悲愴感があまり出すぎるとたたかいは長つづきしないことを学ばされました。だからたまには冗談もとびだし、ユーモラスなこともいう、いわゆる楽天的にかまえるということであります。しかも 一本のスジは絶対に通していく、このことはつねに注意をはらうことにしています(瀬長亀次郎)
- ・ このセナガひとりが叫んだならば、50メートル先まで聞こえます。ここに集まった人々が声をそろえて叫んだならば全那覇市民まで聞こえます。沖縄の90万人人民が声をそろえて叫んだならば、太平洋の荒波をこえて、ワシントン政府を動かすことができます(瀬長亀次郎)
- ・ 良く生きたと思って死ねたら、最高のハレ(鶴見和子)
- ・ 職場での仕事なんて、はっきり言ってつまらないものが多い。そのつまらない仕事をどうやりこな すか、そのつまらない仕事を通じて自分をどう鍛えてゆくか、自分なりに考え、自分なりの手作り の生きがいを持つことが大事だと思う。(上坂冬子)
- ・ 人は『和をもって尊し』とするが、戦いのプロは『勝利をもって和を造る』(稲尾和久)
- ・ 人間、最後はバカになり切った者が勝つ。(稲尾和久)
- ・ 世の中が悪いと不平を言うのは間違っている。優秀な人間が無視され続けた例は、見たことがない。 成功できないのは、たいてい本人のせいなのだ。(ベン・ジョンソン)
- ・ 多くのことをするのは易しいが一事を永続するのは難しい。(ベン・ジョンソン)
- ・ 逆境に遭遇して苦難に耐えたことのない者は自分自身の本当の力というものを知らない。(ベン・ジョンソン)
- ・ 悪人は自己の欠点を弁解するが、善人は自己の欠点をそっとしておく。(ベン・ジョンソン)
- ・ おしゃべりと雄弁は同じではない。愚者はしゃべりまくるが、賢者は話す。(ベン・ジョンソン)
- 膨らんだ財布は、心を軽やかにする。(ベン・ジョンソン)
- ・ 仲間や同僚をライバルにするな。ライバルはお釈迦様か、キリスト様にしろ。(岡本一平)
- ・ 技術者は実地が基本であらねばならぬ。その手が昼間はいつも油に汚れている技術者こそ、真に日本の工業の再建をなし得る人である。(豊田喜一郎)
- ・ 一旦トヨタから出した車は、何処が悪くても全責任を負わなければなりません。それを他の部分に 罪を着せずに、自家製品の悪いところを言い逃れの出来ぬ様にさせると云う事は、自分自身の製品 に自信をつける最も大事な事であります(豊田喜一郎)
- ・ 今日の失敗は、工夫を続けてさえいれば、必ず明日の成功に結びつく(豊田喜一郎)
- ・ 出版は教育である。(下中弥三郎)
- ・ 教育を受けることは、社会成員の義務でなくて権利である。(下中弥三郎)
- ・ 日本本土の「民主改革」は沖縄を米軍政下に置くことが前提で成立したものであり、その立場から 日本の戦後を問わなければならない。(大田昌秀)
- ・ わたしが一番きれいだったとき わたしの国は戦争で負けた そんな馬鹿なことってあるものか ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし歩いた。(茨木のり子)

- ・ 私達は皆、幸せになることを目的に生きています。私たちの人生は一人ひとり違うけれどされど、 皆同じなのです。(アンネ・フランク)
- ・ 自ら機会を創り出し、機会によって自らを変えよ。(江副浩正)
- ・ 人間は目的に向かって剛直に、まっすぐ進むべきものである。(白瀬矗)
- ・ 酒を飲まない。煙草を喫わない。茶を飲まない。寒中でも火にあたらない(白瀬矗)
- 自分は、人が鍬や鎌で雑草を切り揃えた跡を、何の苦労もなく坦々として行くのは大嫌いだ。蛇が 出ようが、熊が出ようが、前人未到の堺を跋渉したい(白瀬矗)
- ・ とにかくやってみろ。やってみてから文句を言え。やりもしないで本から読んだり、人から聞いて そうなりますと、わかったような事を言うな。(小林大祐)
- ・ 日本はこれまで、最も寛容かつ強力な支援国の一つとして全世界で困窮する人々に援助の手を差し伸べてきました。国連は同じ気持ちから、この極めて困難な時期に日本の人々の力となり、可能な限りあらゆる支援を提供する所存です。(潘基文〈パン=ギムン〉)
- ・ 碁の神様がわかっているのが100だとしたら、私にわかっているのは、せいぜい5か6か、あるいはもっと下です。(藤沢秀行)
- ・ 定石どおりの人生を生きて何がおもしろいのか(藤沢秀行)
- ・ 試合が勝負ではない。毎日の積み重ねが勝負なのだ。(藤沢秀行)
- ・ 努力を怠れば進歩が止まるばかりでなくかならず退歩する。(藤沢秀行)
- ・ 成功の秘訣は、どこのステージで戦うかを慎重に選ぶこと。ただし、戦うステージを決めたら全力 で突き進み、あきらめてはいけない。(ドナルド・トランプ)
- ・ 物の興廃は必ず人に由る。人の昇沈は定めて道に在り(空海)
- 自然万物、鳥獣草木は仏の言葉。浄土は心の中にある(空海)
- ・ 私たちの心の本質こそ仏の心である(空海)
- ・ 仏心は慈と悲なり。大慈は則ち楽を与え、大悲は則ち苦を抜く(空海)
- ・ 投機よりも事業を起こせ(根津嘉一郎(初代))
- ・ 相場などで一時の利益を逐ふよりも事業を経営し事業を盛り立てて、其の利益を享受することにせよ(根津嘉一郎(初代))
- ・ 成功の秘訣は先ずどこに無駄があるか、どこに不正があるか、不生産的な費用は早く削除してしま ふ事である。それが出来たところで、初めて外へ向かって拡張する。(根津嘉一郎(初代))
- ・ 成功は誠意と努力に在り(根津嘉一郎(初代))
- ・ 不平不満は出世の行きづまり(根津嘉一郎(初代))
- ・ 会社再生の秘訣は、どこに不正と不合理があるか、その病原を退治することが一番近道である。(根 津嘉一郎(初代))
- ・ (お前の芸が下手でも)わしはいいぞ。 せやけどな、お金を払って見に来てくれるお客さんに、そんな芸でええんか!(藤山寛美)
- ・ 順番を待っているだけの人間には、永久に順番が来ない(藤山寛美)
- ・ 才能とは、持続すること。(平山郁夫)
- ・ 自分に打ち込めるものがあるうちは、まだまだ青春期(平山郁夫)

- ・ 病人を救うのは医師としての義務である(松本良順)
- ・ 空をあゆむ朗々と月ひとり(荻原井泉水)
- ・ 月 雲がにげてゆく雲が追うてゆく(荻原井泉水)
- ・ 一、おはようという親愛の心 二、はいという素直な心 三、すみませんという反省の心 四、どうぞという謙譲の心 五、私がしますという奉仕の心 六、ありがとうという感謝の心 七、おかげさまでという謙虚な心 八、お疲れさんという労わりの心 九、なにくそという忍耐の心 十、嘘をつくなという正直な心(高見山大五郎)
- ・ 事業の邪魔になる人:自己の職務に精進することが忠義である事を知らぬ人。共同一致の融和心な き人。長上(目上)の教えや他人の忠告を耳にとめぬ人。恩を受けても感謝する心のない人。自分 のためのみ思い、他人の事を考えぬ人。金銭でなければ動かぬ人。艱難(かんなん)に堪えずして 途中で屈伏する人。自分の行いについいて反省しない人。注意を怠り知識を磨かぬ人。熱心足らず 実力なきに威張り外見を飾る人。夫婦睦まじく和合せぬ人。物事の軽重緩急の区別の出来ぬ人。何 事を行うにも工夫をせぬ人。国家社会の犠牲となる心掛のない人。仕事を明日に延ばす人。(島津 源蔵(2代目))
- ・ 家庭を滅す人:自分の一家と国家とのつながりを知らぬ人。両親及び兄姉を敬わず夫婦和合せぬ人。 身分相応を忘れる人。毎日不平を言うて暮す人。相互扶助を知らぬ人。嘘を言ひ我儘を平気でする 人。不用の物を買ひたがり無駄事に多くの時間をつぶす人。夜更ふかし朝寝をし実力を養成しない 人。失敗したときに勇気を失ふ人。非礼なことを平気でする人。今日積む徳が明日の出世の因とな ることを知らぬ人。先輩を軽んじ後輩に親切に尽くさぬ人。他人の悪口を言ひ争ひを好む人。秩序 を守らぬ人。今日一日の無事を感謝せぬ人。(島津源蔵(2代目))
- ・ 第一に知恵である。第二に涙である。第三に勇気である。(藤原銀次郎)
- ・ いやしくもこれをもって身を立ててゆこうというならば、ほんとうに自分で一生懸命になって自分 の仕事を覚えてゆくというのでなければならない。
- ・ 事業は人なりとは、昔から変わらぬ私の信念である。80 余年の永い私の過去を振り返ってみて、事業が興るのも衰えるのも、結局人次第であると信じる念はいよいよ強くなってきている。(藤原銀次郎)
- ・ 読書とは、つまるところ、邂逅、出会いの問題に帰するだろう。(臼井吉見)
- ・ 教育の中軸は自己教育だと思いますが、その自己教育の中核は、自分と異質の人間との対話です(臼 井吉見)
- ・ 体を動かし、頭で考え、心に感ずる(臼井吉見)
- ・ 精神の成長の時期に作られる友達が生涯の友達です。たがいに精神の成長の秘密を知っている同志 が友人です。(臼井吉見)
- ・ 肝心の発電は、他人任せにして、電線だけ引っ張って、自分の精神の火をともそうとしたって、だめなんです。か細くても、消えそうでも、精神の世界では、自家発電でなくては、ごまかすわけには行かない。(臼井吉見)
- ・ 苦痛の減少のためにみずから創造的苦痛を負う覚悟の人間の出現と存在が不可欠である。(市井三郎)
- ・ ダーウィンの進化論は進化と進歩を混同している。マルクスの科学的な弁証法的唯物論は現実に裏切られた。パラドックスを超える視点が必要--自由を突き詰めれば平等ではなくなる。多数決は少数の独裁を生む。寛容は非寛容者を生む。主権者が委任すれば奴隷になる。正義を突き詰めれば戦争が起こる。(市井三郎)

- ・ 人類の歴史の「進歩」をはかる価値基準は何か。それは「幸福」な状態への移行だ。(市井三郎)
- ・ 人種・民族・階層。奴隷制。素性・毛並。こういった不条理は歴史的に少しづつ減ってきた。この 理念の実現のためには、苦痛の減少のためにみずから創造的苦痛を負う覚悟の人間の出現と存在が 不可欠である。(市井三郎)
- ・ ただ今現在、不条理な苦痛をより多く負うているのはどちらの側かという視点が必要となる。(市井 三郎)
- ・ この理念は対立を内蔵していないから、普遍的な理念となりうる。(市井三郎)
- ・ 「インフレ期待の高まりこそが消費を減らすだろう。、、、、欲しいのは家や車や食品ではなく、「老後の安心」という無形のもの(藻谷浩介)
- ・ 人生における最大の失敗は、失敗を恐れ続けることである。(教育家 エルバート・ハバード)
- ・ 継続は力なり。継続は勢力なり。(久留島武彦)
- ・ 自分がどんなにダメか、どれだけチームに迷惑をかけているか、誰も自分には教えてくれない。だ から自分で決めるしかない。(ルー・ゲーリッグ)
- ・ きょう一日を、よろこび、努め、人には優しくして暮したい。(太宰治)
- ・ 私はなんにも知りません。しかし、伸びて行く方向に陽が当たるようです。(太宰治)
- ・ ウィスキーの仕事は私にとっては恋人のようなものである。恋している相手のためなら、どんな苦 労でも苦労とは感じない。(竹鶴政孝)
- ・ 私はウィスキー一筋で生きてきた。その意味では、一行で片付く(説明できる)男である。(竹鶴政孝)
- ・ 人間、腹が立つこと、これじゃいけんと思うこと、いっぱいあるでしょう。日々、それと闘うこと で、死ぬまで生きていける。腹が立たなくなったら人間おしまい。…(丸木位里)
- ・ 親もなし妻なし子なし板木なし 金もなければ死にたくもなし(林子平)
- ・ 人間が死ぬのはいつも早すぎるか遅すぎるかのどちらかである。しかし、一生はちゃんとケリがついてそこにある。(サルトル)
- ・ 人間が幸せか不幸せかは、人生に起きる出来事をその人がどうとらえるかであり、起きた出来事自 体はそれほど関係はない(フンボルト)
- ・ 大きな仕事をなしとげるためには、愉悦(ゆえつ)よりも労苦と心配のほうがはるかに強く長い。 そして、そのあいまに訪れる、つかのまの喜びこそ、何ものにもかえがたい生きがいを人に与えて くれる(堀越二郎)
- ・ 『零戦』を通じて我が国の過去を顧みるとき、自らの有する武器が優秀なればなるほど、それを統御するより高い道義心と科学精神を必要とすることを教えているように思われる。(堀越二郎)
- ・ 模倣と小細工のみでは「零戦」は生まれなかったであろう。独自の考え方と哲学、そして「日本人 の血の通った飛行機を作るのだ」という意思がそれを可能としたのである。(堀越二郎)
- ・ 私の武器は、納得がゆくまで自分の頭で考えることだった。裏づけのない議論のための議論はきらいで、実物と実績で見てもらいたいという主義だった。、、これこそが、技術に生きる者のよろどころであることを身にしみて感得した。(堀越二郎)
- ・ 将来の可能性がなくなったと思うのは自分の思い込み。できないと思っているその先に実は無限に 可能性って広がっていてそれに気づけるか。(山本周五郎)
- ・ 人間がこれだけはと思いきったことに十年しがみついていると、大体ものになるものだ。(山本周五郎)

- ・ 売物になるにも、土蔵付売屋となるはよいではないか。(小栗上野介)
- ・ 何か天下のことをしたい(成瀬仁蔵)
- ・ 何か、国家的の事をしなくてはならぬ(成瀬仁蔵)
- ・ 吾が天職、教員にあらず、牧師にあらず、社会改良者なり、女子教導者なり、父母の相談相手也、 創業者なり。、、(成瀬仁蔵)
- ・ 我目的は吾天職を終わるにあり。吾天職は婦人を高め徳に進ませ力と知識練達を予へアイデアルホームを造らせ人情を敦し、、、、理想的社会を造るにあり(成瀬仁蔵)
- ・ 醒めよ、吾が冷き理性、醒めよ、吾が、強き意力、常に爾(なんじ)を欺(あざむ)きて、眠らせんとする、卑屈なる吾を鞭打て、吾は弱し、されど、吾は、吾自ら進まざる可らず。醒めよ!常に 醒めよ!(岸田劉生)
- ・ いまの人は、みんな、「何かしなければ」と思いすぎる。(河合隼雄)
- ・ 『せっかく生まれてきたこの世で、自分の人生をどのような物語に仕上げていこうか』という生き 方の方が幸せなんです。(河合隼雄)
- ・ 司馬さんの小説はガジュマルみたいだ。(妹尾河童)
- ・ 私はガンを患っています。ガンに侵されると、本来使うべき栄養やエネルギーがガンと闘うために そこに取られてしまう。本来人間が生きていくためのそれに向かなくなる。この国は、一言で言え ばガンに罹(かか)っているのです。(筑紫哲也)
- ・ 上一人の気持ちは、下万人に通ずる。(加藤清正)
- ・ 普段から武士道の心がけを練っていなかったならば、いざという場合に潔く死ぬことはできにくい ものだ。(加藤清正)
- ・ 汝等はひとしく予が股肱腹心なり。使うところはその器に従うのみ(加藤清正)
- ・ 人は一代、名は末代。天晴武士の心かな(加藤清正)
- ・ 碁が自分の生命と思っているからやれるので、とても頼まれてやれることではない。(本因坊秀哉)
- ・ 東風吹かばにほひおこせよ梅の花 主なしとて春なわすれそ(菅原道真)
- ・ 芸術におけるすべての回答は、偉大なる自然の中にすべて出ています。ただ私たちは、その偉大な 教科書を、紐解いていくだけなのです。(ガウディ)
- ・ どんな子供でも家のなかでは世界一の有名人なんです。家の中で無名の子供なんていない。(鶴見俊輔)
- ・ もし人が生涯にたった一つでいい本当に良かれと思う選択をしてくれたならこの社会はきっと変わるはずだ。(字井純)
- 51%の確率で入ると判断したボールはすべてスマッシュをしていく。(荻村伊智郎)
- ・ 皿洗いのバイトをしたときに、バイトだから適当にやればいいやという人は、絶対に適当なレベル までしかいきません。バイトの皿洗いでも世界一になろうという人は、ビジネスの世界でもそうそ うのところへいくということです。(荻村伊智郎)
- ・ ゲームが終わったならば、おたがいに自分のベストを尽くしたのですから、まずは相手にあいさつ しましょう。それは礼でもいいし握手でもいいのです。それから自分のベンチを見るとか、いっし ょに喜ぶとか、タオルを取りに行くとかいう人のほうが好きです。(荻村伊智郎)
- ・ 西郷、もう大抵にせんか(木戸孝允)
- ・ 社会意識や政治意識が目に立たなくとも、地味で手堅い『自然観照と身辺詠』の中にも、時代の影はおのづから映るのである(柴生田稔)

- ・ 98歳でも恋はするのよ。夢だってみるの。雲にだって乗りたいわ。(柴田 トヨ)
- ・ あなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません。(小泉八雲)
- ・ 外国人の旅行者にとっては、古いものだけが新しいのであって、それだけがその人の心を、ひきつけるのである。(小泉八雲)
- ・ 後日に思いを残す未練が生じないように、その時点において思い浮かべるすべてを書き尽くすつも りで集約の気分に発してとりかかる姿勢を常に私は基本方針としていた。(谷沢栄一)
- ・ ローマは一日にして成らず。、、、、用意なくして行為なし。人のする仕事は準備と用意の結果である。 (谷沢栄一)
- ・ 何が好きかわからぬうちは、一個の生物であっても一人立ちの人間ではない。好きこそものの上手 なれ。これ以上に人の生きる道を指し示すのに有効な名句はない。(谷沢栄一)
- ・ アーティストはみんな自分で自分が驚く絵を描きたいもんだよ。(横尾忠則)
- ・ 「何々になろう」とする者は多いが、「何々をしよう」とする者は少ない。(長岡半太郎)
- ・ ようです、とは何だ。そのような曖昧さは、研究者として断じてあってはならん。(長岡半太郎)
- ・ 研究は人材なり(長岡半太郎)
- ・ 自分の力以上に自分を見せてはならない。(梁瀬次郎)
- ・ その人の幸せ、不幸せを決めるのは、「でも」か「では」だ。40 歳になって「今からでもできる」 と思うか、「今からでは無理」と諦めるかは、その人の10年後に大きな影響を及ぼす。(梁瀬次郎)
- ・ 心だけが、正しくものを見るkとができるのさ。本当に大切なものは目に見えないんだよ。(サンテグジュベリ)
- いくらデザインがよくても、その良さをわかってくれるクライアントがいなくては作れない。(柳宗理)
- ・ 才能には限界がある。でも、頭脳に限界はない。(野村克也)
- ・ 当時は一般の人々は時計を持たなかったし、また時間の厳守ということもなかったのである。二時に招かれたとしても、一時に行くこともあり、三時になることもあり、もっとおそく出かける場合もよくある。(アーネスト・サトウ)
- ・ 当時の私たちは一語も英語を知らぬその国の人間を相手にして勉強したのだ。文章の意味を知る方法は、小説家のポーの『黄金虫』の中の暗号文の判読について述べているのと、ほとんど同様のものであった(アーネスト・サトウ)
- ・ 我等迄 流れをくむや 苔清水(酒井抱一)
- ・ 予期しない事実に当面したとき、これを処理できる能力を沈着という。沈着の度合いは、心が平静 に戻るまでの時間によって測る。(クラウゼビッツ)
- ・ 戦争は第一に憎悪と悪意を伴った原始的な強力行為であり、第二に確からしさと偶然が糾う博戯、 第三に政治の道具である。(クラウゼビッツ)
- ・ 健康を維持していくには、毎日同じように食べていてはよくない。一週間のうち一日だけ好きなも のを腹いっぱい食べ、あとの六日は腹八分目にしておくのが体によい。(坂田三吉)
- ・ 無差別に親切なことをして下さい。(ダイアナ妃)
- ・ よき人生は、よき人生計画に始まる。(本多静六)
- ・ 逃げてはいけない。文句を言ってはいけない。恐れてもいけない。それを愛しなさい。苦難の本質を味わいなさい。全力で取り組みなさい。嫌がってはいけません。苦しいのは逃げているからです。 (ヘルマン・ヘッセ)

- ・ 孟子は「敵国のなき国は滅ぶ」と言った。今後、カルピスの類似品は続々できるであろう。私はカルピスのためにそれを望む。(三島海雲)
- ・ 幸福は決して怠惰の中にはない。安逸の中に幸福はない。それはただ平穏があり、『仕合せ』がある のであって、『幸福』という輝かしいものではない。平穏はやがて、平穏であるからつまらない時が 来るし、仕合せは仕合せであるのがつまらない。という時が来る。幸福というものはそういうもの ではない。幸福は常に努力する生活の中にのみある。(石川達三)
- ・ 仕事を楽しんでやれる境地になって初めて仕事師といえる。(真藤恒)
- ・ 間はだれでも人生における大きな転機がある。私の場合には、戦争でした。それと仕事を通じて知り合えた多くの人たち、なかでも土光敏夫さんとの巡り合いは私の人生を大きく変えました。戦争と土光さんとの出会いがなかったら、私の人生はいまとまったく異なるものだったでしょう。(真藤恒)
- ・ 仕事が楽しみならば人生は楽園である。仕事でも勉強でも怠け者で大成した人間はいない。成功者 はみんな働き者である。(竹内均)
- ・ 私は他人を羨んだり、妬んだりしたことはありません。自分はいつもなんて幸せなんだろう。映画 に出れば主役で、みんなに大事にされる。映画が傾けば今度はテレビ、その次は舞台。本当に幸福 な人生だと思います。(浅丘ルリ子)
- ・ 雪は天から送られた手紙である。(中谷宇吉郎)
- ・ 一見迂遠な様に見えても、実際は案外早道であるというのが、本当の基礎研究であります。(中谷宇 吉郎)
- ・ すべての事物を、ものと見て、そのものの本体、およびその間にある関係をさぐるのが、科学である(中谷宇吉郎)
- ・ 常に先制の妙を発揮せよ。(大屋晋三)
- ・ 自分のやったことは、自分で責任をとる。まして自分の犯した過ちや、自分のつくった業に対して は、それに対する償いや責めは自分で果たさなければならぬ。(大屋晋三)
- ・ ああ玉杯に花うけて(佐藤紅緑)
- ・ 美と健康の事業を通じて、豊かで平和な社会の繁栄と文化の向上の寄与する(鈴木常司)
- ・ 人の世に涙の川があり苦労の山もある。その川を渡るとき、その山を越えるとき、歌という友がいる。(遠藤実)
- 1年に1度は、これまであなたが行ったことのない場所に、行くようにしなさい。(ダライ・ラマ 14世)
- ・ 政治なる者は術(アート)なり、学(サイエンス)にあらず。(陸奥宗光)
- ・ 予は常に諸子の先頭にあり(栗林忠道)
- ・ 特撮っていうのは、貧乏の中から生まれたんだ(円谷英二)
- ・ 天から降ってくるのを待つのではなく、 自分の力で作り上げることを喜び幸せとしなさい(円谷英二)
- ・ 他人から「できますか?」と聞かれたらとりあえず「できます」と答えちゃうんだよ、その後で頭が痛くなるくらい考え抜けば大抵のことはできてしまうものなんだ(円谷英二)
- ・ まず『出来る』って言う。方法はそれから!(円谷英二)
- ・ 人間はみな荒野の旅人です。このありかたを孤独といいます。孤独というのは淋しいことではない。 判断に不安がつきまとうこと。その不安に耐えることです。(池澤夏樹)

- ・ よし、金銭の奴隷になるのはもうやめた。ひとつ、金銭を奴隷にしてやろう(ジョン・ロックフェラー)
- ・ 十セントを大切にしない心が、君をボーイのままにしているんだよ(ジョン・ロックフェラー)
- ・ 何百万もの富を築いたが、私はそれで幸せを得ることはなかった(ジョン・ロックフェラー)
- ・ 世界で最も貧しい人は金以外の何も持っていない人である(ジョン・ロックフェラー)
- ・ 成功の秘訣は、あたりまえのことを、特別上手にすることだ(ジョン・ロックフェラー)
- ・ 事業の成功には、奇跡はない。永遠の成功は自分を信ずることだ(ジョン・ロックフェラー)
- ・ もし、あなたが成功したいのなら、踏みならされ受け入れられた成功の道を行くのではなく、新た な道を切り開きなさい(ジョン・ロックフェラー)
- ・ いかなる種類の成功にとっても粘り強さほど大切なものはない。粘り強ささえあれば、ほぼなんでも乗り越えることができる。ジョン・ロックフェラー)
- 命どう宝(尚泰王)
- ・ 時が過ぎ去って行くのでは無く、私達が過ぎ去っていくのである。(東山魁夷)
- ・ 経営者には六段階の時期がある。社長個人でお金を儲けようとする時期。会社として利益を生み、 蓄積を考える時期。 売上高や社員を含めて、会社全体を大きくしたいと願う時期。人や組織作りに 一生懸命になる時期。業界や、世の為、人の為に尽くす時期。 死んだとき悪口をいわれないように 努める時期。(神谷正太郎)
- ・ 私は需要とは創造すべきもの、つくり出すべきものだと信じています(神谷正太郎)
- ・ どの種の困難であれ、これを乗り越えていく最大の武器が『誠意』である(神谷正太郎)
- ・ 私は自信をもってこの車(初代カローラ)はご披露する。、、、、将来、この車を世界のファミリーカーに育て上げるつもりである(神谷正太郎)
- ・ 一にユーザー、二にディーラー、三にメーカーの利益を考えよ(神谷正太郎)
- ・ 自決せし手榴弾痕(あと) 夥(おびただ)し地下壕照らす裸電球(山中貞則)
- ・ 人間、練習すれば間違える。計画すると失敗する。覚えていると忘れる。生きていると、死んじゃ う。 (細野晴臣)
- ・ 愛は私の一切である(賀川豊彦)
- ・ 考現学は、時間的には考古学と対立し、空間的には民族学と対立するものであって、もっぱら現代 の文化人の生活を対象として研究せんとするものである(今和次郎)
- ・ 晩年の父母あかつきの山ざくら(飯田龍太)
- ・ 頭に毛があろうと無かろうと肝心なのは頭の中身なんだ(ユル・ブリンナー)
- · We won.(西竹一)
- ・ われは丹精によって男子たらん(青木繁)
- ・ 朝、会社の玄関に入るときに、下腹にエイッと力を入れて、ここからが修羅場だぞと自分に言い聞かせた。(諸橋晋六)
- ・ 好奇心と行動力がなければ話にならない。 (諸橋晋六)
- ・ トップがしなければならないことの第一は、組織全体のコンセプトを明確にし、その組織の目的を 誤りなく伝えることだ。(堺屋太一)
- ・ 医者がこの世で生活しているのは、人のためであって自分のためではない。決して有名になろうと 思うな。また利益を追おうとするな。ただただ自分をすてよ。そして人を救うことだけを考えよ。(緒 方洪庵)

- ・ 返す返すも六かしき字を弄ぶ勿れ(緒方洪庵)
- ・ いつだって努力の何分の一しか答えはえられないのです。やっぱり凡人であるわたしたちにできる ことは、努力すること。(河西昌枝)
- ・ 底上げよりもトップクラスを引き上げる、出るくいを伸ばしていく方が全体を引っ張る力になる。 (根岸英一)
- ・ すでに君が身につけている技術を充分発揮するように努力しなさい。そうしているうちに他のわからないこともわかってくるよ。(レンブラント)
- ・ 道に迷うことを苦にしてはならない。どの路(みち)でも足の向く方へゆけば、必ずそこに見るべく、 聞くべく、感ずべき獲物がある。(国木田独歩)
- ・ 人はどんな場合に居ても常に楽しい心を持ってその仕事をすることが出来れば、即ちその人は真の幸福な人といい得る。(国木田独歩)
- ・ 私の悪口はすぐに報告しなさい。しかし、言った人の名は言わないでください。(永野重雄)
- 生涯一人一研究(松尾孝)
- 10年間の準備 5分間の運命。(アムンゼン)
- ・ 私が死んだら日本の国旗に包んでちょうだい(クーデンホーフ・カレルギー光子)
- ・ これが政治家というものなんだ。あなた達とは違うんです。(福田康夫)
- ・ 己が専門の蘊奥 (うんのう) を極め、合せて他の凡てのことに対して一応の知識を有して居らんで、 即ち修養が広くなければ完全な士と云う可からず。(山川健次郎)
- ・ 日米戦争などまったくばかげておる。そういうことをいう者は浅薄で思慮のない者どもである。日 米双方にとってまったく益のないことであり、両国の識者が話し合うべきだ(山川健次郎)
- ・ 経営者は人間として部下と対峙できるか。その時、自分を支えるのは公私のけじめをはっきりさせた身辺の清潔さである。(江戸英雄)
- ・ 経営者としての肩書きを取り去ったあとの人間の中身を、部下の社員の目にさらしたとき、恥ない だけの自信があるかどうか。(江戸英雄)
- ・ 人脈が広いなどと言われますが、もともと人と人の触れ合いを大切にすることを人生の一つの指針 としてきましたし、人の相談にはできるだけのことをするよう心がけてきました。それでいつしか 人脈が広がったんでしょう。日常の人の世話が仕事に生きてくる。(江戸英雄)
- ・ 世のため、人のために尽くし明るい笑顔で人生を頑張ったのちには、それに見合った素晴らしい世界があります(丹波哲郎)
- ・ 面白がってやっているヤツと、苦労してやっているヤツと、どっちが勝つかな。やっぱりさ、面白 がってやっているヤツにはかなわないんだよ。(青島幸男)
- ・ 兎も角も隠れすむべく野菊かな(川上貞奴)
- ・ 歴史はもう回った・・殺されても、もういい(木戸幸一)
- ・ もしもあなたが敵と平和を築きたいなら、敵とともに働かなくてはならない。そうすれば敵はあな たのパートナーとなる。(ネルソン・マンデラ)
- ・ 私たちの生き方のなかでもっとも偉大な栄光とは、決して倒れないということではなく、倒れていくときにいつも起き上がるということの中にある(ネルソン・マンデラ)
- 外見は大切。笑顔を忘れぬよう。(ネルソン・マンデラ)
- ・ 楽観的であるということは、顔を常に太陽へ向け、足を常に前へ踏み出すことである。(ネルソン・マンデラ)

- ・ 教育は最強の武器です。教育によって世界を変えることが出来ます。(ネルソン・マンデラ)
- ・ 厳しい状況にあるからこそ、社内が団結し、新社長の色が出せる。花道(はなみち)論などナンセンス。(山下俊彦)
- ・ 人口の量と質が決まれば、それを使ってどのような経済を営めるかを考えることができる。重要な のは経済学ではなく、教育学である。(森嶋通夫)
- ・ 戦後教育は価値判断を避けて知識を詰め込んだ。結果として価値判断を行う能力を失い、意志決定力も弱くなった。2050年の土台である人間は劣化しているだろうから日本は頂点から崩れていく可能性が高い。(森嶋通夫)
- ・ 東北アジア共同体の提言。これができないと日本は没落する。政治的イノベーション。日本、中国、 朝鮮半島、台湾、琉球。中国を 6 ブロック、朝鮮半島と日本はそれぞれ 2 ブロックづつ、首都は独 立した琉球 (沖縄)。(森嶋通夫)
- ・ 和魂洋才の和魂の中心は神国思想。神国思想の占めていた場所は真空状態。不吉な方向に発展する 可能性は残る。日本精神を充てんした西欧並みの強国は大きな脅威となる。(森嶋通夫)
- ・ 優れたライターほど、データを捨てる技術に長けている。(草柳大蔵)
- ・ 「さよなら」は大切な言葉だ。しっかりと、美しく言おう。別れの一瞬、相手の目をちゃんと見て、「さようなら」と言って、それから会釈をしよう。(草柳大蔵)
- ・ 目に見える物をそのまま描くのもいい。が、記憶の中でしか見えない物を描く方がさらに良い。そこには、我々の想像と記憶の共同制作で、変化が生じている。(エドガー・ドガ)
- 不屈生(野依秀市)
- ・ 大家といわれる人たちは、年取るほど作品が若くなってくる。ゲーテ然り、トルストイ然り。(加藤 唐九郎)
- ・ お客様に自分が引き出され舞台に生かされる。お客様の力に自然に神の姿を見るのです。お客様は 神様のつもりでやらなければ芸ではない。(三波春夫)
- ・ いやー、映画って本当にいいもんですね~(水野晴郎)
- ・ なせば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり。(上杉鷹山)
- 演じるとは演じないこと(緒形拳)
- ・ 死ぬまで吸血鬼のように、色んなものを取り込んでいく。ものを食い、人と話し、多く…(緒形拳)
- ・ あくせくするな、ロングランで行け!、、、人生行路を走るには長距離選手でなければならぬ。その ためには、まず体を大事にしろ。長生きした者が最後の勝利を得る。(白石元治郎)
- ・ あちこち旅をしてまわっても、自分から逃げることはできない。(ヘミングウェイ)
- ・制度は人間のためにあるものであって、人間が制度の犠牲になってはいけない。(宇沢弘文)
- ・ この業界はお祭りだよ、ワッショイワッショイやろう(浜口庫之助)
- ・ 流行歌は作るものではなく生まれてくるもの(浜口庫之助)
- ・ 今の世の中は過剰防衛。そんなふうにせず、もっと楽しく生きたらいいんじゃないかと思います。 そんなにお金を持たなくても幸せになれるのに、そんなに武器を持たなくても強くなれるのに、な んでそんなにお金を儲けて、なんでそんなに武器を装着して、そんなに必死になって何を守りたい んですか?(浜野安宏)
- ・ キュウリを植えればキュウリと別のものが収穫できると思うな。人は自分の植えたものを収穫する のである。(二宮尊徳)

- ・ 貧となり富となる。偶然にあらず、富も因て来る処あり、貧も因て来る処あり。人皆貨財は富者の 処に集まると思へども然らず。節約なる処と勉強する所に集まるなり。(二宮尊徳)
- ・ 努力は人生の最大最善なる尊いものである。(幸田露伴)
- ・ 福を惜しむ人はけだし福を保つを得ん、能く福を分かつ人はけだし福を致すを得ん、福を植うる人 に至っては即ち福を造るのである。植福成る哉、植福なる哉 (幸田露伴)
- ・ 百論をひとつに止めるの器量なき者は謹みおそれて匠長の座をされ(西岡常一)
- ・ 棟梁は木の癖を見抜いて、それを適材適所に使う、ということやね。(西岡常一)
- ・ 功利的なことを考えずに、時間をかけてもええから、本当の仕事をやってもらいたい。ごまかしや なしに、ほんまの仕事をやってもらいたい。(西岡常一)
- ・ 職人の中から芸術が生まれて、芸術家といわれる人の中からは、芸術は生まれてきません。(西岡常一)
- ・ 自分からしてみせな。それがいちばんですな。なんぼじょうずに文句言うてもあきませんわ。やっぱりまず私自身鉢巻きをしめて、汗を流して、その人の前でこういうふうにやってくれと、実際してみせんとな。(西岡常一)
- ・ 「木を組むには人の心を組め」というのが、まず棟梁の役割ですな。(西岡常一)
- ・ 金は女と一緒で、追いかけると逃げる(坪内寿夫)
- ・ 忙しくて時間がない」と言う人がいる。けれども、時間は「ある」とか「ない」とかの問題ではない。 時間は自分で「作るか」「作らないか」の工夫一つである。(南博)
- ・ 日本史を見ると、外来文化の輸入、模倣と洗練を通じた外来文化の「土着化」、輸入した創造的衝撃 を消費することによって生じる不可避の動乱、そして新しい刺激を求めて外部世界に対し最開港し ていく、というサイクルが到来しています。(磯崎新)
- ・ どんな女でも、本気になって口説くことを決心した男にはなびかずにはいられないように、人生というものも、それを元気よく口説く人間には、その最上のものを提供せざるを得ないものだ。(アレクサンドル・デュマ)
- ・ 恋というのは一つの芝居なんだから、筋を考えなきゃだめだよ。(谷崎潤一郎)
- ・ 筋の面白さは、言ひ換えれば物の組み立て方、構造の面白さ、建築的の美しさである(谷崎潤一郎)
- ・ 「小さな成功よりもあなたの孕んでいる未完成の方がはるかに大きなものがあることを忘れてはならないと思う。(石坂洋次郎)
- ・ 照顧却下 地味に着実 に進むことだ。(石坂洋次郎)
- ・ 賢い平凡人たれ (石坂洋次郎)
- ・ どちらにも片寄らない中道。人間は中道を歩むことが大へん大切なことです。(石坂洋次郎)
- ・ ピアニストはバレリーナや体操選手と同じ筋肉労働者でもあるんです(中村紘子)
- ピアノはハングリーじゃないとダメなんです。ボクシングと同じです(中村紘子)
- ・ ピアニストの肉体的な故障というのは野球のピッチャーと同じところを痛めるんです。腕のつなぎ目ですね。そういうのをしょっちゅう手入れをして、手入れするだけでは物足りなくなって、筋力トレーニングを始めてもう5年ぐらいになります(中村紘子)
- ・ 一日休むと一日衰えてしまう。筋肉だけではありません。耳も感受性も一緒に退化するんです(中村 紘子)
- やはり日々の努力が必要。自分の血肉になるまで弾き抜くことが大切なんですよね(中村紘子)

- ・ こう半分しか残っていないと嘆くのが悲観主義者、まだ半分残っていると喜ぶのが楽観主義者である (バーナード・ショー)
- ・ 自由は責任を意味する。だからこそ、たいていの人間は自由を恐れる (バーナード・ショー)
- 青春は若い奴らにはもったいない (バーナード・ショー)
- ・ 工夫しても、工夫しても、なお、工夫がつかず、年月が過ぎました。(橋本雅邦)
- ・ たった一人しかいない自分をたった一度しかない一生をほんとうに生かさなかったら人間生まれて きたかいがないじゃないか(山本有三)
- ・ アメリカへ行って知った監督・コーチの条件。ウェットな看護婦になれということ。選手の悩みや 怪我故障にぶつかったときに看護婦の気持ちでやってやれということ。聞く耳を持った親父になれ ということ。頭から駄目だと言わず、聴くだけのことは聞いてやってそのあとで助言するというこ と。心理学者になれということ。常に部下はどういうことを考えているのか、スランプの者や調子 に乗ってホイホイしているものがいるだろうから。交通巡査になれ。やはり競技する以上、赤信号 の時は行ってはいかん。家庭教師になれ。これは小学生の家庭教師のように基礎をわかりやすく納 得するまで反復して教えるということ。こういうことを常に考えて部下を指導している者をアメリ カではいい監督、いいコーチと呼ぶのだと言われました。(鶴岡一人)
- ・ 特技とは個性と実力の証明だ!世界中に通用する身分証明書だよ。(大山倍達)
- ・ 文部省の方はやったつもりでいるがいいし、夏目(漱石)の方は貰わないつもりでいるがいい。それより他仕方あるまい。(狩野亨吉)
- ・ わしの眼は十年先が見える。(大原孫三郎)
- ・ 仕事は三割の賛成者があれば 着手すべきだ。五割も賛成者があればもう手遅れだよ。(大原孫三郎)
- ・ 私は青い鳥を探したが、やはり手近にあった。すなわち我々国民が国情と歴史とにより創造する新しい『社会民主主義』である。(片山哲)
- ・ 人の真価は、事の成否以上に、事そのものに全力投球したという充実感にあるのだろう。(長洲一二)
- ・ ヒト・モノ・カネと言われていますが、経営の原点はやはり人ですね。カネ・モノは無機質ですが、 人間は有機物なんですね。経営は人間ですべてが決まります。(河合滋)
- ・ 願くは 御國の末の 栄え行き 我が名さけすむ 人の多きを(重光葵)
- ・ 議員二十五年 政権もとれずに 恥かし平岩。(江田三郎)
- ・ 企業のあり方の中で、官僚主義ほど発展を毒するものはない。(大原総一郎)
- ・ 熱いフライパンの上で猫踊りさせとけ(橋本龍太郎)
- ・ 人々の心に勇気を与える言葉、喜びを与える言葉、何ともいえず、人生を朗らかに感じるような言葉を、お互いに話し合うようにしよう。(中村天風)
- ・ いかなることがあっても、また、いかなることに対しても、かりにも消極的な否定的な言動を夢に も口にするまい、また行うまい。そしていつも積極的で肯定的の態度を崩さぬよう努力しよう。(中 村天風)
- ・ 俺は体が弱いと思ってりゃ体が弱くなる。俺は長生きできないと思っていりゃ長生きできない。俺 は一生不運だと思っていりゃ不運になる。つまりあなた方が考えているとおりにあなた方にあなた 方がしているんです。(中村天風)
- ・ 人生も国家の命運も、最終的には個人の根底に流れる精神力による決断力と行動力に委ねられる。 (中村天風)
- ・ 陽気の発する処、金石また透る(中村天風)

- 「肛門を締める」につれて両肩の力を抜き、静かに息を吐く動作から始まる。(中村天風)
- ・ ザックリと人生を捉えよ(中村天風)
- ・ 一芸とは一つの芸事のみを指すのではなく、それに打ち込むことで、「心の修行」に励み、悟りの境 地に到達するという意味なのだ。(中村天風)
- ・ 我ゆくもまたこの土地にかへり来ん国に報ゆることの足らねば(東條英機)
- ・ ほんとうにもののわかった人間は、俺は正しいのだぞというような顔をしてはいないものである。 (新美南吉)
- ・ 一度死んだ者は、二度生きねばならない。(立原道造)
- ・ お祝いなぞしてはならん。これを機会に共同研究をやるならよろしい。(柳田国男)
- ・ 還暦祝賀会は呑気な江戸の町人隠居のやること(柳田国男)
- ・ いつだって時代は過渡期だし、キャンパスは真っ白なんだよ(小谷正一)
- ・ 自由は、責任ある個人だけが主張できる。(ミルトン・フリードマン)
- ・ 何でもよいから自分のやりかかったことを小でも大でも、し遂げてしまう。小さいことをいくつも 成功していく間に漸々(漸々、ぜんぜん=徐々に)と大きなことにも成功するようになる。(団琢磨)
- ・ もし自分の身の上に万一のことがあったら、必ず台湾に葬るよう。(明石元二郎)
- ・ 永く生きて来て気のつくことは此の生き抜く意外に何もないことなのだ。(室生犀星)
- ・ ふるさとは遠きにありて思ふもの そして悲しくうたふもの 帰るところにあるまじや (室生犀星)
- ・ 基礎ができていないと芝居が浅くなり舞台に立つ値打ちがない。(水谷八重子)
- ・ 人の見のこしたものを見るようにせよ。その中にいつも大事なものがあるはずだ。あせることはない。自分の選んだ道をしっかり歩いていくことだ。(宮本常一)
- ・ Dressing is a way of life. (服装は生き方である) (イヴ・サン=ローラン)
- ・ 学問は飯と心得べし、腹にあくがためなり。掛物などのように、人に見せんずるにはあらず。(三浦 梅園)
- ・ 学文は臭きなのやうなり。とくと臭味を去らば用ひがたし、少し書を読めば学者臭し、余計書を読めば余計学者臭し、こまりしものなり。(三浦梅園)
- ・ 降りる勇気を持て。(速水御舟)
- ・ 人間一期の大事に際して、案外頭のよさなどというものは役に立たぬ。人間大事の決断ということ になれば、それははるかに知性以前のものである。(中野好夫)
- ・ 私は太陽電池で動いており、妻が私のお日さんなのだ。(中坊公平)
- ・ いろいろな仕事の条件や内容を調べて、自分に適合する仕事を探そうとすること自体が、私は違う だろうと思っています。それよりも、いかに自分の能力を上げるか。現場へ行って本質をどのよう にして発見できるか。その力を自分のものにする技を磨くことがもっと重要なのですね。(中坊公平)
- 世の中で一番大切なもの、人間にとって最も大切なもの、それは「思い出」ではないか(中坊公平)
- ・ 少なくとも三つ(牧師・医者・弁護士)の職業はですね、人の不幸を金に変えてはならないという のが厳然たる倫理だと思うんですね(中坊公平)
- ・ 大義の義は、人に談合せず、一心究めたるがよし(伊達正宗)
- · 馬上少年過、世平白髮多、残躯天所赦、不楽是如何(伊達政宗)
- ・ 資本家は利潤追求を目的とするが、経営者は利潤追求を越えた目標を持つべきである。それは国家 への奉仕と、国民利福の実現と、一人一人の社員の人間としての完成である(岩崎小弥太)

- ・ 我々は大いに競争す可きである。然し私は我々の競争をして量の競争たらしめず寧ろ質の競争たらしめたい(岩崎小弥太)
- ・ 人生は晩年の方が充実する。過去の失敗から知恵が、それまでの蓄積から先見性が生まれるからだ。 (三鬼陽之助)
- 僕たちの演奏しているものは人生だ。(ルイ・アームストロング)
- にもかかわらず笑う(石井好子)
- ・ 突き飛ばされて転んだら、ついでにひとりでに起きあがって、歩くとこを見せてやればいい。(壺井 栄)
- 桃栗3年 柿8年 柚の大馬鹿18年(壺井栄)
- ・ このひとみを、どうしてにごしてよいものか(壺井栄)
- ・ 自分に対する尊敬、自分についての知識、自分に対する抑制、この三つだけが人生を導き、生活に 絶対の力をもたらす(テニスン)
- ・ 常に一歩前進を心掛けよ。停止は退歩を意味する。(野村徳七)
- 多くの人に変わって合理的に危険をおかすことにこそ、企業家の本分がある。(野村徳七)
- ・ 人材を養い、有為の人物を蓄え、適材を適所に配するは、資本力以上に大いなる財産である。(野村 徳七)
- ・ 「次のような人は順番にかかわりなく、直ぐに診察します」一、特に苦しい人 一、現職の国務大 臣一、80歳以上の高齢の人一、戦時職務にある軍人(武見太郎)
- ・ 一冊でもよけいに外国の本を読んで、出来るだけ覚書をつくり出来たら、いつかこれを整理して、 まとまったものにして残したいのが私の唯一の野心である。(植草甚一)
- ・ 無関係な切り抜きをくっつけ、それが別なものに変化していく快感(植草甚一)
- ・ 表紙をひと目みて感じてしまう本は、たいがい良い本で、これはレコードを買うときにもあてはま る(植草甚一)
- ・ ぼくは散歩と雑学が好き(植草甚一)
- ・ 勉強は人のため幸福を生む母のごとし天は万物を人ならずして働きに与うるものなり(早矢仕有的)
- ・ 何によらず、臨機の方法を求むる場合に於て、倉皇事を執れば、必ず損失ありと知るべし。(下田歌子)
- ・ 大衆というのは、個人個人をとってみれば、いろんな人がいる。賢い人もいるし、愚かな人もいる。 しかし、全体としての大衆の判断は、非常に賢いといえるのではないか。だから、政治家だけでな く、公的な仕事にあたる人は、大衆のマスとしての判断は賢なり、という考え方で行動しなければ、 必ず国民からしっぺ返しを受ける(後藤田正晴)
- ・ 政治家がいつも考えなければならないのは、国家、国民の運命である。そのためには、不断に勉強 していなければならないが、特に歴史の教訓、国家の興亡の歴史に学ぶことが大変重要なことでは ないかと思う(後藤田正晴)
- ・ 悪い情報は深夜でも報告せよ。いい情報は明朝でいい(後藤田正晴)
- ・ 二人か三人しかおらん上役をごまかせないような奴は、一人前になれるワケがない。しかし、下の 目はごまかせない(後藤田正晴)
- ・ お茶くみのおばさんに愛されないような人間は偉くなろうと思うな(後藤田正晴)
- ・ 人間というのはいつも、志を高く持って生きていかなければいけないんだなということが、だんだ んわかってきたように思います。(黒柳徹子)

- ・ 良質で純粋な原料から作られ、しかも長期保存ができるミルクを人々は求めている。(アンリ・ネスレ)
- ・ 為政清明(政治を行うものは清らかでなければならない)(大久保利通)
- ・ 凡そ国家の事は深謀遠慮自然の機に投じて図るにあらざれば成す事能はざるや必せり。(大久保利 通)
- ・ 国家創業の折には、難事は常に起こるものである。そこに自分ひとりでも国家を維持するほどの器がなければ、つらさや苦しみを耐え忍んで、志を成すことなど、できはしない。(大久保利通)
- ・ 目的を達成する為には人間対人間のうじうじした関係に沈みこんでいたら物事は進まない。そうい うものを振り切って、前に進む。(大久保利通)
- ・ 政府に誠実さが欠けていれば、全国民の道徳も毒される。(ハーバート・フーバー)
- ・ 文明と戦争とは結局両立しえないものである。文明が速やかに戦争を全滅しなければ、戦争がまず 文明を全滅することになるであろう。(幣原喜重郎)
- ・ 夫婦の成功は、人生の勝利です。人間の幸福なんていうものは、この辺の所が、最高なものではないでしょうか。、、、帰するとことは、平凡なものです。(吉川英治)
- ・ "いつもふる里の吾妻山や信夫山、阿武隈川を思い出して作曲してきました。
- ・ 福島市に生まれ育って本当に良かった(古関裕而) "
- 一鳥二石(一万田尚登)
- ・ 自分から逃げれば逃げるほど、生き甲斐も遠ざかる。(淡谷のり子)
- ・ あたしはね、やれるところまでやりますよ。歌と一緒に死んで行かなきゃいけない、と昔から思ってるんだ(淡谷のり子)
- ・ レコード大賞も歌手を堕落させる原因ね。賞を取ればギャラも上がるから血眼でしょう。歌手はね、 お金のために歌うようになったらおしまいよ(淡谷のり子)
- ・ ブルースというものは、だれかが書いて、だれかが曲をつけて歌うもんじゃないの。黒人たちが自 分の思いを自分の言葉で、自分のメロディーで叫んだ歌、それがブルースよ(淡谷のり子)
- ・ 政治は、万民のためを判断基準とする王道を歩むべきで、権謀術数による覇道を排すべきだ。(横井 小楠)
- 三井の近代化は政府高官らとの癒着を断ち切ることから始めなければならない。(中上川彦次郎)
- ・ 理想主義 人道主義のない社会改革なんてつまらん。(荒畑寒村)
- ・ 問題を絶えず追及する人間にあっては、オフ・ビジネスの時にひらめきを見出す例が多い。(藤井康男)
- ・ 人のものは良く見える。それはそうなんだよなあ。だが、遅かれ早かれ、そんなことが気にならなくなる。 (江国滋)
- ・ 願わくば、我に七難八苦を与えたまえ。(山中 鹿之助)
- ・ 縁あれば千里をへだつるとも逢ひ易く、縁なければ面を対するとも見(まみ)ゆること難(な)し。(山東京伝)
- ・ 愚人は過去を、賢人は現在を、狂人は未来を語る。(ナポレオン)
- ・ 強い人が勝つとは限らない。素晴らしい人が勝つとも限らない。私はできる、と考えている人が結 局は勝つのだ。(ナポレオン)
- 人はその制服の通りの人間になる。(ナポレオン)

- ・ この世において成功したければ、他人よりそんなに賢い必要はない。ただ大抵の人より一日早ければ良い。(ナポレオン)
- ・ 幸せは香水のようなもの。他人にふりかけようとすると自分にも2、3滴ふりかかる。(ナポレオン)
- ・ 一流の人は、一流の人を雇う。二流の人は、三流の人を雇う。(ナポレオン)
- ・ 何ごとも心構えこそすべてである。心の姿勢が、その人のすべての習慣を形づくっている。(ナポレ オン)
- 私はつねに、二年先のことを考えて生きている。(ナポレオン)
- ・ 戦闘の翌日に備えて新鮮な部隊を取っておく将軍はほとんど常に敗れる。(ナポレオン)
- ・ 秘訣?秘訣などない。わたしがその秘訣だ。(ナポレオン)
- 一つ一つの勝利が私の新たな武器である。(ナポレオン)
- ・ 宗教なき社会は、羅針盤のない船のようなものである。(ナポレオン)
- ・ 偉大な人間は、人がほめようが批判しようが動じない。いつも自分の良心の声を聞いている。(ナポレオン)
- ・ 人間を動かす二つのてこは、恐怖と利益である。(ナポレオン)
- ・ 兵士たちよ、4000年の歴史が諸君を見ているのだ。(ナポレオン)
- ・ 臆病でためらいがちな人間にとっては、一切は不可能である。なぜなら、一切が不可能なように見 えるからだ(ウオルター・スコット)
- ・ 成功、不成功はその人の能力よりも、精神的態度によるものが大きい。(ウオルター・スコット)
- 休息が長すぎると、カビが生える(ウオルター・スコット)
- ・ 人教えざれば道を知らず。道を知らざれば、すなわち、禽獣より害あり。(山鹿素行)
- ・ 「寝れば一畳、起きれば半畳、五合とっても三合飯」の明るさと、「今にえろ(偉く)なったるぞ」 の意欲が私の力だ。(井上貞治郎)
- ・ 昨日を引きずらず、明日を憂うことなく、今日、今をきちんと生きる。(曻地三郎)
- ・ オシャレをしなくなった日から老いが始まる(曻地三郎)
- ・ 降りかかってきた禍を『困った、困った』と逃げ回っていると、どこまでも追い掛けてくる。それ を、試錬と捉えて『来るなら来い』と立ち向かっていけば、禍が逆に幸福の種になるのです。(曻地 三郎)
- ・ 人間、急いでおったらあんまりいいことない。足元見てマイペースを守っておったら、蹴躓くこと もないわな(菅原文太)
- ・ ヘンクツや異端者と呼ばれてもいいじゃないか。変わり者の生き方の方が面白いよ(菅原文太)
- ・ 沖縄の風土も、本土の風土も、海も山も空気も風も、すべて国家のものではありません。そこに住んでいる人たちのものです(菅原文太)
- ・ 政治の役割はふたつあります。一つは、国民を飢えさせないこと、安全な食べ物を食べさせること。 もう一つは、これが最も大事です。絶対に戦争をしないこと!(菅原文太)
- チャールズ・ブロンソンとか亡くなったスティーブ・マックイーンなんか、大スターになったのは 中年になってだからね。オレとおんなじだよ(菅原文太)
- ・ 本気ですればたいていな事はできる。本気ですれば何でも面白い。本気でしていると誰かが助けて くれる。人間を幸福にするために、本気で働いているものは、みんなで幸福で、みんな偉い(後藤静 香)

- ・ 十里の旅の第一歩 百里の旅の第一歩 同じ一歩でも覚悟が違う 三笠山に登る第一歩 富士山に登る第一歩 同じ一歩でも覚悟が違う どこまで行くつもりか どこまで登るつもりか 目標がその日その日を支配する(後藤静香)
- ・ たしかに生まれた、必要だからだ。 たしかに生きている、まだ用事があるからだ。「われこれがた めに生まれたり」 はっきりとそう言いうるものをつかんだか。(後藤静香)
- ・ なんでもいい。善と信じたことを、ただ一つでも続けてみよ。何が続いているか。三年、五年、十 年続いたことが幾つあるか。一事を貫きうる力が、万事を貫く(後藤静香)
- ・ もっと落ついて考えよ あまりそわそわしすぎる 太陽をみよ 月をみよ 星をみよ 花 をみよ お前のように浮き浮きしている者が どこにある せめて一時間でも、じっとして おれ ただ一つのことでも 本気に考えてみよ(後藤静香)
- ・ 西欧の悪意ある勢力はわが国を西欧化し、『分裂させよう』とする陰謀を一時も捨ててはいない。(江 沢民)
- 一燈照隅 万燈照国(最澄)
- · 忘己利他(最澄)
- ・ 「吾々が時代の人間になるのではない、吾々即時代なのだ。吾々以外に時代など云うものがあって 堪るものか。吾々の精神、吾々の趣味、それが即時代の精神、時代の趣味だよ。(伊藤左千夫)
- ・ 一本の蝋燭たれ。(斉藤隆夫)
- ・ 政府の独断専行に依って、決したいからして、白紙の委任状に盲判を捺してもらいたい。これより ほかに、この法案すべてを通じて、なんら意味はないのである。(斉藤隆夫)
- ・ 無所属の身である以上、ふだんは話し相手もなければ、叱られたり、励まされたりすることもない ので、絶えず自分で自分を監視し、自分に檄を飛ばし、自分に声をかける他はない。(城山三郎)
- ・ 女は40を過ぎて始めておもしろくなる。(ココ・シャネル)
- ・ 自分のやりたい研究に指導教官など、この世にいないものと思え。(山口昌男)
- ・ 偏るのがなぜ悪いのでしょう。過去において「何か」をやった人はたいてい何かひとつの事で優れ て偏った人です(遠山啓)
- ・ 数学によって、天文学者は宇宙のかなたへ飛ぶ事ができた。数学によって、物理学者は原子の中へ もぐり込む事ができた(遠山啓)
- ・ 数学は、人間と人間の集まりである社会とが、長い年月にわたって創りだした歴史的な産物で、計 算術ではなく、ひとつの思想なのだ(遠山啓)
- ・ 金儲けは易しいが、経営とは違う。世のためになって利益を上げるのが経営。だから経営は難しい。 (五島昇)
- ・ 「運、縁、恩」を大切にする人間でありたい。(芦田淳)
- 一つもない。俺は一生懸命やったがダメだったなあ。(辰野金吾)
- ・ 人格を磨く、鍛錬する、勇んで難につく、つとめて苦労する、隠忍する、贅沢を排して生活を安定 する、しかして大いに思索する(出光佐三)
- ・ ドイツは戦争に負けたが、占領政策には敢然として戦っております。ドイツの再興はわれわれの手 でやりたいと言っている(出光佐三)
- ・ 企業制度において、働く人々が組織の要求にどの程度熱心に適応するか。これは尽きるところ、組織が働く人々の人間としての本来的な自己啓発の欲求にどれだけ役に立っているかにかかっている。 (木川田一隆)

- ・ 内部情報を正しく把握するためには待っていてはダメだ。自分で取りに行くことが大事なんだよ(木 川田一降)
- ・ いいえ昨日はありません。今日を打つのは今日の時計。昨日の時計はありません。今日を打つのは今日の時計(三好達治)
- ・ 物の尊卑美徳は、形の大小にはよらず。狭小なりとて、美国(よきくに)なり。(平田篤胤)
- ・ 上見れば 及ばぬことの 多かれど 笠脱ぎてみよ 及ぶ限りを (平田篤胤)
- ・ 学問は本末を知ることが大事でござる。 (平田篤胤)
- ・ なせば成る、なさねば成らぬ何ごとも、ならぬは人のなさぬなりけり(平田篤胤)
- ・ 恋という奴は一度失敗してみるのもいいかも知れぬ、そこで初めて味がつくような気がするね。(若 山牧水)
- ・ この世は自分を探しに来たところ、この世は自分を見に来たところ(河井寛次郎)
- ・ 新しい自分が見たいのだ--仕事する。(河井寛次郎)
- ・ いつまでも長生きして、いい仕事がしたい---これだけです。(河井寛次郎)
- · 手考足思(河井寬次郎)
- ・ 街は生きている。その呼吸を止めるほうが不自然だ。都市は、いまこの瞬間を生きる人の営みを受け止め、これからのライフスタイルや価値観を実現するものでなければならない。(森稔)
- ・ 学びてのち足らざるを知る。(榎本武揚)
- ・ 振り返ってみて五稜郭のときの苦労を思えば、外務大臣の仕事など、どれほどのものでもない。(榎本武揚)
- ・ 健全な国家を支えるのは国力であり、国力の充実は実業に依る。それゆえ実業に従事する者の責任 は重い。実業の根底にあるべきものは各人の高潔な人格と公正な行動だということを忘れてはなら ない。(岩崎久弥)
- ・ 臆病者め。みんなが火を消そうとしているときに、防空壕になんか入っていられるか!(岩崎久弥)
- ・ 教育と教養とは別物です。教養を身につけた人間は、知識階級よりも職人や百姓のうちに多く見い だされる」(福田恆存)
- ・ 先人、友人、仲間、みな師と思うことが大切だ。そして後輩を大切に引っ張っていく力を自らつけていこうと努めているうちに、自然と力はついていくものだ(福田恆存)
- ・ 私たちが真に求めているものは自由ではない。私たちが欲するのは、事が起こるべくして起こっているということだ。そして、そのなかに登場して一定の役割をつとめ、なさねばならぬことをしているという実感だ。なにをしてもよく、なんでもできる状態など、私たちは欲してはいない(福田恆存)
- ・ 生きがいとは、必然性のうちに生きているという実感から生じる。その必然性を味わうこと、それ が生きがいだ(福田恆存)
- ・ 私たちは、その鉱脈をほりあてたいと願っている。劇的に生きたいというのは、自分の生涯を、あるいは、その一定の期間を、一個の芸術作品に仕たてあげたいとうことにほかならぬ(福田恆存)
- ・ 自分の位置を測定する能力、しかも、たえず、流動変化する諸関係のなかで適切に行動する能力、 そのみごとさが教養というものであります(福田恆存)
- ・ 0から1を創るのは、難しい。1から2を作ることは、易しい(クリストファー・コロンブス)
- ・ まだ足らぬ 踊りおどりで あの世まで(尾上菊五郎 6代目)
- ・ ミネルバの梟は夕暮れになって初めて飛翔する。(ヘーゲル)

- ・ 我々が歴史から学ぶことは、人間は決して歴史から学ばないということだ。(ヘーゲル)
- ・ 、、武力日本と相並んで文化日本を世界に躍進せしむべく努力せねばならぬことを痛感する。、、現代人の現代的教養を目的として岩波新書を刊行せんとする。、、、躍進日本の要求する新知識を提供し、岩波文庫の古典的知識と相俟って大国民としての教養に遺憾なきを期せんとするに外ならない。、、古今を貫く原理と東西に通ずる道念によってのみ東洋民族の先覚者としての大使命は果たされるであろう。、、(岩波茂雄)
- ・ 困難が来るたびにぼくは元気になるよ(岩波茂雄)
- ・ 死は生の自然の継続である。最も良き生の後に、最も悪しき死が来る理由がない。死に対する最良 の準備が最もよく生きることにあるのは疑いがない(阿部次郎)
- ・ 愛とは他から奪うことではなくて、自己を他に与えることである(阿部次郎)
- ・ 自嘲は強者のものである。自己憐憫は弱者のものである(阿部次郎)
- ・ 一つずつの小さな現在が続いているだけである(宮沢賢治)
- ・ 何がしあわせかわからないです。本当にどんなに辛いことでも、それが正しい道を進む中の出来事なら峠の上りも下りもみんな本当の幸せに近づく一足づつですから。(宮沢賢治)
- ・ わが国のすべての問題に対する答えは、世界のすべての問題に対する答えは、ただひとつの言葉に 帰着する。それは「教育」である。(ジョンソン大統領)
- ・ わたしは何かの会合で挨拶をするように頼まれたとき、かならず原稿を作る。(丸谷才一)
- ・ 食通に講釈をさせるのはよい。しかし料理をさせてはいけない。(丸谷才一)
- 自分の今行なっていること、行なったことを心から楽しめる者は幸福である(ゲーテ)
- 天才とは努力し得る才だ(ゲーテ)
- 努力する限り、人間は迷うだろう (ゲーテ)
- ・ 私は常に敵の功績に注意を払い、それによって利益を得た (ゲーテ)
- ・ 最上の幸福は、一年の終わりにおいて、年頭における自己よりも、よりよくなったと感ずることである。(トルストイ)
- ・ 真の文明人は、人生における自己の使命を、知っている人間のことである(トルストイ)
- 中途採用の人も含めて、人材はやはり手ずからつくらないとダメだ。(永守重信)
- われわれの知識は、すべて経験基づくものであり、知識は結局のところ経験から生ずるのである。(ジョン・ロック)
- ・ 収入は、靴のようなものである。小さすぎれば、われわれを締めつけ、わずらわす。大きすぎれば、 つまずきや踏み外しの原因となるのだ(ジョン・ロック)
- いかなる人の知識も、その人の経験を超えるものではない(ジョン・ロック)
- ・ 私は人の考えを最もよく知りたいときは、その人の行動を見ることにした(ジョン・ロック)
- 美味とは食物そのものにあるのではなく、味わう舌にあるものである(ジョン・ロック)
- ・ 実業界にとって、「景気」というものは、ボタモチのようにタナから落ちてくるもんなんですね。だ から彼等は今日もまた一生懸命タナの上を見てますよ。(大内兵衛)
- ・ 私は日本人ではない。日本人の朝鮮人に対する虐待は何なのだ。私は苦しめられている同胞のこと を思って走った。それなのに、私のために日の丸が掲げられている。(孫基禎(ソン・ギジョン))
- ・ 物理の原理をバーのウエイトレスに説明できないのであれば、それはウエイトレスではなく、その 原理に問題があるのだ(アーネスト・ラザフォード)
- ・ 人を泣かせる歌を作るには、氷のような心を持たねばならない。(井上陽水)

- ・ 瞬間を逃さずにシャッター。距離と山の大きさ。光線の角度の予備知識。小型カメラでは山頂から 4-5 里がもっともよい。(岡田紅陽)
- ・ 彼女は全く稀にみる妖麗な美人ではあるが、気まぐれな、しかも神経質な女性でもある。、、、全く私 は手に負えないむずかしい恋人を持ったものである。(岡田紅陽)
- ・ 決断の条件は、小心、大胆、細心。(平岩外四)
- ・ 寝床まで仕事は追いかけてこない。寝る前 30 分や 1 時間は空き時間ができる。その時間に本のページをめくるように習慣づけた。(平岩外四)
- ・ 思想はある覚悟をもって生きる人間の生活の全体から、ある毒気をもってにじみ出すものである。 (高橋和己)
- ・ 知識は失敗より学ぶ。事を成就するには、志があり、忍耐があり、勇気があり、失敗があり、その後に、成就があるのである(二代目 田中久重)
- 教育を受ける機会を与えてくれたアメリカで、アメリカオリジナルの絵を生み出して描いてやろうと決める(国吉康雄)
- ひとつ楽しみを見つけますとね、ひとつだけで終わりませんの。(幸田文)
- ・ 結局、思想です。思想が人間を支配するんだ。(柳田誠二郎)
- ・ 犠牲的精神を発揮して男子を感化する者とならねばなりません(広岡浅子)
- ・ 我日本の旧習を脱し暇あれば男子と共に素読して、必ず女子の頭脳は開拓せらるべしとの希望を以って、大に力を養ふ事に努めたり(広岡浅子)
- ・ 広岡家は大阪の富豪なれば、其主人は少しも自家の商業に関せず、万事支配人政治にて、日毎、謡曲、茶の湯等の遊興を自己の業の如く思慮しつつあるが如し。之を見て余は斯くの如き有様にて永久に家業繁盛の継続するや否やの疑問を生ぜり。故に一朝事あれば己れ自ら起たざる可からずと意を決し、其準備に努めたり。そは簿記法、算術、其他商業上に関する書籍を、眠りの時間を割きて夜毎に独学し、之れに熟達せん事を我が希望とせり。(広岡浅子)
- ・ 断然意を決し日本女子大学校発起者に加名するの栄誉を担へり。、、、、将来の希望に向って尽力するを こよなき愉快なる事となしたりき。(広岡浅子)
- ・ 我希望の果されん日は前途尚遼遠なるを覚ゆ。然れども死生の別を考慮する暇あらず。今尚無限の 希望に充ちて、百年の計画を行ふ之れ余が老いぜざる大なる原因ならずんばあらず。(広岡浅子)
- ・ 人格修養の最も簡単な一方法は、一挙手一投足も無意味にしないと云う事であらうと思います。(広 岡浅子)
- ・ 男子を感化し、男子の力を悉く有益高尚なる目的の為に、捧げさせる事が出来るのであります。(広 岡浅子)
- ・ 私は形象と色彩によって抜きさしできぬ煌くような象徴の世界を打ち立てたい。(宇治山哲平)
- 画は色と形によって思想を表現したものである。(字治山哲平)
- ・ 私の絵画は、具体的な描写ではないが、自然のすべてが画因である。太陽、石、山脈、風、凍土、 動植物などあらゆる自然のリズムや形象を極めて単純な記号のような原形にまで抽象して生気を蘇 らせたいと希っている。(宇治山哲平)
- ○△□による華厳世界(宇治山哲平)
- ・ 密教の奥は実は華厳なのである。密教は華厳から生れた秘密の新生児なのである。禅の奥にも華厳 が咲いていた。(宇治山哲平)
- ・ 華厳は密教を生み、曼荼羅という色彩形容とともに華麗な宗教表現を派生させている。(宇治山哲平)

- ・ 華厳でありたいと思うことは、こうした透体脱落を促進する曼荼羅世界を感じるということなのだ。 (宇治山哲平)
- ・ この画人はいつしか「世界画」というものに達したのである。(宇治山哲平)
- ・ 機能的なものが美しいのではない。美しきもののみ機能的である。(丹下健三)
- ・ 朕は国家なり。(ルイ 14世)
- ・ 人生にとってもっとも大切なのは、重要なこと以外は、切り捨てること。(利根川進)
- ・ 突飛な質問、恥、笑い、というのはアイデアへの感覚なのである。(星新一)
- ・ 文体とは、あくまで人柄だ。ユーモアのないひとにユーモラスな文など書けるはずもなく、大まかな性格の人に神経質な文は書けない。文章技術より、自己発見のほうが先である。それだけでいい。 あとは、辞書をそばに誤字を減らすよう努力し、文字を丁寧に書くように気を付ければ、文章は自然と、あなたの人柄のいい面が現れてくる。(星新一)
- ・ 人間、どこかで「なんとかなるサ」って開き直ることがないとね。(西村京太郎)
- ・ 本当の伝統は昨日までのすべてを壊してもう一度作り上げて、たまたま 3 年前と同じになるという ものでしょう。(岩城宏之)
- ・ 生きがいというものは、目前の仕事を自分にとってやりがいのあるものに変えようという実に個人 的な努力から生まれるはず(岩城宏之)
- ・ 私はイギリスと結婚したのです(エリザベス1世)
- ・ 私の肉体は一つですが、神の赦しにより、統治のための政治的肉体を持ちます。、、私はよき助言と 忠告によって全ての私の行動を律するつもりです(エリザベス1世)
- ・ 私がここに来たのは、皆と生死をともにするつもりであり、王国と国民の名誉のために命を捨てる 覚悟だからです(エリザベス1世)
- ・ 私ほど臣下をを愛する国王はいないでしょう、、、神が私を高い地位に上げて下さいましたが、私は 貴方達の愛とともに統治をしてきたことこそ、我が王冠だと思うのです(エリザベス1世)
- ・ 人は実に事業の糸によってのみ、自己を世界に織り込むことが出来る(木下尚江)
- ・ 朝起きて聖書を読み、昼は疲れるまで働き、夜は祈りて眠る(羽仁もと子)
- 東洋の学者は人の禽獣に異なる所以を説き、西洋の学者は人の禽獣に同じき所以を説く。(副島種臣)
- ・ 学問とは驚く能力です。はじめに楽しむことを覚えるべきです(小室直樹)
- ・ 国家の指導者を志すものは、常住坐臥 (じょうじゅうざが)、常在戦場、常在国難の気持ちでいると き、危機管理能力は驚異的に伸展する。これは、世界史の鉄則である。(小室直樹)
- ・ 資本主義における覚悟は、破産と失業である(小室直樹)
- ・ 自分よりずっと悪い状況下でも、そんなことを気にも止めないで、平然として最善を尽くした人、 その例が頭に浮かんだ人は助かる。どんな精神療法よりも効果がある。教育の目的は、そのような 人の例を教えることではないか(小室直樹)
- ・ 人の二倍努力する者は必ずどこかにいる。三倍努力すれば少しは安心できるというもんだ。(木村政 彦)
- ・ 何があっても、面白がってしまいなさいよ。(内館牧子)
- ・ 怒れば怒るほど、それが自分に向かってはね返って来て、無数の破片のように自分を傷つける(神吉 拓郎)
- ・ 究極のデザインは、ほとんど自然の世界と変わらないものになるんです。(栄久庵憲司)
- ・ モノを作ること、デザインを作ることは、念仏を唱えることと一緒。(栄久庵憲司)

- ・ 身近な人はいくらか割引き、目の届きにくいところで活躍している人は大きく見えるようにし、バランスのとれた公正な人事を心がけた。組織は人事の善しあしで強くもなり、弱くもなる。(古川貞二郎)
- ・ ポストは預かり者であることを心に刻み、誠意を尽くせば道は開ける。(古川貞二郎)
- 相手を本当にやっつけようと思ったら、じっと辛抱しながら、時機を待たなければ駄目だ。(徳田球ー)
- ・ モノの値段はお客様が決める。利益はコストの削減で決まる。コストダウンは、モノづくりの根本 のところから追求することによって決まる(豊田英二)
- ・ 乾いたタオルでも知恵を出せば水が出る(豊田英二)
- ・ 今がピークと思ったら終わりだ(豊田英二)
- ・ 一番大切なのは信用であり、信用の担保はお金や物ではなく人間としての誠実さ、真面目さ、そして何より真摯さである。(伊藤雅俊)
- ・ 一に泰平に生まれたること。二に都下に長じたること。三に貴賤に交わりたること。四に長寿を保 ちたること。五に有禄を食んだること。六にいまだ貧を全くせざること。七に四海に名たること。 八に子孫の多きこと。九に老いてますます壮なること(杉田玄白)
- ・ 己れ上手と思わば、はや下手になるの兆しとしるべし(杉田玄白)
- ・ ライフワークを手がけるのが 10 年遅かった。(大宅壮一)
- 男の顔は履歴書だ。(大宅壮一)
- ・ 私の事務所では仕事の 90%以上が海外の案件になっている、、。日本文化を学び、日本人としての地盤を固めていなければ国際人とはいえない。、、本当の信頼は仕事の現場で生まれるものだ(安藤忠雄)
- ・ 働くことは、食べることや眠ることよりも、人間に必要である。(フンボルト)
- ・ 自分が最低だと思っていればいいのよ。一番劣ると思っていればいいの。そしたらね、みんなの言っていることがちゃんと頭に入ってくる。自分が偉いと思っていると、他人は何も言ってくれない。 そしたらダメなんだよ。てめぇが一番バカになればいいの。(赤塚不二夫)
- ・ 我が国小なりといえども誠によく上下同心(しょうかどうしん)その目的を一にし、務めて国力を培養せば、字内に雄飛し万国に対立するの大業甚だ難しきにあらざるべし。(岩倉具視)
- ・ …ようやく何かわかりかけてきたような気がする。私はまだ、進歩している…。(ジャン・ルノワール)
- ・ もし私に誇るべきものがあるとしたら、それはただ「誠」という言葉に集約されるであろう。つまるところ、学問や同胞との付き合いでも、また将来のことを考える場合でも、この「誠」の心を忘れずに貫く覚悟でいるのだ。(小村寿太郎)
- うその外交は骨がおれるし、いつかはばれるが、つねに誠をもって押し通せば、たいした知恵もつかわずに済む。(小村寿太郎)
- ・ 日本はもう戦争をしてはいけません。戦争をする必要がないだけのことは、布石を打ったつもりです。これからは産業などに力を入れて、国民を楽に暮らさせていくことです。(小村寿太郎)
- 資源が何もないことが、ここまできた秘密なんです。(リー・クアンユー)
- ・ 自分は800を泳ぐときは700、500を泳ぐときは1300と考えて全力で泳ぎます。そうするとあとの100、200は苦しさで腕が肩から抜けそうです。このラストが記録の勝負です。(古橋廣之進)

- あきらめずへこたれず、魚になるまで水かきがつくまで泳ぐことだ。(古橋廣之進)
- ・ こは長きも二十行を限りとし短きは十行五行あるは一行二行もあるべし(正岡子規)
- ・ 漱石が来て虚子が来て大三十日(おおみそか)(正岡子規)
- ・ リーダーというものは、下に対して俺を信頼しろというのではなく、まず自らが下を信頼すること。 すべてはそこからはじまります。(塚本幸一)
- ・ 実業に役立たないような技術は意味がない(初代 田中久重)
- ・ 人の知というのは四六時中いつでも出て来るものではない。だから朝早く起き東天を拝し、仕事場に入って机の前に座っていれば、突然巧思妙想が湧いてくるものだ。だから早起きをするのだ(初代 田中久重)
- ・ 油絵の本質は、どこまでもどこまでも突っ込んで行くところにある。体力のすべてを動員し、研究 のすべてを尽し、修正に修正を重ねて完璧なものにするのが油絵である。そしてそれがためには断 じて中途で挫折することにない強烈な意欲が必要なのである。(藤島武二)
- ・ 良い絵とは、ああっと言うだけで、ものが言えなくなるような絵だ。どうだこうだと言える様な絵、 言いたくなる様な絵は大した絵ではない。(横山大観)
- ・ 人間ができてはじめて絵ができる。それには人物の養成ということが第一で、まず人間をつくらね ばなりません。、、、世界的の人間らしき人間ができて、こんどは世界的の絵ができるというわけで す。、、、、ただ一つ我は日本人であるという誇りをどこまでも堅持してもらいたい(横山大観)
- ・ 私は自分自身にも、世間にも、あまり多くを期待しない。けだし失望を避ける唯一の方法は、やたらに高望みしないことだからである。(加藤周一)
- ・ 猿は木から落ちても猿だが、代議士は選挙に落ちればただの人だ。(大野伴睦)
- ・ 人に褒められて有頂天になり、人にくさされて憂うつになるなんておよそナンセンス。なぜなら、 そんなことくらいで自分白身の価値が変わるものではない。(立石 一真)
- · 大企業病(立石 一真)
- ・ 富士が見たい。(吉田茂)
- ・ 俺が 70 になる前に描いたものなんぞ、取るに足らねぇもんばかりだ。73 を越えてようやく、禽獣 虫魚の骨格、草木の出生がわかったような気がする。だから精々、長生きして、80 を迎えたら益々 画業が進み、90 にして奥意を極める。ま、神妙に達するのは 100 歳あたりだろうな。百有十歳にで もなってみろ。筆で描いた一点一画がまさに生けるがごとくになるだろうよ。(葛飾北斎)
- ・ 天が私にあと10年の時を、いや5年の命を与えてくれるなら、本当の絵描きになってみせるもの を。(葛飾北斎)
- 一日は、一生の縮図なり。(森信三)
- ・ 結局最後は、「世のため人のため」という所がなくては真の意味で志とは言いがたい。自己に与えられた条件をギリギリまで生かすことが人生の生き方の最大最深の秘訣である。(森信三)
- ・ 長年の間に亡くなった人で、自分のとって印象に残っている人たち、お世話になった人とかいろいろいろ、つまり私にとって大切な、特別な人たちですが、その名前をずうっと言っていくのです。 今、二百人くらいになっているかな。(金子兜太)
- ・ トップにとって経営とはバランスシート(貸借対照表)で語る物語です。理想的なバランスシート を構想し、それを実現するため、企業内のあらゆる組織、あらゆる人間が行うべき仕事を導き出していくのです。(御手洗富士夫)
- ・ 私は世界の海図を王に示し、マゼラン海峡を経て来たと答えた。(ウィリアム・アダムス(三浦按針))

- ・ 自分で働らいて儲けて、一寸儲ければ一寸だけ、一尺儲ければ一尺だけ、次第次第に大きくなるの がよいのです。(大倉喜八郎)
- ・ この絵、ますますいい絵になってくでしょうね。100年後に見たらどんなになるか。いい絵は描かれた後もどんどん成長するんですねえ。(加山又造)
- ・ じっと孤独に耐え続けているのが、筋の通った老人の態度というものであろう(筒井康隆)
- ・ 儂は今年で八十三になるが、まだ三人や五人叩き斬るくらいの気力も体力も持っている。(田中光顕)
- ・ 人は死から目を背けているうちは、自己の存在に気を遣(つか)えない。死というものを自覚できるかどうかが、自分の可能性を見つめて生きる生き方につながる。(ハイデッガー)
- 人間は、時間的な存在である。(ハイデッガー)
- ・ 物心ともにハンブル・ライフ (つつましい生活) に徹すべきである。(大槻文平)
- ・ 舞台に立つ人間は日本語に対する責任がある。(宇野重吉)
- ・ 「よき社会」(good society) をつくるためには、たかが財政など、パンクしてもかまわないのではないか!(飯田経夫)
- ・ 学びて思わざれば、すなわちくらし、思いて学ばざれば、すなわちあやうし (孔子)
- ・ 其の以す所を視、其の由る所を観、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞかくさんや。 (孔子)
- ・ およそ、事業は、みだりに興すことあるべからず。思いさだめて興すことあらば、遂げずばやまじ、 の精神なかるべからず。(大槻玄沢)
- ・ 多摩大の敵は多摩大。(中村秀一郎)
- ことわざとは、長い経験に基づく短い文のことである。(セルバンテス)
- ・ 「そのうちやる」という名の道を歩いて行けば、「何もしない」という名札のかかった家に、行きつくことになる。(セルバンテス)
- ・ これからはお前の道を行きなさい。(徳川慶喜)
- ・ 理想無ければ道徳無し。(黒岩涙香)
- ・ 私の論述は内容にも機構?にも、他人の所説や工夫を踏用したところは1点もない。すべてが私自 身の創意である。(鈴木三重吉)
- ・ 山中の賊を破るは易し。心中の賊を破るは難し。(王陽明)
- ・ 今も昔も自由と餓死は背中合わせにいる。(隆慶一郎)
- ・ 余命の思想。、、天上天下唯我独尊、、下山の思想の時代、、(五木寛之)
- ・ 日本の宗教的寛容に基づいて二つのグローバル共同体(アメリカ主導とイスラム主導)を架橋する 「仲介者」となることこそ、日本が国際社会に対してなしうる最大の貢献だ(内田樹)
- 何かはっきり徹していないとつまらない。(川口松太郎)
- ・ 心の中からメロディーをひっぱりだすのがコツ。器用な人はダメ。僕みたいに不器用でなきゃ。(服 部良一)
- ・ 裏を見せ表を見せて散る紅葉かな(良寛)
- ・ ネコが年をとると、だんだん図々しく不気味になってくる。女もうっかり年をとると、似た性格を 帯びてくる。(平林たい子)
- 私は生きる。(平林たい子)
- 私は中ぐらいを愛するんです。(新村出)
- ・ 大器晩成ならぬ小器中成。(新村出)

- ・ 人をほめるのはそんなにやさしことではない。少なくとも悪口を言うよりは難しい。悪口はいくらでも実感をこめることができるが、ほめ言葉に実感をこめることは、しばしばこちらの自尊心と衝突するからだ。 (河盛好蔵)
- ・ 本当に学ぶべきなのは、問題とどう取り組むか、どういう戦略を立てるべきかということである。(日 野原重明)
- ・ メモしないでも覚えているような思いつきは大したものではない。メモしないと忘れてしまうよう な着想こそが貴重なのです。(福井謙一)
- ・ 将来の文盲とは、読み書きのできない人ではなく、学ぶことも、学んだことを捨てることも、また 学び直すこともできない人のことである。(アルビン・トフラー)
- ああ ぼくには 今日が また 果てしなく青く 明るい! (村野四郎)
- ・ 拳闘こそ我が命(ピストン堀口)
- ・ 伝統は軽んじてはならない。しかし、伝統にとらわれてもいけない。(久保田一竹)
- 長生きするのも『芸』のうちだよ(吉井勇)
- ・ 命短し恋せよ乙女(吉井勇)
- ・ あまりに多くの人を斬って、刀が鋸のようになってしまった。(近藤勇)
- ・ 生きようという念が一分でもあっては、どうにもなりませんな。不思議なもので、死ぬ気になると、 周りの景色、つまり敵の群れのことですが、その虚が見えてきます。その虚へ突っ込むのです。な んのかんの言っても、その一言ですな。(近藤勇)
- ・ 今日一日、腹を立つまじきこと、今日一日、人の悪しきを言わず、我が良きをいうまじこと。(安田 善次郎)
- ・ 生きた。闘った。使命を全うした。人生に悔いはない(山田顕義)
- ・ 人生とは、人生以外のことを夢中で考えているときにあるんだよ。(ジョン・レノン)
- ・ 任せた以上は口出さず、責任は自分が負う。(大山巌)
- ・ なんじゃ、賑やかじゃのう。児玉さん、今日もどこかでいくさがごわすか。(大山巌)
- ・ 喜劇を演(や)ろうと思ってやっても、喜劇にはならないよ。(榎本健一)
- ・ 無視されるよりも、けなされるほうがましです。(川久保玲)
- ・ 人生のホイッスルが鳴るまで、まだ若干のロスタイムがあるのではないか。(塩川正十郎)
- ・ 重要な事は、必ずしも闘う犬の大きさではなく、犬の闘争心の大きさである。(アイゼンハワー)
- ・ 指揮官はまず楽観的であることが重要である。指揮に自信と情熱と楽観の匂いがなければ、勝利は おぼつかない。(アイゼンハワー)
- 軍になどなるものじゃない。将軍になったら、山のように心配の種を背負うことになる。(アイゼン ハワー)
- ・ 品質問題の85%は、マネジメントに責任がある。(デミング)
- ・ 自分のところに人が来るのを待っていては、小さな問題しか目に入らない。自分が出かけていって、 見つけるべきだ。そもそも大きな問題というのは、問題を抱えているのを自覚していない人たちの ところにあるものだ。(デミング)
- ・ 東郷は、運の良い男でございますから、しかるに、必ずや勝利致しましょう。(山本権兵衛)
- ・ 東京を復興するの努力如何は世界列強の環視する所、我が邦(くに)の実力如何を知るの試金石、 またここに在り。(山本権兵衛)
- ・ 後世、日本海海戦が神秘的な力で勝ったように思われては、日本の運命が危ぶまれる。(山本権兵衛)

- ・ 勝負ごとは、冷静さを失ったら負けさ。(小錦八十吉(初代))
- ・ 五体にみなぎる精力(せいりき)が、両の腕(かいな)におのずから湊(あつ)まる時、わがたま しいは流るる如く彼に通いて、はじめて面も作られまする。(岡本綺堂)
- ・ さわらぬ神にたたりなしといふ心持、不正や悪をとがめることの出来ないヒキョウさは、どんなに 我々の心を堕落させることだろう。(野村胡堂)
- ・ 女とて一度得たる憤り媚に黄金に代へらるべきか。(柳原白蓮)
- ・ 伝統がある、のれんが古いと威張っても、実力が備わっていなければ企業として何の意味もない。 事業はたんに歴史が長いというだけで続くべきものというわけにはいかない。(水上達三)
- ・ 儒教の教えでも仏教の教えでも神道の教えでも何だって構わない。あらゆるものが磨き砂になるん だ (渡部昇一)
- ・ 私としても、恥など多くてもかまわないから、95歳以上は生きたいと思っている(渡部昇一)
- ・ この先やることが何も思い浮かばない人は、仏教に手を出すのも一つの道だと思うのだ。(渡部昇一)
- ・ 時間は 20 歳の時には時速 20 キロで流れ、60 歳では時速 60 キロで流れると感じられると考えればいいだろう (渡部昇一)
- ・ ある国を知るひとつの方法は、その国でどんな本がベストセラーになっているかを見ることだと思 う (渡部昇一)
- ・ 人の上に立つ人間ほど、朗らかで大らかで、寛容でなければならないと思う(渡部昇一)
- ・ 政府は超然として政党の外に立つ。(黒田清隆)
- ・ 大隈どん、貴君の片足を失ったのは、私の片足を失ったより残念じゃ。(黒田清隆)
- ・ 楽観主義者はドーナツを見、悲観主義者はドーナツの穴を見る。(オスカー・ワイルド)
- ・ 趣味は田中角栄 (二階堂進)
- ・ 貿易というものは、自国の物を外国に売り、外国のものを自国に買うのではまだまだである。外国 の物を買って外国に売るのでなければ、本当の外国貿易とは言えない。(益田孝)
- ・ 外は広く、内は深い。(鈴木大拙)
- ・ 死を恐れるのは、やりたい仕事を持たないからだ。やりがいのある、興味ある仕事に没頭し続ければ死など考えているヒマがない。死が追ってくるより先へ先へと仕事を続ければよいのである…(鈴木大拙)
- ・ 成長はまたつねに苦痛をともなう(鈴木大拙)
- 会社を訪問したらトイレを見る。トイレが汚かったら、取引はしない。(高橋荒太郎)
- ・ 私は機会があれば何度でも経営方針の話をします。なぜなら、経営方針というものは、一度聞いただけでは分からず、何回も何十回も聞いて分かるものだからです。(高橋荒太郎)
- ・ 人はパンのみに生きるものに非ず、されどまたパンなくして人は生きるものに非ず (河上肇)
- ・ 国民の叡智がよき判断を下し、国民の意志がよきことを志向するよう祈り続けていることが、皇室 存在の意義、役割を示しているのではないかと考えます。(皇后美智子)
- ・ 常に国民の関心の対象となっているというよりも、国の大切な折々に、この国に皇室があって良かった、と、国民が心から安堵し喜ぶことの出来る皇室でありたいと思っています.(皇后美智子)
- ・ 全ての人の上に立つときは おろかなるも知あるように見ゆ、下にいるものは 知あるも愚に見える ものなり (徳川吉宗)
- 困った時にうつ向く者は役に立たぬ。困った時あお向く者が役に立つ。(徳川吉宗)

- ・ 私は平和的発案の促進の為、私の死後、大きな基金を残すつもりだ。ただ、私はその結果について は懐疑的だ。(アルフレッド・ノーベル)
- ・ 昼は夢 夜ぞうつつ。(江戸川乱歩)
- ・ 運命の鬼めは、甘い獲物を与えて、人の心を試すのだ。そして、ちょっとでも心に隙があったなら、 大きな真っ黒な口を開いて、ガブリと人を呑んでしまうのだ。(江戸川乱歩)
- ・ いったいこの国をどこへもってゆくのや。(西園寺公望)
- ・ いろいろやってみたが、結局、人民の程度以上にはならなかった。(西園寺公望)
- ・ 旦那寺食わしておいてさてと言い。(西園寺公望)
- ・ 君がいい写真を取れないのは、あと半歩の踏み込みが足りないからだよ。(ロバート・キャパ)
- ・ 戦争中はだれかを憎むか愛するかしなければならない。とにかく立場を明らかにしなければならない。そうでなければそこで起こっていることに耐えられない。(ロバート・キャパ)
- ・ 人生、理想、はた秘密、詩人の夢よ幻と、われ笑いしも幾たびぞ。(土井晩翠)
- ・ 愚痴をこぼすな、くよくよ後悔するな(正力亨)
- ・ 鈍さも見方を変えれば才能で、それこそが誠実さや、一途さ、信念といったものを生み出す原動力 となるはずである。(渡辺淳一)
- ・ 検診で発見されるがんの大半が悪性の「本物のがん」ではなく、、他の臓器に転移せず、、命に別状はない「がんもどき」だ、、。が検診による「過剰診断」で、、「がん患者」に仕立てている。、、がんの「放置治療」を推奨する(近藤誠)
- ・ 自伝を書くように私は絵を描く。私の絵は日記のページなのだ。(ピカソ)
- ・ 実ニ宗教コソハ、道徳ニ生命ヲ、人類ニ希望ヲ、政治ニ理想ヲ、世界ニ平和ヲ与ヘルモノデアリマス。(田中耕太郎)
- ・ 被写体に対峙し、ぼくの視点から相手を睨みつけ、そしてときには語りかけながら被写体がぼくを 睨みつけてくる視点をさぐる。そして火花が散るというか二つの視点がぶつかった時がシャッター チャンスである。パシャリとシャッターを切り、その視点をたぐり寄せながら前へ前へとシャッタ ーを切って迫っていくわけである。(土門拳)
- ・ 造形物であるからといって、形に捉われては駄目だ。仏像の精神をまっとうに追及することが必要 なのである。(土門拳)
- ・ 実力会長がいる会社にはロクな会社はない。まして、代表取締役相談役や名誉会長なんて言う屋上 屋を重ねた体制は問題外。(田淵節也)
- ・ 誰かに「ダメだ」と言われたとしてもそれは最初の一歩にしかすぎない。習得しなければならない のはその「ダメだ」と言う言葉に打ち勝つことだ。(ジェームズ・クック)
- ・ 自分は赴任の前、すでに一命は国家に捧げているのであるから、爆弾などは怖いとは思わぬ。また、 爆弾事件があったからといって、統治方針を変えるなどということは断然せぬ。(斎藤実)
- 目を星に向け、足を地につけよ。(セオドア・ルーズベルト)
- ・ 私は平均的な人間にすぎない。ただ、平均的な人間より一生懸命働いているだけだ。(セオドア・ルーズベルト)
- もっと軽い荷物にして欲しい、と祈ってはならない。もっと強い背中にして欲しい、と祈りなさい。 (セオドア・ルーズベルト)
- ・ 人生の一番のご褒美とは、為す価値のある仕事を一生懸命為す機会が与えられることに違いない。 (セオドア・ルーズベルト)

- ・ 賞賛に値するのは、実際に行動した人物であり、汗と血でまみれ、勇敢に戦い、何度も間違いを犯して成功にまで手が届かなかった人物であり、熱意をもって身を捧げ、有意義な目標に向かって全精力を使い、たとえ失敗したとはいえ果敢に挑戦した人物である。その人物は、勝利も敗北も知らない臆病者たちとは一線を画している。(セオドア・ルーズベルト)
- ・ 柔道とは、心身の力を、最も有効に使用する道である。その修行は、攻撃防御の練習により、精神 身体を鍛錬し、その道の真髄を、体得する事である。そして、是によって、己を完成し、世を補益 するのが、柔道修行究極の目的である。(嘉納治五郎)
- ・ 人に勝つより、自分に勝ちなさい。(嘉納治五郎)
- ・ 重罪は甘んじて我等一人に受候決意。(井伊直弼)
- · 一期一会(井伊直弼)
- ・ いまの日本社会や人々には一途さがたりないような感じがします。どうも最初から逃げ道を用意しているような傾向がある。いつも前進を考え、全力を尽くすことが一番大切なんだと思います。(並河萬理)
- ・ 歴代将軍から賜った親書の類を悉く取り出させて焼き捨てた。そしてその灰をわが身と共に埋めよ と遺言(松平伊豆守信綱)
- ・ 一日延ばしは時の盗人である。(上田敏)
- 以徳報怨(蒋介石)
- ・ ロシア革命が見事に成功したにも関わらず、中国革命は未だに名ばかりの革命にすぎない。なぜだろうか。それは強い革命軍がないからだ。強い革命軍があってこそ革命は成功するのだ。諸君、君たちは将来必ずや革命軍の中核となるのだ。革命の精神とは死を恐れないことである。中国 4 億人の民を救うことが諸君の使命なのである」(蒋介石)
- ・ 剣をふるって風を斬れば、剣がいかに鋭くても、ふうわりとした風はどうにもならない。私たちは 風になろうではありませんか。(中江兆民)
- 失敗してもええから、全力でやれ。(佐治敬三)
- ・ 現職の社長がしなきゃならんのは、トップの心得を後継者に説くことじゃなくて、下からのイノベーションの種がどんどん出てくるようにしむけることです。それがサントリーの社是である「やってみなはれ」です。(佐治敬三)
- ・ 出る杭は伸ばす(佐治敬三)
- ・ とにかくワクワクしながら仕事をしてみろ。そうじゃないと人生は面白くならないぞ。(佐治敬三)
- ・ ひとりの人間を永久に欺すことはできる。また、大衆も一時期なら欺すことはできる。しかし、大 衆を永遠に欺すことはできない。要するに、真実でなければダメなんですよ。本当のものでなけれ ば、ダメなんですよ。(佐治敬三)
- ・ パンがなければお菓子を食べればいいじゃない。(マリー・アントワネット)
- 一人では何も出来ぬ。だが、まず誰かがはじめなければならぬ。(岸田國士)
- ・ 一日ひとつずつの教訓を聞いていったとしても、ひと月で三十か条になるのだ。これを一年にすれば、三百六十か条ものことを知ることになるのではないか。(武田信玄)
- ・ いくら厳しい規則を作って、家臣に強制しても、大将がわがままな振る舞いをしていたのでは、規 則などあってなきがごとしである。人に規則を守らせるには、まず自身の言動を反省し、非があれ ば直ちに改める姿勢を強く持たねばならない。(武田信玄)
- ・ 飢えでやむ民の家塚もろともに岸も噛み去る毒の荒波(田中正造)

- ・ これまでも何かを成し遂げようとして簡単に成功したことは一度としてありません。Try Try Again! 何度でも挑戦しよう!(高峰譲吉)
- ・ 良いアイデアの生まれるのは、儲からなくて何とかしようと苦しんでいるときである。だから私は、 儲かることをあまり喜んでいない。(早川徳次)
- ・ つね平生、よく勉強していて、ほかでできないものをたった一つ発見するなら、その人は成功する だろう。(早川徳次)
- ・ 現在会社は5つの蓄積を社是として実践している。「信用」「資本」「奉仕」「人材」「取引先」以上5 つの蓄積である。私たちは5つの貯蓄の精神を基盤にしてその実践を身近い現実のものに見て、今 日から明日へと自分たちの周りをさらに充実していきたいものである。(早川徳次)
- ・ 勇気というやつは生き物なんだ。ひとつの組織体なんだ。だから鉄砲の手入れをするのと同じ理屈 で勇気も手入れをしなくてはならないんだ。(アンドレ・マルロー)
- ・ 指圧の心は母心、押せば命の泉湧く(浪越徳治郎)
- ・ 金をつくるより友人をつくれ。5年間に5人の友人ができたらしめたものである。10年間に10人の友人を得たら天下無敵である。(山口瞳)
- ・ 新入社員) 諸君、一所懸命はたらきなさい。誠心誠意ではたらき有能な社員になってください。有能な社員とは、役に立つ社員のことです。役に立つ社員とは、何か自分のものを持っている社員のことです。誠心誠意はたらきなさい。ミミッチイ考えを起しなさんな。給料分だけはたらけばいいだろう、なんて薄ぎたない根性をお持ちになったらオシマイだよ。(山口瞳)
- ・ 人によってお辞儀の角度を変えてはいけない。(山崎豊子)
- ・ 自分の血で描いているという思いがあります。(山崎豊子)
- ・ 一流の映画を見ろ、一流の音楽を聞け、一流の芝居を見ろ、一流の本を読め、そして、それから自 分の世界を作れ。(手塚治虫)
- ・ 人間よくなるも悪くなるも一寸の間だ(泉鏡花)
- ・ 鳥の生活を理解しなければ、鳥は描けない。(上村松篁)
- ・ ふる里のさつまの国は空あをし。ただあをあをと澄み通るなり(海音寺潮五郎)
- ・ 花は究極の美(入江泰吉)
- ・ 芸術とは本来遊びである。権勢に媚びるための手段でも、生活の糧を得るための手段でもあるべきではない。光悦も自分も、陶芸は余技だから売る必要がない。ゆえに自分の理想とするものを、他人のことなど気にせずに自由に自分の好きなように作ることができる。(川喜多半泥子)
- 目の前の現在の地位で、日本一になることだけを考えていれば、知らない間に、でっかく素晴らしい人間に成長していくもんだ。(今日出海)
- ・ 夢あるところに希望あり(江上波夫)
- ・ 民が自分たちの安全を自分たちで守るのも当然のことである。公的機関が登場するのは、個人の守備範囲を超えたときのみで、災害当初、市民は「公は何もしてくれない」と思うぐらいの覚悟が必要だ。(鈴木俊一)
- ・ 私を取り巻くものの中に活気あふれるものがあるとすれば、それは永遠に不滅な冒険精神です。(マリー・キュリー)
- 私達はただ一つの事、ただ一つの夢に生きました。(マリー・キュリー)
- 人間、馬鹿は構いません。だが、義理を知らないのはいけません。(久保田万太郎)
- ・ 死刑の存廃は一国の文化水準を占う目安である。(団藤重光)

- ・ 我々の様な好きなことを仕事にしている人間にとって悩んでいる暇などないんだ。世の中には好きなことを仕事にできる人は少ないんだ。好きなことを仕事にできるだけで幸せに思わなきゃ。(アランドロン)
- ・ 天才なんてあるものか! あるのは努力だけだ! 誰よりも三倍、四倍、五倍努力勉強する者、それが天才なのだ!(野口英世)
- ・ 創造的な活動とは、自分だけの驚きの体験を、創作家の智恵を通して、人々の驚きにまで進めていくこととも言えるのではないでしょうか。(辻村寿三郎)
- ・ 欧米の覇道ではなく、アジア諸国と協力し合う王道を歩め。(孫文)
- ・ 窮するもまた楽し、通ずるもまた楽し。私はむしろ平坦な道を好まない。その反対に、難題にぶつ かると、これを打開してやまない闘魂が頭を持ち上げてくる。(安西正夫)
- ・ どうかしましたか。誰かにそう言われる時は、必ずどうかしている。(串田孫一)
- ・ 生きんべくんば民衆とともに、死すべくんば民衆のために(布施辰治)
- ・ 世の中に一人だって見殺しにされていい人類はいないのだ(布施辰治)
- ・ 人が孤独に於いて、無為に閑居して退屈を感ずるといふには、其の人に思想がないからである。独 りを楽しむだけの人間的内容がないからである。(岸信介)
- ・ 内閣というものは、時期が長いのが偉いんじゃなしに、何をしたかということが問題であってね。(岸 信介)
- ・ 二大政党が望ましい。、、一度自民党が野に下る必要がある、野党になる必要があると思うんだが。 そのためにも小選挙区制で二大政党を育成すべきだという意見なんですがね。(岸信介)
- ・ 日韓、日華あたりでは、民間でも有力な人が言いたいことを本当にそのまま言い得るような場を持ってとが意味があると思うんですよ。(岸信介)
- ・ (憲法改正は近い時期に可能性があるものではないですよね)という問いに対して、わからないよ。 世界情勢がどういう風に変わるかによってね。(岸信介)
- 獄中三楽、読書、静思、家書。(岸信介)
- ・ 天大任を其の人下さんとするや、まづ其の人を苦しむ。(岸信介)
- ケ点や短所はそのうまくできない理由や根源が、実はみな自分の人間そのものの中にひそんでいる。 (滝沢修)
- ・ 聖人を以てわが身を正すべし、聖人を以て人を正すべからず。凡人を以て人を許すべし、凡人を以 てわが身を許すべからず。(貝原益軒)
- ・ 知っていてもそれを行動に移さないのであれば知らない者となんらかわりは無い。(貝原益軒)
- ・ 言語を慎んで無用の言葉をはぶき言葉数を少なくしなさい。喋れば喋るほど、気を減らし、また気が高ぶる。大きく元気を損なってしまう。言語をつつしむ事も徳を養い、身を養う道である。(貝原 益軒)
- ・ 志を立てることは大にして高くすべし。小にして低ければ、小成に安んじて成就しがたし。天下第 一等の人とならんと平生志すべし。(貝原益軒)
- ・ 人は私の作品について議論し、まるで理解する必要があるかのように理解したふりをする。私の作品はただ愛するだけでよいのに。(クロード・モネ)
- ・ 明治維新の中心人物の一人である西郷隆盛を尊敬している。『子孫のために美田を残さず』の言葉が 好きである。(朴正煕)
- ・ 人の世に道は一つということはない。道は百も千も万もある。(坂本龍馬)

- ・ 事は十中八九まで自らこれを行い残り一、二を他に譲りて功をなさむべし。(坂本龍馬)
- ・ 万事、見にゃわからん。(坂本龍馬)
- ・ 金よりも大事なものに評判というものがある。世間で大仕事をなすのにこれほど大事なものはない。 金なんぞは、評判のあるところに自然と集まってくるさ。(坂本龍馬)
- ・ 慎重は下僚の美徳じゃ。大胆は大将の美徳じゃ。(坂本龍馬)
- ・ 時世は利によって動くものだ。議論によっては動かぬ。(坂本龍馬)
- ・ 世の既成概念を破るというのが、真の仕事である。(坂本龍馬)
- ・ 古来、英雄豪傑とは、老獪と純情の使いわけのうまい男をいうのだ。(坂本龍馬)
- 風景 (志賀重昴)
- ・ 勇気を出せ、断じて行う決心をすれば、予想以上に力も出る。(芦田均)
- ・ 人生のゆきがかりが、私を秋田犬のごとくたたかわしめる。(芦田均)
- ・ 部下に必勝の信念を持たせることは容易だ。それは、勝利の機会をたくさん経験させればよい。(ロンメル)
- ・ 軍人にとって最も不安なのは、敗北の予感に見舞われる時だ。そして、その予感を最も強く察知するのは、指揮官が弱っているのを見る時だ。心理的にも、肉体的にも、指揮官は弱みを部下に見せてはならず、その印象を与えぬ努力を欠いてはならない。(ロンメル)
- ・ 司令官たるもの前線で指揮をとれ(ロンメル)
- ・ 汗を流せ、血を流すな(ロンメル)
- ・ 誰もやり手がなければやってもいい。ただし、私に任せる以上は、はたからクチバシを入れるのは 一切差し控えてもらいたい。(石田退三)
- ・ 彫刻は不完全でいい。完成させるのは遊ぶ子どもたちや、季節、自然である。(イサム・ノグチ)
- ・ やってもせんに! とべ!(本田宗一郎)
- ・ 失敗したからといって、くよくよしている暇はない。(本田宗一郎)
- ・ こんなところで遊んでないで、さっさと帰って油まみれになって働け!(本田宗一郎)
- ・ 人生は『得手に帆あげて』生きるのが最上だと信じている。(本田宗一郎)
- ・ 自動車会社の創業者の自分が葬式を出して、大渋滞を起こしちゃ申し訳ない。(本田宗一郎)
- ・ 美術館のとりもつ縁で、私は、世界の政治家、経済人、芸術家などと、ずいぶん交友がひろまった。 (鹿内信隆)
- ・ 難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く。(井上ひさし)
- ・ 一番大事なことは、 自分にしか書けないことを、誰にでもわかる文章で書くということ。(井上ひ さし)
- ・ わたしの命がわが国のためになるなら、わたしはそれを厭いません。もしわたしが今日死ぬとして も、わたしの血の一滴一滴がわが国を元気づけてくれるでしょう。(インディラ・プリヤダルシニー・ ガンディー)
- ・ 学問が政治や経済の支配勢力に奉仕する侍女となったり、利用される奴隷となったりする危険は今日いよいよと増大している。(末川博)
- ・ 法の理念は正義であり法の目的は平和であるだが、法の実践は社会悪とたたかう闘争である。(末川 博)
- 大衆はモノを書かない批評家である。(ヴォルテール)
- ・ 苦しくても腹立たしくても、顔色ひとつ変えないで別れるのがダンディーの道だ。(板坂元)

- ・ 私は私の眼に映ったものを画くので、たとえ人の眼には円く見えても、色が紫に見えても、私の眼には三角に見えたり、黄色く見えれば、私は自分の眼に見えた通りに画くのです。(竹内栖鳳)
- ・ 偉人は偉人たらんと決意する意志力により偉人となる。(ド・ゴール)
- ・ 危機を目の前にすると、気骨ある人は自分を拠点に戦う。彼は作戦命令を自分で発し、自ら指揮を とる(ド・ゴール)
- ・ 人はなろうとした人物しかなれない。だからといって必ずしも良い条件に恵まれるわけではない。 だが、なろうという意志がなければその人物には決してなれないのだ。(ド・ゴール)
- ・ 明るさを求めて暗さを見ず。今日失敗しても明日に明るさを求める。人の欠点より長所を見る。そ の方が人生楽しいじゃないですか。(斎藤英四郎)
- ・ 賢人の仕事は、いかに死ぬかというよりも、いかに生きるかということにある。(スピノザ)
- ・ 人があれもこれも成しうると考える限り、何も成しうる決心がつかない。(スピノザ)
- ・ 人間は醜い。されど人生は美しい。(ロートレック)
- 悩み事は、散歩して忘れるのが一番だ。(デール・カーネギー)
- ・ 命令を質問の形に変えると、気持ちよく受け入れられるばかりか、相手に創造性を発揮させること もある。(デール・カーネギー)
- ・ 深い思いやりから出る感謝の言葉をふりまきながら日々を過ごす。これが友を作り、人を動かす妙 諦である。(デール・カーネギー)
- ・ あなたの話し相手は。あなたのことに対して持つ 100 倍もの興味を、自分自身のことに対して持っているのである。(デール・カーネギー)
- ・ 一番確実な方法は、エネルギーのすべてを、特定の分野に注ぎこむやり方だ。(アンドリュー・カーネギー)
- ・ 小さく砕いて、一つずつ解決すれば、解決できない問題はない。(アンドリュー・カーネギー)
- ・ 年をとるにつれて、人が言うことには以前ほど注意を払わなくなった。人の行動をただじっと見る ことにしている。(アンドリュー・カーネギー)
- ・ 金持ちのままで死ぬのは不名誉な死である。(アンドリュー・カーネギー)
- ・ 自分より賢き者を近づける術知りたる者、ここに眠る。(アンドリュー・カーネギー)
- ・ 人間の力量一杯の月給を取ると弱くなる。況んやそれ以上を取るに及んでは大ていのものが堕落する。(堺利彦)
- ・ ほんとうに教養のある人というのは、どういう人のことを言うか。それは要するに、日本の現在の 社会状況、それに付随するあらゆる状況が、どうなっているかをできるだけよく考えて、できるだ けほんとうに近いことが言えるということです。(吉本隆明)
- ・ モデルの瞳に感動したら瞳から描け、首筋に感動したら首筋から描くのだ。(藤田嗣治)
- ・ たとえ、ぼくの胸を銃弾が貫いて生命が奪われても、ぼくが降参したと思われなければ、負けてはいないんだ。(ベニグノ・アキノ・ジュニア)
- ・ 限界などない、停滞期があるだけだ。そこに留まってはいけない。(ブルース・リー)
- ・ 自由は外的な事実の中にあるものではない。それは人間の中にあるのであって、自由であろうと欲 する者が自由なのだ。(エンゲルス)
- ・ 一日に十里の路を行くよりも、十日に十里行くぞ楽しき(桂太郎)
- ・ 常識を常に疑っているんです。みんながそうだと言っていることは、本当にそうだろうかと、その 奥を考えたくなる。(中村元)

- ・ 世界が一つになるには、理解と寛容が絶対必要である。(中村元)
- ・ 人生において遅いとか早いとかということはぞざいません。思いついた時、気がついた時、その時 が常にスタートですよ。(中村元)
- ・ 言葉は恐ろしい。たとえようもなく気持ちを伝えることの出来るのも言葉だが、相手の急所をグサリと刺して、生涯許せないと思わせる致命傷を与えるのも、また言葉である。(向田邦子)
- ・ どこで命を終わるのも運です。、、骨を拾いにくることはありません。(向田邦子)
- ・ 人は殺すよりも使え。(黒田官兵衛)
- ・ 人生で必要なものは無知と自信だけだ。これだけで成功は間違いない。(マーク・トウェイン)
- ・ 人は得るもので生計を立て、与えるもので人生を築く (チャーチル)
- ・ 人間が歴史から学んだことは、歴史から何も学んでないということだ (チャーチル)
- 勇気がなければ、他のすべての資質は意味をなさない(チャーチル)
- ・ 凧が一番高く上がるのは、風に向かっている時である。風に流されている時ではない (チャーチル)
- ・ 偉大さの代償は、責任である(チャーチル)
- この世の中にこんなに好きなものがたくさんあるって、すてきじゃない? (モンゴメリー)
- ・ 戦争の前は憤怒なり、戦争の中は悲惨なり、戦争の後は滑稽なり。(長谷川如是閑)
- ・ 山が動いた。(土井たか子)
- ・ 誇りの心は総ての人の生命である。(矢野龍渓)
- ・ 世の中には人を馬鹿にしたがる奴と、馬鹿にされることを気に病む者とがある。いずれも馬鹿な話で、世渡りには、人を馬鹿にしてもいけないし、馬鹿にされても馬鹿にならぬ、その心がけが大切だ。(松永安左衛門)
- ・ 愛は芸術なり、相克は美なり。(荻原守衛)
- ・ 困難な情勢になってはじめて誰が敵か、誰が味方顔をしていたか、そして誰が本当の味方だったか わかるものだ。(小林多喜二)
- ・ 闇があるから光がある。そして闇から出てきた人こそ、本当に光のありがたさがわかるんだ。(小林 多喜二)
- ・ いくら働いても疲れない会社にしたい。(新井正明)
- ・ 選り好みをせずに愛憎などの私心を捨てて部下を用いる。自分流儀の者ばかりを取り立てるのは水 に水を差すようなもので調理にならず味もそっけない。日ごろ嫌いな人を良く用いることこそ腕前。 部下の意見を十分に発表させ、採決は公平にする。自分に部下より良い考えがあっても、あまり支 障のない場合は部下の考えを採用するのがよい。(新井正明)
- ・ 出る杭は打たれるが、出すぎた杭は誰も打てない。出ない杭、出ようとしない杭は、居心地はよい が、そのうちに腐る。(堀場雅夫)
- ・ 組織を変え、マンネリが出てきたらまた変える。縦割りから横割りへ、横から縦へという具合に繰り返せば、職場が沈滞するようなことはない。(堀場雅夫)
- 知らないことがあったら、すぐに調べるということを続けてください。(堀場雅夫)
- ・ 指示されたことにプラスアルファの付加価値をつけて成果を上げる。このプラスアルファに上司は 期待し、プラスアルファの大きい社員が仕事のできる社員なのである。(堀場雅夫)
- ・ 引き受けた以上はしゃあない、やったろうやないか。(堀場雅夫)
- ・ つまらない瞬間を積み重ねても、つまらない人生しか送れません。(堀場雅夫)

- ・ 43 歳。デビューして 26 年。もっと何か、面白いマンガを描きたいと思い続けています。夢に終わるかもしれないけれど、その夢が僕らを支えているのです。(藤子・F・不二雄)
- ・ 人間の地位や名誉、財産ほどくだらないものはない。わしは無一文で生まれてきたのだから、無一 文で死ぬのが理想だ。(矢野恒太)
- ・ 何かを始めることはやさしいが、それを継続することは難しい。成功させることはなお難しい。(津 田梅子)
- ・ 先生をするのであれ、主婦になるのであれ、どのような方面の仕事をするのであれ、高尚な生活を 送るように努力してください。(津田梅子)
- ・ 世間のつまらぬ不平や不愉快を忘れるには学問に遊ぶのが第一の方法である。(永井荷風)
- ・ 無理をするな、素直であれ。すべてがこの語句に尽きる、この心構えさえ失わなければ、人は人と して十分に生きてゆける。(種田山頭火)
- ・ イケダは、3つの卵を 4人で分けるようなことはしない。3つの卵は 6つに増やす、6つの卵を 3人で分けたら 3つ余る。余った 3つを貯金する。これが、経済であります。(池田勇人)
- ・ 山より大きな猪は出ない。(池田勇人)
- ・ 私心をなくして、薄氷を踏む思いでやって、なおかつたりない。そのたりないところは偉大なもの におぎなってもらうよりしかたがない(池田勇人)
- ・ 統制は人の心を委縮させてしまう。国民の活力をあふれさせることによってのみ、国は栄えるのだ。 (池田勇人)
- ・ 大衆というのは、一所懸命かどうかということをよく見ているものです。(池田勇人)
- ・ 「旅」にはたった一つしかない。自分自身の中へ行くこと。(リルケ)
- ・ 徴兵制度は人間を腐らせる。(盧泰愚)
- ・ いいんだよ。出し惜しみしていては、いつまでたっても欧米には追いつけん!(大河内正敏)
- ・ しかし、爆弾の形にせよ、原子炉の形にせよ、原子核エネルギーを取り出すことは、非常に興味があります。おそらく、それは世界中の物理学者の野望であるはずです。(仁科芳雄)
- ・ 古い奴だとお思いでしょうが、古い奴こそ新しいものを欲しがるもんでございます。どこに新しい ものがございましょう。生まれた土地は荒れ放題、今の世の中、右も左も真暗闇じゃござんせんか。 (鶴田浩二)
- ・ 仕事は『点』でなく『線』だ。集中して物事を考え、創作する作業を、次へまた次へとコンスタントに続けられるかどうか。それができるから、作曲家です、小説家です、映画監督ですと名乗って生きていける。(久石譲)
- ・ 今は日本全国が雨漏りしている時ごわんあど(西郷隆盛)
- ・ 恨みは私が引き受けもんそ(西郷隆盛)
- ・ 事大小となく、正道を踏み至誠を推し、一事の詐謀を用うべからず(西郷隆盛)
- ・ 命もいらず名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。この仕末に困る人ならでは、 艱難を共にして国家の大業は成し得るられぬ也(西郷隆盛)
- ・ 人間は何事にせよ、自己に適した一能一芸に深く達してさえおればよろしい。(与謝野晶子)
- ・ 私たちは決して、いわゆるキャラクターをただぺたぺたくっつけた商品を売っているわけではありません。要するにひとびとの、互いに仲よくなりたい、という気持ちを叶えることができるなら何でも対象にする。だからこの産業は前途無限です。(辻信太郎)
- ・ 組織全体にひとつの勢いをつけることが大事である。(瀬島龍三)

- ・ 短い言葉で説明できないことほど、おもしろい。(宮脇俊三)
- ・ 一生懸命やったらこんな結果になった。調べてみたら、前例がなかった。クリエイティブだという ことは、後からわかった。そんな感じが本当の創造性である。だから大切なのは創造性ではなく、 実は情熱である。(日下公人)
- ・ つまらない書物というのはないが つまらない読書というのはある。どんな書物でも それを経験 から知識にしてゆくのは読者の仕事であって書物のせいなどではないからである。(寺山修司)
- ・ 映画に主題歌があるように、人の一生にもそれぞれ主題歌があるのではないだろうか。そして、それを思い出して唄ってみるときに、人はいつでも原点に立ち戻り、人生のやり直しがきくようなカタルシスを味わうのではないだろうか」(寺山修司)
- ・ 涙でサイン見えへんから投げるのはひとつや。(村山実)
- ・ 上を向いて歩こう(坂本九)
- ・ 機会は魚群と同じだ。はまったからといって網をつくるのでは間に合わない。(岩崎弥太郎)
- ・ 決して降参するな。(ロベルト・コッホ)
- ・ 武蔵にとっての剣は、私にとっては歌だ。武蔵が一剣で自己の人間を完成しようとしたように、私 も一唱によって自分を鍛えていきたい。(東海林太郎)
- ・ 進まざる者は必ず退き、退かざる者は必ず進む。(福沢諭吉)
- ・ 一度、学問に入らば、大いに学問すべし。農たらば大農となれ、商たらば大商となれ。(福沢諭吉)
- ・ とかく、あまり人生を重く見ず、捨て身になって何事も一心になすべし。(福沢諭吉)
- ・ 自ら労して自ら食うは、人生独立の本源なり。(福沢諭吉)
- ・ 人は他人に迷惑を掛けない範囲で自由である。(福沢諭吉)
- ・ ペンは剣よりも強し(福沢諭吉)
- ・ 自由と我儘(わがまま)との界は、他人の妨げをなすとなさざるとの間にあり。(福沢諭吉)
- ・ 政治とは悪さ加減の選択である。(福沢諭吉)
- ・ 一家は習慣の学校なり。父は習慣の教師なり。(福沢諭吉)
- 私は病気を遠ざけたくはない。私の芸術が病気に負うところは、実は大きいのだ。(ムンク)
- ・ 写真っていうのはねぇ。いい被写体が来たっ、て思ってからカメラ向けたらもう遅いんですよ。そ の場の空気に自分が溶け込めば、二、三秒前に来るのがわかるんですよ。その二、三秒のあいだに 絞りと、シャッタースピード、距離なんかを合わせておくんです。それで撮るんですよ。(木村伊兵 衛)
- ・ 安物を粗末に使うな。良いものを大事に使え(小津安二郎)
- ・ 黒沢明は考える人、木下恵介は感じる人、小津は見る人ではないか(小津安二郎)
- ・ なんでもないことは流行に従う。重大なことは道徳に従う。芸術のことは自分に従う(小津安二郎)
- 結婚――いかなる羅針盤もかつて航路を発見したことのない荒海。(ハインリヒ・ハイネ)
- 幸福は浮気な娼婦である。同じところにジッとしてはいない。(ハインリヒ・ハイネ)
- ・ 私の事業的信念は、それが世に価値のあるものならば、数字的に自信がなくとも、正しく行えば成し遂げられるということである。(大谷竹次郎)
- ・ 同じ事業をやるなら、人間は自分が好きな事業に手を出すべきだ。(大谷竹次郎)
- ・ 宅急便を考えたとき、単なる一企業の事業ではなく、社会的なインフラになるし、そうしたいと思っていた。思い上がったことだったかもしれないが、それは私の志だった。(小倉昌男)

- ・ 論理的な思考とは、物事をシンプルに考えるということにほかならない。シンプルな論理的思考を 心がけることだ。物事をできるだけ単純に考えることが、真の目的に到達する近道なのである。(小 倉昌男)
- ・ 「なんでだろう」から、仕事は始まる。(大谷竹次郎)
- ・ 1999年、七の月 恐怖の大王が天より降り立つ アンゴルモアの大王を蘇らせ その前後は幸 運に助けられて火星が君臨する。(ノストラダムス)
- ・ 絵はたまに描いたんでは駄目なんです。毎日頭から絞り出していないといけない。絵を描くには勇 気がいるよ。(猪熊弦一郎)
- ・ 自分の力量以上に、自分を見せてはならない。(梁瀬長太郎)
- ・ その人の幸せ、不幸を決めるのは、「でも」か、「では」だ。(梁瀬長太郎)
- ・ 君たち、表紙だけ替えても中身が変わらなければ意味はないよ。(伊東正義)
- ・ 長い間一緒に暮らして、その間に芽生える感情こそが「愛」で、そのことの方が恋愛よりもずっと 大事。(谷川俊太郎)
- 25歳。それは男のすべてが決まる年だ。悔いを残してはいけない。(ベートーベン)
- ・ はした金など求めず、星を求める生活をしなさい。(ベートーベン)
- ・ 多くの人々に幸せを与えること以上に、崇高で素晴らしいものはない。(ベートーベン)
- ・ 「勇気を出そう。肉体はどんなに弱くともこの精神で勝ってみせよう。いよいよ、25歳だ。一個の 男の力の全部が示されるべき年齢に達したのだ。(ベートーベン)
- ・ 僕の最も大切な部分、僕の聴覚が著しくだめになって来たのだ。、、、、僕の仕事では、これは恐ろしい 状況だ。(ベートーベン)
- ・ 音楽は、一切の知恵・一切の哲学よりもさらに高い啓示である。、、、私の音楽の意味をつかみ得た人は、他の人々がひきずっているあらゆる悲惨から脱却するに相違ない。(ベートーベン)
- ・ おお、僕がこの病気(聾疾)から治ることさえできたら、僕は全世界を抱きしめるだろうに!、、、 少しも仕事の手は休めない。眠る間の休息以外には休息というものを知らずに暮らしている。(ベートーベン)
- ・ 人の幸福の第一は家内の平和だ。家内の平和は何か。夫婦が互いに深く愛するというほかはない。(尾 崎紅葉)
- ・ 隣室に書よむ子らの声きけば 心に沁みて生きたかりけり。 (島木赤彦)
- 面白くて為(ため)になる(野間清治)
- ・ 他の出演者の女優さんが何人か脱いでいるのに自分だけ脱がないのはおかしい私も脱いで演技します。(夏目雅子)
- ・ いくらお医者さんでも汚い病人ばかり見ているのは嫌だから、人が病気にならない研究をしよう。 (志智潔)
- ・ バッターの素質で最も大切なのは、打席で怖がらないことだ。当てられることを恐れなければ、いいバッターになれる。(タイ・カップ)
- ・ 粘って粘り抜く。そうすればいつかは曙光が見えてくるものと私は確信しています。(金森政雄)
- ・ われわれが通常口にするのは論理的判断の基準だが、本当の決断の基準となっているのは、「空気が 許さない」という空気的判断の基準である。(山本七平)
- ・ 日本人には日本特有の雰囲気が醸し出される家が本当人いい住宅であると思う。(吉田五十八)

- ・ 組織のなかでは、しばしば、罪があって排斥されるのではなく、排斥する気があってから罪がつくられるのだ。(埴谷雄高)
- ・ 研究だけをやっていたのではダメだ。それをどうやって世の中に役立てるかを考えよ。(北里柴三郎)
- ・ 直感は誤らない。誤るのは判断だ。(五味康祐)
- ・ 公的な生活でどんなに成功しても、家庭での失敗を補うことはできない。(ディズレーリ)
- ・ 小さな親切を勇気をもってやってほしい。(茅誠司)
- ・ 作家になるには、24時間、机の前に座っていられる性格であればいい。(松本清張)
- 疑問のところをとらえて、それを深く突っ込む。だから調べていく。探索していく。これがまた、 自分の好奇心を満足させるわけです。(松本清張)
- ・ 恵まれた人はケチに徹し、その分を社会に還元しなければいけない。どケチはとても真面目な考えなんです。(森下泰)
- ・ 現実というのは、常に公式からはみ出すものだ。(ファーブル)
- ・ 独学には独学の値打ちがある。それは、官学の定まった型に人をはめ込まない利点と特徴があるの だ。(ファーブル)
- ・ 敵に勝つには、まず、負けないことだ。(神永昭夫)
- ・ 成功の秘訣は目的の一定不変にあり。(サミュエル・スマイルズ)
- ・ 書物よりも、生きた人間から受けた影響の方が、ずっと大きい。(田山花袋)
- ・ 現実に触れよとは切実な経験をせよということである。(安倍能成)
- ・ 何といっても教育の中心は教師です。いかによい制度ができても、いくらよい指導精神が紙の上ででき上りましても、いくらよいカリキュラムや教育方法が考案されましても、よい教師がいなければよい教育は行えません。(森戸辰男)
- ・ テロリストの要求に応じることは、将来多くの人命を危険にさらすことである。(ヘルムート・シュミット)
- ・ 死ぬということは、最も容易な方法で、 なんでもないことだ。(鈴木貫太郎)
- 「自分はこういう人間だ」などと決めつけるのは何とももったいないことです。人はどんどん変わっていける。(阿川弘之)
- ・ 成功する人は動き続けている。間違いを犯すことはあっても決して立ち止まることはない。(コンラッド・ニコルソン・ヒルトン)
- ・ 愛情とはからだとからだをよせて、さむさをあたためあうことなのだ。(金子光晴)
- ・ 家内の生命が尽きていない限りは、生命の尽きるそのときまで一緒にいる、決して家内を1人ぼっちにはしない、という明瞭な目標があったのに、家内が逝ってしまったいまとなっては、そんな目標などどこにもありはしない。ただ私だけの死の時間が、私の心身を捕え、意味のない死に向って刻一刻と私を追い込んで行くのである。(江藤淳)
- ・ 最後の最後まで仕事が続けられるように心がけ、そしてひと握りの理解者に囲まれて生を全うしたいものだ。(江藤淳)
- ・ 早しよし、ちょうどよしは危うし。遅し悪し。(徳川家康)
- ・ およそ人は一生の内三段の変化がある。十七八歳の頃は、交わる友に依って悪しくなる。三十歳頃には物ごとに慢心生じ、老朽の物を軽侮する心が出る。四十歳になると物に退屈し述懐の心が出て悪しくなる。この三段に変わらぬ人をよき人とはいうのだ。(17、8歳は今の27歳。30歳は48歳。40歳は64歳)(徳川家康)

- ・ 天下は一人の天下に非ず。天下は天下の天下なり(徳川家康)
- ・ 及ばざるは過ぎたるよりまされり(徳川家康)
- ・ 地位か名誉か金か、いや、大切なのは目的だ。(五代友厚)
- ・ 歴史の中に未来の秘密がある。(岡倉天心)
- ・ いたずらに古人に模倣すれば必ず滅ぶ。系統を守りて進み、従来のものを研究して、一歩を進めん ことを勉むべし。西洋画、よろしく参考すべし。しかれども、自ら主となり進歩せんことを。(岡倉 天心)
- ・ 諸君は売れるようなものをお作りになるから売れません。売れないものをお作りなさい。必ず売れます。(岡倉天心)
- ・ モットモット高い所、結局信貴山縁起位まで遡って標準を置いて見よ。(岡倉天心)
- ・ 変化こそ唯一の永遠である。(岡倉天心)
- ・ 内からの勝利か、さもなくば外からの圧倒的な死か。(岡倉天心)
- ・ 私たち日本人の住居、習慣、衣服や料理、陶磁器、漆器、絵画、そして文学にいたるまで、すべて 茶道の影響を受けていないものはない。日本文化を学ぼうとするなら茶道の存在を知らずにはすま されない。(岡倉天心)
- ・ ある時代なり流派なりの凡庸な産物をいくらたくさん集めるよりも、ただひとつの傑作に接する方がより多くのことを教えてくれる。(岡倉天心)
- ・ 二十五歳未満の者、小説を書くべからず。(菊池寛)
- ・ 私は頼まれて物を言ふことに飽いた。(菊池寛)
- ・ 私はさせる才分無くして文名を成し、一生を大過なく暮らしました。多幸だったと思います。
- ・ 日本精神というのは外来のあらゆる文化の思想を包容して、しかも本来の真面目を失わないところ に存する。
- 日常生活が小説を書くための修業なのだ。
- ・ 本当のリーダーは人をリードする必要はない。ただ道を示すだけでよい。(ヘンリー・ミラー)
- ・ 物事に巻き込まれるのが普通の人。行動を起こすのがヒーローである。(ヘンリー・ミラー)
- ・ 過去にしがみついて前進するのは、鉄球のついた鎖を引きずって歩くようなものだ。(ヘンリー・ミラー)
- ・ 人生の目的は生きることであり、生きることは感じることだ。喜びに満ち、酔いしれ、安らぎ、厳かに、感じることだ。(ヘンリー・ミラー)
- ・ 不均衡から均衡へ、さらに均衡から不均衡へと、周期が無限にめぐる。しかし、どの周期もわれわれにさらに高度な発展をもたらす。均衡が一時的、相対的であるのに対し、不均衡は常態で、絶対的である。(毛沢東)
- ・ 商売は戦いなり。勝つことのみが善である。これが 6 5 年間、激動の時代を乗り越えた私の経営哲学である。(上原正吉)
- ・ 楽しきと思うが楽しきの基なり(松平定信)
- ・ 予を殺そうとも、妻子を殺そうとも、天下の災を止めたまえ。(松平定信)
- ・ 汝、草木と同じく朽ちんと欲するか。(頼山陽)
- ・ 男児学ばざれば則ち已(や)む。学ばば当(まさ)に群を超ゆべし。安(いず)くんぞ発奮して志を立て、 以て国恩に答え、以て父母を顕(あらわ)さざるべけんや。(頼山陽)

- ・ 自分を才子(才能がある男)だというのは、自分を知る者ではない。自分を刻苦勉励ののちに一人 前の男になったのだという者がいるならば、その人こそ真に私を知っている者である。(頼山陽)
- ・ 幸運の女神は、準備を終えた者のところにしか訪れない(パスツール)
- ・ 戦後起きている天災は、災害にあらずして政治災害であるといっても過言ではない。(浅沼稲次郎)
- ・ 博愛これを仁という。仁とは人をいつくしむこと。(佐野常民)
- ・ 風立ちぬ いざ生きめやも。(掘辰雄)
- ・ 人の悪口は、絶対に口にするな。人にしてあげたことは、すぐに忘れろ。人にしてもらったことは、 生涯忘れるな。(石原裕次郎)
- ・ どんな場面に出くわしても、死さえ覚悟できる心意気があれば、何てことはない。(三遊亭圓楽 (5 代目))
- ・ 朝霧の一滴にも 天と地が 映っている (開高健)
- ・ 花の命は短くて 苦しきことのみ多かりき(林芙美子)
- ・ 悪法も法だ。(ソクラテス)
- ・ 賽は投げられた。(ガイウス・ユリウス・カエサル)
- ・ 大きなる事を謀るには、輔有るには如かず。(藤原鎌足)
- ・ つゐに行く道とはかねてききしかど 昨日けふとはおもはざりしを(在原業平)
- ・ 迅速こそ、勝利である。(源義経)
- ・ 初心忘るべからず 時々の初心忘るべからず 老後の初心忘るべからず(世阿弥)
- ・ 茶の湯者の茶人めきたるはことの外にくむこと(武野紹鴎)
- ・ 気は長く、勤めは堅く、色うすく、食細くして、心広かれ。(天海)
- ・ 長命は、粗食、正直、日湯(ひゆ)、陀羅尼(だらに)。時折ご下風(げふう)あそばさるべし (天海)
- ・ 国を治めるには重箱の味噌を、杓子で取る心持でなさりませ。(板倉勝重)
- おぼろなる月もほのかに雲かすみ 晴れて行くへの西の山のは(武田勝頼)
- ・ 心が凝り固まっていては見えないものも、力を抜いて素直に見ると、いろんな顔が現れてくるだろ う。心を開いて受け止めるなら、この世のすべては美しい。(本阿弥光悦)
- ・ 平常心をもって、一切のことをなす人。これを名人と言うなり。(柳生宗矩)
- ・ たのしみは貧しさにあり梅の花。(左甚五郎)
- ・ 松が枝の 直ぐなる心 保ちたし 柳の糸の なべて世の中(大岡忠相)
- ・ 国が異なり言葉が違っても同じ人間だから理解出来ないことはないだろう(前野良沢)
- ・ 良薬は口に苦く、出る杭は打たれる習ひ。(平賀源内)
- ・ ああ、吾、あやまてり。あたら小才と奇智におぼれ、お江戸の風に浮かれだこ。(平賀源内)
- ・ 良工の手段は、皆様方のお解りになるところじゃございません。(狩野融川)
- ・ 男子、志を立てて郷関を出ず、学もし成らずんば死すとも帰らず、骨を埋ずむるに、あにただ墳墓 の地のみならんや。人間いたるところ青山あり(月照)
- ・ 芸の奥義は深いもので、考えても考えても尽くることがない。わしはいつも芸の事を考えているから少しも退屈せぬ。(豊沢団平)
- ・ 第三の成長戦略とは規制緩和のことだが、過剰な競争原理は、、デフレを招く、、。次に大きなバブル 崩壊が起きれば、中間層は消滅しかねない(水野和夫)

- ・ アメリカが尖閣を守れなかった時、日米同盟は無効化し、東アジアに中国を頂点とする秩序が成立 する (中野剛志)
- ・ 「自分の発話量は、「3割」くらい、、、。相手にたくさん話をさせつつ、相槌を打ちながら時折口を はさむのが、日本人向きのコミュニケーション、、(内藤誼人)
- ・ 心――態度態度――行動運命――人生 (ヒンズーの教え)